

主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II

鳥取県鳥取市

NISIKATURAMI ISEKI

西桂見遺跡

一鷺谷口地区・鷺谷奥地区・堤谷地区一

KURAMI KOHUNGUN

倉見古墳群

1996

財団法人 鳥取県教育文化財団

正 誤 表

頁 行	誤	正
背表紙	西桂見遺跡群	西桂見遺跡
例言	山田真司	山田真宏
文中写真	1995年度お払い	1995年度おはらい
P 1 17～18行目	鳥取土木事務所都市計画課	鳥取県土木部道路課及び鳥取土木事務所
P 10 28行目	炭化物や炭化物を	炭化物や焼土を
P 19 挿図15		
P 42 5行目	主柱穴は4本と	主柱穴は4個と
P 44 13行目	P 19	P 17
P 49 挿図43		
P 83 13行目	SI 11・12・共に、	SI 11・12共に、
P 93 14行目	C 1～C13	C 2～C14
P 95 2行目	C14～C24	C15～C25

序

湖山池周辺は、布勢古墳、天神山城などの史跡を含め、原始・古代からの数多くの遺跡が存在する、遺跡の宝庫であります。

当財団では、このような遺跡地帯の中で、鳥取土木事務所の委託を受け、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う発掘調査として、3カ年にわたって桂見遺跡・西桂見遺跡を調査いたしました。

その結果、西桂見遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡がまとめて検出されたほか、中世の礎石総柱建物跡、中世墓群なども検出され、当時の人々の生活ぶりを知る上で、大変おおきな成果をあげることができました。

今回、この調査結果を報告書にまとめることができましたが、本書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が長く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、鳥取土木事務所並びに調査に参加して下さいました地元の方々はじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田 淵 康 允

例 言

1. 本書は、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う、鳥取市桂見字堤谷716、726他4筆、高住字鷺谷口847-1、847-2他3筆、高住字鷺谷奥848、852-2に所在する西桂見遺跡堤谷地区・鷺谷口地区・鷺谷奥地区および倉見古墳群の発掘調査報告書である。契約時及び調査時は、それぞれ桂見・高住所在遺跡群3区、桂見・高住所在遺跡群6区、桂見・高住所在遺跡群5区と呼称した。
2. 本調査は、鳥取土木事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団東部埋蔵文化財調査事務所が1993年度から1995年度にかけて行った。なお、遺跡名は、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取市教育委員会と協議した結果、当該地は鳥取市桂見・高住にかけて所在し、既に発掘調査報告がなされている遺跡と同一の丘陵上にあつて、西桂見遺跡・倉見古墳群とされているため、その遺跡名を踏襲して命名し、既に調査された地区と区別するために主要な字名を地区名として付け、西桂見遺跡鷺谷口地区・鷺谷奥地区・堤谷地区とした。
3. 西桂見遺跡鷺谷奥地区は、地形的特徴からA区・B区に、堤谷地区は、A区・B区・C区に分けた。倉見古墳群のうち、倉見7号墳は周知の古墳であるが、倉見8号墳・9号墳は、新発見のため古墳群の一連の名称をつけた。
4. 本報告書で示す標高は、ワールド航測コンサルタント株式会社による3級基準点1 (X: -55719.667m、Y: -14628.725) の30.516m、3級基準点2 (X: -55734.756m、Y: -14487.404m) の15.459mを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。X、Yの数値は国土座標第V系の座標値である。
5. 本報告書に記載の地形図は、鳥取市発行の1/50000地形図「鳥取市管内図」、調査区位置図は、鳥取市1/2500地形図「都市計画計画図1-19、1-24」を使用した。
6. 報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次に記載した。

遺構図の浄写は、東部埋蔵文化財調査事務所、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。

遺構・遺物写真は発掘担当調査員が撮影した。

本書の編集は牧本が行った。
7. 遺構実測は基本的に調査員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託して行った。
8. 竪穴住居跡内で出土した炭化材の樹種鑑定は、鳥取大学農学部農林総合科学科・古川都夫教授・堤誠司氏・佐藤真美氏にお願いし、多忙にも関わらず玉稿をいただいた。
9. 遺跡内出土の炭化物の¹⁴C年代測定を、京都産業大学理学部・山田治教授に委託した。
10. 中世墓出土の人骨についての所見を、鳥取大学医学部・井上晃孝教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず玉稿をいただいた。
11. 遺跡内出土の種子同定を、バリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
12. ラジコンヘリコプターによる遺構空中写真を、写測エンジニアリングおよび大橋保夫氏に委託した。
13. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
14. 現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力して頂いた。

赤木三郎 赤沢秀則 高橋正弘 中野知照 西尾克己 平川 誠 三木 靖 山田真司 松山智弘

(敬称略)

凡 例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致するが、以下のものは変更したものである。

調 査 時	報 告 書	調 査 時	報 告 書
斜面部黒色土落ち込み	SK07	炭化米籾	SK08

2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。また、竪穴住居跡のビット番号は、調査時のものから変更したものがある。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑・土壇 SD：溝状遺構 SS：段状遺構
P：柱穴・ビット

3. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

(1) 遺構図—竪穴住居跡：1/60、掘立柱建物跡：1/60・1/80、土坑・土壇：1/30、1/60、溝状遺構：1/60
・1/80・1/100

段状遺構：1/60・1/80、ビット群：1/60、1/80、床面遺物出土状況：1/20・1/30

土器溜り：1/30、1/100、埋葬施設：1/20・1/40・1/60、古墳：1/60・1/100

(2) 遺物実測図—土器：1/3・1/6・1/8、鉄製品：1/2、石器：1/2・1/3・1/4、玉製品：1/1、古銭：1/1

4. 遺構の測定値のうち、ビットの規模は（長径×短径－深さ）cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳端（裾部）までの計測値である。

5. 遺構図における表示は以下の通りである。

●：焼土面、■：貼床、○：土坑、□：炭化物、△：炭・灰

●：土製品、△：鉄製品、□：石製品、★：玉製品

6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po：土器・土製品 S：石器 F：鉄製品 J：玉製品 B：銅製品 C：古銭

7. 土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器・陶磁器は断面黒塗りで表現した。

遺物実測図中における記号は以下の通りにする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、……：擦り範囲、—：敲打範囲、

●●●●：赤色塗彩、○●●●：敲打面、○●●●：擦り面・砥面

8. 遺跡名は略号（西柱見遺跡=NKM）を用いた。

遺物には、遺跡名略号、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に明記した。実測した遺物については、実測者番号（FN-1等）をシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原因にもその番号を記した。

9. 遺物観察表については以下の通りとする。

(1) 法量は、土器については基本的に口径、器高、胴部最大径、底部径を記載した。石器・鉄器・玉製品については基本的に最大長、最大幅、最大厚、重さを記載した。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の前に※印、残存値は同様に△印を付した。

(2) 手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測図で表された方向である。

目 次

序		
例 言		
凡 例		
目 次		
第1章 調査の経緯		
第1節 調査に至る経緯	(牧本)	1
第2節 調査の経過と方法	(牧本)	1
第3節 調査体制	(牧本)	4
第2章 位置と環境		
第1節 地理的環境	(高垣)	5
第2節 歴史的環境	(高垣)	6
第3章 西桂見遺跡の調査 (1994年度)		
第1節 西桂見遺跡鷺谷口地区の概要	(牧本)	9
第2節 西桂見遺跡鷺谷口地区の調査結果	(高垣・牧本)	10
第3節 西桂見遺跡鷺谷奥地区A区の概要	(牧本)	41
第4節 西桂見遺跡鷺谷奥地区A区の調査結果	(小谷・高垣・牧本)	41
第5節 西桂見遺跡鷺谷奥地区B区の概要	(牧本)	75
第6節 西桂見遺跡鷺谷奥地区B区の調査結果	(小谷・高垣・牧本)	75
第4章 西桂見遺跡の調査 (1995年度)		
第1節 西桂見遺跡堤谷地区A区の概要	(牧本)	83
第2節 西桂見遺跡堤谷地区A区の調査結果	(牧本)	84
第3節 西桂見遺跡堤谷地区B区の概要	(牧本)	107
第4節 西桂見遺跡堤谷地区B区の調査結果	(牧本)	107
第5節 西桂見遺跡堤谷地区C区の概要	(牧本)	114
第6節 西桂見遺跡堤谷地区C区の調査結果	(牧本)	114
第5章 倉見古墳群の調査 (1994年度)		
第1節 倉見古墳群の概要	(牧本)	126
第2節 倉見7号墳の調査結果	(牧本)	126
第3節 倉見8号墳の調査結果	(牧本)	130
第4節 倉見9号墳の調査結果	(牧本)	133
第6章 考察		
第1節 西桂見・桂見遺跡における集落の構造	(牧本)	140
第2節 湖山池周辺の横穴式石室について	(牧本)	143
第3節 西桂見遺跡の土室状遺構について	(牧本)	145
第4節 中世墓について	(牧本)	146
註・参考文献		152
西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物観察表	(牧本)	153
特論1 西桂見遺跡出土の榊鑑定結果	古川郁夫・堤誠司・佐藤真美	173
特論2 西桂見遺跡中世の土坑から検出された骨片の同定	バリノ・サーヴェイ株式会社	174
特論3 西桂見遺跡出土の種実遺体同定	バリノ・サーヴェイ株式会社	174
特論4 西桂見遺跡の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定	山田 治	176
特論5 堤谷地区出土人骨	井上晃孝	180
写真図版		

挿図目次

- 挿図1 西桂見遺跡調査区位置図
挿図2 鳥取市の位置図
挿図3 周辺遺跡分布図
挿図4 1994年度西桂見遺跡調査区全体図
挿図5 S I 01遺構図
挿図6 S I 01炭化物出土状況図
挿図7 S I 01貼床除去後状況図
挿図8 S I 01内S K 1遺構図
挿図9 S I 01出土遺物実測図
挿図10 S I 02遺構図
挿図11 S I 02出土遺物実測図
挿図12 S I 03遺構図
挿図13 S I 03出土遺物実測図
挿図14 S K 01遺構図
挿図15 S K 01出土遺物実測図
挿図16 S K 02遺構図
挿図17 S K 02出土遺物実測図
挿図18 S D 01～S D 03、S R 01遺構図
挿図19 S D 01出土遺物実測図
挿図20 S D 04～S D 06遺構図
挿図21 S D 05出土遺物実測図
挿図22 S D 07～S D 10遺構図
挿図23 S D 08出土遺物実測図
挿図24 S D 09出土遺物実測図
挿図25 S D 10出土遺物実測図
挿図26 S S 01遺構図
挿図27 S S 02遺構図
挿図28 S S 02出土遺物実測図
挿図29 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(1)
挿図30 鷺谷地区土器溜り周辺地形図
挿図31 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(2)
挿図32 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(3)
挿図33 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(4)
挿図34 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(5)
挿図35 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(6)
挿図36 鷺谷口地区遺構外遺物実測図
挿図37 S I 04出土遺物実測図
挿図38 S I 04遺構図
挿図39 S I 05遺構図
挿図40 S I 05出土遺物実測図
挿図41 S I 06出土遺物実測図
挿図42 S I 06遺構図
挿図43 S I 07遺構図
挿図44 S K 06遺構図
挿図45 S I 07出土遺物実測図
挿図46 S K 06出土遺物実測図
挿図47 S I 08出土遺物実測図
挿図48 S I 08遺構図
挿図49 S I 08 P 1内遺物出土状況図
挿図50 S K 03遺構図
挿図51 S K 03出土遺物実測図
挿図52 S I 09・S D 15遺構図
挿図53 S I 09炭化物出土状況図
挿図54 S I 09床面遺物出土状況図
挿図55 S I 09出土遺物実測図
挿図56 S D 15出土遺物実測図
挿図57 S I 10出土遺物実測図
挿図58 S I 10遺構図
挿図59 S K 04遺構図
挿図60 S K 04出土遺物実測図(1)
挿図61 S K 04出土遺物実測図(2)
挿図62 S K 05遺構図
挿図63 S D 14出土遺物実測図
挿図64 S D 11遺構図
挿図65 S D 11出土遺物実測図
挿図66 S D 14遺構図
挿図67 土壘状遺構、S D 12・13全体図
挿図68 土壘状遺構遺構図
挿図69 S D 12・13遺構図
挿図70 土壘状遺構出土遺物実測図
挿図71 鷺谷奥地区A区遺構外遺物実測図
挿図72 S K 07遺構図
挿図73 S K 07出土遺物実測図(1)
挿図74 S K 07出土遺物実測図(2)
挿図75 S K 08遺構図
挿図76 S K 08出土遺物実測図
挿図77 鷺谷奥地区B区土器溜り出土遺物実測図(1)
挿図78 鷺谷奥地区B区土器溜り出土遺物実測図(2)
挿図79 鷺谷奥地区B区土器溜り遺物出土状況図
挿図80 鷺谷奥地区B区遺構外遺物実測図(1)

- 挿図81 鷲谷奥地区B区遺構外遺物実測図(2)
 挿図82 1995年度西桂見遺跡調査区全体図
 挿図83 S I 11・12遺構図
 挿図84 S I 11出土遺物実測図
 挿図85 S I 12出土遺物実測図
 挿図86 S I 13出土遺物実測図
 挿図87 S I 13遺構図
 挿図88 S I 15遺構図
 挿図89 S I 15出土遺物実測図
 挿図90 S B01遺構図
 挿図91 S K22出土遺物実測図
 挿図92 S K22遺構図
 挿図93 S K23遺構図
 挿図94 S K24遺構図
 挿図95 S K24出土遺物実測図
 挿図96 S K09出土遺物実測図
 挿図97 S K09遺構図
 挿図98 S K10遺構図
 挿図99 S K10出土遺物実測図
 挿図100 S K11・S D16遺構図
 挿図101 S K11遺構図
 挿図102 S K11出土遺物実測図
 挿図103 S K12・13遺構図
 挿図104 S K12出土遺物実測図(1)
 挿図105 S K12出土遺物実測図(2)
 挿図106 S K14・S D17遺構図
 挿図107 S K14遺構図
 挿図108 S K14出土遺物実測図
 挿図109 S K15遺構図
 挿図110 S K15出土遺物実測図
 挿図111 S K16・S D18遺構図
 挿図112 S K16遺構図
 挿図113 S K16出土遺物実測図
 挿図114 S K17遺構図
 挿図115 S K17出土遺物実測図
 挿図116 S K18遺構図
 挿図117 S K18出土遺物実測図
 挿図118 S K19遺構図
 挿図119 S K20遺構図
 挿図120 S K20出土遺物実測図
 挿図121 S K21遺構図
 挿図122 S K21出土遺物実測図
 挿図123 S K27遺構図
 挿図124 ビット群01遺構図
 挿図125 ビット群02・溝状遺構遺構図
 挿図126 ビット群02出土遺物実測図
 挿図127 堤谷地区A区遺構外出土遺物実測図
 挿図128 S I 14遺構図
 挿図129 S I 14出土遺物実測図
 挿図130 S I 16出土遺物実測図
 挿図131 S I 16遺構図
 挿図132 S I 17遺構図
 挿図133 S K25遺構図
 挿図134 S K25出土遺物実測図(1)
 挿図135 S K25出土遺物実測図(2)
 挿図136 S K26遺構図
 挿図137 S K26出土遺物実測図
 挿図138 S D19遺構図
 挿図139 ビット群03遺構図
 挿図140 堤谷地区B区遺構外出土遺物実測図
 挿図141 S B02 P13内遺物出土状況図
 挿図142 S B02 P14内遺物出土状況図
 挿図143 S B02遺構図
 挿図144 S B02出土遺物実測図
 挿図145 S O3出土遺物実測図
 挿図146 S O3遺構図
 挿図147 倉見7号墳墳丘測量図
 挿図148 倉見7号墳主体部遺構図
 挿図149 倉見7号墳出土遺物実測図
 挿図150 倉見8号墳墳丘測量図
 挿図151 倉見8号墳出土遺物実測図(1)
 挿図152 倉見8号墳出土遺物実測図(2)
 挿図153 倉見9号墳横穴式石室実測図
 挿図154 倉見9号墳墳丘測量図
 挿図155 倉見9号墳石室基壇実測図
 挿図156 倉見9号墳周溝内埋葬施設実測図
 挿図157 倉見9号墳出土遺物実測図
 挿図158 西桂見遺跡調査区位置図
 挿図159 西桂見遺跡・桂見遺跡遺構全体図
 挿図160 西桂見遺跡・桂見遺跡集落変遷図
 挿図161 倉見9号墳石室実測図
 挿図162 葦岡長者古墳(古岡1号墳)石室実測図
 挿図163 山ヶ鼻古墳(古海13号墳)石室実測図

図版目次

- 図版 1 1994年度西桂見遺跡全景 (上空より)
1994年度西桂見遺跡全景 (南東上空より)
- 図版 2 鷺谷口地区完掘状況 (上空より)
S I 01完掘状況 (西より)
S I 01貼床除去後状況 (西より)
S I 01炭化物検出状況 (西より)
- 図版 3 S I 02完掘状況 (西より)
S I 03完掘状況 (南より)
S D 01・02完掘状況 (西より)
S D 01東端部完掘状況 (北東より)
- 図版 4 S D 04完掘状況 (西より)
S D 04土層断面 (A-A'断面)
(西より)
S D 05完掘状況 (西より)
S D 09完掘状況 (東より)
- 図版 5 S D 10完掘状況 (南より)
S K 01検出状況 (東より)
S K 01完掘状況 (東より)
S K 02遺物出土状況 (北より)
- 図版 6 S S 01完掘状況 (南より)
S S 02完掘状況 (東より)
鷺谷口地区南側土器溜り検出状況
(北西より)
鷺谷口地区北側土器溜り検出状況
(西より)
- 図版 7 鷺谷奥地区A区南側完掘状況 (上空より)
鷺谷奥地区A区北側完掘状況 (上空より)
S I 04完掘状況 (南より)
S I 05検出状況 (東より)
- 図版 8 S I 05完掘状況 (東より)
S I 06完掘状況 (南より)
S I 06中央ピット土層断面 (南西より)
S I 07完掘状況 (東より)
- 図版 9 S K 06完掘状況 (東より)
S I 08完掘状況 (南より)
S K 03完掘状況 (西より)
S I 08 P 1内遺物出土状況 (西より)
- 図版 10 S I 09・S D 15完掘状況 (北より)
S I 09床面遺物出土状況 (南東より)
- S D 15遺物出土状況 (北より)
S I 10完掘状況 (北より)
- 図版 11 S K 04完掘状況 (東より)
S K 04遺物出土状況 (東より)
S K 05完掘状況 (東より)
S D 11完掘状況 (西より)
- 図版 12 土壘状遺構検出状況 (北より)
土壘状遺構盛土状況 (C-C'断面)
(北より)
S D 12・13完掘状況 (北より)
S D 13調査区南際完掘状況 (北より)
- 図版 13 S D 14完掘状況 (東より)
鷺谷奥地区B区完掘状況 (東より)
S K 07遺物出土状況 (南より)
鷺谷奥地区B区土器溜り検出状況
(南より)
- 図版 14 1995年度西桂見遺跡堤谷地区調査前状況
(西より)
1995年度西桂見遺跡堤谷地区調査区全景
(上空より)
S I 11・12完掘状況 (北西より)
S I 11・12完掘状況 (東より)
- 図版 15 S I 11完掘状況 (北西より)
S I 11床面土器出土状況 (北より)
S I 11排水溝土層断面 (西より)
S I 12排水溝土層断面 (西より)
- 図版 16 S I 12暗渠状排水溝検出状況 (東より)
S I 13完掘状況 (西より)
S I 15完掘状況 (西より)
S K 22完掘状況 (東より)
- 図版 17 S K 23完掘状況 (北より)
S K 24完掘状況 (北東より)
S K 09完掘状況 (南西より)
S K 10完掘状況 (南より)
- 図版 18 S K 10遺物出土状況 (南より)
S K 11・S D 16・S B 01完掘状況
(北より)
S K 11完掘状況 (南より)
S K 11古銭出土状況 (南より)

- 図版19 SK12・13完掘状況（南より）
SK12古銭出土状況（南より）
SK14・SD17完掘状況（北より）
SK14完掘状況（南より）
- 図版20 SK14人骨・古銭出土状況（西より）
SK14埋土空洞部検出状況（南より）
SK15完掘状況（南より）
SK16・SD18完掘状況（南東より）
- 図版21 SK16完掘状況（南東より）
SK17完掘状況（南より）
SK18完掘状況（西より）
SK19完掘状況（南より）
- 図版22 SK20完掘状況（北より）
SK21完掘状況（南より）
SK27完掘状況（西より）
溝状遺構・ピット群02完掘状況（北西より）
- 図版23 SI14完掘状況（西より）
SI16完掘状況（西より）
SI16P1内砥石出土状況（北より）
SI17完掘状況（西より）
- 図版24 SK25完掘状況（西より）
SK25短刀出土状況（北西より）
SK26完掘状況（東より）
SD19完掘状況（西より）
- 図版25 ピット群03完掘状況（南西より）
SB02完掘状況（北東より）
SB02P13内遺物出土状況（南東より）
SB02P14内遺物出土状況（北より）
- 図版26 SS03完掘状況（東より）
SS03盛土状況（北より）
倉見7号墳完掘状況（上空より）
倉見7号墳主体部完掘状況（北より）
- 図版27 倉見7号墳南側周溝内遺物出土状況（南より）
倉見8号墳完掘状況（北より）
倉見9号墳完掘状況（北上空より）
倉見9号墳横穴式石室完掘状況（西より）
- 図版28 倉見9号墳横穴式石室基底石検出状況（西より）
倉見9号墳横穴式石室基底石検出状況（南より）
倉見9号墳横穴式石室奥壁石積み状況（北より）
倉見9号墳横穴式石室側壁石積み状況（西より）
- 図版29 倉見9号墳横穴式石室玄門部石積み状況（南より）
倉見9号墳横穴式石室羨道部石積み状況（西より）
倉見9号墳主体部墓壇完掘状況（南より）
倉見9号墳周溝内埋葬施設完掘状況（西より）
- 図版30 SI01、SI02、SI03出土遺物
- 図版31 SI03、SK01、SK02、SS02出土遺物
- 図版32 鷺谷口地区土器溜り出土遺物
- 図版33 鷺谷口地区土器溜り出土遺物
- 図版34 鷺谷口地区土器溜り出土遺物
- 図版35 鷺谷口地区土器溜り、鷺谷口地区遺構外、SI04、SI05、SI06、SI07出土遺物
- 図版36 SI07、SI08、SK03、SI09出土遺物
- 図版37 SI09、SD15、SI10、SK04出土遺物
- 図版38 SK04、SD11、SD14、土塁状遺構出土遺物
- 図版39 鷺谷奥地区A区遺構外、SK07出土遺物
- 図版40 SK07、SK08、鷺谷奥地区B区土器溜り出土遺物
- 図版41 鷺谷奥地区B区土器溜り出土遺物
- 図版42 鷺谷奥地区B区土器溜り、鷺谷奥地区B区遺構外出土遺物
- 図版43 SI11、SI12、SI15、SK22出土遺物
- 図版44 SK24、SK09、SK10、SK11出土遺物
- 図版45 SK11、SK12出土遺物
- 図版46 SK12、SK14、SK15、SK16出土遺物
- 図版47 SK17、SK18、SK20出土遺物
- 図版48 SK20、SK21、SI14出土遺物
- 図版49 SI14、SI16、SK25、SK26出土遺物
- 図版50 SB02出土遺物
- 図版51 SS03出土遺物
- 図版52 倉見7号墳、倉見8号墳、倉見9号墳出土遺物

文中写真

- 写真1 1995年度お払い
- 写真2 1995年度重機表土剥ぎ作業
- 写真3 整理作業風景
- 写真4 発掘調査参加者

挿表目次

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 挿表1 西桂見遺跡竪穴住居跡一覧表 | 挿表9 堤谷地区A区ビット群01一覧表 |
| 挿表2 西桂見遺跡鷺谷口・堤谷地区中世墓一覧表 | 挿表10 堤谷地区A区ビット群02一覧表 |
| 挿表3 S K10出土銅銭一覧表 | 挿表11 堤谷地区B区ビット群03一覧表 |
| 挿表4 S K11出土銅銭一覧表 | 挿図12~15 中世墓一覧表 |
| 挿表5 S K12出土銅銭一覧表 | 挿表16~40 西桂見遺跡出土遺物観察表 |
| 挿表6 S K14出土銅銭一覧表 | |
| 挿表7 S K18出土銅銭一覧表 | |
| 挿表8 S K20出土銅銭一覧表 | |

付 図

- 付図1 西桂見遺跡鷺谷口・鷺谷奥・堤谷地区、桂見遺跡堤谷西地区調査前地形測量図
- 付図2 1994年度西桂見遺跡調査区全体図
- 付図3 1995年度西桂見遺跡調査区全体図

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

主要地方道鳥取鹿野倉吉線 鳥取市西部の湖山池南東岸周辺は、近年の都市計画整備事業によって大きく変貌を遂げている地域である。この地域では、鳥取市西部地域の交通混雑緩和を図るために、主要地方道鳥取鹿野倉吉線の道路整備事業が進められている。

工事区間のうち、鳥取市桂見と鳥取市高住をむすぶルートの計画地内及び周辺は、周知の桂見遺跡・西桂見遺跡・青島遺跡など、重要な文化財が存在している遺跡密集地域である。

西桂見遺跡 西桂見遺跡・倉見古墳群が立地する丘陵は、数多くの遺構が存在し、先端部では、1980年～1981年にかけて鳥取市教育委員会によって現地調査が行われている。この調査によって、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓では日本最大級の西桂見墳丘墓の他、同時期の土壇墓群、古墳時代前期の古墳、中世墓群などが検出されるなど、山陰地方の弥生時代から古墳時代への移行を考える上で、大変貴重な遺跡である。

調査計画 計画地内は、周知の西桂見遺跡・倉見古墳群が立地する同一丘陵上にあり、鳥取土木事務所都市計画課は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当文化財団が発掘計画を作成し、それに基づき、東部埋蔵文化財調査事務所が、桂見遺跡とあわせて1993年度から1995年度にかけての3か年で発掘調査を担当することとなった。

発掘調査 1993年度は、西桂見遺跡鷺谷口地区・鷺谷奥地区・堤谷地区の一部の調査を行った。1994年度は、西桂見遺跡鷺谷口地区・鷺谷奥地区・倉見7号墳5475m²を調査する予定であったが、調査終了時には3956.2m²に変更となった。1995年度は、西桂見遺跡堤谷地区1828m²を調査した。

第2節 調査の経過と方法

調査区は、狭く急峻な丘陵上に立地し、また、付近に民家等があるために、排土等が流失しないよう、調査区際土留めを設置した後調査に取りかかった。排土はすべて調査区外へ搬出するために、ベルトコンベヤー・重機によって調査区外へ一時仮置きした後、ダンプで場外搬出した。

調査区は、主要な小字名を地区名とし、西方に舌状に延び出す低丘陵を鷺谷口地区、この地区の上方に当たる南北に延びる丘陵を鷺谷奥地区、谷を挟んで南東に延びる丘陵を堤谷地区とした。また、地形的特徴から、鷺谷奥地区丘陵上を鷺谷奥地区A区、東斜面部を同B区、堤谷地区丘陵上を堤谷地区A区、東斜面部を同B区、西斜面部を同C区の各小区に便宜的に分けることとする。

1993年度調査 1993年度は、当該地における調査計画をより綿密なものとするために、西桂見遺跡鷺谷口地区、鷺谷奥地区、堤谷地区の一部を調査した。

1994年度調査 1994年度は、西桂見遺跡鷺谷口地区・鷺谷奥地区A区・鷺谷奥地区B区が調査対象地区となり、まず道路センター杭を利用して、調査区を10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1～19、東西軸は北からA～Iとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北西側の杭の名称を取って呼称することとした。

調査は4月6日から開始し、古墳と考えられる部分及び小型重機が進入できない鷺谷奥地区A区を除いて、鷺谷口地区から表土剥ぎ作業を行った。鷺谷口地区・鷺谷奥地区B区西側は地形の起伏が激しく重機を搬入することができない箇所があるために、人力によっても表土剥ぎ作業を行った。鷺谷

奥地区A区はすべて人力によって表土剥ぎを行った。鷺谷口地区の重機剥ぎ作業は4月26日に終了し、鷺谷奥地区B区の重機剥ぎ作業は5月9日から5月20日にかけて行った。

検出作業の結果、鷺谷口地区では弥生時代後期後半の竪穴住居跡3棟、同時期の土坑1基、段状遺構2基、溝状遺構10条、中世の火葬墓1基、古墳時代後期の古墳2基、土器溜りを検出した。

鷺谷奥地区A区では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡7棟、同時期の土坑・土壇5基、時期不明の溝状遺構5条、土壇遺構1基、古墳時代前期の古墳1基を検出した。

鷺谷奥地区B区では、弥生時代後期前半から後半の土坑1基、土器溜り、平安時代の炭化米を埋蔵した土坑1基を検出した。

鷺谷口地区・鷺谷奥地区A区合せて10棟の竪穴住居跡のうち、焼失住居跡が2棟あり、炭化材の出土状況及び炭化材樹種の現地での鑑定を鳥取大学農学部古川郁夫教授に依頼し、現地指導・助言を仰いだ。

古墳については、鷺谷口地区で検出した2基の古墳は、新発見のため倉見古墳群の一連の番号をつけ、倉見8・9号墳と命名した。なお、鷺谷奥地区A区で検出したものは周知の倉見7号墳である。

遺構の個別写真は、ローリングタワーからおよびラジコンヘリコプターによって行い、遺跡全体の写真は、ラジコンヘリコプターによって行った。

西桂見遺跡鷺谷口地区・鷺谷奥地区の調査は、発掘作業は8月1日に終了し、その後調査後地形測量を業者委託し、9月1日に終了した。

1995年度 1995年度は、西桂見遺跡堤谷地区が調査対象地区となり、前年度にならって同様に調査区全体を10mグリッドに区画し、基準軸を設定した。その結果、南北軸は西から24〜31、東西軸は北からC〜Fとなった。グリッド名は、前年度にならって命名した。

調査は、5月19日から5月26日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、検出作業は5月30日から開始し、一次中断があり、本格的には6月19日から始めた。

検出作業の結果、堤谷地区A区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、貯蔵穴と考えられる袋状土坑3基、中世と考えられる土葬・火葬墓14基、時期不明の土坑1基、ピット群2か所、溝状遺構8基を検出した。

堤谷地区B区では、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡3棟、中世と考えられる土壇墓1基、近世と考えられる土坑1基、時期不明の溝状遺構1基、ピット群1か所を検出した。

堤谷地区C区では、中世と考えられる礎石総柱建物跡1棟、中世以降の段状遺構を検出した。

堤谷地区A区の中世墓のうち、SK14・SK17からは遺存状態は悪かったが人骨が出土しており、現地指導及び取り上げを、鳥取大学医学部井上晃孝助教授にお願いし、多忙にもかかわらず玉稿を頂いた。

遺構の個別写真は、ローリングタワーから行い、遺跡全体写真は、ラジコンヘリコプターによって行った。

西桂見遺跡堤谷地区の調査は、発掘作業は11月10日に終了し、その後地形測量を業者委託し、12月7日に終了した。

調査日誌抄

〈1994年〉

4月6日 西桂見遺跡・倉見古墳群調査開始

4月13日 火葬墓おほらい

5月2日 SK01、SD01・02完掘

5月9日 倉見9号墳石室掘り下げ

5月17日 倉見9号墳ラジコンヘリによる空中撮影

5月20日 倉見8号墳完掘

5月24日 鳥取市立世紀小学校6年生体験発掘

5月27日 山陰中央テレビ取材

6月6日 S101完掘

6月7日 鳥取市立世紀小学校6年生体験発掘

6月16日 土壇遺構断ち割り

6月22日 倉見7号墳主体部掘り下げ

7月8日 S I 05床面検出
 7月9日 現地説明会開催。約120名参加。
 7月25日 S I 09完掘
 7月28日 S K 08で炭化米検出
 8月1日 検出作業終了
 9月1日 調査後地形測量終了
 <1995年>
 5月19日 表土剥ぎ作業開始
 6月20日 S K 09完掘
 6月22日 S K 11・15・16完掘
 6月26日 中世墓群おほらい
 6月28日 S K 14人骨出土。S I 11・12検出

7月4日 S K 14・17人骨取り上げ
 7月13日 S I 11・12床面検出
 7月27日 S I 11・12完掘
 8月3日 S I 13完掘
 8月21日 S I 14完掘。S K 23・24完掘。S K 25短刀出土
 9月4日 S S 03検出
 9月13日 S B 02検出
 9月20日 S B 02完掘
 10月28日 現地説明会開催。約100名参加
 10月30日 堤谷地区B区東側検出作業
 11月10日 検出作業終了
 12月7日 調査後地形測量終了



写真1 1995年度おほらい



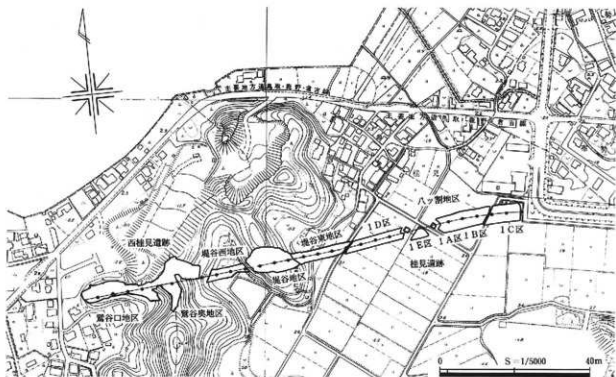
写真2 1995年度重機表土剥ぎ作業



写真3 整理作業風景



写真4
発掘調査参加者



挿図1 柱見遺跡・西柱見遺跡調査区位置図

第3節 調査体制

調査は、下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田淵康允（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事	上田 徹（鳥取県教育委員会次長）
事務局長	若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長	宮谷正信（鳥取県教育委員会文化課長）
次長	八木谷昇
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
調査指導係	久保龍二朗 長岡充展 山折雅美
庶務係長	梅山昭美（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
主任事務職員	米村康夫

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 東部埋蔵文化財調査事務所

所長	谷尾喜代治
主任調査員	牧本哲雄 小谷修一
調査員	高垣陽子（旧姓津村）
整理員	山下孝子

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○主な発掘調査・整理作業従事者

青木根玄、新 征憲、有田顕泰、有田やす子、池添幸子、石田誠和、井関和正、伊藤恵美子、船垣美智恵、今石克久、岩崎康子、太田垣喜代子、太田垣直市、太田良一、岡野悦子、奥田秀雄、小田桐清、小野悠一、表 明美、影井なみ子、影井春枝、影井治美、懸山貞幸、加藤 敦、川上正人、岸田倉之助、岸本義弘、北山敏恵、北山英男、北脇寿夫、北脇富士枝、北脇まつ子、北脇善治、木下敏江、熊沢時夫、小谷寿枝、小谷美代子、小林源市、小林美佐恵、小山菜穂子、沢田武男、清水房子、杉山 茂、厨子章子、鈴木 敦、砂田三恵子、竹中成代、田中郁之亮、田中美里、田中美智枝、田中陽子、谷口幸枝、谷本 剛、塚北寿美恵、綱田良夫、坪倉秀幸、時高政志、富山泰三、中島寿次、中谷沢子、中原 淳、中原千恵、中西政之、中村大土、西本美佐子、橋本一郎、橋本 豊、長谷高恵美子、花田富子、花田登美枝、浜本喜代政、藤井俊治、福田周二、福田延子、福田末子、古谷京子、本庄 豊、毎野静枝、松田和之、水原義幸、南田泰孝、村上松江、森田清正、森本操子、安井弘義、山縣一雅、山添龍雄、山田佳子、山中貴美子、山根 都、山根智津、山本清子、山本光雄、山本博子、山本幸正、吉村正彦、米村末子、米山麻紀、若林正明

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

西桂見遺跡は、鳥取市高住字鷺谷口・鷺谷奥、桂見字堤谷に所在する。

鳥取市

西桂見遺跡の所在する鳥取市は鳥取県東部に位置し、面積237.25km²、人口14万人余りで、鳥取県の県庁所在地である。東は岩美郡国府町・福部村、西は気高郡気高町、南は八頭郡郡家町・河原町と接し、北は日本海に面している。市の東・西・南の三方は山に囲まれ、北は日本一広いことでも知られる国立公園の鳥取砂丘が広がっている。市の中央部には中国山地から流れる千代川が鳥取平野を二分して南北方向に流れ、日本海へとそそぐ。また、市の西側には池としては日本一の広さを誇る潟湖、湖山池がある。

千代川・
鳥取平野

鳥取県の南側、岡山県との県境である八頭郡智頭町の山中に源を発する千代川は総延長56.8kmの一級河川であり、大小合わせて70数本の支流を集めながら北へと流れ、鳥取市を経て日本海へとそそぐ。この下流域に発達した鳥取平野は、洪積世から沖積世初期には鳥取湾（鳥取海）と称される入海あるいは潟湖であって、縄文時代前期以降の海退による湖泥化と、古墳時代以降に千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積により形成された沖積低地である。

湖山池

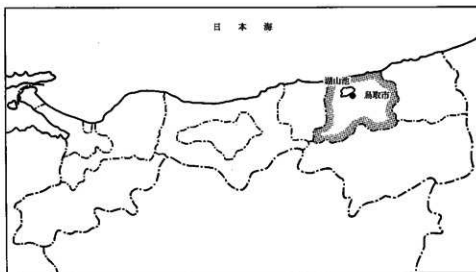
鳥取市西部に位置する湖山池は、周囲約16km、面積約6.8km²を測る日本一広い池である。この湖山池は、千代川による堆積作用と湖山砂丘の発達により、かつては入海であったものが湖泥した潟湖であり、旧海島である青島、天神山、山王山、足山などが、内湾であった面影を今に伝えている。

湖山池周辺の土壌は、北には湖山池を潟湖とした砂丘、東には低位泥炭土壌・細粒灰色低地土壌、南と西側の支線線上に沿っては褐色森林土壌、谷底平野には灰色低地土壌・グライ土壌が広がっている。⁹⁾

西桂見遺
跡

西桂見遺跡は、湖山池南部の放射状に広がる丘陵に位置している。調査範囲としたのは、東西及び南東に延びる標高約15～20mの低丘陵と、南北方向に延びる標高約30mの丘陵および斜面である。この丘陵の基盤層は、風化花崗岩である。

丘陵より北を臨むと、そこには湖山池がひろがり晴れの日などは絶景である。東側を見ると、ほとんど障害もなく久松山の全景をうかがうことができる。



挿図2 鳥取市の位置

第2節 歴史的環境

旧石器時代 因幡地域では明確な旧石器遺跡は確認されていないが、鳥取砂丘で黒曜石の莖尖頭器が採集されており¹⁰⁾、その存在を想像させる。

時代 鳥取平野西部・千代川左岸には数多くの遺跡がある。中でも湖山池周辺の低湿地に立地した縄文時代後期を主体とした遺跡が多い。主な遺跡に青島遺跡¹¹⁾、布勢遺跡¹²⁾、東桂見遺跡¹³⁾、桂見遺跡¹⁴⁾などがあげられる。西桂見遺跡の東に隣接する桂見遺跡は、縄文時代中期末頃から中津式に並行する後期初頭、緑帯文を経て凸帯文を持つ晩期へと移行する遺跡で、後期の丸木舟をはじめ、数多くの遺物を出土している。そのさらに東の東桂見遺跡では後期全般の土器を出土しており、その東150mの布勢遺跡では後期中頃の布勢式土器、漆塗りの壺型木製品や碗、もじり編みのカゴ、耳栓など後期の遺物を多数出土している。いずれも低湿地性遺跡のためクルミやトチの実などの植物遺体が多数出土しており、当時の植生を知る上で貴重な資料を提供している。

晩期の遺跡としては、野坂川流域の大橋遺跡¹⁵⁾、天神山遺跡¹⁶⁾、湖山第2遺跡¹⁷⁾などのほか、千代川左岸の自然堤防上に営まれる古海遺跡¹⁸⁾などがあげられる。古海遺跡の南、山ヶ鼻遺跡¹⁹⁾では後期末から晩期初頭の土器が多数出土している。

弥生時代 前期の遺跡は沖積地や海岸砂丘とその背後の低湿地に立地している。湖山第2遺跡、桂見遺跡などは前期の土器を出土している遺跡である。また、岩吉遺跡²⁰⁾は多数の土器が出土しており、前期から後期まで引き続いて集落が営まれていたことが推測されている遺跡である。さらに土層の観察により、海面変化による水位上昇に伴って東から西へと次第に高い場所に居住地を移動させていることも推測されている。

中期になると岩吉遺跡や青島遺跡のように前期から引き続き遺跡のほかに、自然堤防や丘陵地にまで居住の場を広げる遺跡が現れるようになる。岩吉遺跡の分村と考えられている大橋遺跡はその南東に位置し、その例の一つといえよう。また、桂見遺跡でも中期の完形の壺が2点出土し、周辺に集落の存在が推定される。

青島遺跡の対岸・塞ノ谷遺跡²¹⁾では中期の土器に伴って分銅型土製品が出土している。そして、この遺跡の南東約400mの丘陵地では流水文銅鐸が見つかっており²²⁾、宗教的な色彩が感じられる。

後期になると、布勢第2遺跡²³⁾で玉作工房跡が調査されている。また、帆城遺跡²⁴⁾で玉製品や玉砥石などが出土しており、この地域に玉造りの集団がいたことが想像される。岩吉遺跡では水田面が確認され、桂見、東桂見遺跡、服部遺跡²⁵⁾などでも田下駄が多数出土している。また、鳥取大学構内の湖山第2遺跡、松原谷田遺跡²⁶⁾などで竪穴住居跡が確認され、湖山池湖底遺跡から土器が採取されるなど、湖山池周辺での遺跡、遺物の確認がたいへん多くなっている。

以上のように湖山池周辺には多くの弥生遺跡が存在するが、これは湖山池周辺の低湿地を中心に稲作を営んだ集落が多く存在したためと考えられる。これらの集落は次第に大きくなり社会的集団へと発展していく。そしてその集団の中で力を得、いわゆる首長として一帯を治めた権力者は、それを象徴するかのよう大きな墓を残している。それは湖山池南岸の丘陵部にそびえた、1980年度調査で確認された日本最大規模の西桂見遺跡・四隅突出型墳丘墓であると考えられる。そこでは特殊な形をした大型器台付特殊壺が出土しており、その特異な権力を感じさせる。

古墳時代 古墳時代になると湖山池周辺の遺跡はさらに拡大していく。布勢第2遺跡、湖山第1・第2遺跡、大橋遺跡・岩吉遺跡・古海遺跡など平野部で集落が営まれる。

前期では、水田遺構・井戸などが検出された岩吉遺跡、古海遺跡など、弥生時代中期から営まれていた集落が引き続き見られる。

中期では、子持勾玉などが出土した青島遺跡、多量の木製品などが出土した塞ノ谷遺跡などの、祭



挿図3 周辺遺跡分布

- | | | | | | |
|------------|----------|----------|----------|-----------|----------|
| ① 柱見遺跡 | ② 西柱見遺跡 | ③ 東柱見遺跡 | ④ 柱見遺跡群 | ⑤ 倉見古墳群 | ⑥ 西柱見塚丘墓 |
| ⑦ 布勢稲形奥墳墓群 | ⑧ 布勢第1遺跡 | ⑨ 布勢古墳群 | ⑩ 帆城遺跡 | ⑪ 布勢1号墳 | ⑫ 布勢遺跡 |
| ⑬ 天守山遺跡 | ⑭ 天守山城 | ⑮ 扇山第1遺跡 | ⑯ 帆城遺跡 | ⑰ 大塚段1号墳 | ⑱ 三浦古墳 |
| ⑲ 扇山南段遺跡 | ⑳ 青島遺跡 | ㉑ 奥ノ谷遺跡 | ㉒ 扇山第2遺跡 | ㉓ 高在古墳群 | ㉔ 瓦田古墳群 |
| ㉕ 松原古墳群 | ㉖ 松原谷田遺跡 | ㉗ 丸山城跡 | ㉘ 高在古墳群 | ㉙ 高在朝山出土城 | ㉚ 扇山南段古墳 |
| ㉛ 三ヶ崎本陣山城跡 | ㉜ 扇城遺跡 | ㉝ 岩倉遺跡 | ㉞ 吉岡古墳群 | ㉟ 重仁古墳群 | ㊱ 扇山城跡 |
| ㊲ 狹間1号墳 | ㊳ 狹間古墳群 | ㊴ 大狹遺跡 | ㊵ 里仁古墳群 | ㊶ 重仁穴 | ㊷ 扇山城跡 |
| ㊸ 山ノ鼻遺跡 | ㊹ 真南遺跡 | ㊺ 島置南寺跡 | ㊻ 古館36号墳 | ㊼ 古勢古墳群 | ㊽ 古館遺跡 |

周辺の主な遺跡

祀に関わる遺跡が見られる。

また、千代川下流右岸の秋里遺跡²⁰⁰は、古墳時代を中心として弥生時代後期から、奈良・平安時代まで続く祭祀遺構として考えられている。

集落周辺の丘陵には大小様々な古墳が築かれているが、時期が判明しているものは少ない。この中で前期のものは、桂見古墳群²⁰¹では船載の斜縁軟帯鏡と内行花文鏡が出土した桂見2号墳、その他に倉見古墳群などがある。前期初頭には前方後円墳は確認されておらず、墳形はほとんどが方墳であり、因幡地域で前方後円墳が出現するのは、前期後半になってからである。

中期になると、県東部で最大規模の全長92mの橢圓1号墳²⁰²、国史跡の布勢古墳²⁰³、鳥取大学構内の三浦古墳²⁰⁴、大熊段1号墳²⁰⁵、古海36号墳²⁰⁶などの前方後円墳・前方後方墳が出現し、県内でも前方後円墳の密集する地域として知られている。その他、里仁32号墳²⁰⁷では罎付円筒埴輪や埴輪が出土している。

後期古墳では、桂見6号墳²⁰⁸などの前方後円墳が調査されている。また、横穴式石室が知られているものとして、吉岡1号墳(葦筒長者古墳)²⁰⁹、倉見9号墳、高住12号墳等があるが、千代川右岸域に比べてその数は少ない。古海13号墳(山ヶ鼻古墳)²¹⁰では削り抜きの横口式石塚が知られており、この辺りの古墳の重要性を感じさせ、これからの調査に期待が持たれるところである。

歴史時代
奈良・平安
律令体制下のこの地域は、高草郡に組み込まれ、東大寺領高庭荘として開発されていたことが『東大寺東南院文書』の「東大寺領因幡国高草郡高庭庄平付注進状案」でうかがわれる。これによると南北10条にわたり、条、里、郷、坪名が記載されており、条里制が執行されていたようであるが、実態は明らかでない。この頃の高草郡の中心は土師百井式軒丸瓦を出土し、現在も塔の礎石が残る葛蒲遺跡東方の葛蒲苑寺跡²¹¹、同北方の大野見宿禰神社のある古海郷にあったと考えられている。また、古代山陰道が通ったとされることも踏まえて、高草郡衙がこの地周辺にあったと考えられるだろう。『因幡民談記』によると、葛蒲苑寺とその西・釣山との間に官衙またはそれに類するものが存在したと考えられるが、明確な位置ははっきりしていない。因幡国造浄成女に代表される古代因幡氏の本拠地は高草郡と考えられており、因幡国府のおかれた法美郡とともにこの地は古代の因幡の中心地であったと思われる。

この時期の遺跡の実態はいまだ明らかではなく、桂見遺跡において、谷部で密集状態の掘立柱建物群、平野に面した斜面部に整地を施した総柱掘立柱建物跡が見つまっている程度である。

中・近世
中世のこの地域は、布勢第2遺跡で建物跡が見つまっているほか、大熊段遺跡²¹²、三浦遺跡²¹³、里仁古墳群²¹⁴、桂見古墳群²¹⁵、西桂見遺跡²¹⁶などで多数の中世墓が確認されている。特に現在布勢総合運動公園になっている布勢騎指築墳墓群²¹⁷では、84基もの土壌墓が検出されており、中世にこの地に大規模な墓域が構えられていたことがうかがえる。

15世紀になると因幡守護山名氏が湖山池東岸に布勢天神山城²¹⁸を築城し、因幡支配の拠点とした。天神山城に関する記録は『因幡民談記』などに比較的よく残っている。城跡にも掘切りや井戸跡などが現存している。また、1994年度の西桂見遺跡の調査で約45mの土塁状遺構が検出され、中・近世の研究に新しい資料を提供している。後、因幡国の拠点は久松山の鳥取城に移り、この間しばらくの間は静かな農村地帯であった。

以上のように、湖山池周辺は原始より因幡の中心として重要な位置を占めている地なのである。

第3章 1994年度調査

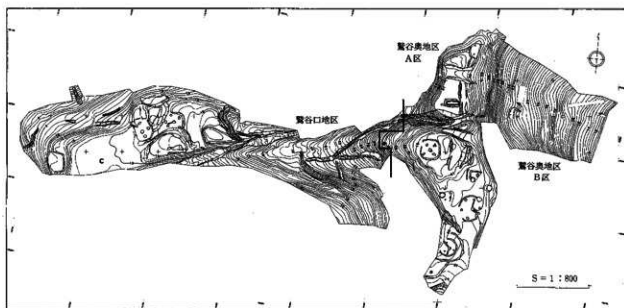
第1節 西桂見遺跡鷺谷口地区の概要

位置 1994年・95年に調査した西桂見遺跡は、これまでに調査された地区と区別するために西から鷺谷口地区、鷺谷奥地区、堤谷地区とし、さらに、立地的特徴を考慮し鷺谷奥地区をA区・B区に分けて呼ぶことにした。このうち、1994年度は鷺谷口地区・鷺谷奥地区が調査対象区となった。鷺谷口地区は標高7m～27.3mの西側に舌状に延びる低丘陵上及び谷斜面部の地区である。

遺構 この地区で検出した遺構は、竪穴住居跡3基、火葬墓1基、貯蔵穴と考えられる袋状土坑1基、溝状遺構10基、段状遺構2基、道路状遺構1基、古墳2基である。このうち、古墳については倉見古墳群に属するため、章を改めて述べる事とする。

竪穴住居跡は弥生時代後期のもので、このうちの1棟(SI01)は焼失住居跡で、複数の樹根を用いて建てられたものであった。この時期には屋外貯蔵穴(SK02)が併存している。

中世頃と考えられる火葬墓(SK01)は1基のみ検出された。この時期の墓は群集するのが常態であるが、単独で見られたことから、周辺の中世墓とは異なる事情があったことが推察される。



挿図4 1994年度西桂見遺跡調査区全体図

第2節 西桂見遺跡鷲谷口地区の調査結果

1. 竪穴住居跡

S101 (挿図5~9、図版2・30)

位置 鷲谷口地区丘陵部中央6C・Dグリッド、標高約14.0~15.0mに位置する。南側は倉見8号墳の周溝によって切られ、西側も横穴式石室をもつ倉見9号墳によって切られている。北側にはS502が隣接している。

形態 西側、南側が切られているため遺存状態はよくないが、残り二壁より平面形は隅丸方形を呈す。規模は東西5.17m以上、南北4.3m以上を測り、床面積は19.7m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.80mである。

柱穴は床面上で8個検出された。このうち、主柱穴はP1~P4で、それぞれの規模は順に(34×58-73)cm、(64×48-56)cm、(131×43-64)cm、(68×61-51)cmを測る。

主柱穴間距離はP1~P2間から順に2.44m、3.13m、3.13m、2.32mである。なお、P1では底の方より柱を固定したと思われる石皿S1が検出された。

P1-2、P2-3、P3-4の間に補助柱穴と考えられるP6、P7、P8がある。規模はそれぞれ(33×25-28)cm、(81×43-32)cm、(58×54-34)cmである。

壁溝は、壁の残存する北側及び東側で検出された。規模は幅8~29cm、深さ4~15cmを測り、断面逆台形を呈す。壁溝内に小ビットが数個検出されたが、これは壁溝内に立てたと考えられる板を支える枕状のものと思われる。

中央ビット 中央ビットP5は上縁部の一部を深さ7cm掘って二段掘りしており、規模は(80×53-31)cmである。南西方向に、長さ1.73m、幅0.12m、深さ0.15~0.33mを測る溝が延びる。中央ビットの埋土中に、炭化物を多量に含む層をもつ。

焼土面 床面上で10数カ所の、大小の焼土面が検出された。これらは、継続的に火を使用したものではなく、火災の際に焼けたものと考えられる。主に柱穴の周囲に広がっており、柱が立ったまま焼けているものであることが窺える。

炭化材・炭土 床面の北側、南側より多量の炭化材が検出された。中央部ではほとんど検出されていない。遺存状態はあまり良くなくほとんどがどの部分であるかは特定できないが、壁際で検出されたものは垂木の可能性がある。また、柱穴に残っている炭化物もあり、その出土状況より柱材であると考えられる。また、床面上・床面近くの層は、炭化物や炭化物を多量に含む層が広がる。

貼床 住居の西側半分、小礫、炭化物少混の暗黄褐色土、暗褐色土による貼床が施されている。範囲は南北4.2m、東西2.2m、深さ25~35cmである。

土坑 住居の床面上西端にSK1が検出された。貼床を楕円形状に掘り込んでおり、規模は(0.92×0.63-0.22)mである。埋土は⑥層単層である。検出状況より、屋内貯蔵穴と考えられる。

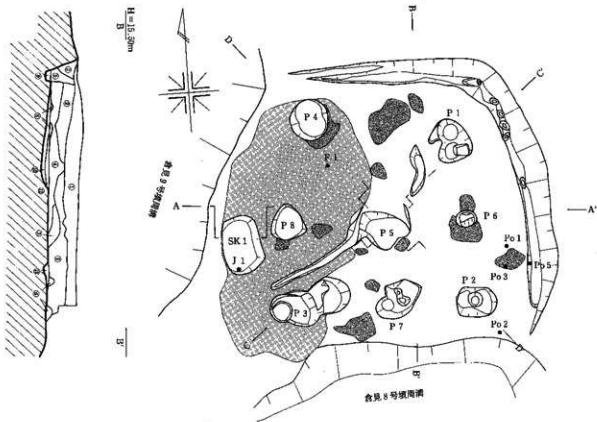
埋土 埋土は13層に分層できる。このうち、⑥層は炭化物で、その他床面付近は炭化物・焼土を含む層が多い。⑦層は焼け落ちた焼土である。

ビット中の埋土も多くが炭化物を含む。

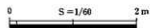
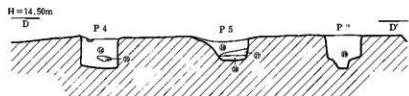
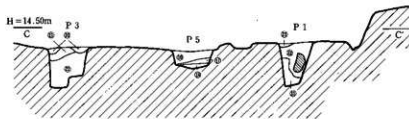
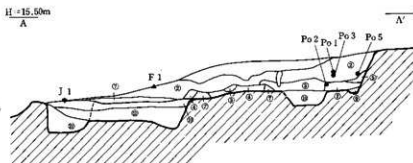
遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに甕Po1~Po3、高杯脚Po4・5、石皿S1、鉄片F1~F4、管玉J1がある。

このうち、床面からはPo2、J1が出土している。また、P1内よりS1が出土している。その他の遺物は、埋土下層中からの出土である。

時期 出土遺物より、S101の時期は岩吉編年III(新)期¹⁰・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



- ① 黒褐色土
- ② 暗黄褐色土
- ③ 暗褐色土 (粘土粒、粘土塊多量)
- ④ 黄褐色土 (炭化物多量)
- ⑤ 炭化物
- ⑥ 赤褐色土 (焼け落ち焼土)
- ⑦ 淡黄褐色土 (後世の漂埋土)
- ⑧ 褐色土 (炭化物少、粘土粒少)
- ⑨ 暗褐色土 (小礫、炭化物少)
- ⑩ 暗黄褐色土 (炭化物少)
- ⑪ 赤褐色土 (焼土、小礫、炭化物少)
- ⑫ 黄灰色土 (灰か)
- ⑬ 暗黄褐色土 (炭化物わずかに混)
- ⑭ 黒色土 (炭化物層)
- ⑮ 暗褐色土
- ⑯ 黒褐色土 (炭化物多量)
- ⑰ 暗褐色土 (土層堅固)
- ⑱ 暗黄褐色土 (砂質)
- ⑲ 黄褐色土
- ⑳ 黄褐色土
- ㉑ 暗黄褐色土
- ㉒ 淡赤黄褐色土



挿図5 S101遺構図

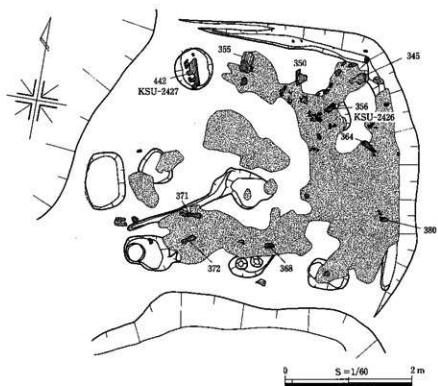


插图6 S I 01炭化物出土状况图

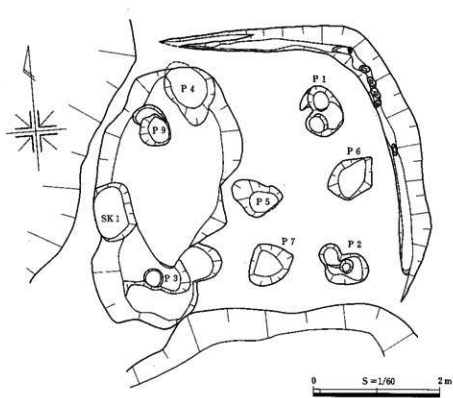
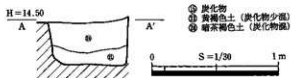
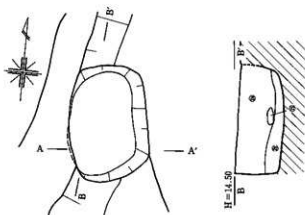
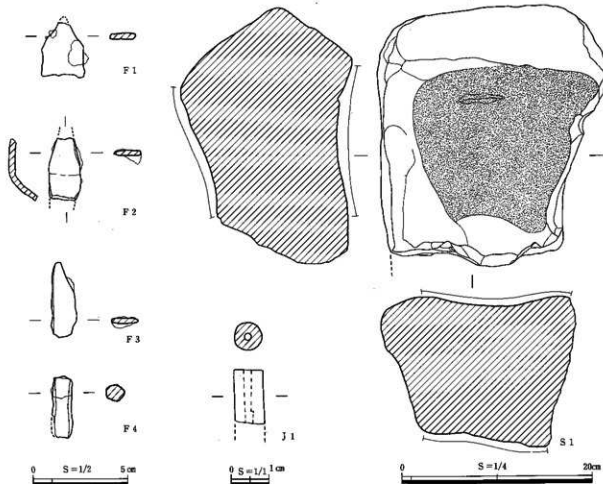
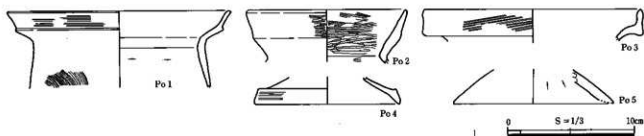


插图7 S I 01贴床除去後状况图

また、P1・P4の柱材の¹⁴C年代測定を行った結果、No356 (KSU-2426) はBP1740±25、No442 (KSU-2427) はBP1640±20であった。この測定値から換算される絶対年代は、それぞれ3世紀後半、5世紀前半と幅があり、土器編年が示す年代観とずれるものがある。



挿図8 S101内SK1遺構図



挿図9 S101出土遺物実測図

S I 02 (挿図10・11、図版3・30)

位置 鷺谷口地区のほぼ中央南側の6D・Eグリッドにあり、標高14.0~14.8mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。倉見8号墳の基盤層中で検出された。南側の大半をS D14によって壊されている。

形態 遺存状況は非常に悪く、壁溝と考えられる鉤状の溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。遺存する壁溝から、平面は方形ないしは隅丸方形と考えられる。規模は不明である。

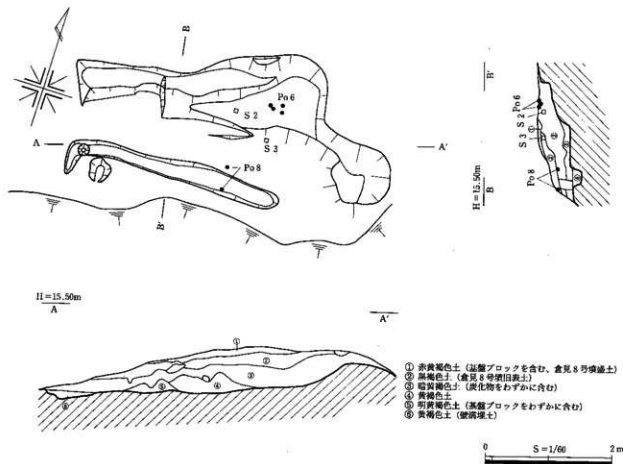
壁溝は、幅0.24~0.38m、深さ8~15cmを測り、断面逆台形状を呈す。壁溝内にはピットがある。

埋土 埋土は5層に分層できた。これらは中心部に向かって自然堆積した状況が窺われる。このうち③層中には炭化物がわずかに含まれている。

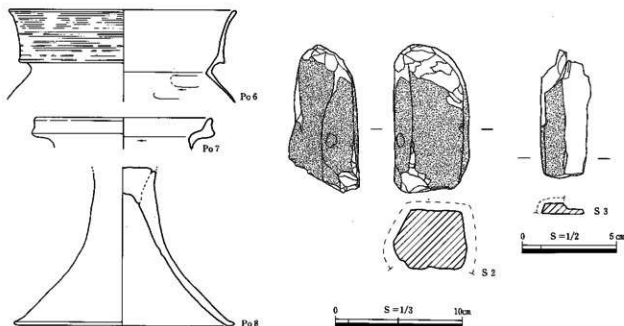
貼床は認められなかった。

遺物出土状況 S I 02内で図化できたものには、甕Po6・Po7、高杯Po8、砥石S1・S2がある。いずれも住居東側の埋土上層からの出土であるが、Po6は後述するS I 03出土の土器片と接合した。

時期 埋土中の土器から、S I 02は岩吉編年IV期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図10 S I 02遺構図



挿図11 S I 02出土遺物実測図

S I 03 (挿図12・13、図版3・30)

位置 鷺谷口地区のやや西側の5 Dグリッドにあり、標高13.7mの平坦面に位置する。倉見9号墳の基盤層中で検出された。北東側約7mにはS I 01がある。

形態 S I 03は、少なくとも2回の建て替えがあったものと考えられ、それぞれS I 03-1、S I 03-2とした。

S I 03-1 遺存状況は悪く、北側は倉見9号墳によって、西側は後世の削平によって削り取られている。遺存する壁の状態から円形ないしは多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西5.24m以上、南北6.06mを測り、床面積は24.9㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北東壁で最大0.56mを測る。

S I 03-1に伴う壁溝は、検出されなかった。

主柱穴はP 1～P 5と考えられるが、柱穴の並びを考えると本来は6個あったものと考えられる。それぞれの規模は、P 1 (72×53-59) cm、P 2 (98×86-93) cm、P 3 (90×70-62) cm、P 4 (50×42-67) cm、P 5 (48×43-52) cmを測る。

主柱穴間距離は、P 1～P 2間から順に、2.6m、2.0m、2.3m、2.5mである。

中央ピットは、二段掘りのP11と考えられ、上縁部 (85×83-15) cm、中央部 (56×44-17) cm掘り込む。埋土は1層である。

S I 03-2 S I 03-1の内側で検出された壁溝と考えられる溝から存在を考えた。形態・規模ともに不明である。

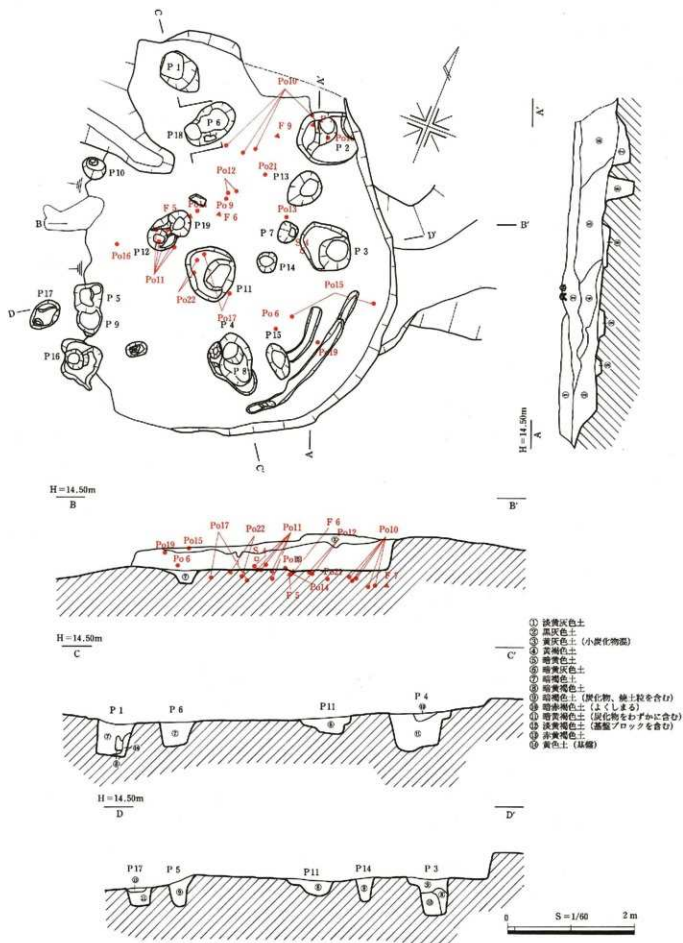
主柱穴は、P 6～P10の5個と考えられ、それぞれの規模は、P 6 (63×55-40) cm、P 7 (34×33-30) cm、P 8 (36×32-57) cm、P 9 (42×38-23) cm、P10 (37×35-27) cmを測る。

主柱穴間距離はP 6～P 7間から順に、2.2m、2.3m、2.5m、2.4m、1.9mである。

壁溝は、南東側で2条検出できた。幅18cm、深さ2～9cmを測り、断面「U」字状を呈す。

この他に、床面上で多数のピットが検出されたが、用途は不明である。しかし、壁溝が二重に巡る事から、上記の建て替え以外にも建て替えがあったものと推察される。

埋土 埋土は6層に分層できた。これらは中心部に向かって自然堆積した状況が窺われる。このうち③層中には炭化物がわずかに含まれている。



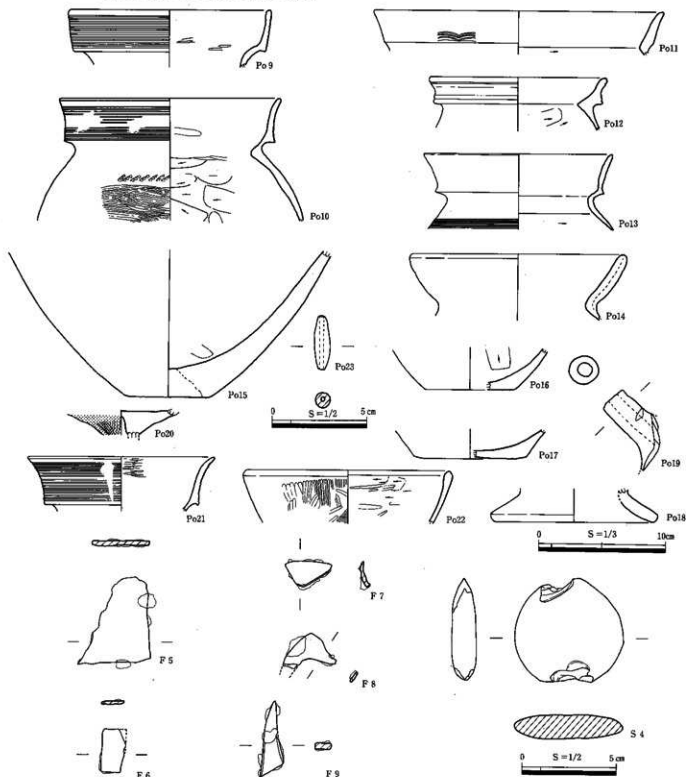
挿図12 S103遺構図

遺物出土状況 S I 03内で図化できたものには、壺Po9、甕Po10~Po14、底部Po15~Po17、脚部Po18、注口土器Po19、高杯Po20、鼓形器台Po21、鉢Po22、土鍾Po23、石鍾S4、鉄片F5~F9がある。

このうち床面中央ピット周辺でPo17、中央部でPo21が出土している。埋土下層からは、Po9~Po14、Po16、Po18、Po22、S4、鉄片が出土している。その他は、埋土上層からの出土である。

なお、出土している鉄片は、三角形から長方形を呈し、いずれも製品とは考えられない。

時期 床面及び埋土下層中の土器から、S I 03は岩吉福年IV期、弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、ピットの深さが03-1のものの方が深く、外側に配置されることから、S I 03-2→03-1の順で建て替えがあったものと考えられる。



挿図13 S I 03出土遺物実測図

2. 土坑・土壌

SK01 (挿図14・15、図版5・31)

位置 鷺谷口地区東側の10Eグリッドにあり、標高約20.8~21.0mの西側に傾斜する斜面に位置する。検出位置はSD01の埋土中で、ほぼ溝幅いっぱいに掘り込まれている。

形態 SD01検出中に存在を確認したため、検出面では非常に浅い墓壇の検出に終わった。平面は角の取れた長方形で、規模は、基底部で南北1.10m、東西0.93m、深さ0.38mを測る。断面は逆台形状を呈す。長軸方向は、N-27°-Wである。

埋土 埋土は3層に分層できた。①層中には炭化物の他骨片・鉄釘などの遺物も含む。②層は炭化物層、焼土・炭 ③層は炭化物を含む焼土層である。

化物 底面・埋土中で骨片・焼土・炭化物が検出されたことから、SK01は火葬墓と判明した。

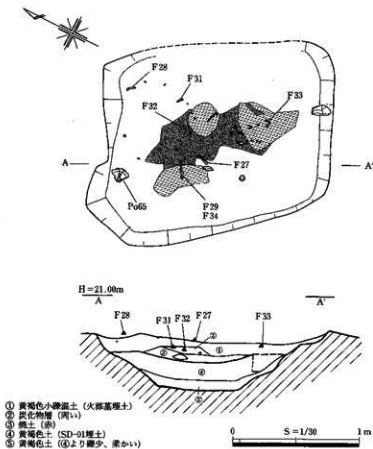
遺物出土状況 出土遺物には、固化できたものに土師質土器皿Po65、鉄釘F27~F34がある。いずれも底面直上またはやや浮いた状態での出土である。Po65は北壁際で、鉄釘は底面中央を中心に検出された。

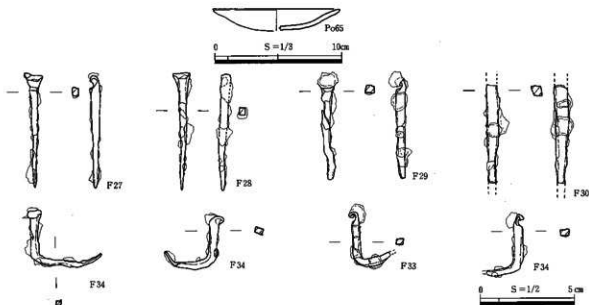
鉄釘には直線状を呈すF27~F30、折れ曲がったF31~F34の2種類が使用されていたものと考えられる。

また、埋土中から骨片がわずかに検出された。いずれも小片のため部位は同定できなかったが、鑑定の結果人骨の可能性が指摘された。

時期 出土土器から、SK01は中世末頃のものと考えられる。SD01との切り合い関係は、明らかにSD01の埋土中に掘り込まれていることから、SD01が埋没した後で作られたものといえる。

性格 SK01は、火葬墓と考えられるが、単独で検出され、周辺には立地的に墓が作られた形跡はなく、群集するこの地域の中世墓の形態とは異なるあり方を示す。





挿図15 SK01出土遺物実測図

SK02 (挿図16・17、図版5・31)

位置 鷺谷口地区南西側の4Eグリッドにあり、標高約13mの広くなった平坦面の南側に位置する。北東側約10mにはS I03、西側約10mにはS S01がある。

形態 遺存状況は非常に悪く、上部は後世の削平を受けており、基底部のみ検出された。平面は楕円形、断面逆台形状を呈す。規模は、基底部で長軸1.17m、短軸0.95m、深さ0.16mを測る。

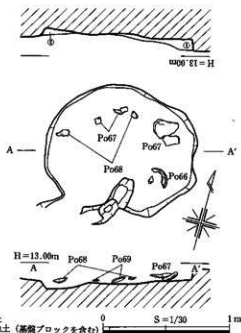
埋土 埋土は、わずかに2層に分層できた。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに甕Po66、胴部Po67、小型甕Po68、高杯Po69がある。いずれも底面直上からの出土である。

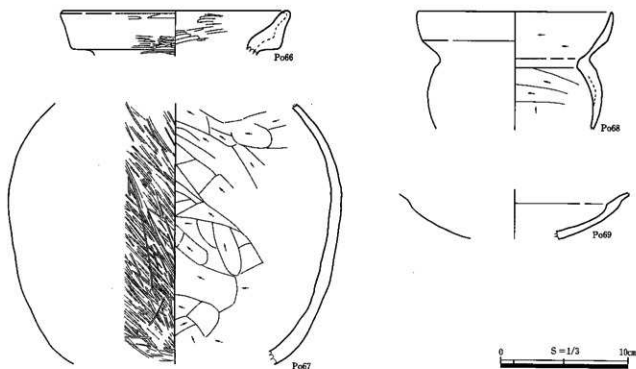
このうち、鈍い厚手の複合口縁をもつPo66は、断面を観察すると、短く外反する複合口縁をもつ甕の外側に粘土を継ぎ足して器壁を厚く作りかえたものと考えられるものである。

時期 底面出土土器から、SK02は岩吉福年IV期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性格 SK02は基底部のみ検出され、形態から用途を推定できないが、遺物出土状況から貯蔵穴として使用されたものと考えられる。



挿図16 SK02遺構図



挿図17 SK02出土遺物実測図

3. 溝状遺構

SD01～SD03, SR01 (挿図18・19、図版3)

位置 鷺谷口地区北東側の10E・11D・11E・12D・12Eグリッドにあり、標高約19.3～26.7mの急斜面に3本の溝が一部接しながら位置する。SD01と02は10Eグリッドで接続し、10・11EグリッドでSD02と03が近接して造られている。10Eグリッドでは、SD01の埋土中に火葬墓であるSK01が掘り込まれている。

形態 SD01は、斜面中腹をほぼ東西方向に、やや湾曲しながら走っている。急斜面に造られているために北西側は流失し、また、東端部はSD11によって削り取られ、西端部は後世の削平によって途切れており、全体的には遺存状況は必ずしも良好ではない。東端部は底面が一部階段状を呈す。

規模は残存値で、全長29m、幅0.6～1.05m、深さ0.1～0.6mを測る。断面は逆台形状または「U」字状を呈す。

SD02 SD02は、斜面中腹をほぼ東西方向に、やや湾曲しながら走っている。急斜面に造られているために、東端部は流失している。

規模は残存値で、全長13m、幅0.7～1.0m、深さ0.1～0.52mを測る。断面は逆台形状または「U」字状を呈す。

SD03 SD03は、SD02と直交するように、斜面に沿って南北方向に直線的に走っている。急斜面に造られているために、南端部は流失している。

規模は、全長3m、幅0.8～1.3m、深さ0.1～0.4mを測る。断面は「U」字状を呈す。

SR01 SR01は、南西側へ傾斜する急斜面を段状に加工したものである。南東側は流失している。この遺構は、調査前地形でも確認できたものである。

規模は、全長13.5m以上、幅0.75～4.4mを測る。

埋土 SD01の埋土は、3～6層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

SD02の埋土は、2層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

SD03の埋土は、茶褐色土単層である。皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

遺物出土状況 SD01の出土遺物には、図化できたものが壑Po125 1点のみある。この土器は、東側の②層中からの出土であり、鷲谷奥地区A区他の遺構からの混入と考えられる。

SD02・03、SR01からは遺物は出土していない。

時期 これらの遺構に伴う土器が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、SD01・02はほぼ同時期で、また、SD01はSD11より遡るものと考えられる。

用途 SD01は、東端部底面の形態上の特徴から、道として使用された可能性がある。

SD02・03については、用途は不明であるが、SD01と同様の性格があった可能性がある。

SR01は尾根と谷部を結ぶ道路として機能したものと考えられ、現在まで使用されたものである。

SD04～SD06 (挿図20・21、図版4)

位置 鷲谷口地区中央の6E・7C・7D・7E・8C・8D・9Dグリッドにあり、SD04～06の溝が一部接しながら、標高13.0～14.2mの斜面に位置する。SD04は、6Eグリッドで倉見8号墳を大きく環し、8DグリッドでSD05、9DグリッドでSD06と接している。

形態 SD04は、調査区を南西～北東方向に斜めに直線的に横切る形で検出されたが、北東側調査区外にSD04も延びており、現状でもB区西側急斜面中腹にテラス状の平坦面が見られる。

規模は残存値で、全長32.5mを測る。幅1.1～3.1mの範囲で掘削が行われ、さらに、2～4本の複数の溝が掘り込まれている。6E・7Eグリッドでは轍状を呈している。深さは、カット面から底面まで2.0m、中の小さな溝は5～18cmを測る。それぞれの小さな溝の断面は、逆台形状または「U」字状を呈す。

SD05 SD05は、調査区の北側斜面を弧状に下っており、北側は調査区外へ延びている。南東側はSD04によって削り取られている。

規模は、全長13.2m以上、幅1.2～2.0m、深さ0.2～1.2mを測る。断面は逆台形状を呈し、一部段状を呈す。

SD06 SD06は、ほぼSD04と平行するように走っており、東端はSD04と接している。

規模は、全長7.0m以上、幅0.5～0.9m、深さ0.16～0.2mを測る。断面は、逆台形状を呈す。

埋土 SD04の埋土は、2～15層に分層できた。中央部から西側は、現代も利用されていたものといわれており、埋土の堆積はわずかである。なお、調査区北東際のA-A'の土層断面を観察すると、4～6回掘り返されているものと考えられる。このうち、⑤～⑨層は非常に固く締まったものである。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

SD05の埋土は、7層に分層できた。①層は周辺を削り出した時のものと考えられる。

SD06の埋土は、2層に分層できた。埋土の状況はSD04と類似している。

遺物 表土中及び埋土中から土器片が出土しているが、わずかに図化できたものは、SD05の埋土中から出土した備前焼播鉢Po126のみである。また、SD04から図化できなかったが、須恵器杯身片が出土している。この須恵器は、倉見8号墳からの流れ込みと考えられる。

時期 時期を比定できる遺物が出土していないため、それぞれの時期は不明である。遺構の切り合い関係から考えると、SD04・06は、ほぼ同時期のもの、また、SD05はSD04によって切られていること

から、3本の溝の中では最も浅いものと考えられる。

用途 これらの溝状遺構の用途は不明であるが、道として使用された可能性がある。

S D07～S D10 (挿図22～25、図版4・5)

位置 鷺谷口地区西側の2D・3C・3D・4C・4Dグリッドに4条の溝状遺構が検出された。周辺は後世の耕作等により大きく削平されており、いずれの溝も遺存状態はよくない。

S D07・08は、3D・4C・4Dグリッドにあり、標高約9.3～12.0mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。北側のものがS D08、南側のものがS D07である。

S D09は、最も西側の2Dグリッドにあり、標高約7.0～9.5mの西側に傾斜する斜面に位置する。南東側約6mにはS S01が、北東側約8mにはS D07がある。

S D10は、3Cグリッドにあり、標高約5.7～8.4mの北側に傾斜する斜面に位置する。南側約4mにはS D07がある。

形態 S D07は、4D杭付近で途切れるものの、ほぼ直線状に東西方向に走っている。規模は、全長約15.5m、幅0.4～1.2m、深さ0.08～0.21mを測る。断面は「U」字状を呈す。

S D08 S D08は、やや北側斜面向かって湾曲するものの、ほぼ東西方向に走っている。規模は、全長約5.5m、幅0.53m、深さ0.03～0.21mを測る。断面は「U」字状を呈す。

S D09 S D09は、西側斜面を、蛇行しながらほぼ南北方向に走っている。規模は残存値で、全長7.0m、幅0.5～0.95m、深さ0.26～0.49mを測る。断面は「V」字状を呈す。

S D10 S D10は、北側急斜面を直線的に南東～北西方向に走っている。北側は、掘り込みが非常に不明瞭である。規模は、全長5.7m、幅0.65～1.2m、深さ0.36mを測る。断面は「U」字状を呈す。

埋土 S D07の埋土は、2層に分層できた。これらは皿状の堆積をしており、自然堆積したものと考えられる。

S D08 S D08の埋土は、わずかに暗黄褐色土1層である。なお、S D08の北側には、溝埋土と同色の土層の下に黒褐色土層が堆積しており、S D08埋没以前の旧表土と考えられる。

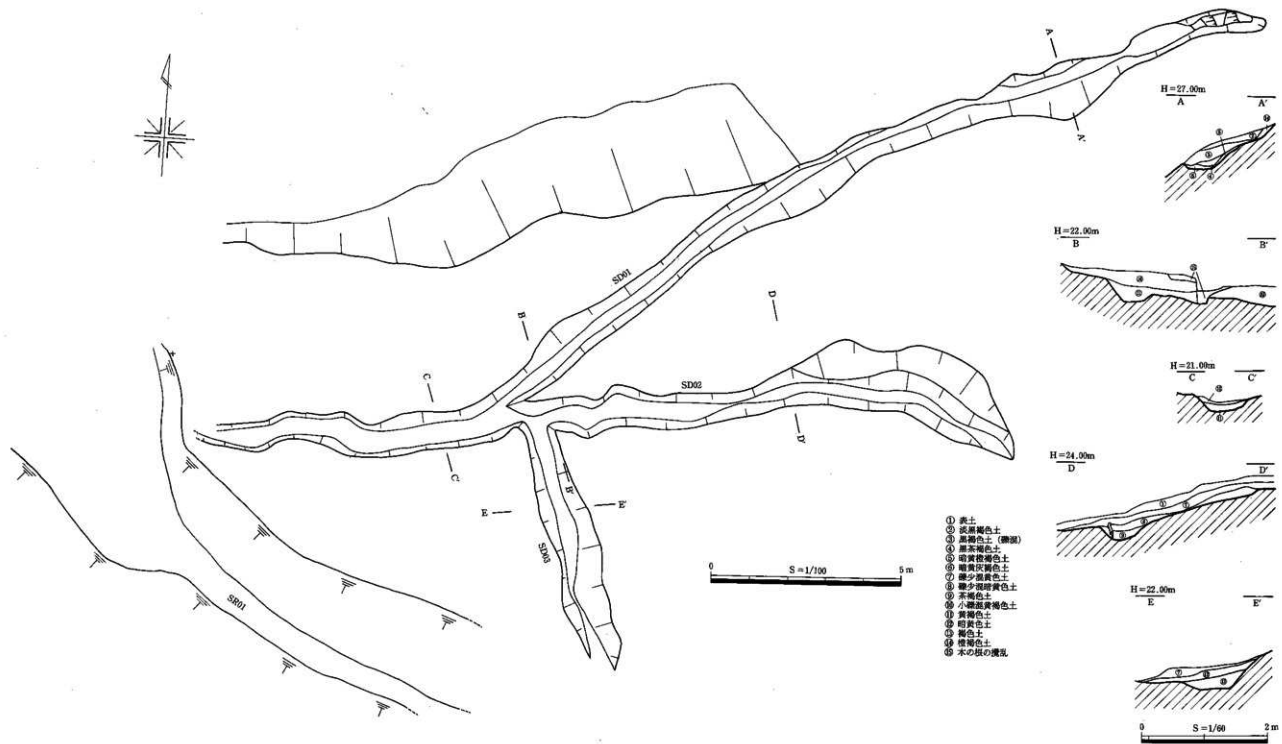
S D09 S D09の埋土は、3層に分層できた。これらは皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

S D10 S D10の埋土は、4層に分層できた。このうち、⑦層は締まりがないものである。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

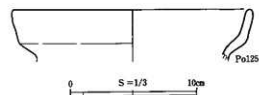
遺物 S D07からは遺物は検出されなかった。S D08からは、埋土中から須恵器高杯Po127が出土している。S D09からは、埋土中から土器片が出土しているが、図化できたものがわずかに施釉陶器Po128のみである。また、S D10からは、埋土中から陶器片Po129が出土している。

時期 S D08のPo127は古墳時代後期～奈良時代頃のものと考えられるが、周辺からの流入と考えられ、この遺構に伴うものとは考えられない。その他の遺物は、中世～近世にかけてのものと考えられる。

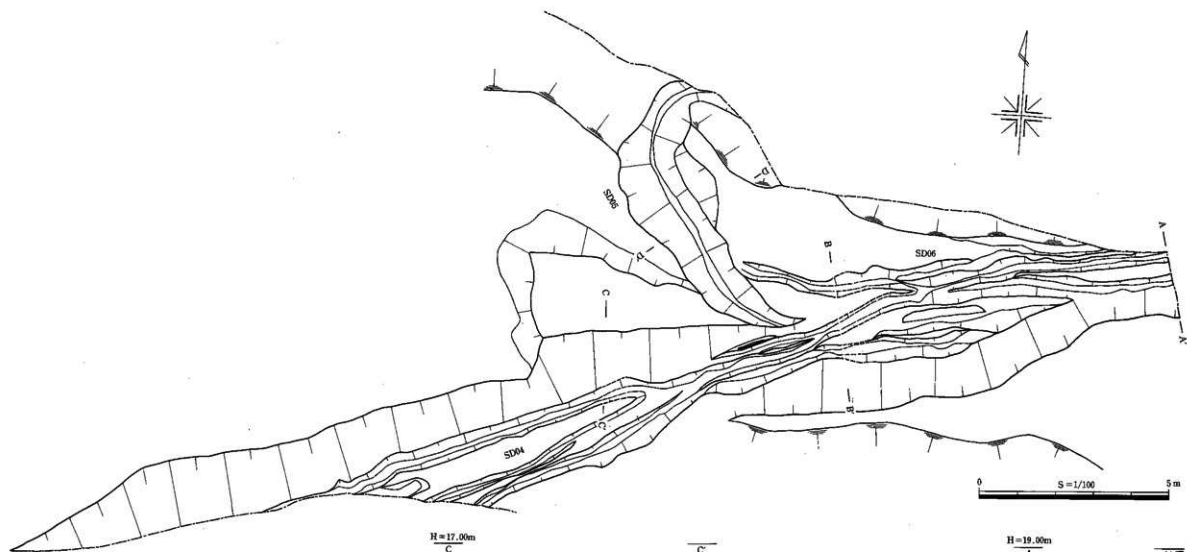
用途 用途はいずれの溝も不明である。



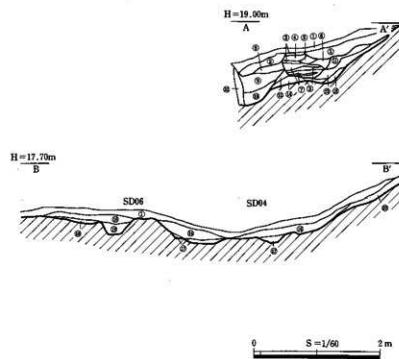
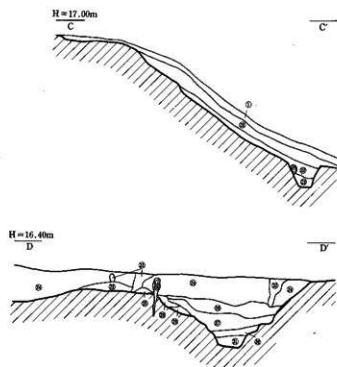
挿図18 SD01~SD03、SR01遠構図



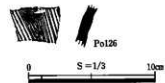
挿図19 SD01出土遺物実測図



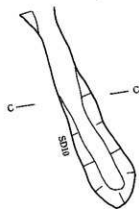
- | | |
|------------------|-------------------|
| ① 黄土 | ⑭ 灰褐色土 |
| ② 赤褐色土 | ⑮ 灰白色礫質土 |
| ③ 灰白色礫質土 (鉄分を含む) | ⑯ 赤褐色土 (赤多量) |
| ④ 褐色土 (よくしまる) | ⑰ 赤褐色土 (ややうすい褐色土) |
| ⑤ 暗褐色土 | ⑱ 赤褐色土 |
| ⑥ 褐色土 | ⑲ 暗褐色土 |
| ⑦ 灰褐色土 | ⑳ 赤褐色土 |
| ⑧ 灰褐色土 | ㉑ 赤褐色土 |
| ⑨ 暗褐色土 | ㉒ 赤褐色土 |
| ⑩ 赤褐色土 (やや粘性をもつ) | ㉓ 暗褐色土 (礫混) |
| ⑪ 赤褐色土 | ㉔ 暗褐色土 |
| ⑫ 暗褐色土 (赤多量) | ㉕ 赤褐色土 |
| ⑬ 褐色土 | ㉖ 赤褐色土 |
| ⑭ 暗褐色土 (礫混) | ㉗ 赤褐色土 |
| ⑮ 赤褐色土 | ㉘ 赤褐色土 |
| ⑯ 赤褐色土 | ㉙ 赤褐色土 |
| ⑰ 赤褐色土 | ㉚ 赤褐色土 |
| ⑱ 赤褐色土 | ㉛ 赤褐色土 |
| ⑲ 暗褐色土 | ㉜ 赤褐色土 |
| ⑳ 赤褐色土 | ㉝ 赤褐色土 |
| ㉑ 赤褐色土 | ㉞ 赤褐色土 |
| ㉒ 赤褐色土 | ㉟ 赤褐色土 |
| ㉓ 暗褐色土 (礫混) | ㊱ 赤褐色土 |
| ㉔ 暗褐色土 | ㊲ 赤褐色土 |
| ㉕ 赤褐色土 | ㊳ 赤褐色土 |
| ㉖ 赤褐色土 | ㊴ 赤褐色土 |
| ㉗ 赤褐色土 | ㊵ 赤褐色土 |
| ㉘ 赤褐色土 | ㊶ 赤褐色土 |
| ㉙ 赤褐色土 | ㊷ 赤褐色土 |
| ㉚ 赤褐色土 | ㊸ 赤褐色土 |
| ㉛ 赤褐色土 | ㊹ 赤褐色土 |
| ㉜ 赤褐色土 | ㊺ 赤褐色土 |
| ㉝ 赤褐色土 | ㊻ 赤褐色土 |
| ㉞ 赤褐色土 | ㊼ 赤褐色土 |
| ㉟ 赤褐色土 | ㊽ 赤褐色土 |
| ㊱ 赤褐色土 | ㊾ 赤褐色土 |
| ㊲ 赤褐色土 | ㊿ 赤褐色土 |
| ㊳ 赤褐色土 | |
| ㊴ 赤褐色土 | |
| ㊵ 赤褐色土 | |
| ㊶ 赤褐色土 | |
| ㊷ 赤褐色土 | |
| ㊸ 赤褐色土 | |
| ㊹ 赤褐色土 | |
| ㊺ 赤褐色土 | |
| ㊻ 赤褐色土 | |
| ㊼ 赤褐色土 | |
| ㊽ 赤褐色土 | |
| ㊾ 赤褐色土 | |
| ㊿ 赤褐色土 | |



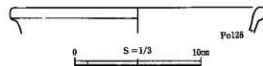
挿図20 SD04~SD06遺構図



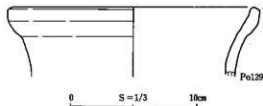
挿図21 SD05出土遺物実測図



挿図23 S D 08出土遺物実測図



挿図24 S D 09出土遺物実測図

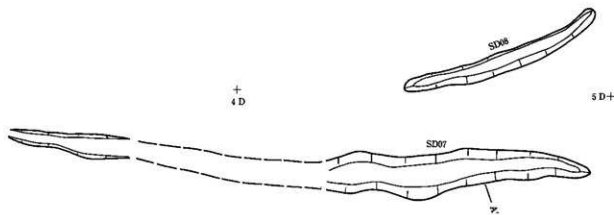


挿図25 S D 10出土遺物実測図

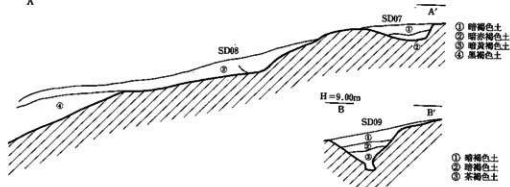
+
3 D

+
4 D

S D +



H=12.00m
A



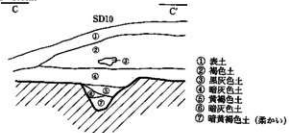
H=9.00m
B

① 暗褐色土
② 暗黄褐色土
③ 暗灰褐色土
④ 黒褐色土

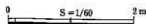
+
3 E



H=8.50m
C



① 黄土
② 褐色土
③ 黒灰色土
④ 赤褐色土
⑤ 暗褐色土
⑥ 暗黄褐色土 (表部)

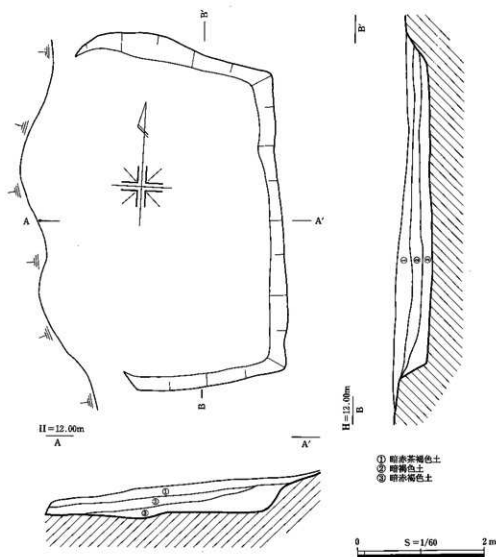


挿図22 S D 07~S D 10遺構図

4. 段状遺構

S S01 (挿図26、図版6)

- 位置** 鷺谷口地区西側の3Eグリッドにあり、標高約10.3~11.1mの西側に傾斜する斜面部に位置する。西側約6mにはSD09がある。
- 形態** 斜面をカットし、現状で長方形を呈す平坦面を作っている。西側は流失しており、遺存状態は必ずしも良好ではない。平坦面の規模は、南北5.1m、東西3.8m以上、深さは最も遺存状態のよい東側壁で最大0.39mを測る。平坦面の面積は、18㎡以上である。床面上ではピットなどは検出されなかった。
- 埋土** 埋土は、3層に分層できた。いずれも締まりのないものである。
- 遺物** 埋土中から、土師器片・須恵器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時期** 埋土中の須恵器片から、古墳時代後期後半~奈良時代頃のものと考えられる。
- 用途** 用途は不明であるが、斜面部に作られた竪穴住居跡の可能性も考えられる。



挿図26 S S01遺構図

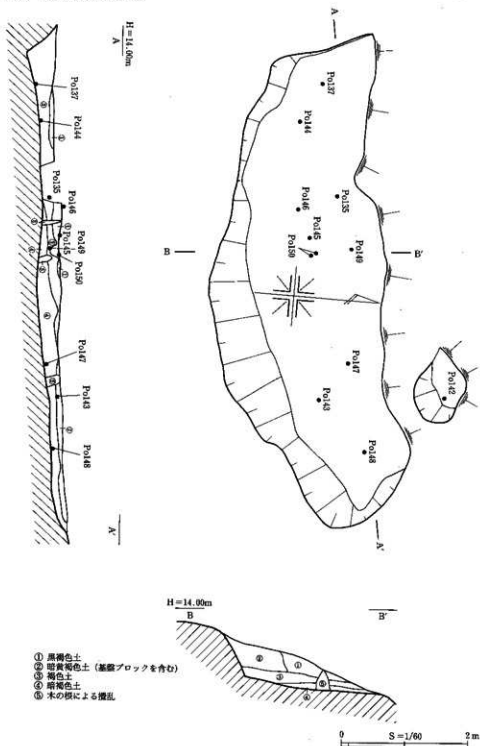
S S02 (挿図27・28、図版6・31)

位置 鷲谷口地区北側の5C・6Cグリッドにあり、標高約12.7~14.0mの北側に傾斜する斜面部に位置する。北側は流失している。南側は埋土上に倉見9号墳周溝が掘り込まれている。

形態 斜面をカットし、不整形円形状を呈す平坦面を作っている。北側は流失しており、遺存状態は必ずしも良好ではない。平坦面の規模は、南北2.2m以上、東西7.5m、深さは最も遺存状態のよい南側壁で最大1.06mを測る。平坦面の面積は、12.4㎡以上である。

床面上ではビットなどは検出されなかった。

埋土 埋土は、4層に分層できた。



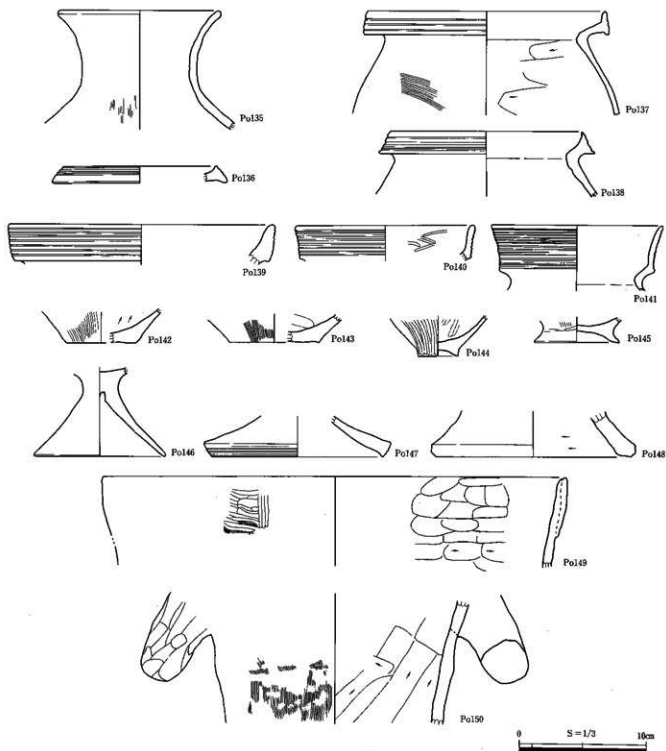
挿図27 S S02遺構図

遺物出土状況 出土遺物のうち図化できたものには、単純口縁をもつ壺Po135、甕Po136～Po141、底部Po142～Po145、高杯脚部Po146・Po147、脚部Po148、甕Po149・Po150がある。

これらは、西側半分に集中して見られ、いずれも埋土中から出土している。

時期 埋土中の土器は、岩吉編年II（古）～III（新）期、弥生時代後期前葉～後半にかけてのものとな幅があるが、S S02の時期はこのうちの最も新しい岩吉III（新）期、弥生時代後期後半頃のものとするこ
とができる。

用途 用途は不明である。



挿図28 S S02出土遺物実測図

5. 鷲谷口地区土器溜り (挿図29~35、図版6・32~35)

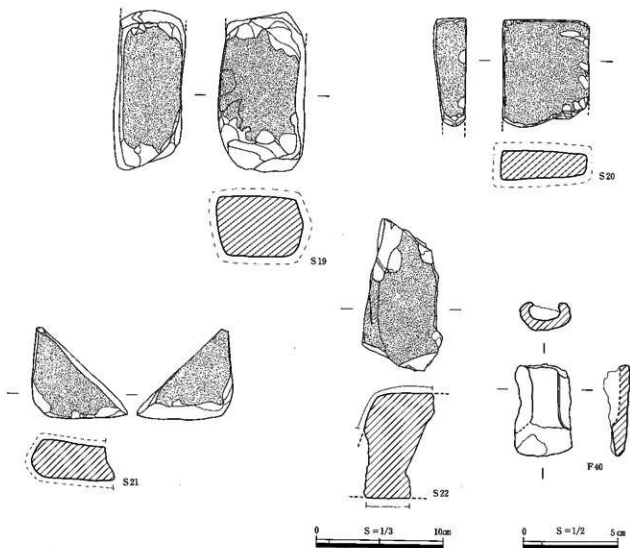
位置 鷲谷口地区の最も南東の11F・11G・12F・12Gグリッドにあり、標高14.0~21.0mの南西側に傾斜する急斜面~谷部に位置する。

埋土 埋土は27層に分層でき、いずれも二次堆積したものと考えられる。土層を観察すると、黒褐色土と黄褐色土が互層状に堆積しており、谷部への堆積が一次的なものではないと言える。

遺物出土状況 図化できたものには、複合口縁をもつ壺Po156~Po163、凹線文をもつ壺頸部Po164、直口壺Po165~Po168、小型壺Po170、複合口縁をもつ壺Po171~Po225、「く」字状口縁をもつ壺Po226~Po228、胴部Po229、底部Po230~Po242、高杯Po243~Po250、鼓形器台Po251~Po256、蓋Po257、脚部Po258、低脚杯脚部Po259・Po260、甔Po261~Po263、波佐見焼系碗Po264、磁石S19~S22、袋状鉄弁F40がある。

出土位置がわかるものを見ると、遺物のまとまりは大きく2群に分かれる。東寄りの一群からは、Po169・175・188・192・195・196・213・217・228・244・247・252・257・263が出土している。

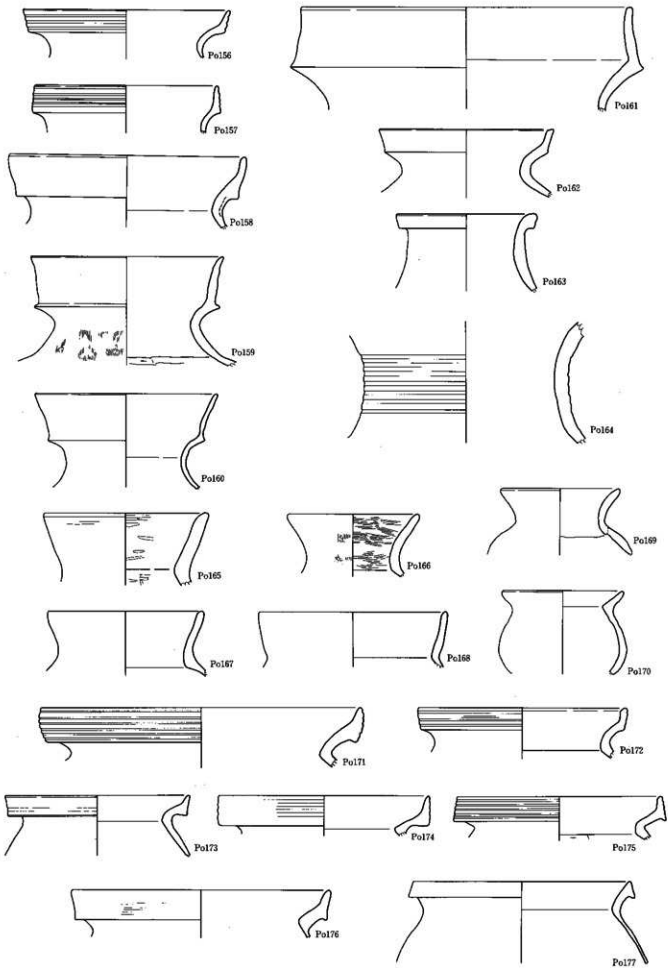
西寄りの一群からは、Po156・158・159・160・165・167・168・176・178・180・182・185・186・187・189・198・200・205~209・211・214~216・218・220・221・224・225・227・230~234・236・238・239・242・243・245・246・248・249・251・253~256・258~260・262が出土している。



挿図29 鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(1)

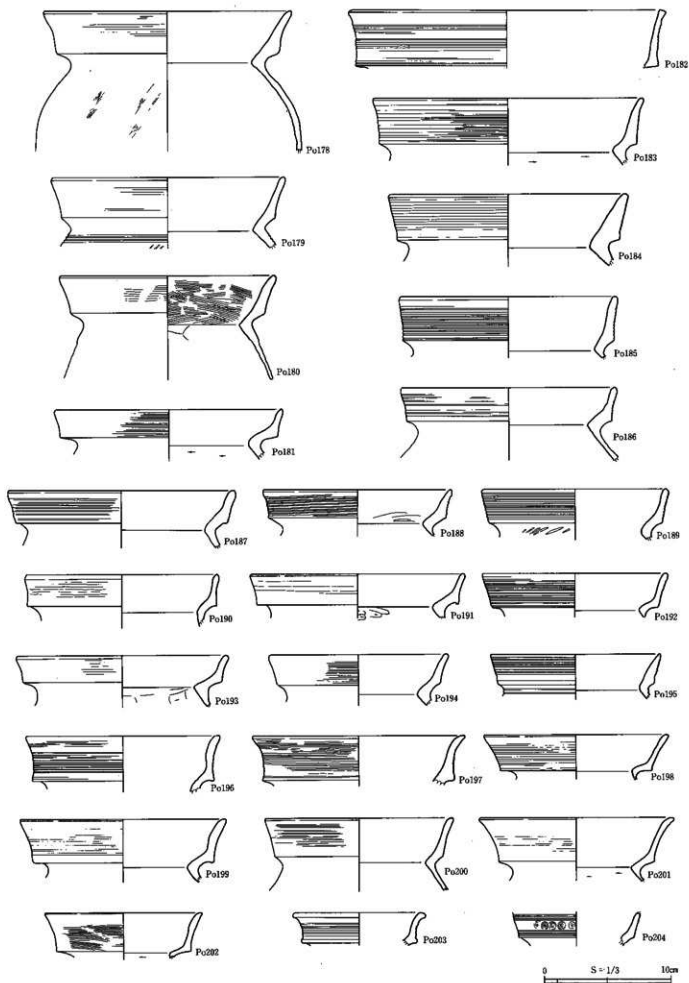


挿図30 鷲谷地区土器溜り周辺地形図

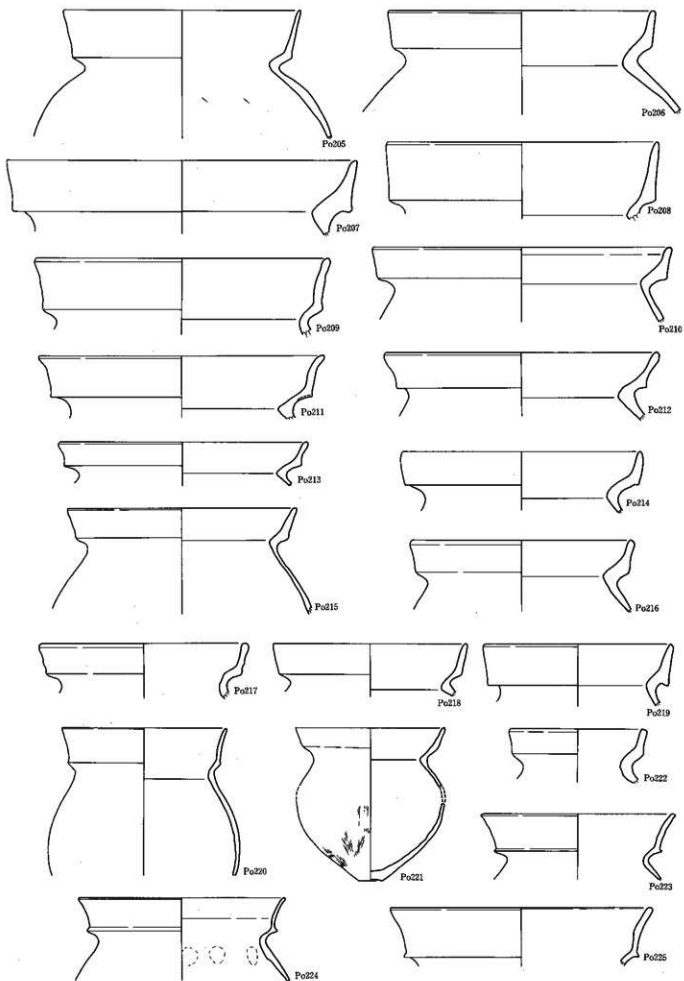


挿図31 鰐谷口地区土器溜り出土遺物実測図(2)

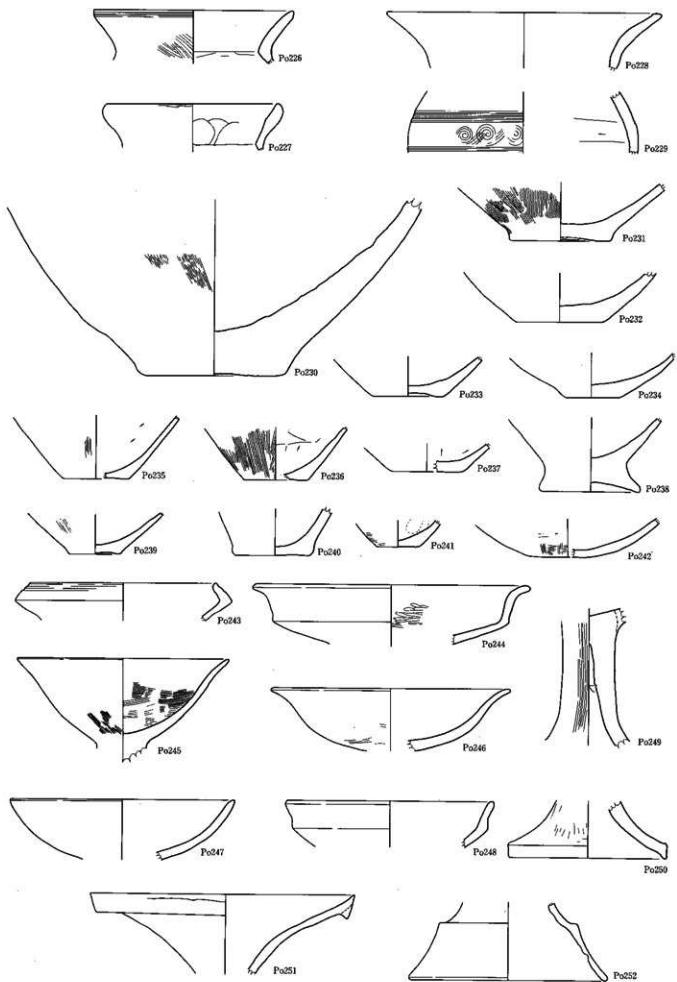
0 S=1/3 10cm



挿図32 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(3)



挿図33 鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(4)

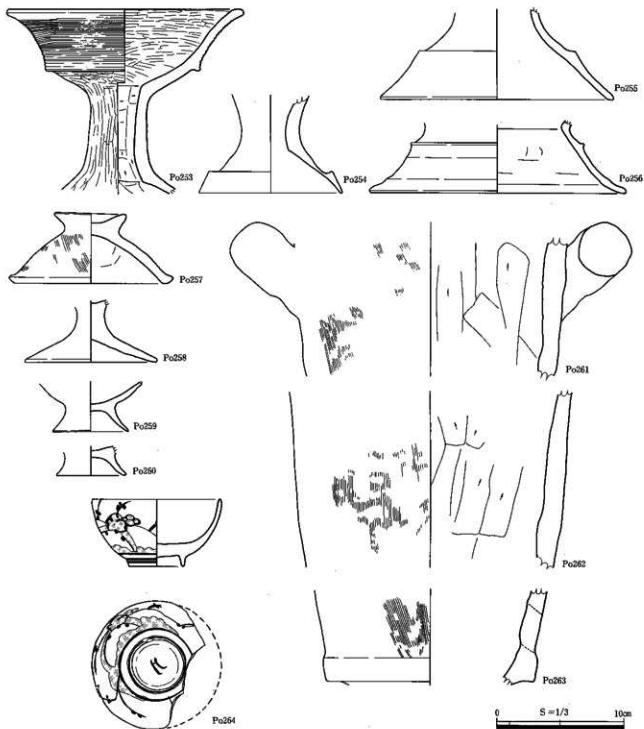


挿図34 鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(5)

0 S=1/3 10cm

時期 これらの遺物は、Po264を除けば岩吉編年II（新）期～V（新）期、弥生時代後期前半～古墳時代前期のものと考えられる。これらは、上方の鷺谷奥地区A区から転落したものと考えられる。今回の調査では鷺谷奥地区には岩吉II（新）期に遡る遺構は見当たらなかったが、本来鷺谷奥地区には岩吉II（新）期の遺構があったものと考えられる。なお、Po264は18～19世紀のものと考えられる。

また、図化できなかったが、縄文土器も出土しており、周辺にはこの時期の遺構の存在も推定される。



挿図35 鷺谷口地区土器溜り出土遺物実測図(6)

6. 鷺谷口地区遺構外遺物 (挿図36、図版35)

ここでは、鷺谷口地区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

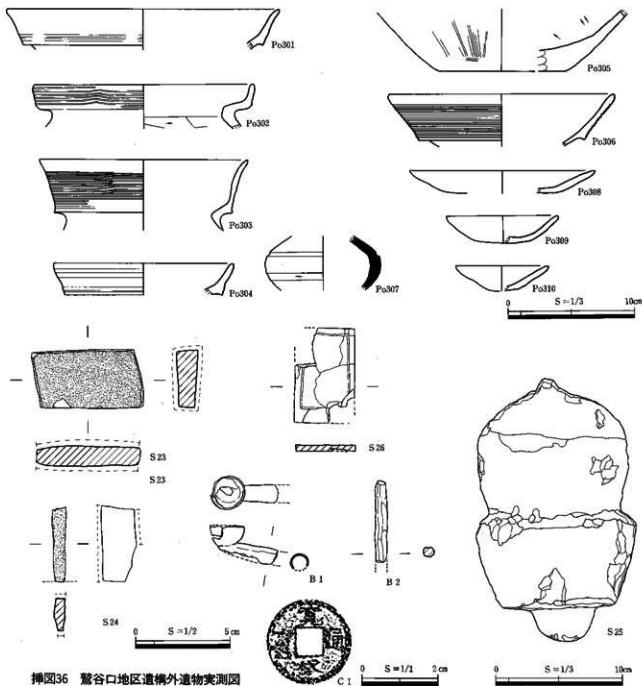
図化できたものには、弥生土器壺Po301~Po304、底部Po305、鼓形器台Po306、須恵器甕Po307、土師質皿Po308~Po310、砥石S23・S24、五輪塔空風輪S25、硯S26、煙管雁首B1、不明青銅器B2、寛永通寶C1がある。

弥生土器のうちPo302は岩吉編年III(古)期、Po301・Po304~Po306は岩吉編年III(新)期、Po303は岩吉編年IV期に並行するものと考えられ、鷺谷口地区の遺構とほぼ同時期のものである。

甕Po307は古墳時代後期のものと考えられ、後述する倉見8・9号墳とほぼ同時期と考えられる。

土師質皿は、中世末頃のものと考えられ、SK01とほぼ同時期のものと考えられる。

砥石S23・S24、硯S26、煙管B1、不明青銅器B2は、10Eグリッド付近で出土している。いずれも近世頃のものと考えられる。



挿図36 鷺谷口地区遺構外遺物実測図

第3節 西桂見遺跡鷺谷奥地区A区の概要

位置 鷺谷奥地区は標高12m～32mの南北方向に延びる狭い丘陵上～斜面にかけての地区で、さらに、地形的特徴からA区・B区に分けた。

A区は、標高27m～32mの丘陵上～西側斜面にかけての地区である。

遺構 この地区で検出した遺構は、鷺谷口地区同様弥生時代後期～中世にかけてのものがほとんどで、竪穴住居跡7基、貯蔵穴と考えられる袋状土坑3基、不明土壇1基、溝状遺構5基、土塁状遺構1基、古墳1基である。このうち、古墳については倉見古墳群に属するため、章を改めて述べる事とする。

竪穴住居跡(S I 04～S I 10)は弥生時代後期～古墳時代前期のもので、以前に調査された西桂見墳丘墓・土壇墓群とほぼ同時期のものである。この時期には屋外貯蔵穴(S K 04)・屋内貯蔵穴(S K 03?・06)が併存している。

土塁状遺構は、時期は不明であるが、この地区の遺構の中では最も時期が下るものである。部分的な検出であったが、この尾根上に累々と築かれたものと考えられる。

第4節 西桂見遺跡鷺谷地区A区の調査結果

1. 竪穴住居跡

S I 04 (挿図37・38、図版7・35)

位置 鷺谷奥地区A区の最も北側の14Bグリッドにあり、標高30.75mの狭い尾根上に位置する。南側約5mには倉見7号墳がある。

形態 遺存状況は悪く東側半分以上は流失しているが、平面形は、遺存する壁の状態から円形または隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.37m以上、南北3.98m以上を測り、床面積は7.7 m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい南壁で最大0.57mを測る。

壁溝は、南壁際でわずかに検出されたに過ぎない。幅18cm、深さ6cm、断面「U」字状を呈す。

検出された主柱穴はP 1・P 2の2個であるが、本来は4個あったものと考えられる。それぞれの規模は、P 1 (33×25-56) cm、P 2 (45×30-56) cmを測る。

主柱穴間距離は、2.4mである。

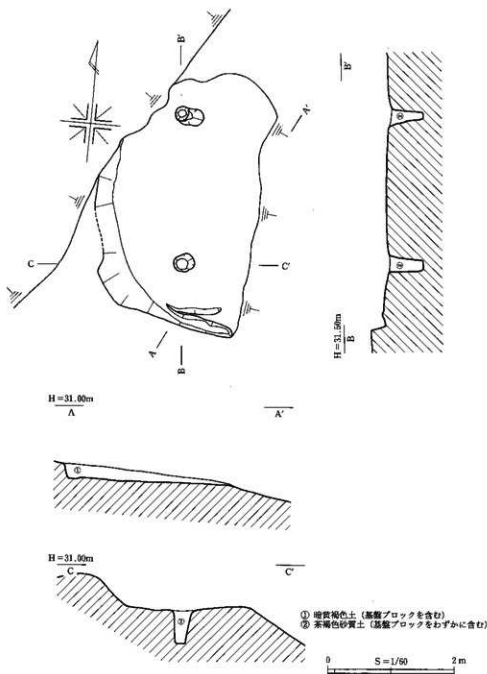
埋土 埋土は暗黄褐色土1層である。

遺物 図化できたものには、床面直上から出土した壺Po24のみである。

時期 床面出土の土器から、岩古羅年III(新)期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図37 S I 04出土遺物実測図



挿図38 S104遺構図

S105 (挿図39・40、図版7・8・35)

位 置 鷲谷奥地区A区のほぼ中央の13D・Eグリッド、標高約31～32mに位置する。丘陵上の平坦な地に孤立した形で存在する。北側にはSD11、東側には用途不明であるが中・近世のものと思われる土塁状遺構がある。西側は急な斜面となっている。

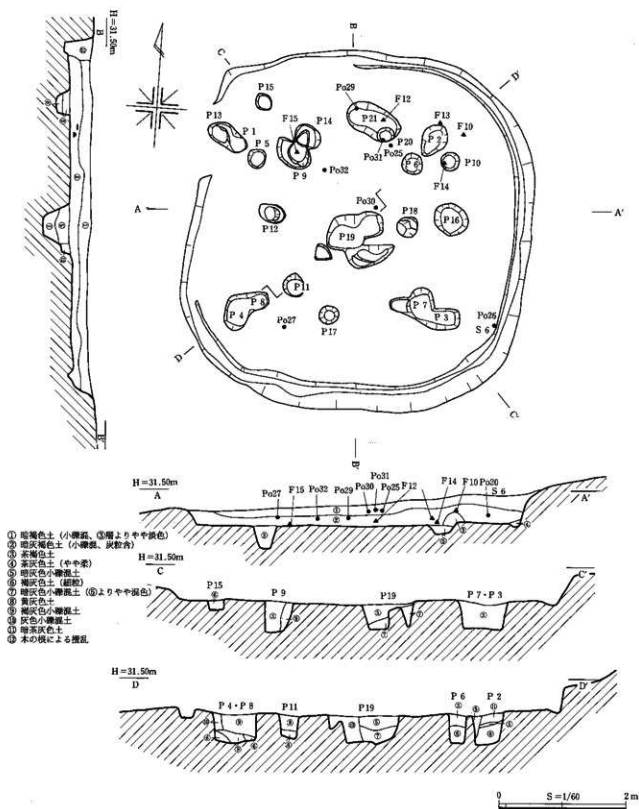
形 態 遺存状態は比較的良く、壁はほぼ全周する。平面形は隅丸方形を呈す。主柱穴は4本と考えられるが、1か所に3個以上のピットが見られることから、3回以上の建て替えが考えられる。同一床面上でピットを検出したため、それぞれの床面規模は不明であるが、最も新しいものは、南北5.3m、東西5.2m、床面積は23.6㎡を測る。

残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.60mである。

壁溝は西側1/3を除く部分で検出されたが、本来は全周していたものと考えられる。断面は逆台形を呈し、幅は6~20cm、深さは4~6cmである。

時期の前後は不明であるが、小さいものからP3・9・10・11を主柱穴とするものをS105-1、同じくP5・6・7・8をS105-2、P1・2・3・4をS105-3とし、以下に記述する。

なお、P3は横長のピットで、S105-1、-3が共有していたものと判断した。



挿図39 S105遺構図

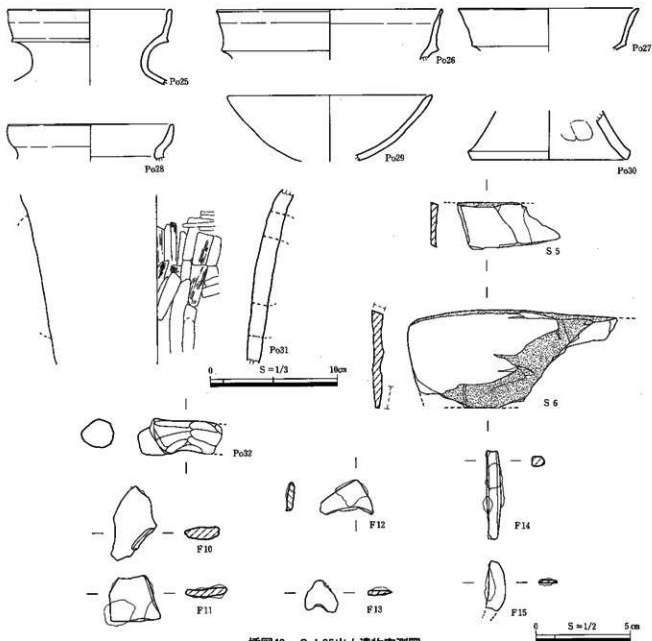
S I 05-1 主柱穴の規模は上述順に (57×35-41) cm、(45×34-47) cm、(31×30-35) cm、(38×32-36) cmで、柱穴間距離はP 9～P 10が2.46m、P 10～P 3が2.32m、P 3～P 11が2.42m、P 11～P 9が2.16mである。

S I 05-2 主柱穴の規模は上述順に (29×31-44) cm、(34×34-47) cm、(54×42-36) cm、(34×34-42) cmで、柱穴間距離はP 5～P 6が2.30m、P 6～P 7が2.27m、P 7～P 8が2.60m、P 8～P 5が2.30mである。

S I 05-3 主柱穴の規模は上述順に (49×33-43) cm、(60×41-52) cm、(57×35-41) cm、(55×40-49) cmで、柱穴間距離はP 1～P 2が3.2m、P 2～P 3が2.9m、P 3～P 4が3.3m、P 4～P 1が2.8mである。

中央ピットをはさんで東西に、(35×32-27) cmを測るP 18、(43×31-40) cmを測るP 12があり、これらはS I 05-1に伴う様持柱と考えられる。

また、P 2～P 3間には(58×47-17) cmを測るP 16、P 3～P 4間には(30×28-35) cmを測るP 19があり、これらは補助柱穴と考えられる。



挿図40 S I 05出土遺物実測図

中央ピット 中央ピットP19の平面形は、(54×60-45) cmと(42×42-45) cmの円形のピットを合わせた形と
なっている。建て替えの際に、中央ピットも掘り替えられたものと考えられる。

この他にも床面上でピットが検出されているが、性格は不明である。

埋土 埋土は3層に分層できるが、基本的には2層である。全体的に小礫を含み、黒ずんでいる。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに斐Po25~Po28、高杯Po29・Po30、甕Po31、磁S5・6、鉄片
F10~15がある。このうち鉄片は床面から出土し、その他は埋土中・下層からの出土である。

鉄片が多数出土しているが、いずれも製品とは考えられないものである。

時期 出土遺物より、岩吉編年V(古)期・弥生時代後期後半~古墳時代前期前半頃のものと考えられ
る。

S I 05-1、2、3の明確な前後関係は不明であるが、S I 05-2と-3で重複する主柱穴P4が
P8を切っていることから、S I 05-2が-3に先行すると考えることができる。また、西性見遺跡
の他の住居跡は、おおむね拡張傾向を示していることから、S I 05-1→2→3の順で建て替え
が行われたものと考えられる。

S I 06 (挿図41・42、図版8・35)

位置 鷺谷奥地区A区南側の14Fグリッドにあり、標高約30mの尾根上のやや広くなった平坦面に位置す
る。北側約4mにはS I 08、南側約7mにはS I 09がある。

形態 遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われているものと考えられ、ピット及び壁溝
のみ遺存している。床面上に多数のピットが検出されているが、並びを考えると少なくとも2回の建
て替えがあったものと考えられ、それぞれS I 06-1、S I 06-2とした。

S I 06-1 平面形は、遺存する壁溝の状態から楕円形または多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西6.
05m、南北6.73mを測り、床面積は約32.2㎡である。壁高は、不明である。

壁溝は、東側・西側で途切れる部分があるものの、ほぼ全周していたものと考えられる。幅13~26
cm、深さ8~15cm、断面「U」字状を呈す。

主柱穴はP1~P7と考えられ、それぞれの規模は、P1(35×30-45) cm、P2(69×65-58)
cm、P3(31×30-41) cm、P4(40×34-28) cm、P5(50×40-32) cm、P6(56×51-58)
cm、P7(56×52-42) cmを測る。

主柱穴間距離は、P1~P2間から順に、2.1m、2.2m、2.8m、2.4m、2.5m、2.4m、2.4mで
ある。

S I 06-2 S I 06-2は、06-1の内側で検出された6個のピットから存在を判断した。平面形・規模とも不
明である。

主柱穴はP8~P13で、それぞれの規模は、P8(28×28-70) cm、P9(35×27-67) cm、P
10(52×40-42) cm、P11(100×69-49) cm、P12(63×57-47) cm、P13(69×67-61) cmを測
る。

主柱穴間距離は、P8~P9間から順に、1.9m、3.0m、2.2m、2.5m、2.9m、2.8mである。

中央ピットは不整形に二段に掘り込まれたP14で、上縁部(156×120-11) cm、中央部(84×70-
29) cmを測る。中央ピットから外側に向かって2本の溝が延びている。北側のものは、長さ2m、幅
16cm、深さ5cmを測り、P2によって切られている。南東側のものは、長さ2.16m、幅22~32cm、深
さ15~20cmを測る。

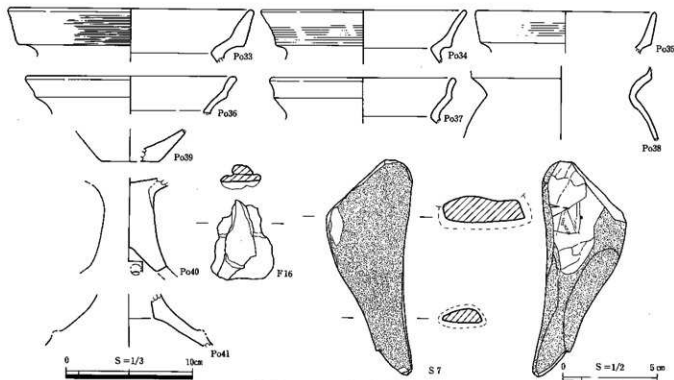
その他に、床面上で多数のピットが検出されたが、用途は不明である。しかし、P1・P8・P10
の周辺には明らかに主柱穴と考えられるものがあり、S I 06-1、06-2以外にも上記の主柱穴を利用
した建て替えの住居があったものと考えられる。

埋 土 埋土は暗褐色土1層である。

遺物出土状況 出土遺物には、壺Po33~Po38、底部Po39、高杯Po40、鼓形器台Po41、砥石S7、鉄片F16がある。このうち、床面からは、Po1、Po3、Po9が出土している。また、P6内からPo6が出土している。その他のものは、埋土下層中からの出土である。

F16は3~4個の鉄片が付着したもので、いずれも製品とは考えられない。

時 期 床面出土の土器は、岩吉編年Ⅲ(新)期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。S I 06-1、06-2の確かな先後関係は不明であるが、中央ピットから延びる溝のうち、北側のものがS I 06-1のピットによって切られている事から、この溝がこの住居のうちの先行するものの溝と考え、S I 06-2→S I 06-1に拡張されたものと考えられる。この場合、S I 06-1は上記の時期のものと考えられ、S I 06-2は若干遅るものと考えられる。



挿図41 S I 06出土遺物実測図

S I 07・S K 06 (挿図43~46、図版8・9・35・36)

位 置 鶯谷奥地区A区西側の14Fグリッドにあり、標高約30mの屋根上のやや広くなった平坦面の西側に位置する。北東約3mにはS I 08、南西側約3mにはS I 06がある。

形 態 遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われているものと考えられ、ピット及び壁溝のみ遺存している。壁溝の遺存状態から考えると、平面方形ないし長方形を呈していたものと考えられる。規模は西側を復元すると、東西2.6m、南北3.0m程度となり、床面積約7㎡と推定される。

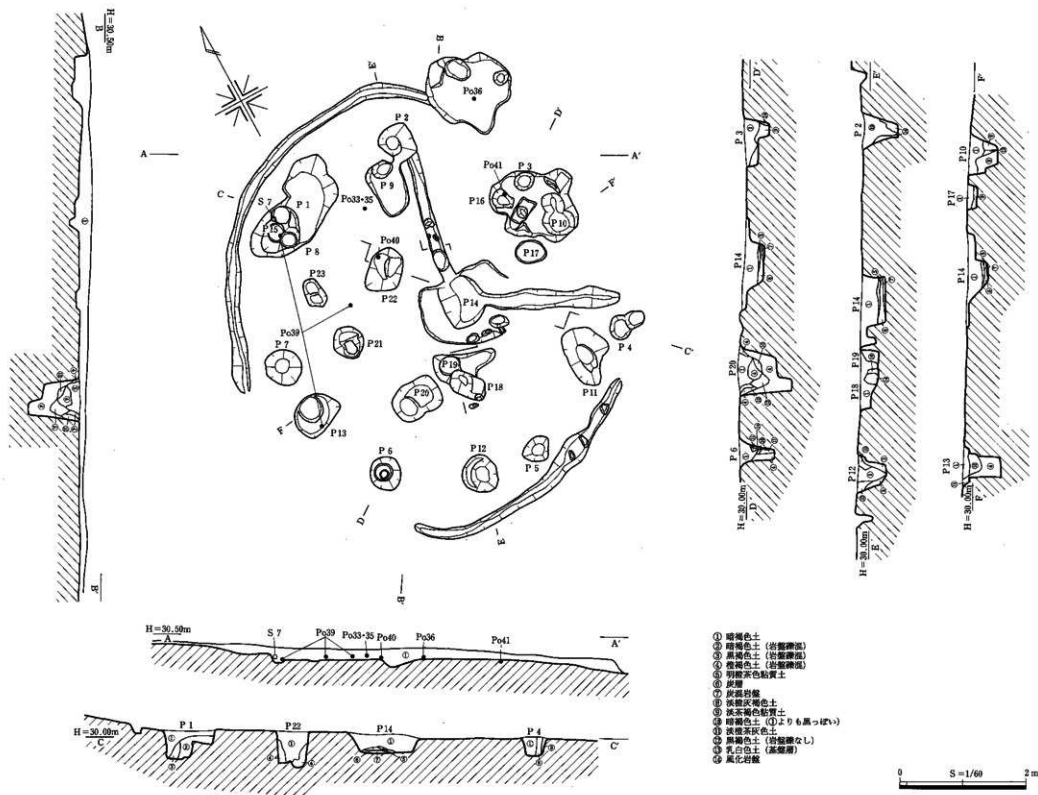
壁溝は、東側で部分的に検出された。幅13~22cm、深さ6~15cm、断面「U」字状を呈す。

主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、床面上で4個のピットを検出した。それぞれの規模は、P 1 (46×43-56) cm、P 2 (35×35-31) cm、P 3 (41×27-42) cm、P 4 (34×21-19) cmを測る。これらの用途は不明である。

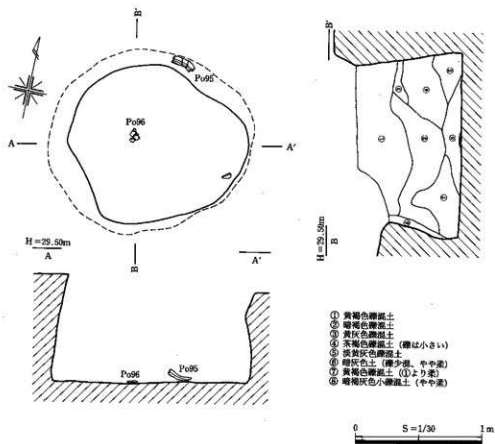
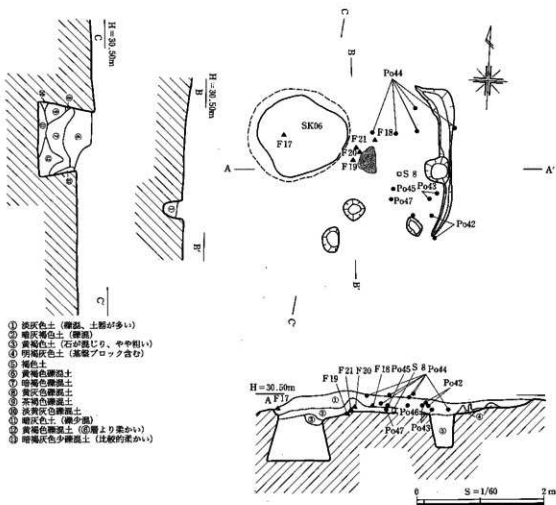
床面ほぼ中央部で、焼土面を1カ所検出した。

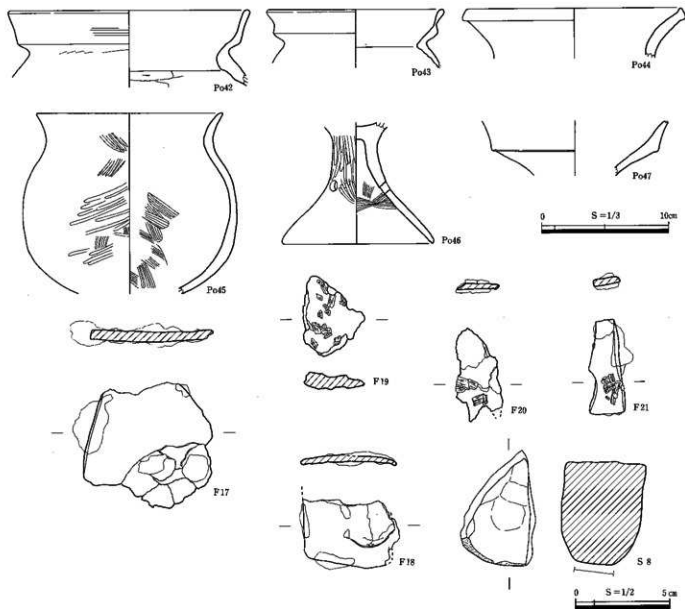
埋 土 埋土は、2層に分層できた。

S K 06 床面南西側でS K 06が検出された。遺存状況は比較的よく、平面は上縁部不整形円形、底部楕円

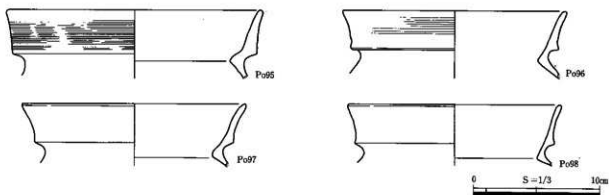


挿図42 S106遺構図





挿図45 S I 07出土遺物実測図



挿図46 S K 06出土遺物実測図

形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.45m、短軸1.27m、基底部で長軸1.61m、短軸1.46m、深さ1.03mを測る。

埋土は、8層に分層できた。いずれも基盤礫を含むもので、壁が崩落しながら堆積したものと考えられる。

形態上の特徴から及び検出位置から、SK06はこの住居に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものには甕Po42～Po45、高杯Po46、鼓形器台Po47、鉄片F17～F21、敲石S8がある。

いずれも埋土下層からの出土である。鉄片は、板状を呈すもので、F19～F21には炭化物が付着している。

SK06からは甕Po95～Po98が出土している。このうち、底面上ではPo95が北側壁際で、Po96が中央部で出土している。その他のものは、埋土中からの出土である。

時期 埋土下層出土の土器及びSK06出土土器から、SI07は、岩吉編年Ⅲ（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

SI08・SK03（挿図47～51、図版9・36）

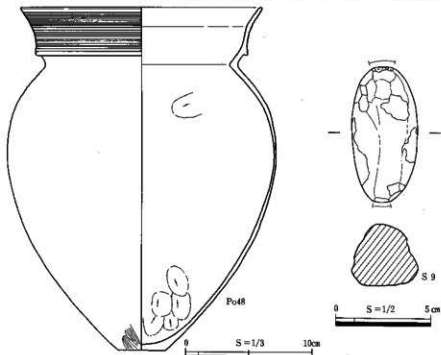
位置 鷲谷奥地区A区南側の14Eグリッドにあり、標高約30mの尾根上のやや広くなった平坦面の北側に位置する。南側約4mにはSI06、南東側約2mにはSK04がある。

形態 遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われ、ピット及び二重に巡る壁溝のみ遺存している。壁溝の遺存状態から考えると、平面方形ないし長方形を呈していたものと考えられる。規模は東側・南側を復元すると、東西約4m、南北約3.0m程度となり、床面積約12m²と推定される。

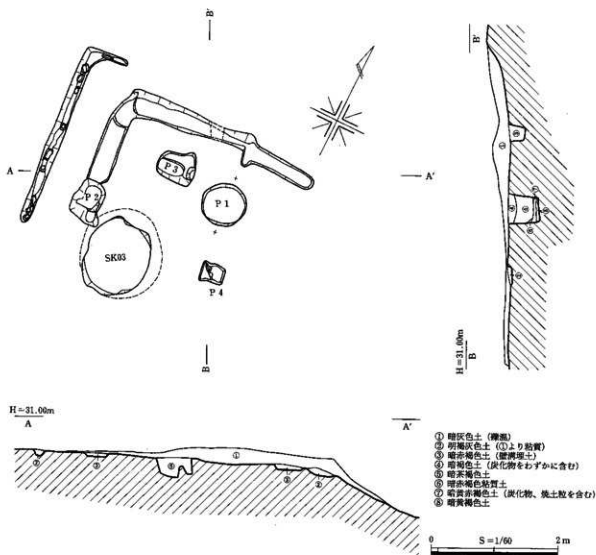
壁溝は、北側～西側で検出された。外側のものは幅9～20cm、深さ9cmを測り、断面逆台形状を呈す。壁溝内には、径10cm程度の小ピットが掘り込まれている。

内側のものは、幅24～34cm、深さ8～14cmを測り、断面逆台形状を呈す。

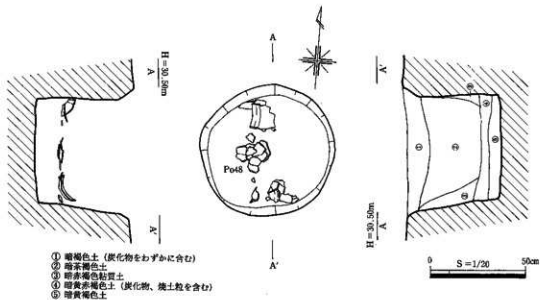
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、床面上で4個のピットを検出した。それぞれの規模は、P1（74×70-51）cm、P2（64×45-40）cm、P3（63×44-32）cm、P4（48×31-16）cmを測る。



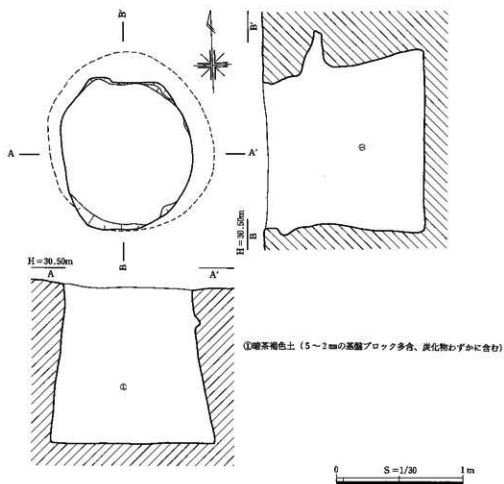
挿図47 SI08出土遺物実測図



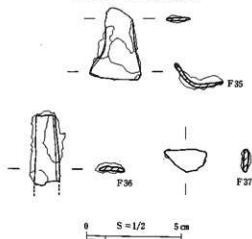
挿図48 S108遺構図



挿図49 S108 P1内遺物出土状況図



挿図50 SK03遺構図



挿図51 SK03出土遺物実測図

埋土 埋土は、暗灰色土1層のみである。

SK03 床面西側で、SK03が検出された。

遺存状況は非常によく、平面は上縁部楕円形、底面円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.19m、短軸1.03m、基底部で長軸1.44m、短軸1.32m、深さ1.26mを測る。

底面から0.8～1.0mのところに幅8～15cm、深さ3～30cmを測る切り込みが、ほぼ円形に設けられ

ており、土坑上面をふさぐ蓋などを受けるためのものと考えられる。

埋土は、炭化物をわずかに含む暗茶褐色土単層である。

形態上の特徴及び検出位置から、S K03はこの住居に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものにP 1から出土した壺Po48、敲石S 9がある。また、S K03埋土中から土器片、鉄片F35～F37が出土している。鉄片は、三角形・長方形を呈すもので、いずれも製品とは考えられないものである。土器片は、小片のため図化できなかった。

時期 P 1内出土土器から、S I 08は岩吉編年IV期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

S I 09・S D15 (挿図52～56、図版10・36・37)

位置 鷲谷奥地区A区南側の13G・14Gグリッドにあり、標高約29.8～30.6mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。南側約2mにはS I 10がある。また、周囲には約1.3～1.5m離れて、S D15が半環状に巡っている。

形態 西側が流失しているものの遺存状況は比較的良好、平面は円形を呈す。規模は、東西4.13m、南北4.54mを測り、床面積15.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状況がよい東側壁で最大0.67mを測る。壁溝は、西側が流失しているがほぼ全周していたものと考えられる。幅7～18cm、深さ2～5cmを測り、断面逆台形状を呈す。北東側壁溝内には、径10cm程度の小ピットが掘り込まれている。

主柱穴と考えられるものはP 1～P 3の3個である。それぞれの規模は、P 1 (48×42～57) cm、P 2 (39×39～33) cm、P 3 (41×36～38) cmを測る。主柱穴間距離は、P 1～P 2間から順に、2.7m、2.7m、2.4mである。

中央ピットはP 4で、(85×75～49) cmを測る。埋土は、炭化物をわずかに含む暗茶褐色土単層である。中央ピットから壁溝に向かって南北2本の溝が接続している。北側のものは、長さ2.5m、幅24～38cm、深さ16cmを測る。南側のものは、長さ1.7m、幅14～24cm、深さ13cmを測る。断面はいずれも「U」字状を呈す。

この他に、床面北側で(28×24～32) cmを測るP 5が検出されているが、用途は不明である。

炭化材・焼土 床面上で、中央部より南東側で構造材と考えられる炭化材が検出され、S I 09が焼失したことを裏づけるものである。遺存状況はあまりよくなかったが、南側のものは明らかに垂木と推定された。P 2・P 5上で検出されたものも垂木と考えられるが、柱の可能性もある。これらの炭化材は、樹種鑑定の結果スダジイ・スギ・ミズキと判明した。また、南側では炭化材上で焼土が検出された。この焼土は、焼失の際に焼け落ちたものと考えられるが、南側部分にのみ検出されており、出土状況から見ると不自然である。消火の際に投げこまれた可能性もある。この焼土下に、Po49・Po50が潰れるように検出された。

埋土 埋土は、8層に分層できた。いずれも炭化物を多量に含むもので、焼失の際に堆積したものと考えられる。なお、⑧層は土塁状遺構の盛土の可能性もある。

S D15 S I 09の後背部に1.3～1.5m離れて半環状に巡るS D15が検出された。この溝は全周するものではない。規模は全長17.7m、幅0.21～0.68m、深さ0.13～0.3mを測る。断面は逆台形状を呈す。

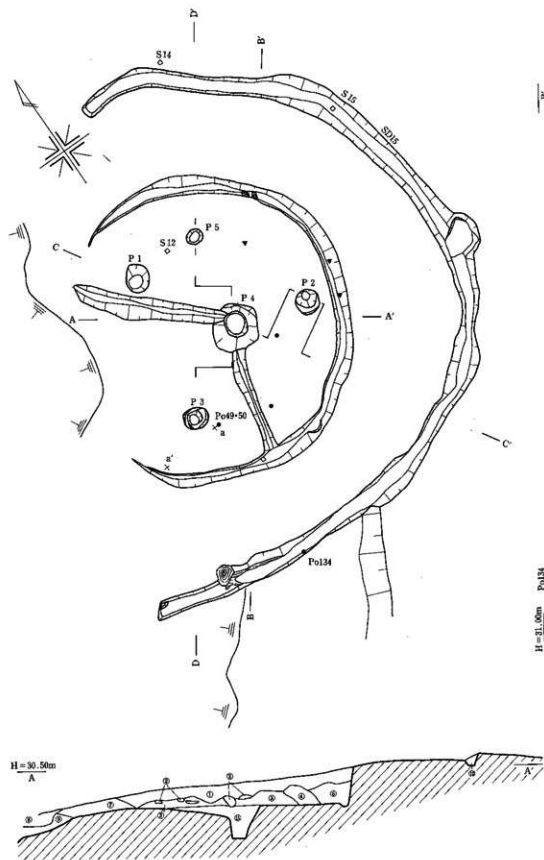
埋土は暗茶褐色土単層である。

S I 09の周囲を巡ることから、この住居に伴う排水溝と考えられる。

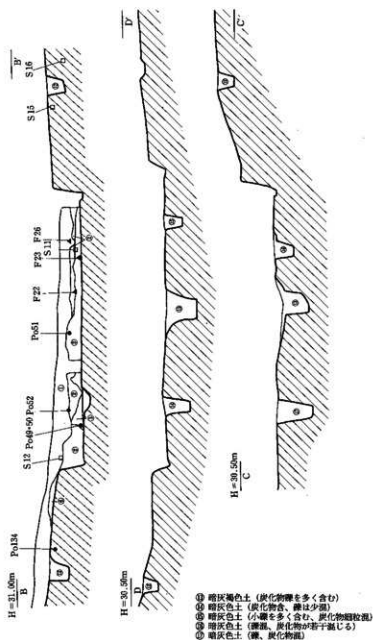
遺物出土状況 出土遺物には、S I 09で図化できたものに大型壺Po49・Po50、壺Po51・Po52、底部Po53、鼓形器台Po54、鉄片F22～F26、敲石S 10、磨石S 11、擦石S 12がある。

このうち、床面南側で焼土下に潰れたようにPo49・Po50が出土している。その他のものはいずれも埋土中からの出土である。

鉄片は、いずれも製品とは考えられないもので、埋土下層で出土している。

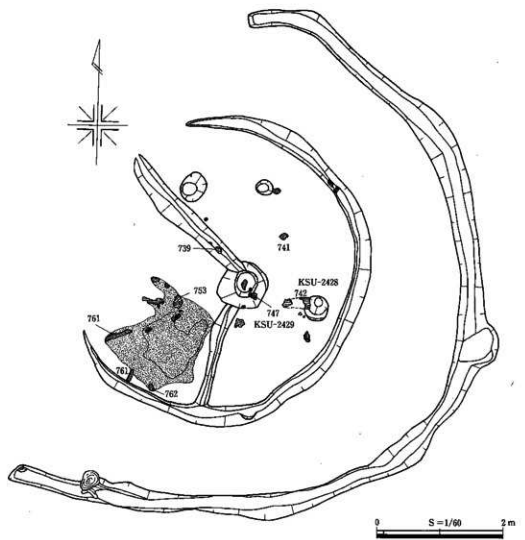


挿図52 S109・SD15遺構図

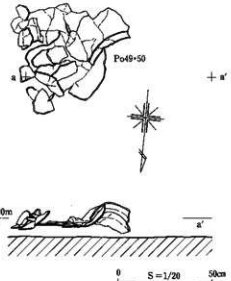


- ① 暗黒灰色礫混土 (木炭粒も少々入る。炭化物混)
- ② 淡黄灰色礫混土 (炭化物も少々入る)
- ③ 暗黒灰色礫混土 (江戸層とほぼ同層)
- ④ 暗褐色礫混土 (大きな礫、炭化物混)
- ⑤ 暗褐色礫混土 (区層とほぼ同層)
- ⑥ 黄褐色土 (礫少量)
- ⑦ 暗灰色小礫土 (炭化物少量)
- ⑧ 黄灰色土 (土層?)
- ⑨ 暗灰色土
- ⑩ 茶褐色礫混土
- ⑪ 暗灰色礫土 (炭化物、礫を多く含む)
- ⑫ 暗灰色土 (S111層上)

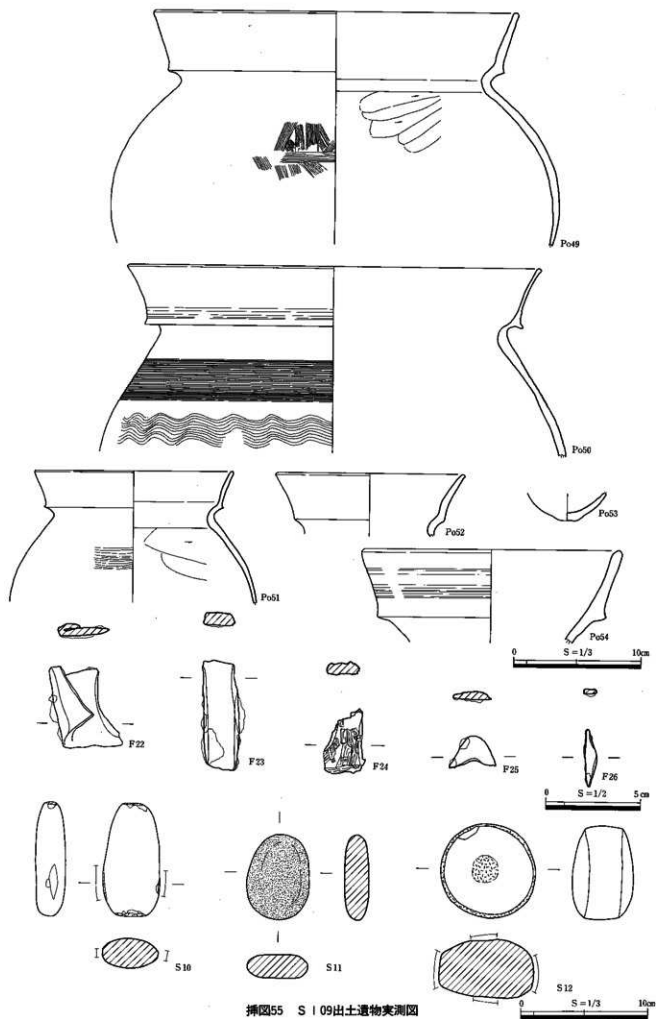
0 S=1/50 2m



挿図53 S109炭化物出土状況図



挿図54 S109床面遺物出土状況図



挿図55 S109出土遺物実測図

S D15からは、図
 画できたものに鑿
 Pol134、砥石 S13・
 S14がある。このう
 ち、Pol134は、南側
 壁際に張り付くよう
 に、口縁部を逆さに
 して出土している。
 また、S13は東側中
 央部で、S14は北側
 周辺で出土してい
 る。

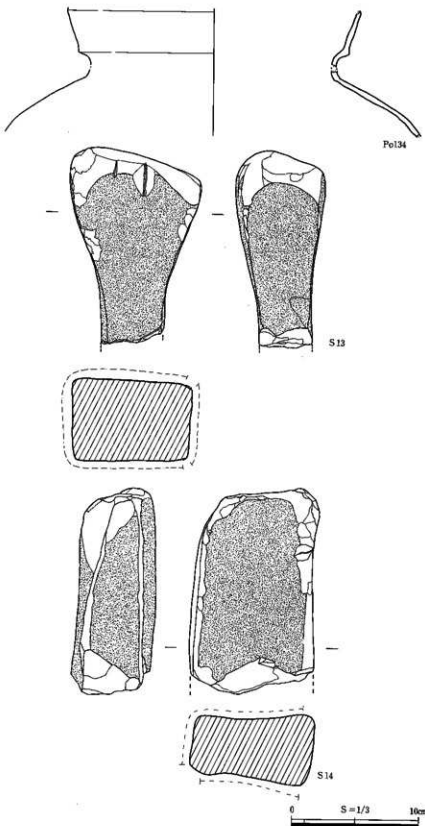
また、図化できな
 かったが、鉄片が出
 土している。

なお、砥石 S13の
 端部には鉄錆が付着
 しており、砥石とし
 て機能した以外に、
 鉄製品の製造に関わ
 ったものと考えられ
 る。

時 期 S I 09床面出土土
 器及び S D15出土土
 器から、S I 09は岩
 吉編年 V (古) 期・
 弥生時代後期後半
 ～古墳時代前期前半
 頃のものと考えられ
 る。

なお、炭化材 No742
 (K S U-2428)、No747
 (K S U-2429)の¹⁴C
 年代測定の結果、前
 者は B.P1570±20、
 後者は B.P1580±20
 という年代値が示さ
 れた。この年代から

与えられる絶対年代は、5世紀前半であり、土器型式が示す年代とは約半世紀以上の開きがあるもの
 と思われる。



挿図56 S D15出土遺物実測図

S I 10 (挿図57・58、図版10・37)

位置 鷺谷奥地区A区南側の13Hグリッドにあり、標高約30.7～31.2mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。北側はSD15・S I 09によって切られている。西側は流失している。

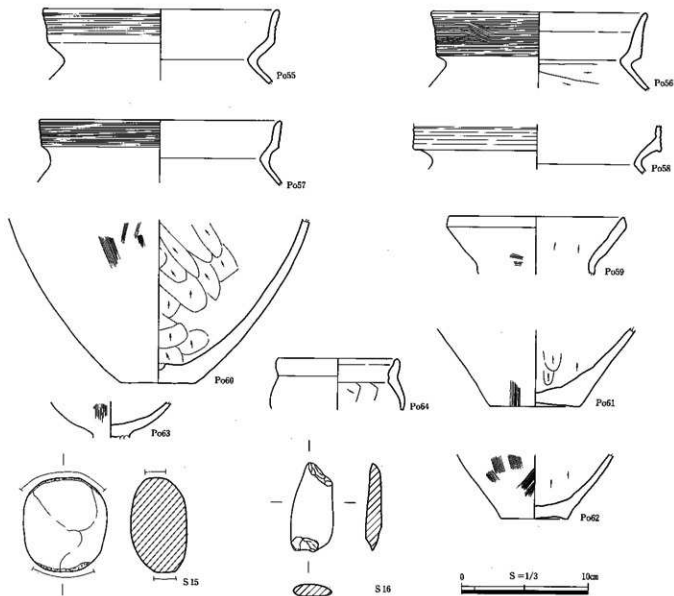
形態 北側・西側が消失しており、確かな形態は不明であるが、遺存する壁の形態から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.06m以上、南北6.5m程度測り、床面積10.5㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状況がよい南東側壁で最大0.81mを測る。

壁溝は、浅いものの南側で検出できた。本来は全周していたものと考えられる。幅14～40cm、深さ3～5cmを測り、断面「U」字状を呈す。

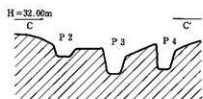
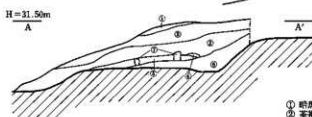
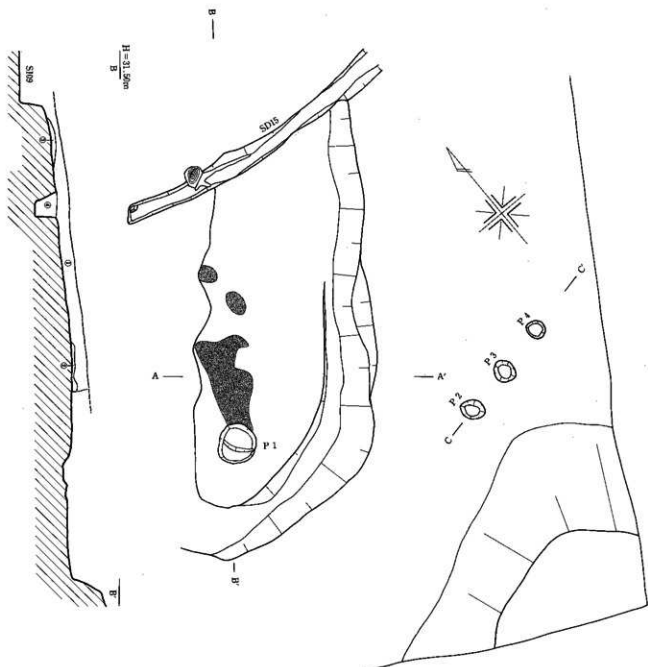
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、南壁側で(63×60-16)cmを測るP1が検出された。

焼土面 P1周辺の床面上で焼土面を3か所検出した。焼失した痕跡がないことから、床面上で火を使用したものと考えられる。

埋土 埋土は、6層に分層できた。このうち①層は土壘状遺構の盛土と思われ、純粋な埋土は、②層以下の5層である。いずれも中央に向かって流れた状況を示し、自然堆積したものと考えられる。



挿図57 S I 10遺物実測図



- ① 暗黒灰色礫混土 (大粒礫も少々。炭化物混)
- ② 茶褐色礫多混土
- ③ 黄褐色土 (礫少混)
- ④ 暗褐色土
- ⑤ 暗赤褐色土 (基盤ブロックを多量に含む)
- ⑥ 暗褐色土 (基盤ブロックを多量に含む)
- ⑦ 木の根による擾乱

0 S=1/60 2m

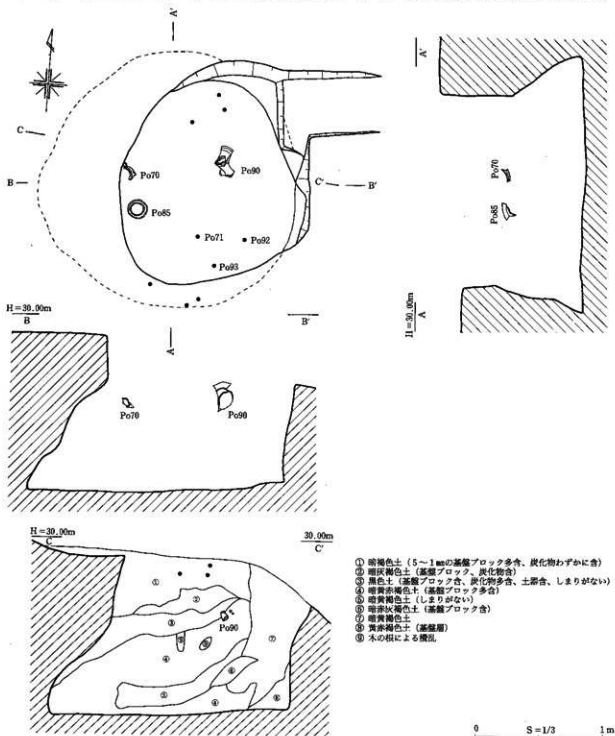
挿図58 S110遺構図

周辺ピット 南東コーナー周辺で3個のピットが一直線上に並んで検出された。これらは、径約40cm、深さ約20~40cmを測る。住居の方向とは一致せず、垂木尻ピットのような直接住居に関わるものとは考えられず、周辺に柵列状のものがあつたものと考えられる。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po55~Po58、単純口縁をもつ甕Po59、底部Po60~Po62、低脚杯Po63、小型甕Po64、敲石S15、石錘S16がある。

このうち、床面北側でPo57、Po63、Po64が出土している。また、Po56は南側周辺から出土している。その他のものは南側でまとめて埋土中から出土している。

時期 床面出土の土器から、S I 10は岩吉編年III（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図59 SK 04遺構図

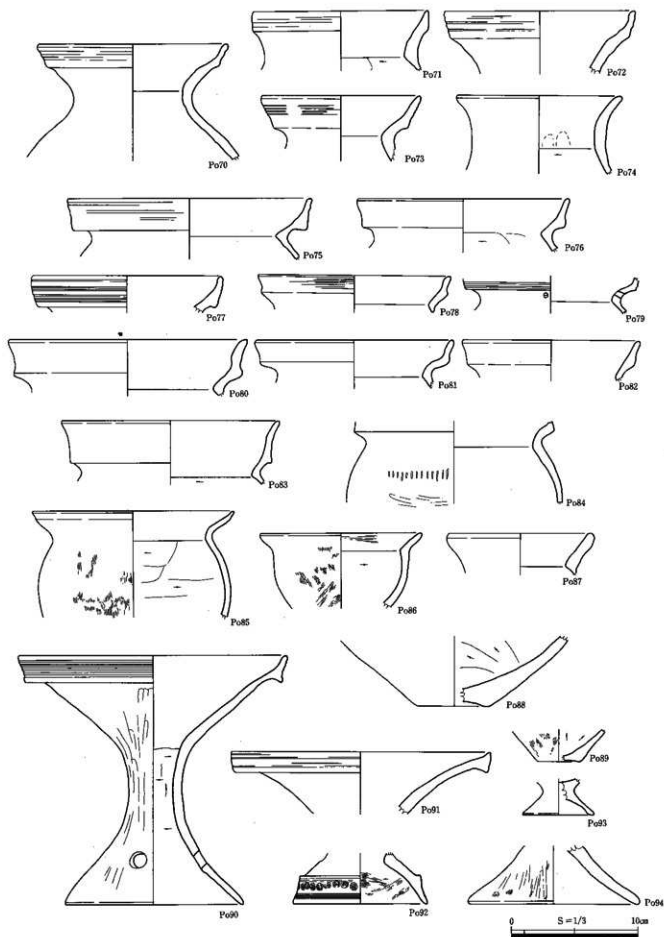


插图60 SK 04出土物夹图(1)

2. 土坑・土墳

SK04 (挿図59～61、図版11・37・38)

位置 鷲谷奥地区A区中央部の15E・15Fグリッドにあり、標高約29.5～30mの緩やかに東側に傾斜する斜面に位置する。SK04の北東側約4mにはS I 08が、南西側約3mにはS I 06がある。

形態 平面は上縁部楕円形、底面円形呈す。断面は、東側はほぼ垂直に掘り込まれるが、西側は袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.62m、短軸1.49m、基底部で長軸2.06m、短軸2.05m、深さ1.17mを測る。

埋土 埋土は、7層に分層できた。③層には、炭化物を多量に含んでいる。⑦層は堆積状況が異なり、埋没後掘り込まれたものと考えられる。

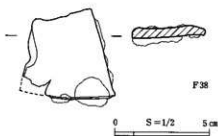
遺物出土状況 埋土中及び周辺から比較的多くの土器が出土している。図化できたものには、壺Po70～Po74、甕Po75～Po87、底部Po88・Po89、器台Po90～Po92、低脚杯Po93、蓋Po94、鉄片F38がある。

このうち、③層以下の埋土下層から出土しているものには、Po73・Po77・Po82・Po83・Po92・Po93がある。その他のものは、埋土上層からの出土である。

鉄片F38はやや厚手の撥形を呈す。

時期 埋土下層中の土器から、SK04は岩吉編年Ⅲ(古)～Ⅳ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

出土状況を見ると、埋土上層の土器は下層のものより遡るものであり、時期が逆転している。上層のものは、SK04が埋没した後に掘り返され、周辺の古い時期の土器を捨てたものと思われる。



挿図61 SK04出土遺物実測図(2)

性格 形態上の特徴から、SK04は貯蔵穴として利用されたものと考えられるが、後に掘り返され捨て場として使用されたものと考えられる。

SK05 (挿図62、図版11)

位置 鷲谷奥地区A区西側の12Dグリッドにあり、標高約27.3～27.6mの西側に傾斜する斜面に位置する。東側約10mにS I 05がある。

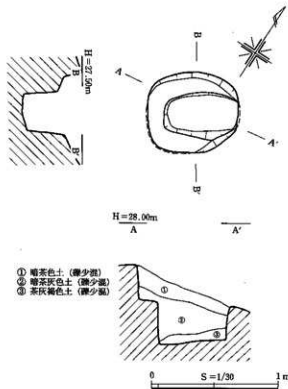
形態 遺存状況は比較的良好で、二段に掘り込まれている。平面は上縁部楕円形に長軸0.72m、短軸0.67m、深さ0.27mに掘り、幅15cmのテラスを設けた後さらに長軸0.6m、短軸0.37m、深さ0.33mに掘り込んでいる。

埋土 埋土は、3層に分層できた。いずれも基盤礫を含むものである。

遺物 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなため、時期は不明である。

性格 性格は不明である。



挿図62 SK05遺構図

3. 溝状遺構

S D11 (挿図64・65、図版11・38)

位置 鷺谷奥地区A区のほぼ中央部の12C・12D・13C・13D・14C・14Dグリッドにあり、標高約25.8~30.8mの斜面〜尾根頂部に位置する。中央部で倉見7号墳を大きく掘削している。また、東側では土壘状遺構に伴うと考えられるS D13によって切られている。

形態 鷺谷奥地区A区尾根中央部を東西方向に横断するかたちで検出された。東端部は流失している。規模は、全長22m以上、幅3.1~5.1m、深さ0.6~2.5mを測る。断面は「U」字状を呈す。この溝は少なくとも2回掘り返されているものと考えられ、13DグリッドのものをS D11-1、14DグリッドのものをS D11-2とした。

S D11-1 は長さ15m、幅1.5~3.5m、最も深いところで深さ2.5mを測る。

S D11-2 は長さ13m以上、幅2.0~3.2m、最も深いところで深さ0.6mを測る。

埋土 埋土は、周辺の土層と合せて計24層に分層できたが、A-A'断面では③〜⑨層が、また、B-B'断面では⑩〜⑭層がこの遺構に伴う純粋な埋土と考えられる。B-B'断面のうちの⑯〜⑳層は倉見7号墳周溝埋土である。

B-B'断面を見ると、⑩・⑪・⑫層を切り込むような堆積状況が窺われ、2回の掘削が行われたものといえ、S D11-1が埋没した後にS D11-2が掘り込まれたものと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から、わずかに土器片が出土している。図化できたものには、弥生土器甕片Po130・Po131、須恵器杯片Po132がある。Po130・131は④層中から、Po132は⑩層中からの出土である。

時期 切り合い関係では、S D11-1→S D11-2の順に作られている。また、周辺の遺構との関係を見ると、倉見7号墳を掘削していることから古墳時代前期以降、また、土壘状遺構に伴うものと考えられるS D13によって切られていることから、土壘状遺構以前のものと考えられる。

また、出土遺物から見ると、弥生土器甕は弥生時代後期後半、岩吉編年Ⅲ(新)期〜Ⅳ期頃のものと考えられる。これらはB区頂部の遺構から二次的に流入したものと考えられる。

また、須恵器杯Po132は奈良時代頃のものと考えられ、S D11-1にともなう可能性がある。S D11-2の確実な時期は不明である。

用途 用途は不明である。

S D14 (挿図63・66、図版13・38)

位置 鷺谷奥地区A区南側の13F・14F・14Gグリッドにあり、標高29.0~30.2mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。

北東側約2mにはS I 08、南側約3mにはS I 09がある。

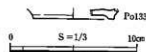
形態 緩やかに湾曲しながら、南東〜北西方向に走っている。西側は、調査区外へ延びているものと思われる。規模は全長7.1m以上、幅1.1~2.4m、深さ0.2~0.95mを測る。断面は逆台形状を呈す。

埋土 埋土は3層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと思われる。なお、④層は基盤層である。

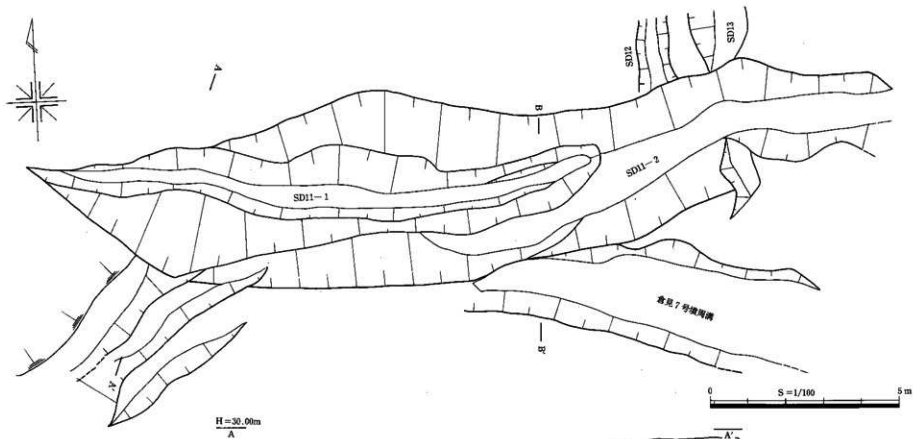
遺物 遺物は、埋土中から土師器杯Po133が出土している。低く貼り付けの高台をもつものである。

時期 埋土中の遺物から、奈良〜平安時代のものと考えられる。

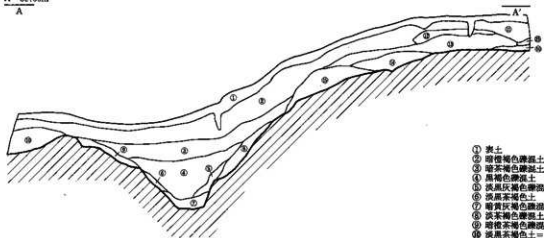
用途 用途は不明である。



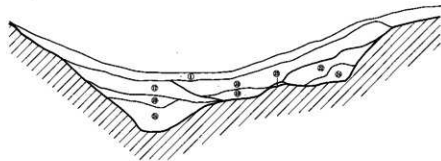
挿図63 S D14出土遺物実測図



H=30.00m
A



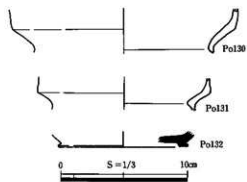
H=32.50m
B



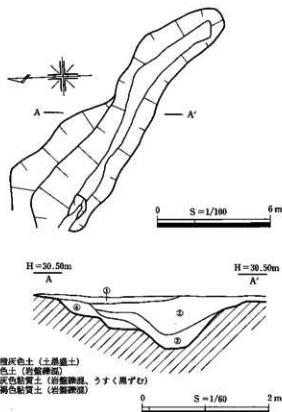
挿図64 SD11遺構図

- ① 黄土
- ② 黄褐色砂状土
- ③ 黄褐色砂状土
- ④ 黄褐色砂状土
- ⑤ 黄褐色砂状土
- ⑥ 赤褐色砂状土
- ⑦ 赤褐色砂状土
- ⑧ 赤褐色砂状土
- ⑨ 赤褐色砂状土
- ⑩ 赤褐色砂状土
- ⑪ 赤褐色砂状土
- ⑫ 赤褐色砂状土
- ⑬ 赤褐色砂状土
- ⑭ 赤褐色砂状土
- ⑮ 赤褐色砂状土
- ⑯ 赤褐色砂状土
- ⑰ 赤褐色砂状土
- ⑱ 赤褐色砂状土
- ⑲ 赤褐色砂状土
- ⑳ 赤褐色砂状土
- ㉑ 赤褐色砂状土
- ㉒ 赤褐色砂状土
- ㉓ 赤褐色砂状土
- ㉔ 赤褐色砂状土
- ㉕ 赤褐色砂状土
- ㉖ 赤褐色砂状土
- ㉗ 赤褐色砂状土
- ㉘ 赤褐色砂状土
- ㉙ 赤褐色砂状土
- ㉚ 赤褐色砂状土
- ㉛ 赤褐色砂状土
- ㉜ 赤褐色砂状土
- ㉝ 赤褐色砂状土
- ㉞ 赤褐色砂状土
- ㉟ 赤褐色砂状土
- ㊱ 赤褐色砂状土
- ㊲ 赤褐色砂状土
- ㊳ 赤褐色砂状土
- ㊴ 赤褐色砂状土
- ㊵ 赤褐色砂状土
- ㊶ 赤褐色砂状土
- ㊷ 赤褐色砂状土
- ㊸ 赤褐色砂状土
- ㊹ 赤褐色砂状土
- ㊺ 赤褐色砂状土
- ㊻ 赤褐色砂状土
- ㊼ 赤褐色砂状土
- ㊽ 赤褐色砂状土
- ㊾ 赤褐色砂状土
- ㊿ 赤褐色砂状土
- ① 黄土
- ② 黄褐色砂状土
- ③ 黄褐色砂状土
- ④ 黄褐色砂状土
- ⑤ 黄褐色砂状土
- ⑥ 赤褐色砂状土
- ⑦ 赤褐色砂状土
- ⑧ 赤褐色砂状土
- ⑨ 赤褐色砂状土
- ⑩ 赤褐色砂状土
- ⑪ 赤褐色砂状土
- ⑫ 赤褐色砂状土
- ⑬ 赤褐色砂状土
- ⑭ 赤褐色砂状土
- ⑮ 赤褐色砂状土
- ⑯ 赤褐色砂状土
- ⑰ 赤褐色砂状土
- ⑱ 赤褐色砂状土
- ⑲ 赤褐色砂状土
- ⑳ 赤褐色砂状土
- ㉑ 赤褐色砂状土
- ㉒ 赤褐色砂状土
- ㉓ 赤褐色砂状土
- ㉔ 赤褐色砂状土
- ㉕ 赤褐色砂状土
- ㉖ 赤褐色砂状土
- ㉗ 赤褐色砂状土
- ㉘ 赤褐色砂状土
- ㉙ 赤褐色砂状土
- ㉚ 赤褐色砂状土
- ㉛ 赤褐色砂状土
- ㉜ 赤褐色砂状土
- ㉝ 赤褐色砂状土
- ㉞ 赤褐色砂状土
- ㉟ 赤褐色砂状土
- ㊱ 赤褐色砂状土
- ㊲ 赤褐色砂状土
- ㊳ 赤褐色砂状土
- ㊴ 赤褐色砂状土
- ㊵ 赤褐色砂状土
- ㊶ 赤褐色砂状土
- ㊷ 赤褐色砂状土
- ㊸ 赤褐色砂状土
- ㊹ 赤褐色砂状土
- ㊺ 赤褐色砂状土
- ㊻ 赤褐色砂状土
- ㊼ 赤褐色砂状土
- ㊽ 赤褐色砂状土
- ㊾ 赤褐色砂状土
- ㊿ 赤褐色砂状土

S=1/60 2m



挿図65 SD11出土遺物実測図



挿図66 S D 14遺構図

4. 土塁状遺構・S D 12・13 (挿図67～70、図版12・38)

立地 鷲谷奥地区A区の最も高い部分、標高31.5～33mの幅約10～15mの狭い尾根の頂部に、尾根に沿って南北方向に築造されている。

形態 この土塁状遺構は、全て盛土によって築造されている。断面台形状を呈すが、西側は緩やかで、東側は急になり、平坦面に続いている。頂部平坦面は尾根中心より西側にある。

14Gグリッドで二股状に分かれる部分があったが、この部分より北側の14EGは流失しており、本来の形状を保っているものかどうかは疑わしい。

規模 調査区ほぼ中央部の14Eグリッドでは既に流失していたが、南北調査区外に延びるようである。遺存している部分では、長さ約45m以上、幅約10m、高さは東側平坦面からは0.4m、旧表土面下からは最も残りのよい部分で高さ1.7mを測る。頂部平坦面は、南側部分で幅0.4～1.2m、二股部分で幅0.15～0.6m、高さ0.7～1.6mを測る。

盛土 盛土は、最も遺存状態のよい部分で1.7m施されているが、中心部は①層（岩盤破砕碎層と暗灰褐色砂質土層と明黄褐色土が互層状に、非常に固く突き固められている）が柱状にみられる。①層の周囲は中心部に比べて締まりがない。①層の断面は、ジグザグになっており、盛土を行う際に中心部のみを突き固めながら、盛られたものと考えられる。

また、旧表土の状況を見ると、土塁状遺構築造以前の旧地形の頂部は土塁の平坦部にあたり、盛土は東側に比べて西側が厚くなっている。

溝状遺構 この地区の頂部平坦面東側、14B・14C・14D・14E・13Hグリッドに、南北方向に途切れとぎれではあるが、ほぼ平行する2本の溝を検出した。2本の溝のうち西側のものをS D 12、東側のものをS D 13とした。

14Eグリッド付近では土壘状遺構の盛土下にも溝状遺構が掘り込まれるものがあるが、14Dグリッド以北のものは一連のものと考えた。

14DグリッドではSD11・倉見7号墳周溝によって切られているように見えるが、確実な切り合い関係は不明ではあるが、本来はSD11埋土上に掘り込まれたものと考えられる。

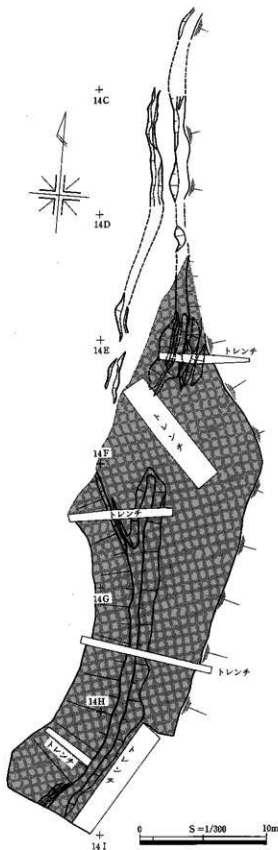
SD12 SD12は、薄い表土を除去した段階で検出されたため、遺存状態は非常に悪い。14D・14Eグリッドで途切れるものの、ほぼ南北方向に走っている。途切れる部分を復元すると、全長は検出面で約26m、幅0.5～0.9m、深さ7～30cmを測る。断面はいびつな逆台形状を呈す。

SD13 SD13は、14Cグリッドでは表土除去した段階で、14D・14E・13Hグリッドでは土壘状遺構盛土を除去した段階で検出された。14Dグリッドでは東側にも短い溝を検出し、また、13Hグリッドでも溝を検出し、これらも一連のSD13として考えた。14Cグリッドでは東側肩が流失しており、遺存状況は非常に悪い。14C～14Eグリッドで検出したものは、途切れた部分も復元すると全長約30m、幅最大1.9m、深さ20～40cmを測り、断面「U」字状を呈す。13Hグリッドで検出したものは、長さ3m以上、幅0.5m、深さ2～20cmを測り、断面「U」字状を呈す。SD13はさらに調査区外南側に延びているものと思われる。

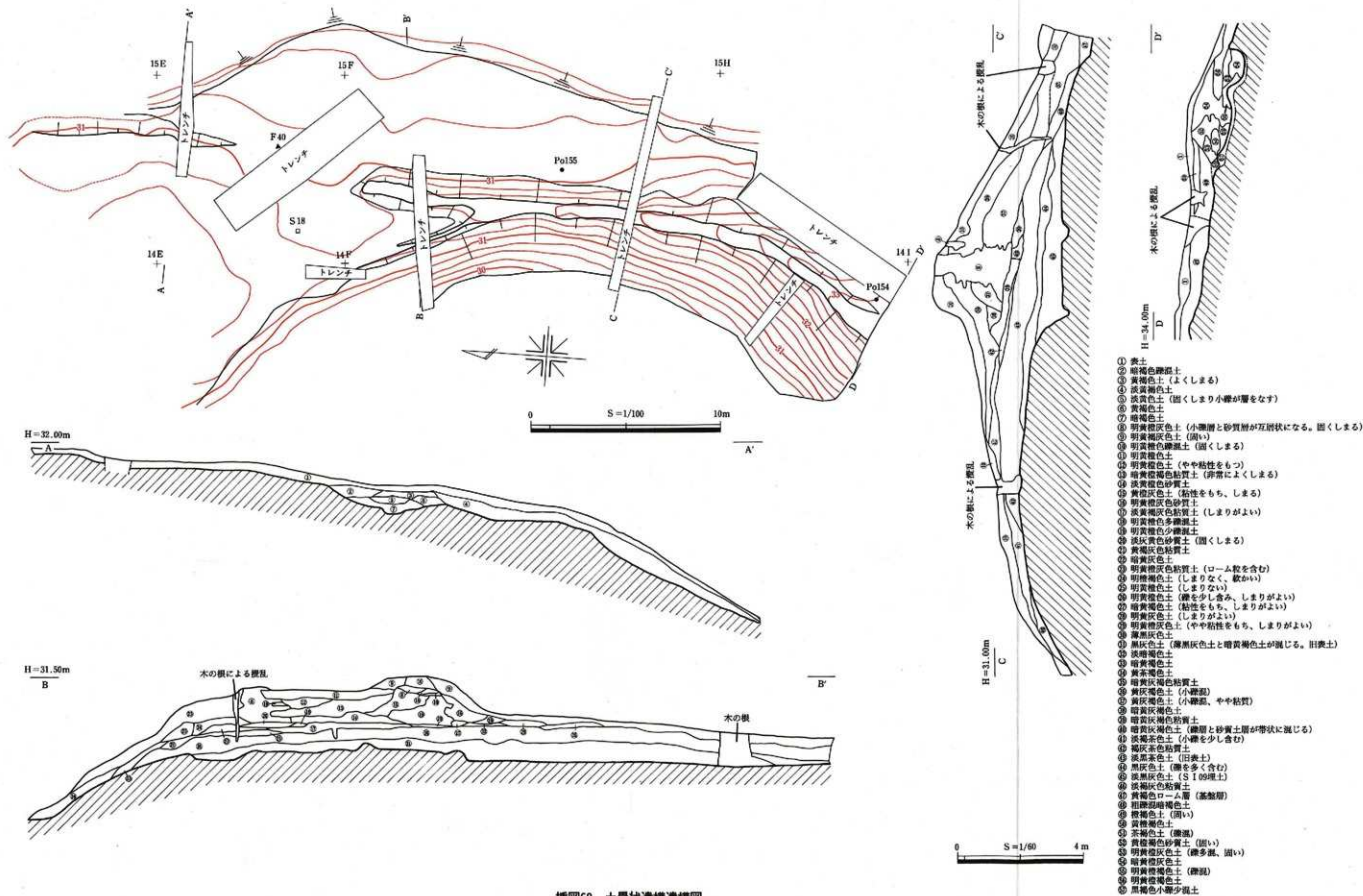
SD12の埋土は、観察できた箇所では均質な黄褐色土単層である。

SD13の埋土は、土壘状遺構の盛土と同質なもので、一部叩き締められた砂質層が認められた。これらの層は、明らかに人為的なものと考えられる。

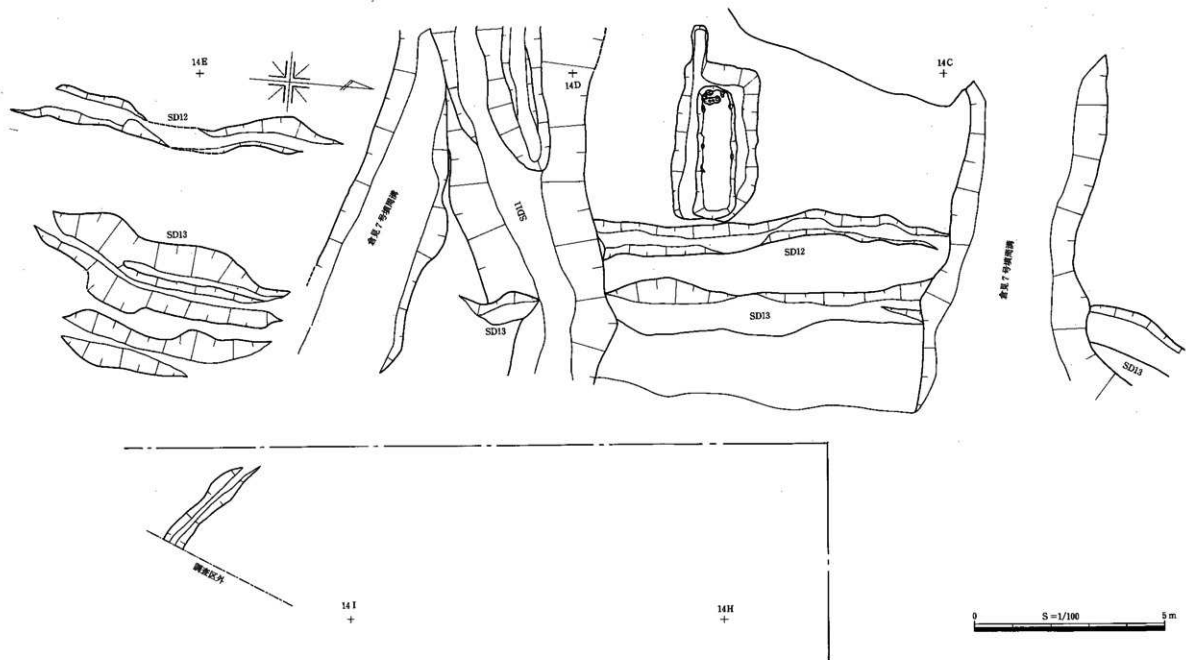
遺物出土状況 図化できたものには、盛土下層から須恵器高台杯Po152、須恵器甕胴部Po153、碧玉製管玉未製品S18、鉄刀片F39が、盛土上層から須恵器底部Po154が、表土中から備前焼播鉢Po155が、旧表土中より須恵器甕Po151、



挿図67 土壘状遺構、SD12・13全体図



挿図68 土層状遺構構造



押区69 SD12・13遺構図

不明石器 S17 が出土している。

その他に、磁器片が出土しているが図化できなかつた。

SD12・13からは遺物は検出されなかつた。

時期 遺構の切り合い関係を見ると、古墳時代前期の倉見7号墳の周溝を削り込んでいるSD11上にも、土塁状遺構の盛土が認められていることから、SD11より後に築かれたものといえる。SD11は奈良時代～平安時代頃のものと考えられることから、それ以降のものであろう。

また、出土遺物が示す時期を考えると、旧表土及び盛土内から出土しているものは、古墳時代後期後半～奈良時代後半頃と時期幅をもつものであり、土塁状遺構構築以前の遺物と考えられる。

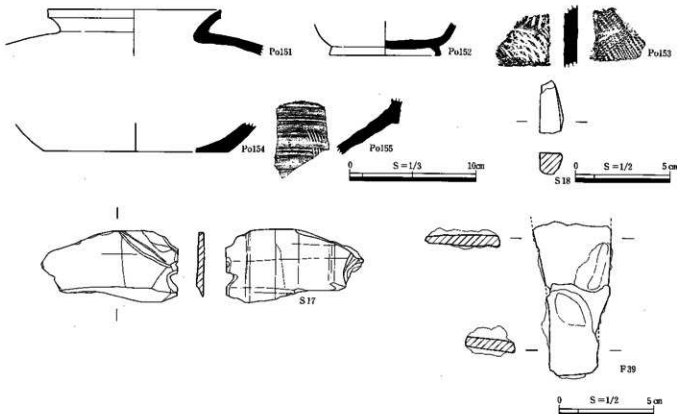
また、表土中の備前焼播鉢は備前V期（16世紀後半頃）、また、倉見7号墳北側周溝から出土している土師質土器皿Po435もほぼ同時期のものと考えられることから、築造時期としてはこの時期に近いものが考えられる。しかし、確実に土塁状遺構に伴う遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

また、SD12・13の時期については、SD13は切り合い関係を見ると倉見7号墳・SD11よりは後出するもので、また、埋土の状況は土塁状遺構の盛土と同質であることから、土塁状遺構築造に伴う溝と考えられる。

SD12についてもSD13とほぼ平行し、また、土塁状遺構も固く締まった層が14Eグリッドで二段に分かれる状況が窺われることから、土塁状遺構に伴ったものと考えることができよう。

性格 この土塁状遺構は尾根に沿って築かれており、現在の字名もこの尾根を境に西側が高住字鷲谷口・字鷲谷奥、東側が桂見字堤谷になることから、地境に使われたものとも考えられるが、非常に丁寧な作りとなっていることから、それ以外の用途も考えなければならないだろう。

特に、断面形態を見ると東側に平坦面を作っている事、土塁の中心部が尾根の西側にずれており、西側が厚く盛られている事などから見ると、西側に対して作られたものと考えられる。



挿図70 土塁状遺構出土遺物実測図

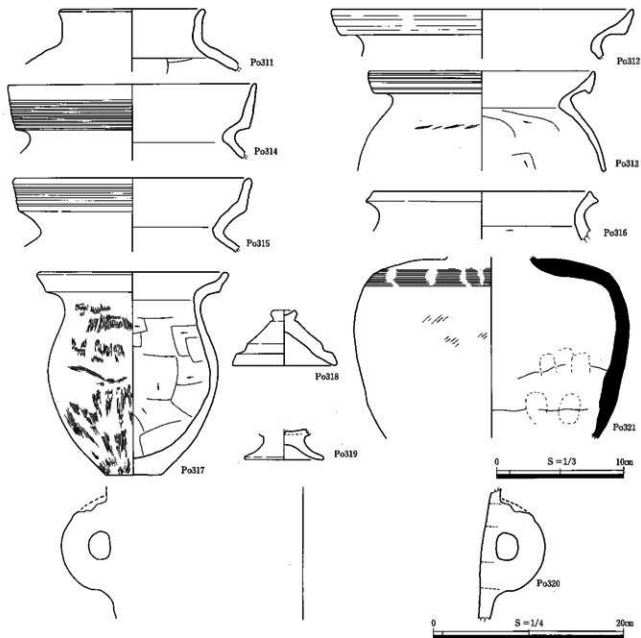
5. 鷺谷奥地区A区遺構外遺物 (挿図71、図版39)

ここでは、鷺谷奥地区A区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

図化できたものには、弥生土器壺Po311、弥生土器甕Po312～Po317、蓋Po318、低脚杯Po319、甕Po320、須恵器壺Po321がある。

弥生土器のうちPo312・Po313・Po316は岩吉編年Ⅲ(古)期、Po314・Po315・Po317・Po318は岩吉編年Ⅲ(新)期、Po319・Po320は岩吉編年Ⅴ期に並行するものと考えられ、鷺谷奥地区の遺構とほぼ同時期のものである。

須恵器壺Po321は古墳時代後期～奈良時代にかけてのものと考えられる。



挿図71 鷺谷奥地区A区遺構外遺物実測図

第5節 西桂見遺跡鷺谷奥地区B区の概要

位置 鷺谷奥地区B区は標高12m～29mの、鷺谷奥地区の東側の斜面部地区である。

遺構 この地区で検出した遺構は、鷺谷口地区・鷺谷奥地区A区同様弥生時代後期～古代にかけてのもので、不明土坑2基（SK07・08）、土器溜り1か所である。

土坑は、弥生時代後期のもの（SK07）と、平安時代後期のもの（SK08）がある。SK08の埋土中では、炭化米が出土している。

土器溜りは、大型の壺などを含み、弥生時代後期のものと考えられる。

なお、表土及び流土と考えられる暗褐色土中から多量の土器片が出土しており、これらは、鷺谷奥地区A区から流れ落ちてきたものと考えられる。

第6節 西桂見遺跡鷺谷奥地区B区の調査結果

1. 土坑

SK07（挿図72～74、図版13・39・40）

位置 鷺谷奥地区B区西側の15C・16Cグリッドにあり、概高約21.6～22.9mの急斜面に位置する。SK07の北東側約10mには土器溜りがある。

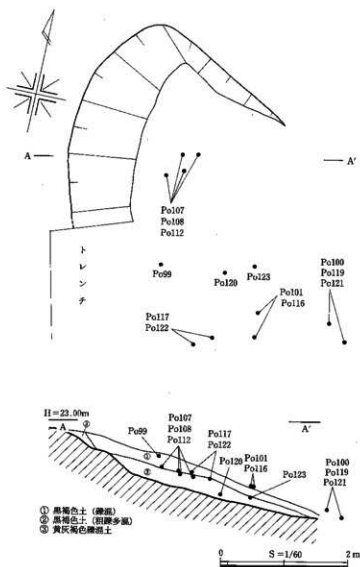
形態 南側はトレンチによって削平されており、正確な規模及び平面形は不明であるが、遺存している状況から、平面は上縁部長方形、断面は傾斜をもつ皿状を呈していたものと思われる。規模は、長軸3.5m以上、短軸3.2m、深さ0.61mを測る。

埋土 埋土は、3層に分層できた。いずれも基盤礫を多量に含むものである。

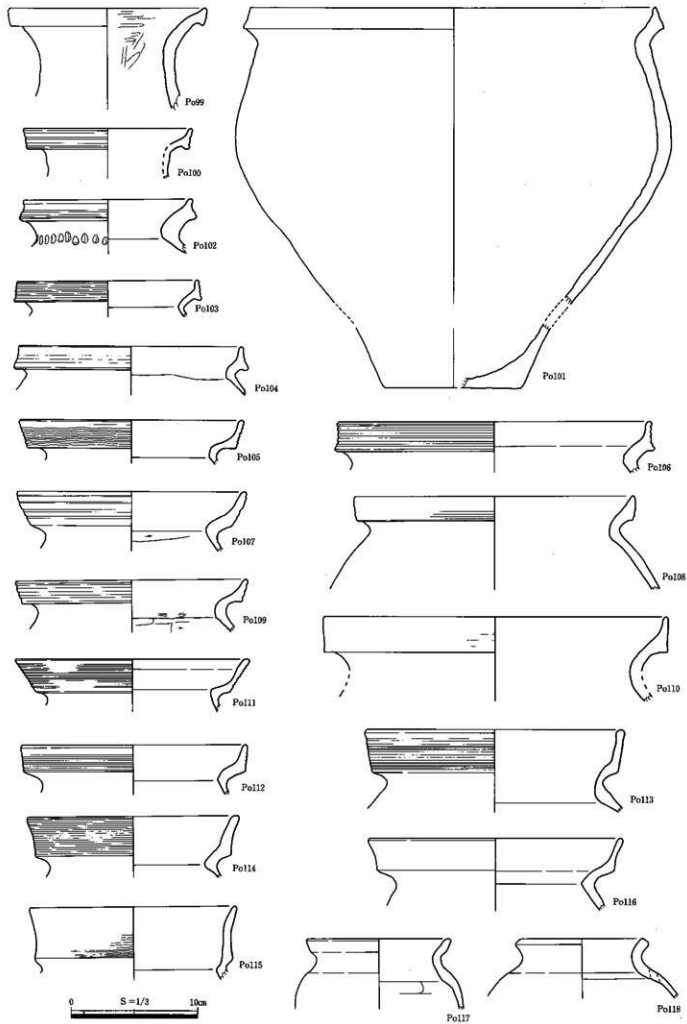
遺物出土状況 埋土中及び周辺から多量の土器が出土している。図化できたものには、壺Po99・Po100、壺Po101～Po118、把手付土器Po119、高杯Po120・Po121、鼓形器台Po122、甗把手Po123がある。

時期 埋土中の土器から、SK07は岩吉編年III（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

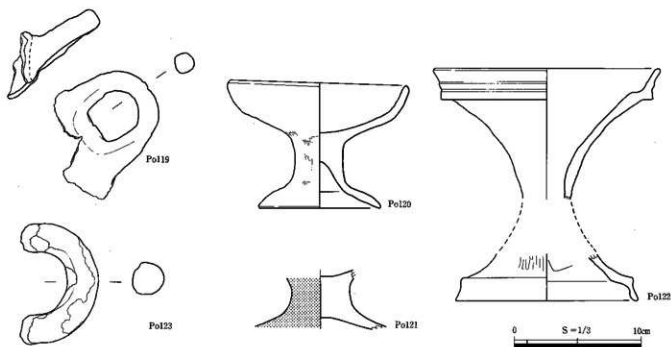
性格 性格は不明である。



挿図72 SK07遺構図



挿図73 SK 07出土遺物実測図(1)



挿図74 SK07出土遺物実測図(2)

SK08 (挿図75・76、図版40)

位置 鷲谷奥地区B区東側の18Cグリッドにあり、標高約13.0～13.5mの斜面に位置する。SK08の西側約12mにはC区土器溜りがある。

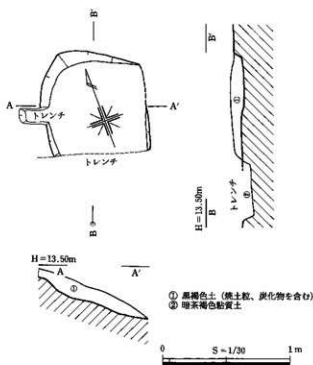
形態 平面は隅丸方形、底面は傾斜をもつ皿状を呈す。規模は、長軸0.85m以上、短軸0.82m、深さ0.22mを測る。

埋土 埋土は、炭化物・焼土粒を含む黒褐色土単層である。

炭化米 埋土中から炭化米342.5gが出土している。これらはすべて底面から浮いた状態で検出された。

遺物・時期 埋土中から甕Pol124が出土している。これは、岩吉編年II(古)期・弥生時代後期初頭頃のものと考えられるが、炭化米の¹⁴C年代測定の結果、B.P.1060±20年(A.D.930前後)という年代が出ており、この時期に近いものと考えられる。

性格 炭化米が出土しているが、形態上の特徴から貯蔵穴とは考え難く、炭化米を廃棄した穴と思われる。



挿図75 SK08遺構図

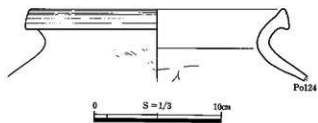


插图76 S K 08出土物实测图

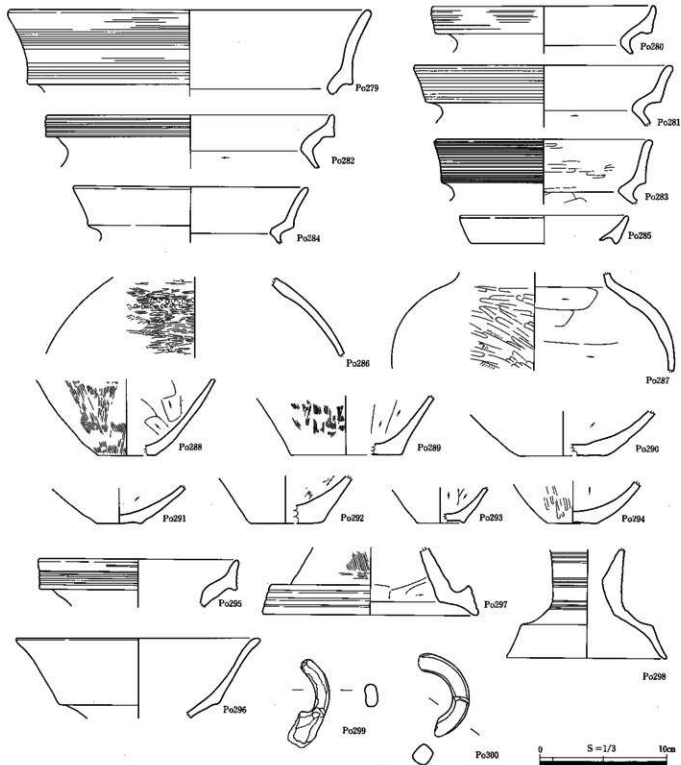
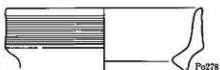
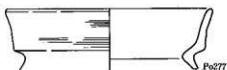
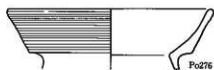
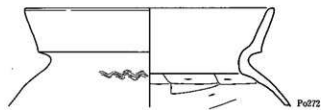
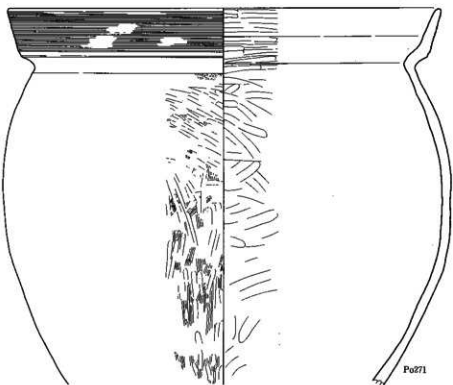
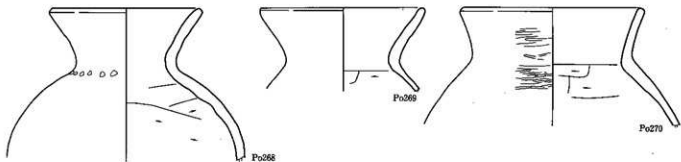
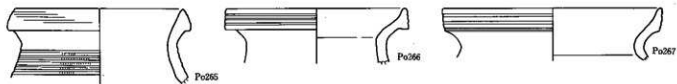


插图77 鹭谷奥地区B区土器溜り出土物实测图(1)



挿図78 鶯谷奥地区B区土器溜り出土遺物実測図(2)

0 S=1/3 10cm

2. 鷺谷奥地区B区土器溜り (挿図77~79、図版13・40~42)

位 置 鷺谷奥地区A区より東側に向かう斜面中央、やや北寄りの15B・Cグリッドにあり、標高約18mの急斜面がやや緩やかになった地点に位置する。北西側約10mにはS K07がある。

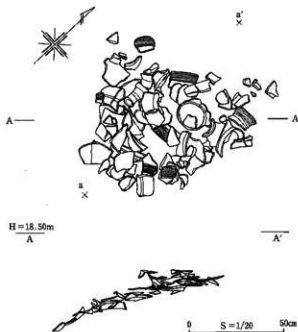
遺物出土状況 約36個体の土器が折り重なるように出土している。上方から転落したものとは考え難く、この場所に破棄されたものと考えられる。

図化できたものに壺Po265~Po270、甕Po271~Po287、底部Po288~Po294、鼓形器台Po295~Po298、把手Po299・300がある。

壺は複合口縁をもち外面口縁部に擬凹線のあるものと、「く」の字状口縁をもつものの2種類がある。

甕はいずれも複合口縁をもつ。Po279は外面口縁部の平行沈線をナデ消し、Po272・284・285は外面口縁部を全体にナデている。Po271は非常に大型の甕である。

時 期 これらの土器には多少の時期差があり、一括遺物としては考えにくいがおおよそ岩吉編年Ⅲ(古)期~Ⅲ(新)期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図79 鷺谷奥地区B区土器溜り遺物出土状況

3. 鷺谷奥地区B区遺構外遺物 (挿図80・81、図版42)

ここでは、鷺谷奥地区B区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

図化できたものには、壺Po322~Po326、甕Po327~Po348、底部Po349~Po357、注口土器Po358、小型特殊壺Po359、高杯Po360~Po362、鼓形器台Po363~Po365、脚付椀Po366、低脚杯Po367、蓋Po368がある。

これらは大半が弥生土器と考えられ、Po327~Po329は岩吉編年Ⅱ(新)期、Po322~Po326、Po330~Po346、Po349~Po368は岩吉編年Ⅲ(新)期頃のものと考えられる。

Po347は岩吉編年Ⅴ期、古墳時代前期頃のものと考えられる。

これらは、鷺谷奥地区A区の遺構とほぼ同時期のものであり、鷺谷奥地区A区から流れ落ちてきたものと考えられる。

なお、Po359は一般的な集落遺構に伴うものではなく、墳墓関連の遺物と考えられ、以前鳥取市教育委員会によって調査された、この丘陵先端部の四隅突出型墳丘墓、土壇墓群などに関わるものと考えられる。

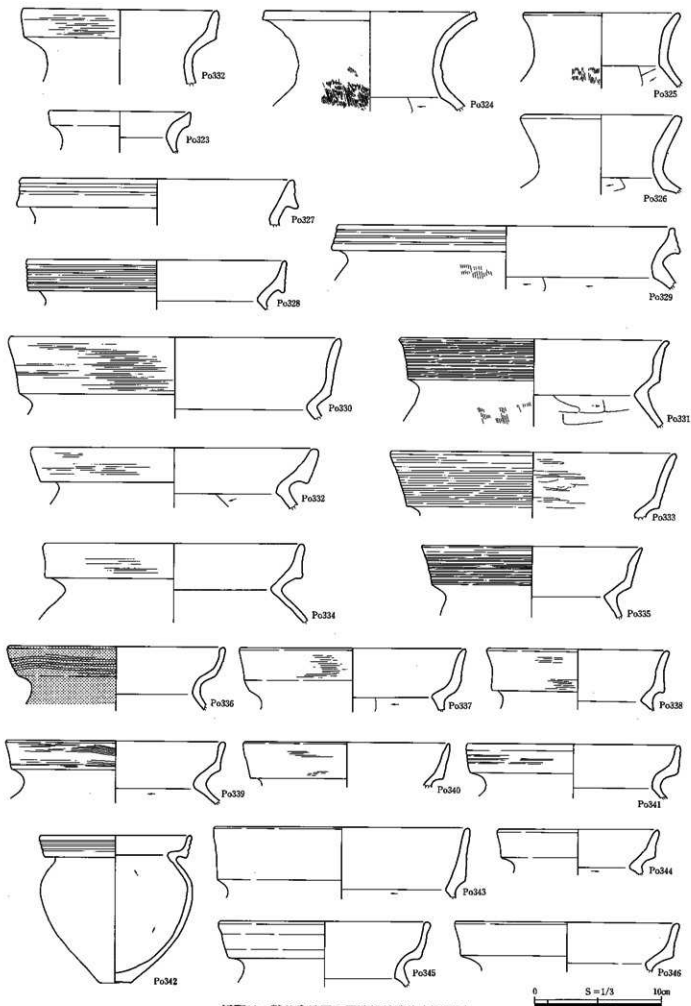


插图80 鹭谷奥地区B区遺構外遺物実測図(1)

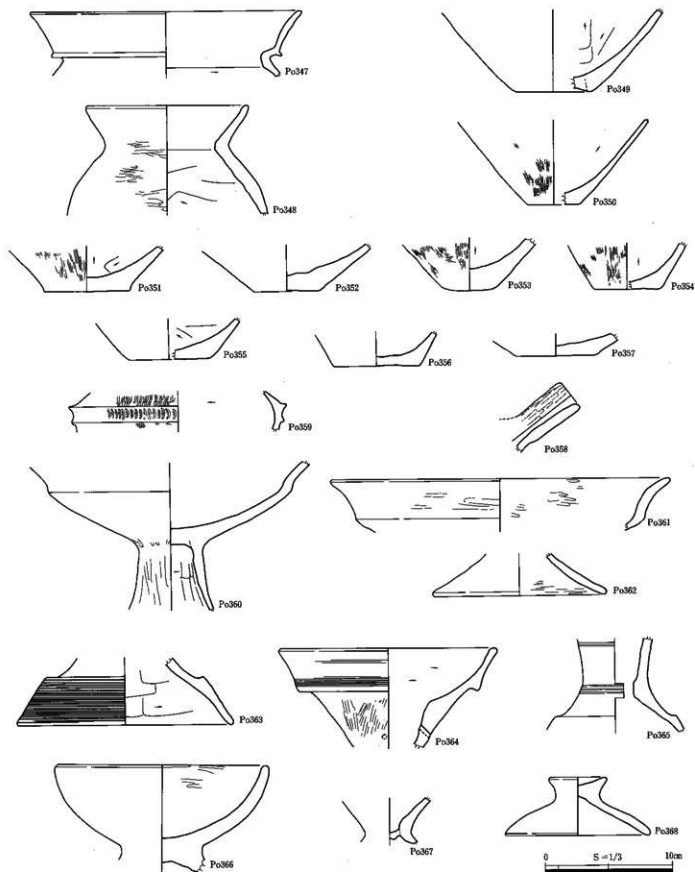


插图81 蔚谷奥地区B区遺構外遺物実測図(2)

第4章 西桂見遺跡の調査(1995年度)

第1節 西桂見遺跡堤谷地区A区の概要

位置 堤谷地区は、標高9～21mの南東方向に延びる狭い丘陵上へ斜面にかけての地区で、さらに、地形的特徴から丘陵頂部をA区、東斜面部をB区、西斜面部をC区に分けた。

A区は、標高16～21mの丘陵上の平坦面地区である。

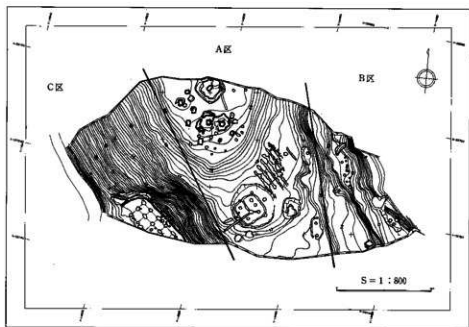
遺構 この地区で検出した遺構は、弥生時代後期～中世にかけてのもので、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、貯蔵穴と考えられる袋状土坑3基、中世墓13基、不明土坑1基、ピット群2か所、溝状遺構8基である。

弥生時代後期では竪穴住居跡(S I 12)と、掘立柱建物跡(S B 01)、屋外貯蔵穴と考えられる土坑(S K 22～24)、ピット群がセットで検出されている。ピット群01は、一段高い平坦面の縁辺部に並んでおり、杭列または柵であった可能性がある。

古墳時代前期では、竪穴住居跡(S I 11・13・15)が検出されている。

比較的大型のS I 11・12と共に、屋外へ延びる排水溝を備えており、竪穴住居の構造的特徴に、他地域からの影響が窺われる。

中世では、墳墓が13基検出された。このうち、周溝を巡らすもの(S K 11・14・16)があり、墓墳のみのものと階層差があったものと考えられる。また、これらは、土葬墓(S K 11・13・14・16・18・20・21)、火葬墓(S K 09・10・12・15・17・19)に分けることができ、さらに、火葬墓は、茶甕に付したものと火葬骨を埋葬したものに分けることができる。



挿図82 1995年度西桂見遺跡調査区全体図

第2節 西桂見遺跡堤谷地区A区の調査結果

1. 竪穴住居跡

S I 11・12 (挿図83~85、図版14~16・43)

位 置 堤谷地区A区南側の27・28Eグリッド、標高約17.3~17.7mの一段低くなった平坦面に、2棟の竪穴住居跡が切りあって位置する。切り合い関係から、一回り小さいものをS I 11、S I 11の外側にあるものをS I 12とした。東側2mにはSK27が、南東約8mにはS I 13がある。また、南西側にはSK23・24が隣接している。

形 態 S I 11は、遺存状態は非常によく、平面形は楕円方形を呈す。

S I 11 規模は東西5.1m、南北4.88mを測り、床面積は29.7m²である。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.28mである。

柱穴は床面上で13個検出された。このうち、S I 11に伴うものはP 1~P 5で、残りはS I 12に伴うものと考えられる。主柱穴P 1~P 4のそれぞれの規模は、(48×46-29) cm、(63×58-55) cm、(60×44-68) cm、(52×52-52) cmを測る

主柱穴間距離はP 1~P 2間から順に2.8m、2.8m、2.8m、2.7mである。

壁溝は、周壁際を全周し、幅10~18cm、深さ4~8cmを測り、断面逆台形を呈す。壁溝内に小ピットが数個検出されたが、これは壁溝内に立てたと考えられる杭状のものと思われる。

中央ピット 中央ピットP 5は二段掘りを呈すもので、上縁部(80×70-8) cm、下段(46×42-64) cmを測る。中央ピットに向かって、北側壁溝およびP 3から、幅11~34cm、深さ4~14cmを測る溝が延びている。中央ピットの埋土は2層に分層できたが、⑥層は、炭化物層である。

排水溝 また、中央ピットから、南西方向に長さ6.84m、幅22~40cm、深さ13~66cmを測る溝が、住居外へ延びている。底面には、工具痕が明瞭に残っている。この溝の底面は、住居外へ向かって傾斜していることから、排水溝と考えられる。排水溝の底面と中央ピットの底面には段差が認められ、排水溝の方が48cm高い。

貼 床 中央ピットP 5の北側で、⑦層による貼床が一部認められた。この部分は、S I 12に伴うと考えられる中央ピットP 12があり、S I 11の床面整形時にこのピットを埋めるかたちで貼床が施されたものと考えられる。

床面上では焼土面は検出されなかった。

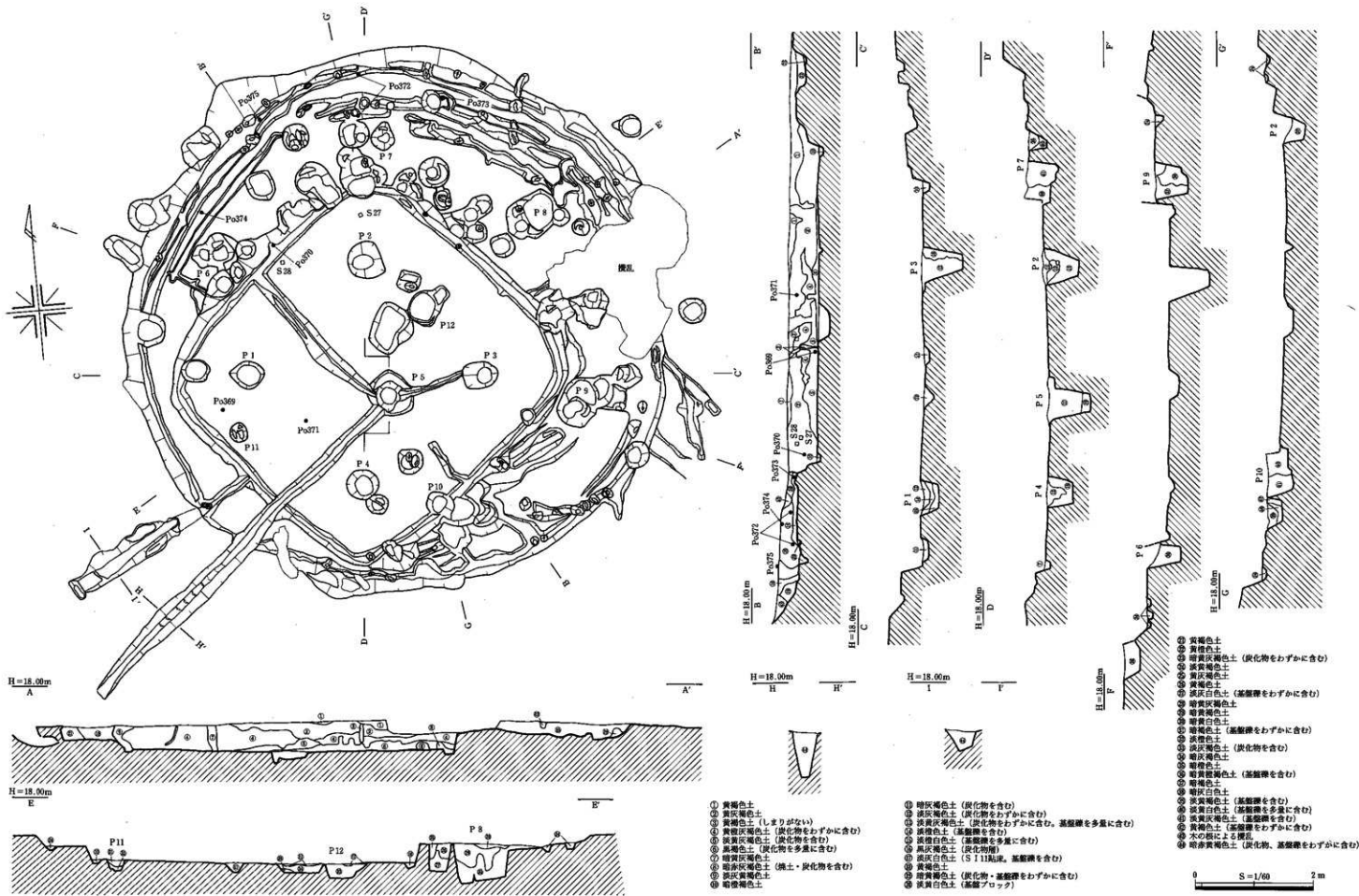
S I 12 S I 12はS I 11によって中央部分を切られ、また、東側は後世に擾乱を受けており、遺存状態は余りよくない。周壁の遺存状態から、平面は不整な六角形を呈すものと考えられる。

規模は、東西9.04m、南北8.8mを測り、床面積は60.4m²と非常に大型である。壁溝は、最も遺存状態のよい北側壁で最大0.43mである。

柱穴は、床面上及び一部S I 11の床面上にも遺存するものが多数あり、この住居跡は数回の建て替えがあったことが窺われる。最終的な主柱穴はP 6~P 11の6個と考えられ、規模は、P 6(50×39-54) cm、P 7(94×62-49) cm、P 8(93×70-65) cm、P 9(80×62-54) cm、P 10(50×40-65) cm、P 11(32×30-27) cmを測る。このうちP 7は3個のピットが切り合うように検出され、また、P 11はS I 11床面上で検出された。

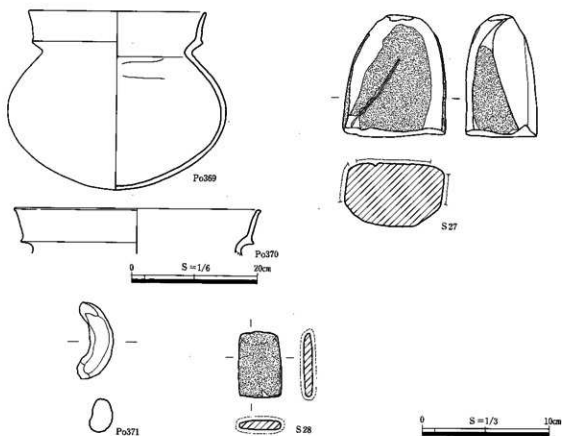
壁溝は、周壁際をほぼ全周し、幅12~20cm、深さ6~12cmを測り、断面「U」字状を呈す。壁溝内に小ピットが検出されており、これらは壁溝内に立てた板などを止めるための杭跡と考えられる。

また、床面上には同心円状に走る壁溝と考えられる溝が3本認められることから、この住居は少なくとも3回の建て替えがあったものと推察される。



挿図83 S111・12遺構図

- 中央ピット S I 12に伴う中央ピットは、S I 11床面上で検出されたP12と考えられる。規模は、(53×52-25) cmを測る。埋土は3層に分層できた。
- 埋土 S I 11の埋土は10層に分層できた。このうち、⑥層は炭化物を多量に含む層である。また、⑨層は壁溝から立ち上がるように検出されたもので、板が腐朽したものと考えられる。
- S I 12の埋土は3層に分層できた。
- 遺物出土状況 S I 11の出土遺物には、図化できたものに、壺Po369・Po370、把手Po371、砥石S27・S28がある。
- このうち、北西側床面からPo369が出土している。その他の遺物は、埋土中からの出土である。
- S I 12の出土遺物には、図化できたものに、甌Po372、低脚杯Po373・Po374、蓋Po375がある。
- いずれも埋土中からの出土である。
- 時期 出土遺物より、S I 11の時期は岩吉編年V(新)～VI(古)期・古墳時代前期前半頃のものと考えられる。一方S I 12はS I 11より遅いもので、岩吉編年V期(古)・弥生時代後期後半～古墳時代前期頃のものと考えられる。



挿図84 S I 11出土遺物実測図



挿図85 S I 12出土遺物実測図

S I 13 (挿図86・87、図版16)

位置 堤谷地区A区の南東側の28F・29Fグリッドにあり、標高15.7~16.2mの平坦面に位置する。西側約10mにはS I 12がある。

形態 遺存状況は悪く、東側半分以上が流失し、また、南側が擾乱を受けている。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.2m以上、南北4.3m以上を測り、床面積は7.7m²以上である。

周辺は、後世の擾乱で削平されたものと思われ、壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.13mと低い。

壁溝はほぼ全周するものと考えられ、幅6~24cm、深さ4~7cm、断面「U」字状を呈す。

検出された主柱穴はP 1・P 2の2個であるが、本来は4個あったものと考えられる。それぞれの規模は、P 1 (51×46-53) cm、P 2 (52×51-66) cmを測る。

主柱穴間距離は、2.7mである。

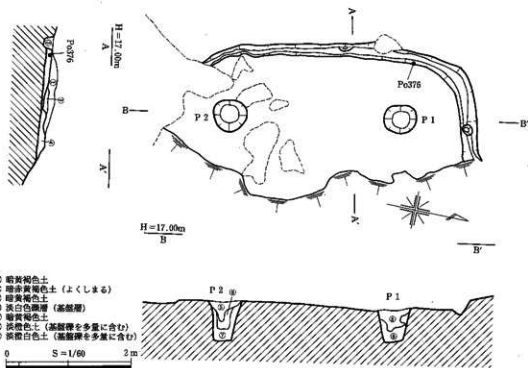
埋土 埋土は暗黄褐色土1層で、②④層は貼床または基盤層と考えられる。

遺物出土状況 図化できたものには、北西側床面直上から出土した底部Po376のみである。Po376は、わずかに平底を呈すものである。

時期 床面出土の土器から、岩吉編年V(古)期、弥生時代後期後半~古墳時代前期前半頃のものと考えられる。



挿図86 S I 13出土遺物実測図

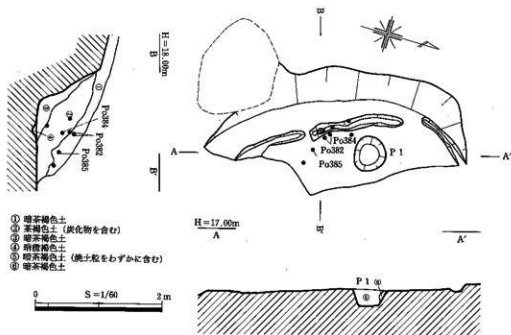


- ① 暗黄褐色土
- ② 暗赤褐色土(よくしまる)
- ③ 暗黄褐色土
- ④ 淡白色礫層(高級層)
- ⑤ 暗黄褐色土
- ⑥ 淡褐色土(高級層を多量に含む)
- ⑦ 淡白色土(高級層を多量に含む)

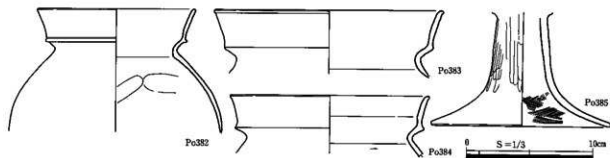
挿図87 S I 13遺構図

S I 15 (挿図88・89、図版16・43)

- 位置** 堤谷地区A区の中央東側の28・29Dグリッドにあり、標高16～17.1mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約11mにはS I 13がある。
- 形態** 遺存状況は悪く、東側半分以上は流失している。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.4m以上、南北3.8m以上を測り、床面積は3.7㎡以上である。壁高は、最も依存状態のよい西壁で最大0.97mを測る。壁溝は周壁の内側で検出された。幅14～20cm、深さ3～6cm、断面「U」字状を呈す。支柱穴と考えられるものはP 1のみで、(56×48-26) cmを測る。
- 埋土** 埋土は3層に分層できた。いずれも住居中央に向かって傾斜しており、自然堆積したものと考えられる。②層中には炭化物を含んでいる。
- 遺物出土状況** 図化できたものには、壺Po382～Po384、高杯脚部がある。壺は口縁端部が平坦面を持つものである。いずれも埋土上層中からの出土である。
- 時期** 出土土器から、岩吉編年VI(古)期、古墳時代前期頃のものと考えられる。



挿図88 S I 15遺構図



挿図89 S I 15出土遺物実測図

2. 掘立柱建物跡

SB01 (挿図90、図版18)

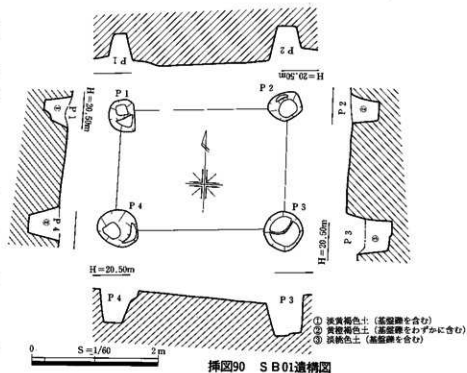
位置 堤谷地区A区の中央部の26C・27Cグリッドにあり、標高20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。北側約10mにはSK22がある。

形態 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-90°-Eと東西方向を向く。柱穴はP1～P4の4個で、それぞれの規模は、P1 (51×40-43) cm、P2 (50×44-57) cm、P3 (61×60-60) cm、P4 (68×57-54) cmを測る。主柱穴間距離は、P1～P2から順に、2.7m、1.8m、2.7m、1.9mである。

埋土 埋土は、P1が①層、P2・P4が②層、P3が③層それぞれ単層で入る。

遺物 遺物は出土していない。

時期 時期を比定できる遺物が出土していないために、時期は不明であるが、埋土の状況から中世墓以前のもと考えられ、おそらく、弥生時代後期頃のものと考えられる。



挿図90 SB01遺構図

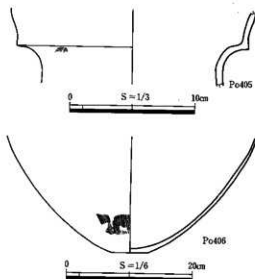
3. 土坑・土塹

SK22 (挿図91・92、図版16・43)

位置 堤谷地区A区北側調査区際の26Bグリッドにあり、標高約20.8mの一段高くなった平坦面に位置する。南西側がSK16と接している。

形態 SD18掘り下げ中に検出されたために、上部は削平され、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整形円形、底面円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部長軸1.65m、短軸1.36m、底面長軸1.95m、短軸1.85m、深さ1.45mを測る。

埋土 埋土は、7層に分層できた。いずれも基盤礫を多量に含むもので、壁が崩落しながら埋



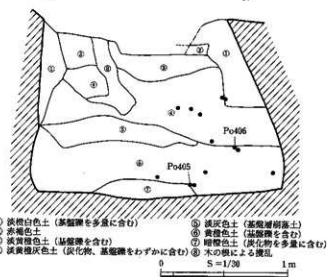
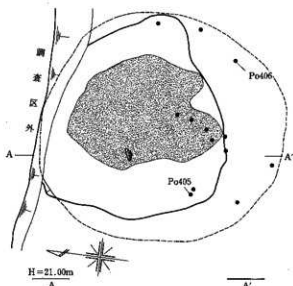
挿図91 SK22出土遺物実測図

まっていたものと考えられる。
このうち、⑦層は炭化物を多量に
含み、底面ほぼ中央部分のみで
検出されたことから、上層の覆い
が焼け落ちたものと考えられる。

遺物出土状況 埋土中で弥生土器片が出土して
いるが、このうち図化できたもの
に壺Po405、胴部Po406がある。
いずれも埋土最下層中からの出土
で、Po406は壁際で出土している。

時期 出土遺物から、岩吉編年Ⅲ
(新)期、弥生時代後期後半頃
のものと考えられる。

性格 断面の形態から、貯蔵穴として
使用されたものと考えられる。

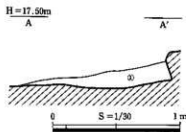


- ① 淡褐色土 (炭化物を多量に含む)
- ② 赤褐色土
- ③ 灰質褐色土 (炭化物を含む)
- ④ 淡黄褐色土 (炭化物、基礎礫をわずかに含む)
- ⑤ 淡灰色土 (基礎礫層土)
- ⑥ 黄褐色土 (基礎礫を含む)
- ⑦ 暗褐色土 (炭化物を多量に含む)
- ⑧ 木の根による腐乱

挿図92 S K 22遺構図



① 明赤褐色粘質土



挿図93 S K 23遺構図

S K 23 (挿図93、図版17)

位置 堤谷地区A区南側27Fグリッド
にあり、標高約16.9~17.3mの緩
やかに南側に傾斜する斜面に位置
する。北側約1mにはS I 12、西
側約1mにはS K 24がある。

形態 遺存状況は非常に悪く、南側は
流失しており、基底部のみ検出さ
れた。平面は不整な半円形、断面袋状を呈す。規模
は、基底部で長軸1.63m、短軸1.3 m以上、深さ0.
44mを測る。

埋土 埋土は、暗赤褐色粘質土単層である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため、確かな時期は不明で
ある。

性格 断面の形態から、貯蔵穴として使用されたものと
考えられる。

S K 24 (挿図94・95、図版17・44)

位置 堤谷地区A区南側の26Fグリッドにあり、標高約
16.4~16.8mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置
する。北東側約2mにS I 12、東側1mにS K 23が
ある。

形態 遺存状況は比較的良好、平面は上縁部不整楕円
形、底面不整円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁

部長軸1.75m、短軸1.31m、底面長軸1.89m、短軸1.8m、深さ1.12mを測る。

埋土 埋土は、9層に分層できた。③層以下は基盤礫を多量に含みよく締まるもので、壁が崩落した後、一時的にこの面で再使用されたものと考えられる。

遺物出土状況 埋土中で弥生土器片が出土しているが、このうち図化できたものに壺Po407、低脚杯Po408・Po409がある。Po407・409は埋土上層から、Po408は埋土下層からの出土である。

時期 出土遺物から、岩吉編年Ⅲ(新)期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性格 断面の形態から、貯蔵穴として使用されたものと考えられる。

4. 中世墓

S K 09 (揮図96・97、図版17・44)

位置 渠谷地区A区北側の26Cグリッドにあり、標高約20.7mの一段高くなった平坦面に位置する。S K 09の北側約1mにはS K 18、西側約2mにはS K 15がある。

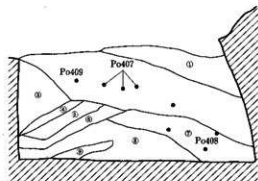
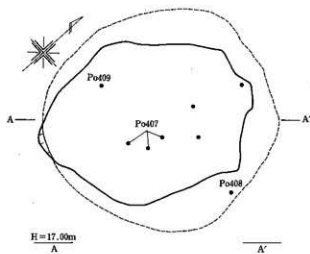
形態 平面は隅丸長方形を呈し、底面は不整形で凹凸が著しい。規模は、長軸1.20m、短軸1.01m、深さ最大0.44mを測る。長軸方向は、N-42°-Eである。

埋土 埋土は、4層に分層できた。このうち、底面付近の③層中には、炭化物を多量に含んでいる。

遺物 底面ほぼ中央部から、原形をとどめないほどに溶けた銅銭と考えられるB3が出土している。

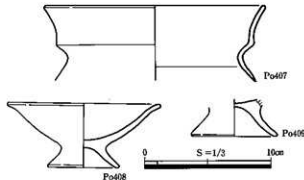
時期 時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、¹⁴C年代測定の結果、B.P.280±40年という結果が得られた。しかし、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

性格 多量の炭化物及び、熱変した銅銭が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で茶毘に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。

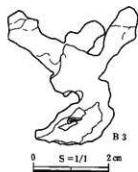


- ① 暗褐色赤土 (基盤礫を多量に含む)
- ② 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ③ 暗褐色赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ④ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑤ 暗褐色赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑥ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑦ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑧ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑨ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑩ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑪ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑫ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑬ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑭ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑮ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑯ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑰ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑱ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑲ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑳ 淡灰赤土 (炭化物をわずかに含む)

揮図94 S K 24遺構図



揮図95 S K 24出土遺物実測図



揮図96 S K 09出土遺物実測図

SK10 (押図98・99、図版17・18・44)

位置 堤谷地区A区北側の27Cグリッドにあり、
標高約20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。
南側約2mにはSK14がある。

形態 平面は、上縁部・底面とも長方形を呈す。
規模は、長軸1.31m、短軸0.69m、深さ最大
0.17mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長
軸方向は、N-8°-Eである。

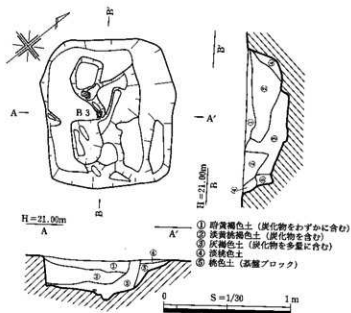
埋土 埋土は、2層に分層できた。このうち、①
層中には炭化物を含んでいる。

焼土面 底面南寄り及び西側長辺壁に、不整形に広
がる焼土面が検出された。

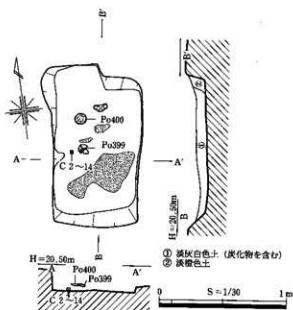
遺物出土状況 底面中央部やや西寄り、土師器皿
Po399~Po401溶着した銅銭C1~C13が出土して
いる。また、①層中から鉄釘F41~F45、人骨片が
出土している。

時期 出土遺物から、中世末頃のものと考えられ、また、¹⁴C年代測定の結果B.P.470±40年という結果
を得た。

性格 埋土中に炭化物及び底面で焼土面が検出されてい
ること、熱で溶着したと考えられる銅銭が出土して
いることから、この場所で茶毘に付したものと考え
られる。



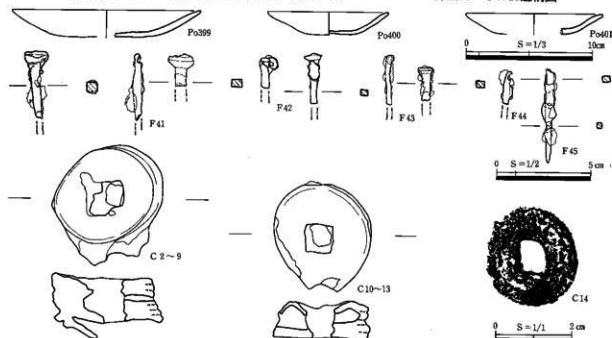
挿図97 SK09遺構図



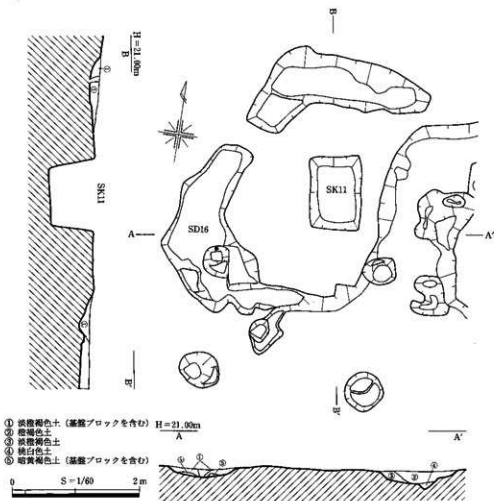
挿図98 SK10遺構図

SK11・SD16 (押図100・101、図版18・44・45)

位置 堤谷地区A区北側の26C・27Cグリッドにあり、
標高約20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。



挿図99 SK10出土遺物実測図



挿図100 SK11・SD16遺構図

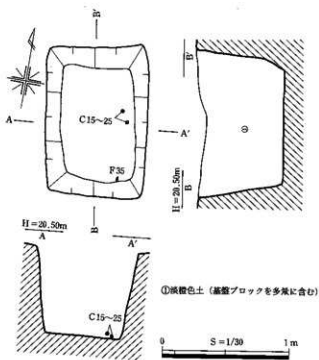
SK11に伴う周溝SD16の東側は、SK14の周溝のSD17と共有している。SK11の西側約4mにはSK15が、東側約2mにはSK14がある。

形態 平面は、上縁部・底面とも長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.21m、短軸0.83m、深さ最大0.73mを測る。底面は、長軸0.92m、短軸0.6mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-8°-Wである。

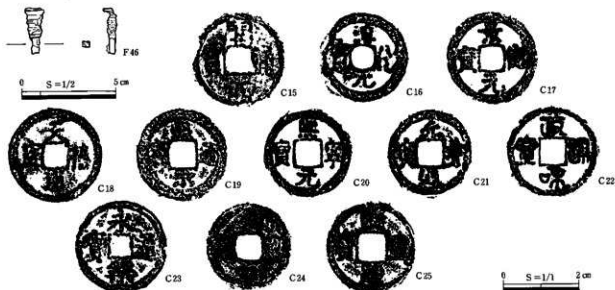
埋土 埋土は、淡褐色土単層である。

周溝 周囲には、不整長方形に巡る周溝SD16がある。東側はSD17と共有し、切り合い関係は確認されなかった。北西側でブリッジ状に途切れる部分がある。幅は一定ではなく、0.58~1.3mを測る。深さは、5~9cmと浅く、最大28cmである。

基壇は、溝に区画された中心部ではな



挿図101 SK11遺構図



挿図102 SK11出土遺物実測図

く、やや東側に偏って掘り込まれている。

遺物出土状況 SK11底面中央部東壁寄りで、銅銭C14～C24が2か所に離れて出土している。また、南壁際で鉄釘F46が出土している。

またSD16内では、土師質土器片が出土しているが図化できなかった。

時期 出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

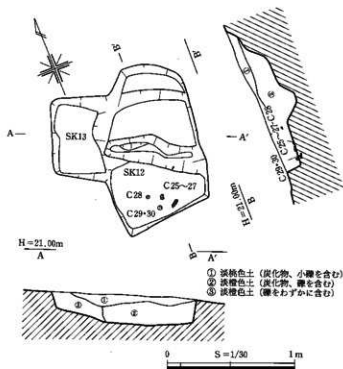
用途 炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。

SK12・13 (挿図103～105、図版19・45・46)

位置 堤谷地区A区北側の26Cグリッドにあり、標高約20.6mの一段高くなった平坦面に位置する。検出面は不整形な凸形を呈しており、2基の土壌が切りあっているものと判断し、東側のものをSK12、西側のものをSK13とした。SK13の北西側約2mにはSK15が、SK12の南側約2mにはSK19がある。

形態 SK12は、平面は上縁部・底面とも不整形な長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.24m、短軸0.83m、深さ最大0.22mを測る。底面は、長軸1.15m、短軸0.75mを測る。底面中央は、溝が掘られている。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-1°-Eである。

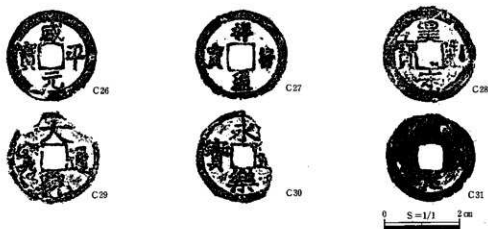
SK13 SK13は、SK12によって切られる形で検出され、SK12とは直交するものと考えられる。平面形は不明であるが、本来は長方形を呈すものと考えられる。残存規模は、長軸0.4m以上、短軸0.66m、深さ最大0.18mを測る。



挿図103 SK12・13遺構図



挿図104 SK12出土遺物実測図(1)

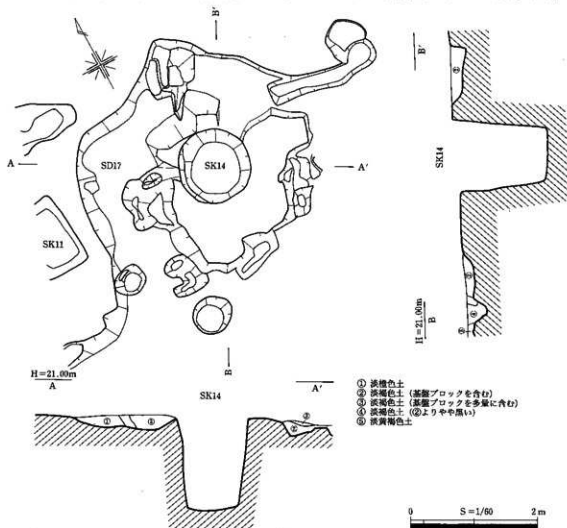


挿図105 SK12出土遺物実測図(2)

埋土 埋土は、3層に分層できた。①・②層中では炭化物が検出されている。

遺物出土状況 SK12底面南壁際で、銅銭C26～C31が3か所に離れて出土している。また、やや離れて鉄釘F47が出土している。

時期 出土遺物から、SK12は中世末頃のもの、SK13はこれより若干遅るものといえる。また、SK12



挿図106 SK14・SD17遺構図

- ① 淡褐色土
- ② 淡褐色土 (基礎ブロックを含む)
- ③ 淡褐色土 (基礎ブロックを多量に含む)
- ④ 淡褐色土 (②よりやや濃い)
- ⑤ 淡黄褐色土

出土の炭化物の¹⁴C年代測定の結果、B.P.540±30年の結果を得た。

性 格 SK12の埋土中から炭化物が出土しているが、焼土面が検出されておらず、他所で茶毘に付された後埋葬されたものと考えられる。また、SK13については、埋土中からは炭化物等が検出されていないことから、土葬墓であった可能性があるが、中世墓の大半が切り合い関係を持たないことから、使用されなかった掘り込みとも考えられる。

SK14・SD17 (挿図106~108、図版19・20・46)

位 置 堤谷地区A区北側の26Cグリッドにあり、標高約20.4mの平坦面に位置する。SK14に伴う周溝SD17の西側は、SK11の周溝SD16と共有している。SK14の南東側約2mにはSK17が、北東側約2mにはSK10がある。

形 態 平面は、上縁部・底面とも円形を呈す。規模は、上縁部長軸1.19m、短軸1.17m、深き最大1.50mを測る、非常に深く掘られたものである。底面は、長軸0.83m、短軸0.8mを測る。断面は、長方形を呈す。

埋 土 埋土は2層に分層でき、②層中から人骨片が出土している。埋土中ほどには、空洞部分がある。

周 溝 北側・西側で不整形に巡る周溝SD17がある。西側はSD16と共有し、切り合い関係は確認されなかった。東・南側は遺存状態が非常に悪い。幅は一定ではなく、0.7~1.2mを測る。深さは、10~16cmである。

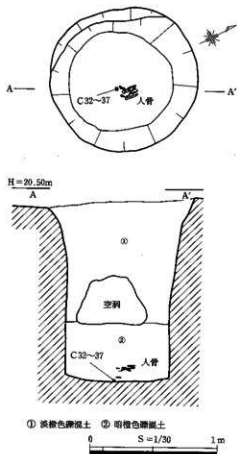
基壇は、溝に区画されたほぼ中心部に掘り込まれている。

遺物出土状況 SK14底面中央部で、人骨片と共に銅銭C32~C37、鉄釘F48・F49が出土している。人骨は鑑定

の結果、壮年男性と考えられ、円形の座棺に納められて埋葬されたものと考えられる。

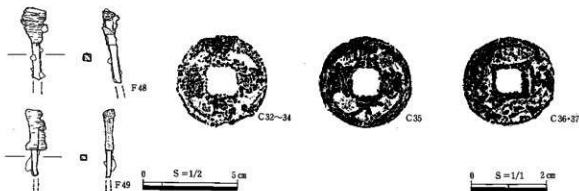
時 期 時期を比定する遺物は出土していないが、他の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

性 格 炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。



① 淡棕色障壁土 ② 明褐色障壁土

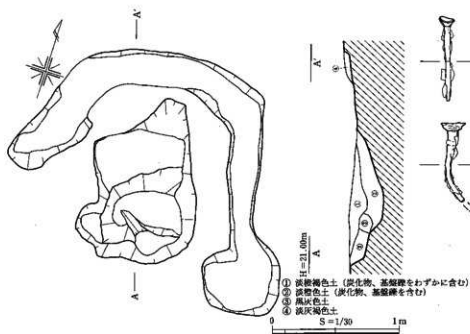
挿図107 SK14遺構図



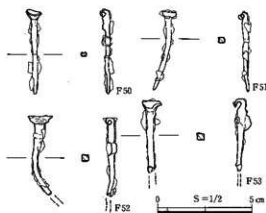
挿図108 SK14出土遺物実測図

S K 15 (挿図109・110、図版20・46)

- 位置** 堤谷地区A区北側の26Cグリッドにあり、標高約20.7mの一段高くなった平坦面に位置する。
S K 15の南東側約2 mにはS K 13、東側約1.5mにはS K 09がある。
- 形態** 平面は不整形な長方形を呈し、底面は不整形で、南側が一段低くなっている。規模は、長軸1.08 m、短軸0.77m、深さ最大0.24mを測る。長軸方向は、N-8°-Wである。
- 埋土** 埋土は、3層に分層できた。いずれの層も炭化物を含んでいる。
- 溝** 墓墳の周囲には、幅19~35cm、深さ4~14cmを測る溝が検出されている。
- 遺物** 埋土中から鉄釘F50~F53が出土している。
- 時期** 時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、¹⁴C年代測定の結果B.P. 430±30年の結果を得た。また、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。
- 性格** 埋土中から炭化物が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で茶甕に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。



挿図109 S K 15遺構図



挿図110 S K 15出土遺物実測図

S K 16・S D 18 (挿図111~113、図版20・21・46)

- 位置** 堤谷地区A区北側の26B・26C・27B・27Cグリッドにあり、標高約20.4mの平坦面に位置する。
周囲には、S K 16に伴う周溝S D 18があるが、北東側は一部調査区外にある。S K 16の南側約6 mにはS K 11が、南西約3.5 mにはS K 18がある。
- 形態** 墓墳であるS K 16は、平面は上縁部・底面とも隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.33m、短軸0.89m、深さ最大1.08mを測る。底面は、長軸1.03m、短軸0.67mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-42°-Eである。
墓墳は、溝に区画されたほぼ中央部に掘り込まれている。
- 埋土** 埋土は、淡褐色土単層である。
- 周溝** 周囲には、方形に巡る周溝S D 18があるが、北東部分は調査区外にある。本来は、一辺約4 mの方形の墳丘を持っていたものと考えられる。規模は、幅0.65~1.1m、深さは、17~29cmを測る。

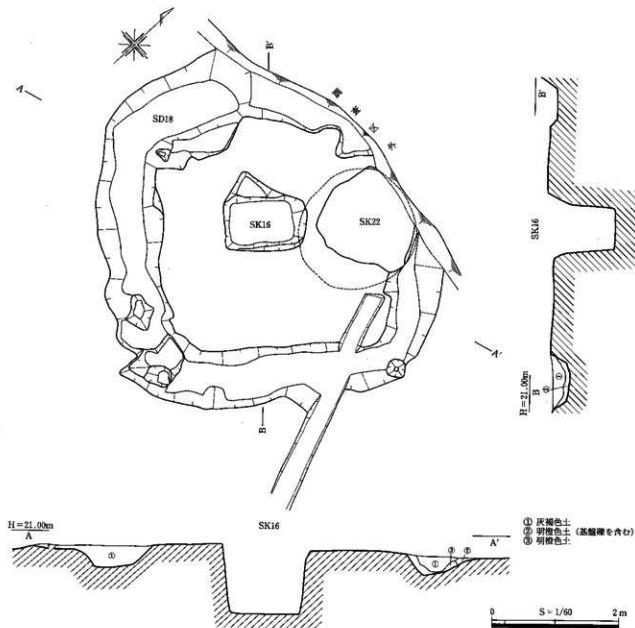
遺物出土状況 出土遺物には、SK16底面北長側側及び東小口側で、鉄釘F54～F59が出土している。その他に、中央やや北側で、漆膜片が出土している。

東側小口付近で、扁平な板石が床面からやや浮いた状態で出土している。

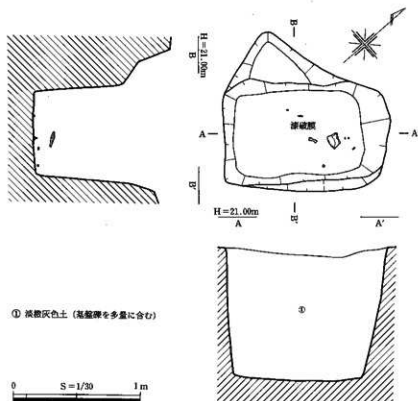
また、SD18埋土中から土師質土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土していないが、周辺の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

性格 墳丘は失われているが、本来は、一辺約4m前後の墳丘をもち、基壇は、炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。

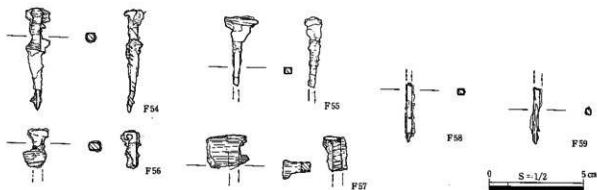


挿図111 SK16・SD18遺構図



① 淡黄灰色土（瓦礫層を多量に含む）

挿図112 S K 16遺構図



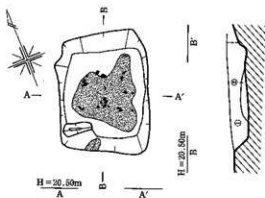
挿図113 S K 16出土遺物実測図

S K 17 (挿図114・115、図版21・47)

- 位置** 堤谷地区A区北側の27Cグリッドにあり、標高約20.1mの平坦面に位置する。S K 17の北西側約2 mにはS K 14がある。周囲の中世墳墓との切り合い関係は見られない。
- 形態** 平面は、上縁部・底面ともいびつな長方形を呈す。規模は、上縁部長軸0.97m、短軸0.71m、底面長軸0.7m、短軸0.63m、深さ最大0.18mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-35°-Eである。
- 埋土** 埋土は、2層に分層できた。このうち、②層中には炭化物・骨片を含んでいる。
- 焼土面** 底面中央部及び南側短辺壁に、不整形に広がる焼土面が検出された。
- 遺物** 底面中央部で、小児の焼骨片と共に鉄釘F60～F62が出土している。その他に、溶着した古銭が出土していたが、清掃中に紛失してしまった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、周辺の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

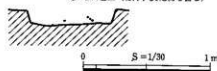
性格 埋土中に炭化物及び底面で焼土面が検出されていること、熱で溶着したと考えられる銅銭が出土していることから、火葬墓と考えられる。



S K 18 (挿図116・117、図版21・47)

位置 堤谷地区A区北側の26B・26Cグリッドにあり、標高約20.7mの平坦面に位置する。S K 18の南側約1mにはS K 09、東側約4mにはS K 16がある。

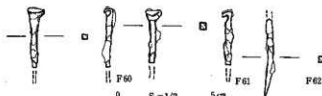
① 黄灰色土 (高嶺層、炭化物をわずかに含む)
② 暗灰色土 (骨片、炭化物を含む)



形態 平面は、上縁部・底面ともに隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.03m、短軸0.8m、底面長軸0.67m、短軸0.55m、深さ最大0.63mを測る。長軸方向は、N-76°-Eである。

挿図114 S K 17遺構図

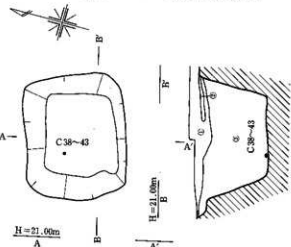
埋土 埋土は、3層に分層できた。このうち、上層の①・②層中には、炭化物を含んでいる。



遺物 底面北西部から、古銭C38~C43が出土している。

挿図115 S K 17出土遺物実測図

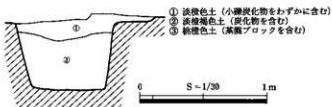
時期 時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。



性格 埋土中からわずかに炭化物が出土しているが、古銭は火を受けた様子はなく、また焼土面が検出されていないことから、土葬墓と考えられる。

S K 19 (挿図118、図版21)

位置 堤谷地区A区北側の26Cグリッドにあり、標高約20.5mの一段高くなった平坦面に位置する。S K 19の北側約2mにはS K 12、東側約3.5mにはS K 11がある。

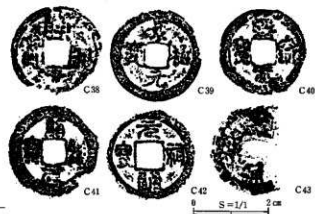


形態 平面は長方形を呈し、底面は不整形で凹凸が著しい。規模は、長軸1.10m、短軸0.77m、深さ最大0.24mを測る。長軸方向は、N-1°-Eである。

挿図116 S K 18遺構図

埋土 埋土は、2層に分層できた。このうち、②層中には、炭化物を多量に含んでいる。

遺物 埋土中から炭化物が出土しているが、その他の遺物は検出されなかった。

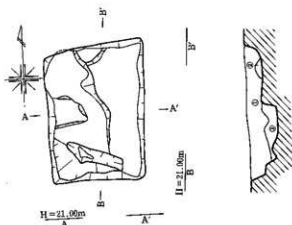


時期 時期を比定する遺物が出土していない

挿図117 S K 18出土遺物実測図

め、確かな時期は不明であるが、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

性格 多量の炭化物が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で茶毘に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。



- ① 淡黄褐色土 (基礎ブロックを含む)
- ② 暗褐色土 (炭化物を多量に含む)
- ③ 淡褐色土 (基礎層)



挿図118 S K 19遺構図

S K 20 (挿図119・120、図版22・47・48)

位置 堤谷地区A区北側の26C・27Dグリッドにあり、標高約20.2~20mの一段高くなった平坦面に位置する。S K 208の北側約3mにはS K 11、東側約3mにはS K 21がある。

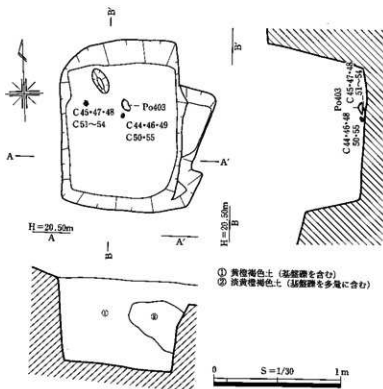
形態 平面は、上縁部・底面ともに隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.38m、短軸0.95m、底面長軸1.08m、短軸0.87m、深さ最大0.79mを測る。長軸方向は、N-4°-Eである。

埋土 埋土は、2層に分層できた。いずれも基盤礫を含むものである。

遺物 底面北側から、大型の土師質土器皿Po402、小型のPo403、ややはなれて古銭C44~C55が二カ所に分かれて出土している。

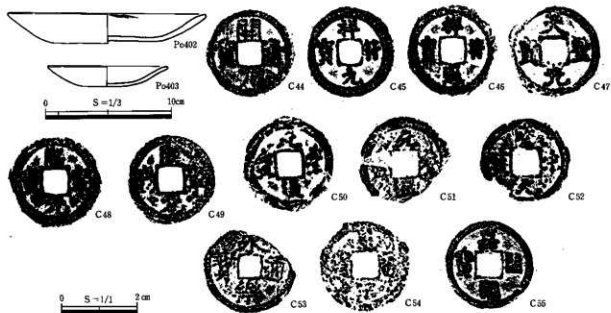
性格 出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

炭化物・焼土面が見られず、掘り込みも深いことから、土葬墓と考えられる。



- ① 黄褐色土 (基盤礫を含む)
- ② 淡黄褐色土 (基盤礫を多量に含む)

挿図119 S K 20遺構図



挿図120 S K 20出土遺物実測図

S K 21 (挿図121・122、図版22・48)

位置 堤谷地区A区北側の27C・27Dグリッドにあり、標高約20.1mの一段高くなった平坦面に位置する。S K 21の北側約2mにはS K 14、北東側約2mにはS K 17がある。

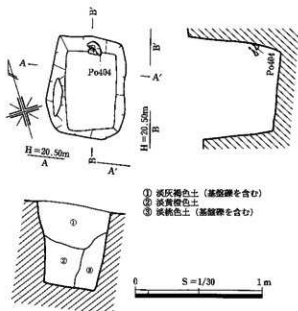
形態 平面は、上縁部・底面ともに長方形を呈す。規模は、上縁部長軸0.81m、短軸0.6m、底面長軸0.61m、短軸0.41m、深さ最大0.69mを測る。長軸方向は、N-17-Eである。

埋土 埋土は、3層に分層できた。①・③層中には基盤礫を含む。

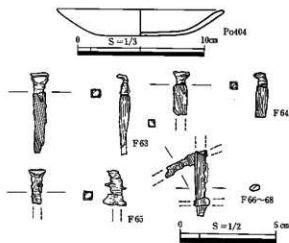
遺物出土状況 北壁際でやや浮いた状態で、大型の土師質土器皿Po404が出土している。また、埋土中から鉄釘F63～F68が出土している。

時期 出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

性格 炭化物・焼土面が見られず、掘り込みも深いことから、土葬墓と考えられる。また、他の土葬墓に比べて規模が小さいことから、小児用であった可能性がある。



挿図121 S K 21遺構図

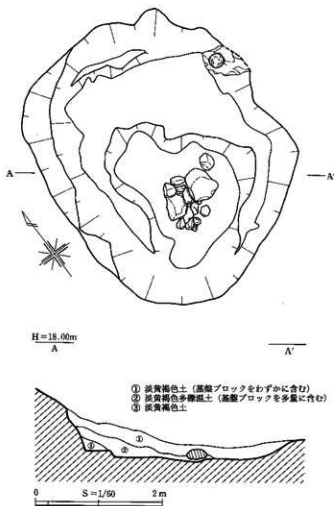


挿図122 S K 21出土遺物実測図

5. 不明土壌

S K 27 (挿図123、図版22)

- 位置** 堤谷地区A区南側の28Eグリッドにあり、標高約16.6～17.3mの緩やかに南西へ傾斜する斜面に位置する。西側約2mにはS I 12がある。調査前から大きく凹んでいたものである。
- 形態** 遺存状況は比較的良好、平面は上縁部不整形円形、底面不整形、断面皿状を呈す。規模は、上縁部長軸4.67m、短軸3.72m、深さ1.21mを測る。
- 埋土** 埋土は、基盤ブロックを多量に含む3層に分層できた。
- 石材** また、底面には、人頭大の角礫が多数出土している。
- 遺物** 遺物は全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため、時期は不明である。
- 性格** 性格は不明である。

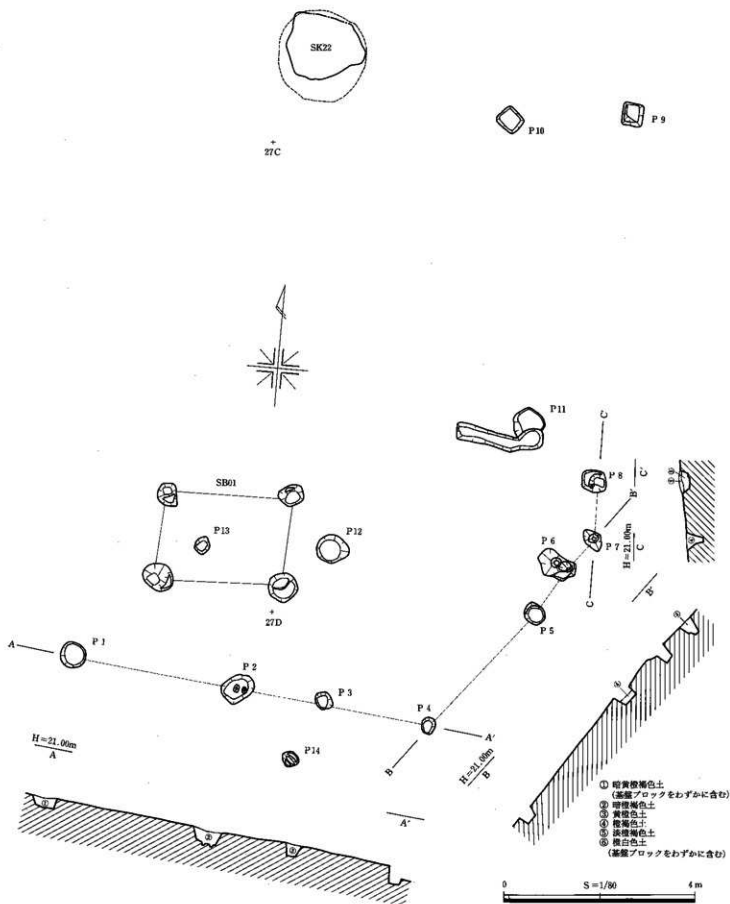


挿図123 SK 27遺構図

6. ビット群・溝状遺構

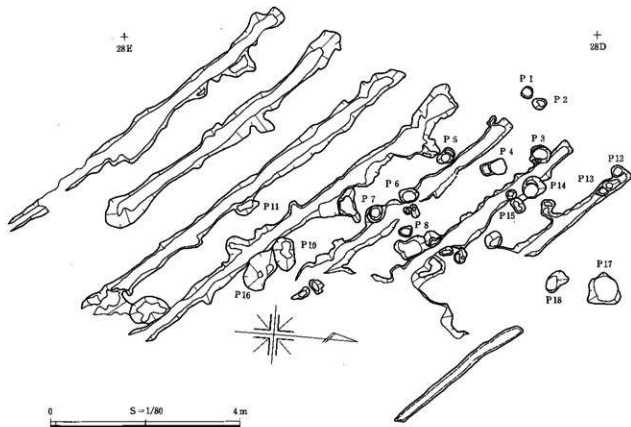
ビット群01 (挿図124)

- 位置** 堤谷地区A区北側の26D・27B・27C・27Dグリッドにあり、標高約19.6～20.6mの一段高くなった平坦面の縁辺部に位置する。
- ビットは計14個検出された。それぞれの規模は、P 1 (55×53-30) cm, P 2 (70×53-43) cm, P 3 (38×34-27) cm, P 4 (35×30-31) cm, P 5 (48×42-38) cm, P 6 (86×45-41) cm, P 7 (45×32-37) cm, P 8 (53×47-22) cm, P 9 (48×45-27) cm, P 10 (52×45-27) cm, P 11 (66×47-17) cm, P 12 (67×60-49) cm, P 13 (35×30-32) cm, P 14 (33×31-36) cm を測る。特に、P 1～P 8は、鉤状に並んでいる。
- 埋土** 埋土は、それぞれ①～④層が単層で入るものが多く、S B 01の埋土に近いものである。
- 遺物** 遺物は全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため、時期は不明である。
- 性格** P 1～P 8は、鉤状に並んでおり、また、埋土の状況も弥生時代後期と考えられるS B 01に近いことを考えると、S B 01に伴う杭列または柵列の可能性があり、この時期の住居跡と住居以外の施設(貯蔵施設?)とを区画するためのものと考えられる。

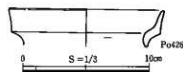


挿図124 ビット群01遺構図

ビット群02・溝状遺構 (挿図125・126、図版22)



挿図125 ビット群02・溝状遺構遺構図



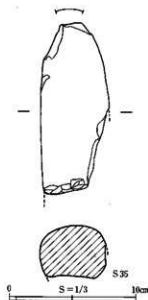
挿図126 ビット群02出土遺物実測図

位置 堤谷地区A区東側の28Dグリッドにあり、標高約17.3～17.8mの平坦面に位置する。ビットは計18個検出され、不規則に並んでいる。また、周辺には、幅24～60cm、長さ2.8～8.4mを測る溝が8条検出された。切り合い関係を見ると、ビットが溝状遺構に切られており、ビット群が行する。

遺物 図化できた遺物には、わずかにP4内出土の燧石Po426がある。

時期 出土遺物から、ビット群は岩吉編年III（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性格 ビット群の性格は不明である。溝状遺構は、後世の耕作に関わるものと考えられる。



挿図127 堤谷地区A区遺構外出土遺物実測図

7. 堤谷地区A区遺構外遺物 (挿図127)

堤谷地区A区27Cグリッドで、磨製石斧片S35が出土している。その他土器片も多数出土しているが図化できなかった。

第3節 西桂見遺跡堤谷地区B区の概要

位置 B区は、標高9m～15mの丘陵東側斜面部の地区である。現況では、テラス状に加工された段が2段ある。

遺構 この地区で検出した遺構は、弥生時代後期～近世にかけてのもので、竪穴住居跡7棟、中世墓1基、不明土坑1基、ピット群1か所、溝状遺構1基である。

弥生時代後期では竪穴住居跡（S I 14・16）が検出されており、桂見遺跡堤谷東地区のものとはほぼ同時期で、堤谷地区A区のものより遅いものである。

古墳時代前期では、竪穴住居跡（S I 17）が検出されている。堤谷地区A区のものとはほぼ同時期である。

中世墓であるSK25は、A区のものより遅いもので、形態が異なり、短刀が出土している。

近世では、不明土坑（SK26）が検出されている。

いずれもテラス状の段上に作られており、この段が近年の耕作等に関わるものではないといえる。

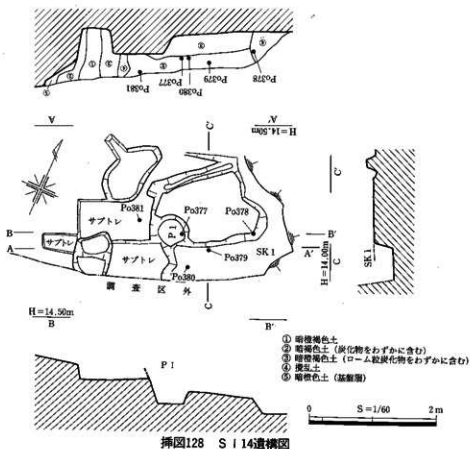
第4節 西桂見遺跡堤谷地区B区の調査結果

1. 竪穴住居跡

S I 14 (挿図128・129、図版23・48)

位置 堤谷地区B区の南側調査区際の30Fグリッドにあり、標高13.7mの平坦面に位置する。北西側約12mにはSK25がある。

形態 遺存状況は非常に悪く、東側半分は削り取られ、また、大半が調査区外にある。平面形は、遺



存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.6m以上、南北1.6m以上を測り、床面積は2.8㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.21mを測る。

壁溝は北側のみで検出された。幅10～14cm、深さ3～5cm、断面「U」字状を呈す。

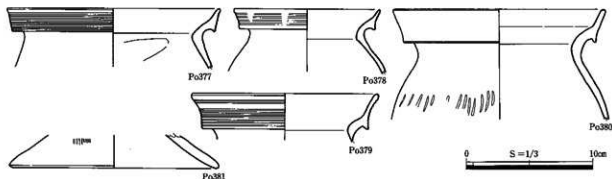
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、西壁際で(63×51-19)cmを測るP1が検出されている。

土 坑 床面中央部には、土坑SK1が掘り込まれているが、土層を観察すると、S114より遅いものと考えられる。

埋 土 埋土は3層に分層できた。②③層中には炭化物をわずかに含んでいる。

遺物出土状況 図化できたものには、甕Po377～Po380、蓋Po381がある。このうち、床面直上からPo377、Po378、Po380が出土している。その他は、埋土中または、周辺からの出土である。

時 期 床面出土の土器から、岩吉編年Ⅲ(新)期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図129 S114出土遺物実測図

S116 (挿図130・131、図版23・49)

位 置 堤谷地区B区南側の30Eグリッドにあり、標高約11.6mの平坦面に位置する。北側約1mにはSK26がある。

形 態 遺存状況は悪く、東側半分以上は流失している。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形または多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.5m以上、南北5.7m以上を測り、床面積は4.7㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.31mを測る。

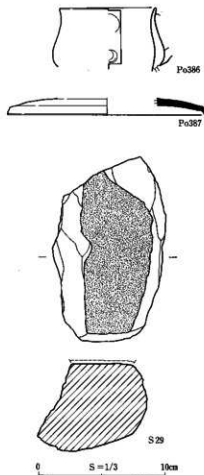
壁溝は周壁際で検出され、ほぼ全周していたものと考えられる。幅18～40cm、深さ6～14cm、断面逆台形状を呈す。

主柱穴と考えられるものはP1、P2のみで、それぞれ(75×56-77)cm、(60×38-69)cmを測る。その他に、P3・P4が検出されたが、性格は不明である。

埋 土 現況は①～④層によって平坦面が作られており、S116に伴う埋土は⑤層のみである。

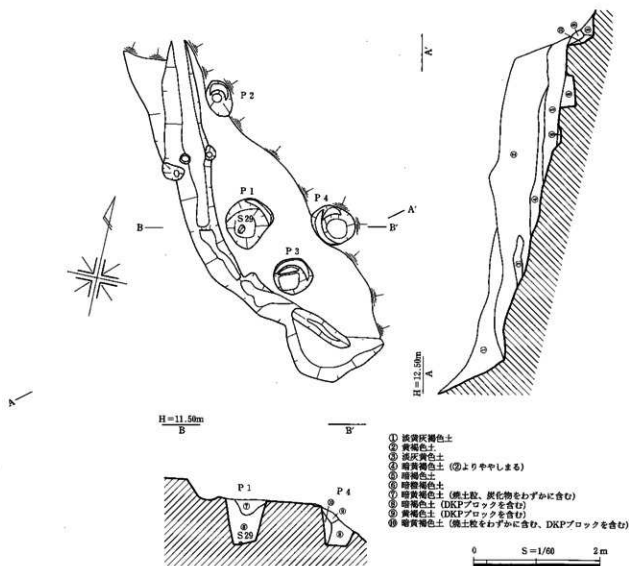
遺物出土状況 図化できたものには、把手付短頸壺Po386、須恵器杯蓋Po387 磁石S29がある。S29はP1内、その他は周辺からの出土である。床面上からも土器が出土しているが、図化できなかった。

時 期 時期を比定できる土器は出土していないため、確実な時期は



挿図130 S116出土遺物実測図

不明であるが、およそ岩吉山編年（新）期・弥生時代後期後半頃のものと同推察される。



挿図131 S I 16遺構図

S I 17 (挿図132、図版23)

位置 堤谷地区B区北側調査区際の29Cグリッドにあり、標高約12～12.5mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約1mにはSD19がある。

形態 遺存状況は悪く、東側半分は流失し、北側は大半が調査区外にある。平面形は、不明である。規模は、東西1.6m以上、南北1.8m以上を測り、床面積は2.0㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.25mを測る。壁溝は周壁の内側で検出された。幅14～22cm、深さ6cm、断面逆台形状を呈す。主柱穴と考えられるものはP1のみで、(30×16以上-34)cmを測る。

埋土 埋土は①層のみである。
 遺物 埋土中から土器片が出土しているが、図化することはできなかった。
 時期 時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。

2. 土坑

S K 25 (挿図133～135、図版24・49)

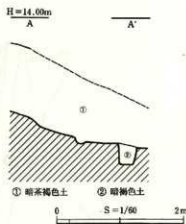
位置 堤谷地区B区西側の29Eグリッドにあり、標高約14.1mの平坦面に位置する。南側約12mにはS I 14がある。

形態 北東側は崖面で削り取られており、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整形円形、底面不整形、断面逆台形状を呈す。規模は、上縁部長軸1.6m以上、短軸1.2m、深さ0.65mを測る。長軸方向は、N-44°-Eである。

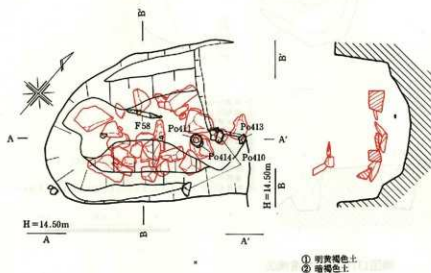
埋土 埋土は、2層に分層できた。

石材 また、埋土中から人頭大の角礫が多数出土している。この石材中には、砥石S30が含まれている。

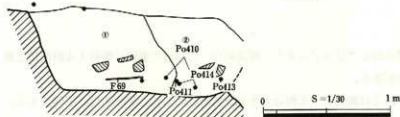
遺物出土状況 埋土中及び底面付近で土師質土器、短刀、砥石が出土している。図化できたものに、回転糸切り痕が明瞭に残る土師質土



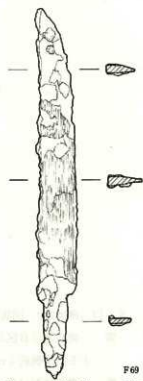
挿図132 S I 17遺構図



① 粗赤褐色土
 ② 暗褐色土



挿図133 S K 25遺構図

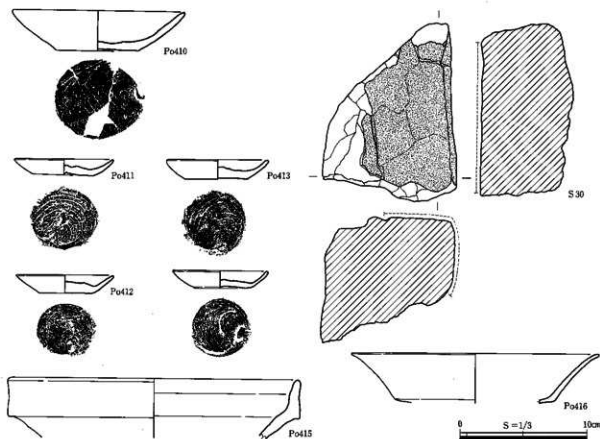


挿図134 S K 25出土遺物
 実測図(1)

器皿Po410~Po414、備前焼き摺り鉢Po415、土師器高杯Po416、短刀F69、砥石S30がある。

時期 出土遺物から、中世前半頃のものと考えられる。

性格 出土遺物等から土壌墓と考えられるが、A区の中世墓より遅るものと考えられ、形態も異なる。



挿図135 SK25出土遺物実測図

SK26 (挿図136・137、図版24・49)

位置 堤谷地区B区の東側調査区際の30Eグリッドにあり、標高約8.6~10.9mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約1mにはS116がある。

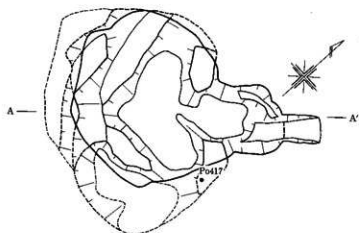
形態 東側は崖面で崩り取られており、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整椀鏡形、底面不整形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部長軸3.35m、短軸2.75m、深さ3.0mを測る。

埋土 埋土は、9層に分層でき、ほとんど崩落土と考えられるDKPを含む層である。

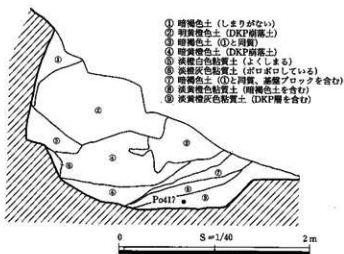
遺物 出土遺物には、図化できたものに南東側底面で出土した施軸陶器Po417がある。

時期 出土遺物から、近世頃のものと考えられる。

性格 性格は不明である。



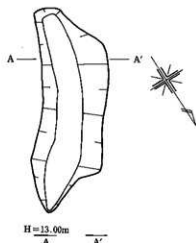
H=11.50m
A



挿図136 S K 26遺構図



挿図137 S K 26出土遺物実測図



H=13.00m
A A'



挿図138 S D 19遺構図

3. 溝状遺構

S D 19 (挿図138、図版24)

- 位置 堤谷地区B区北側調査区際の29Dグリッドにあり、標高約11.4～12.3mの東側に傾斜する斜面に位置する。北側約1mにはS D 19がある。
- 形態 平面形は、緩く三日月状を呈す。規模は、長さ3.3m、幅1.05m、深さ0.47mを測る。
- 埋土 埋土は2層に分層できた。
- 遺物 遺物は出土していない。
- 時期 時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。
- 性格 性格は不明である。

4. ビット群

ビット群03 (挿図139、図版25)

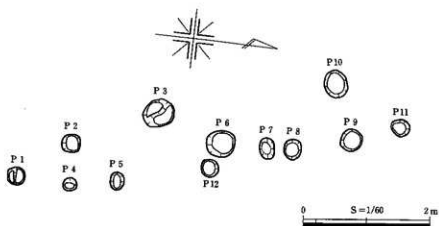
位置 堤谷地区B区北側調査区際の29Dグリッドにあり、標高約12.3mの平坦面に位置する。北側約1mにはSD19がある。

不規則に並ぶ計12個のビットを検出した。規模は、挿表11を参照されたい。

遺物 遺物は出土していない。

時期 時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。

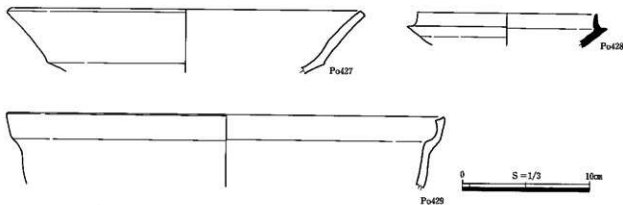
性格 性格は不明である。



挿図139 ビット群03遺構図

5. 堤谷地区B区遺構外遺物 (挿図140)

堤谷地区B区30Fグリッドで、甍形器台Po427、須恵器杯身Po428、瓦質土器土鍋Po429が出土している。Po427は古墳時代前期頃、Po428はTK43並行期^(a)・古墳時代後期、Po429は中世のものと考えられる。



挿図140 堤谷地区B区遺構外遺物実測図

第5節 西桂見遺跡堤谷地区C区の概要

位置 C区は、標高8～20mの丘陵西側斜面部の地区である。現況では、調査区南側が大きくカール状に湾曲し、平坦面が作られていた。

遺構 この地区で検出した遺構は、中世の礎石総柱建物跡（SB02）1棟と、中世以後の盛土遺構（SS03）である。

SB02は、南東側約1/3が調査区外にあるものの、2間×5間の規模と考えられる。遺存していた礎石は3個のみであった。また、地鎮具と考えられる土師器皿・円礫が埋納された、ピットが2個検出されている。

SS03は、SB02廃絶後、厚さ約1mの盛土が施され整形されていた。

第6節 西桂見遺跡堤谷地区C区の調査結果

1. 礎石総柱建物跡

SB02（挿図141～144、図版25・50）

位置 堤谷地区C区南側調査区際の25・26Eグリッドにあり、標高8.9mの平坦面に位置する。

平坦面 この平坦面は、斜面を大きく加工したもので、現況でも斜面がカール状に抉られているのがわかった。標高9m付近は、東西18.4m以上、南北6.3m以上を測る平坦面となっている。

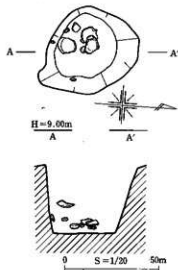
形態 建物はこの平坦面上に作られており、南西側が調査区外にあるものの、桁間2間3.8m、梁行5間11.3mと推定される礎石総柱建物跡である。主軸方向は、N-49°-Wと北西・南東方向を向く。

礎石はP5・P6・P7のみに遺存しており、その他は抜き取られていた。

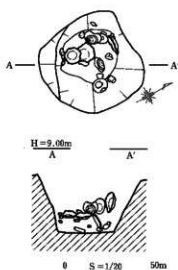
それぞれの掘り方は、P1（95×71-9）cm、P2（86×63-9）cm、P3（112×65-17）cm、P4（63×60-11）cm、P5（109×63-11）cm、P6（65以上×25以上-10）cm、P7（75×70-18）cm、P8（110×64-15）cm、P9（85×67-22）cm、P10（80×66-17）cm、P11（72×61-7）cm、P12（55×53-9）cmを測る。いずれの掘り方も素掘りで浅く、礎石設置に伴う根石等は検出されなかった。

主柱穴間距離は、梁間が2.3m、桁間が1.8～2.1mを測る。

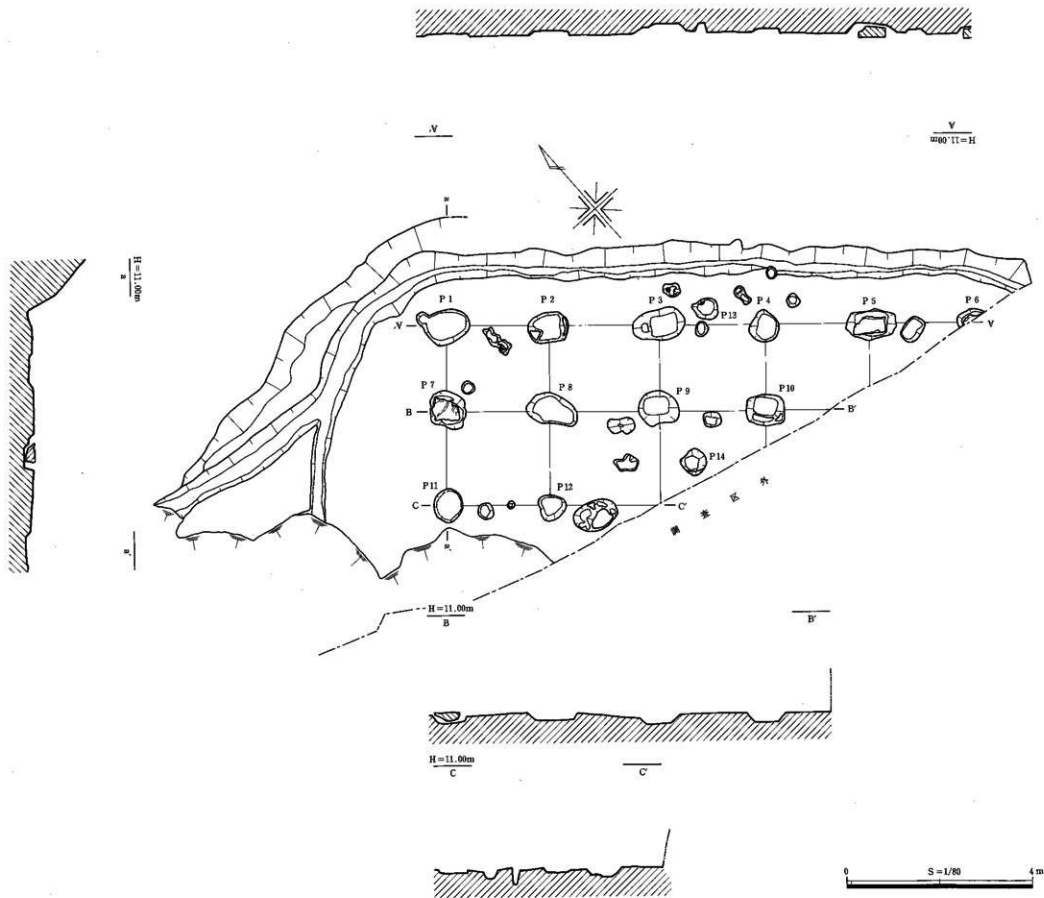
その他平坦面上で数個のピットが検出されたが、このうちP13・P14内からは地鎮具と考えられる土師質土器皿とともに円礫が出土している。P13・P14は、建物のほぼ中軸線上に並んでいる。



挿図141 SB02P13内遺物出土状況図

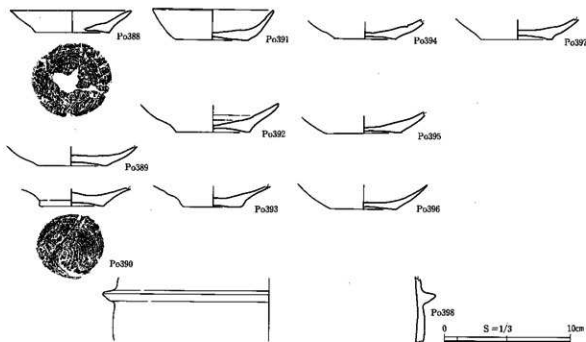


挿図142 SB02P14内遺物出土状況図



挿図143 SB 02遺構図

- 排水溝 また、建物の周囲には、斜面際に幅20～77cm、深さ1～7cmを測る、排水溝と考えられる溝が巡っており、西側では二股に分かれている。
- 遺物出土状況 出土遺物には、P13内で土師質土器皿Po388～Po390、P14内で土師質土器Po391～Po397、平坦面上で瓦質土器羽釜Po398がある。土師質土器皿は、風化が著しいが底部に糸切り痕が認められる。
- 時期 これらの遺物から、中世頃のものと考えられる。
- 性格 性格は不明であるが、この時期の建物としては大掛かりなものといえる。



挿図144 S B02出土遺物実測図

2. 盛土遺構

S S03 (挿図145・146、図版26・51)

- 位置 堤谷地区C区南側調査区際の25・26Eグリッドにあり、前述のS B02の廃絶後に盛土が行われて成形されたものである。
- 形態 盛り土上面は、ほぼ平坦面となっているが、平坦面上で遺構等は検出されなかった。
- 盛土排水溝 土層断面を観察すると、21層に分層できたが、このうち盛土と考えられるのは②層のみである。②層は大型の基盤ブロックを多量に含むもので、厚さ0.6～1.0mを測る。②層以下は盛土以前の二次泥土と考えられる。
- 遺物出土状況 出土遺物には、②層中で甕Po418・Po419、底部Po420、器台Po421、瓦質土器高台付杯Po422、青磁Po423、陶器Po424・Po425、砥石S31、石錘S32、磨製石斧S33、石皿S34、楔と考えられるF70、鉄釘F71がある。
- 時期 これらの遺物は、弥生時代中期～中世と幅をもち、S S03に伴う遺物とは言えない。S B02が鎌倉時代頃のものと考えられることから、中世以後のものと考えられる。
- 性格 性格は不明である。

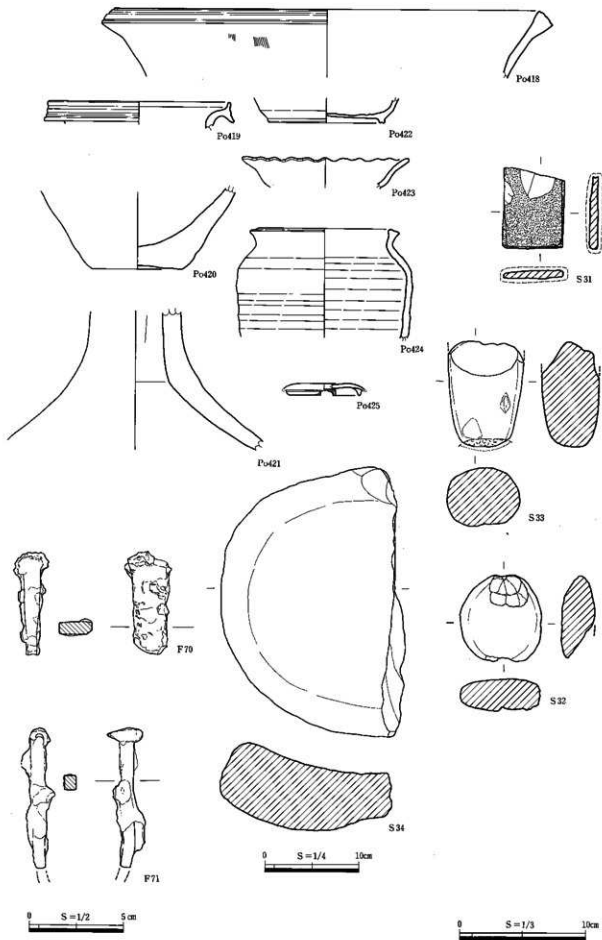
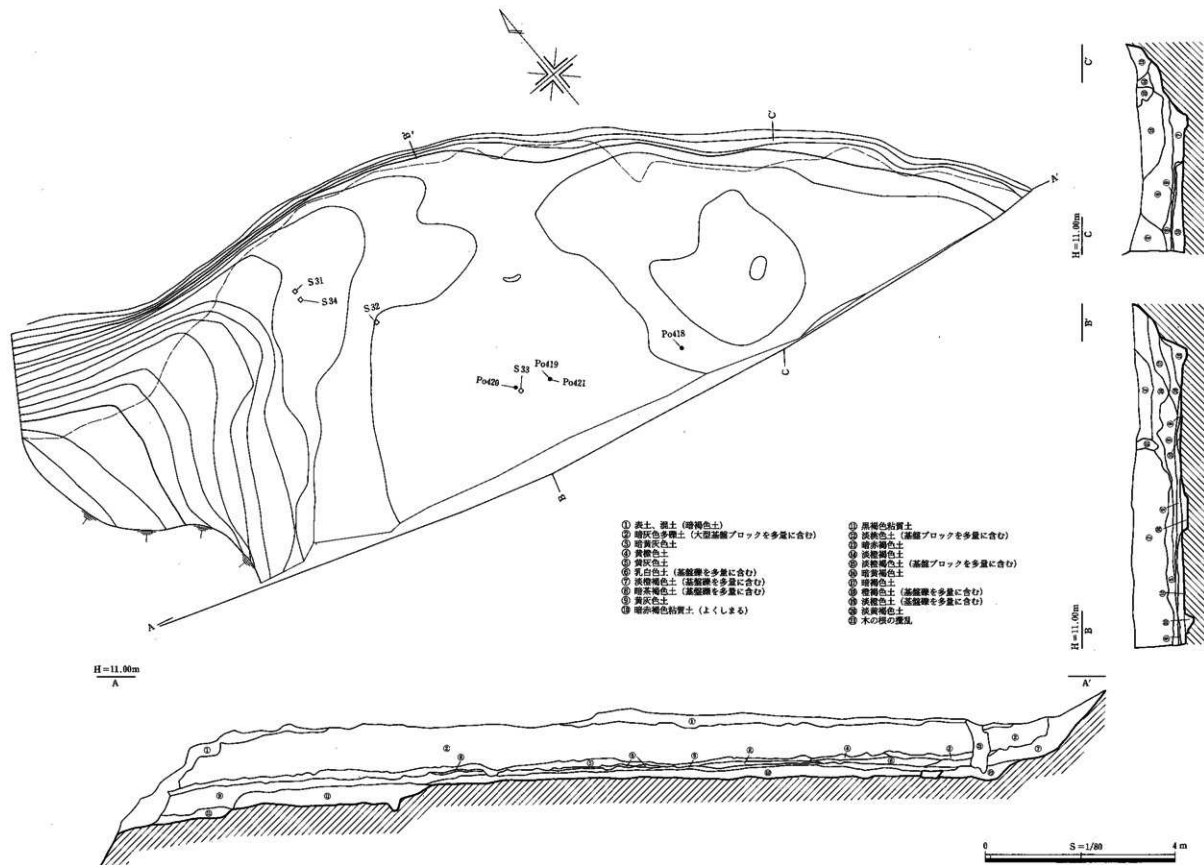


插图146 S S 03出土物实测图



弾丸146 S 03遺構図

遺構名	形態	規模 (m)	床面積 (㎡)	残存壁高	主柱穴	遺物	時期	備考
S I 01	隅丸方形	5.17×4.3	19.7↑	0.79	4	甕・器台・蓋・鉄片・管玉・石皿	弥生時代後期後半	中央ビット、貼床、屋内貯蔵穴炭化材、焼土
S I 02	方形?	不明	不明	—	—	甕・高杯・磁石	弥生時代後期後半	
S I 03-1	楕円形	6.06↑ ×5.24↑	24.9↑	0.56	6?	甕・甕・高杯・注口土器・鼓形器台・甕・鉄片・石鍾	弥生時代後期後半	中央ビット
03-2	—	—	—	—	5			
S I 04	隅丸方形	3.98↑ ×2.37↑	7.7↑	0.57	4?	甕	弥生時代後期後半	
S I 05-1	—	—	—	—	4	甕・甕・高杯・甕・鉄片・磁石	古墳時代前期前半	
05-2	—	—	—	—	4			中央ビット
05-3	隅丸方形	5.27×5.17	23.6	0.6	4			中央ビット、棟持柱、補助柱穴
S I 06-1	楕円形	6.73×6.05	32.2	?	7	甕・高杯・鼓形器台・鉄片・磁石	弥生時代後期後半	中央ビット
06-2	—	—	—	—	6			
S I 07	方形	3.0※×2.6※	7※	?	?	甕・高杯・鼓形器台・鉄片・磁石	弥生時代後期後半	焼土面、屋内貯蔵穴
S I 08	方形	4※×3※	12※	?	—	甕・磁石	弥生時代後期後半	
S I 09	円形	4.54×4.13	15.3	0.67	3	甕・鼓形器台・鉄片・磁石・磨石・礫石	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半	中央ビット、炭化材、焼土
S I 10	隅丸方形	6.5×2.06↑	10.5↑	0.81	—	甕・高杯・磁石・石鍾	弥生時代後期後半	焼土面
S I 11	隅丸方形	5.1×4.88	29.7	0.28	4	甕・甕・磁石	古墳時代前期前半	中央ビット、排水溝
S I 12	六角形	9.04×8.8	60.4	0.43	6	甕・低脚杯	弥生時代後期後半	中央ビット、暗渠状排水溝
S I 13	隅丸方形	4.3↑×2.2↑	7.7↑	0.13	4?	底部	弥生時代後期～古墳時代前期	
S I 14	隅丸方形?	1.6↑×1.6↑	2.8↑	0.21	—	甕・蓋	弥生時代後期後半	
S I 15	隅丸方形?	3.8↑×1.4↑	3.7↑	0.97	—	甕・高杯	古墳時代前期前半	
S I 16	不明	5.7↑×1.5↑	4.7↑	0.31	—	把手付短頸壺	弥生時代後期後半	
S I 17	不明	1.8↑×1.7↑	2.0↑	0.26	—	—	不明	

挿表1 西柱見遺跡壁穴住居跡一覧表

※は推定、↑は数値以上

遺構名	形態	規模 (m)	長軸方向	種類	遺物	時期	備考
S K01	長方形	1.10×0.93-0.38	N-27° -W	茶甕墓	土師質土器皿、鉄釘、人骨、炭化物	中世末	焼土面
S K09	隅丸長方形	1.20×1.01-0.44	N-42° -E	火葬墓	銅銭?、炭化物	中世末	B.P.280±40
S K10	長方形	1.31×0.69-0.17	N-8° -E	茶甕墓	土師質土器皿、鉄釘、銅銭	中世末	焼土面 B.P.470±40
S K11	長方形	1.21×0.83-0.73	N-8° -W	土葬墓	鉄釘、銅銭	中世末	周溝
S K12	不整長方	1.24×0.83-0.22	N-1° -E	火葬墓	鉄釘、銅銭、炭化物	中世末	B.P.540±30
S K13	長方形?	0.4↑×0.66-0.18	—	不明	—	中世末	
S K14	円形	1.19×1.17-1.50	—	土葬墓	鉄釘、銅銭、壮年男性骨片	中世末	周溝
S K15	不整長方形	1.08×0.77-0.24	N-17° -W	火葬墓	鉄釘、炭化物	中世末	溝 B.P.430±30
S K16	隅丸長方形	1.33×0.89-1.08	N-42° -E	土葬墓	鉄釘、漆被膜	中世末	周溝
S K17	長方形	0.97×0.71-0.18	N-35° -E	茶甕墓	鉄釘、銅銭、炭化物、小児骨片	中世末	焼土面
S K18	隅丸長方形	1.03×0.8-0.63	N-76° -E	土葬墓	銅銭	中世末	
S K19	長方形	1.10×0.77-0.24	N-1° -E	火葬墓	炭化物	中世末	
S K20	隅丸長方形	1.38×0.95-0.79	N-4° -E	土葬墓	土師質土器皿、銅銭	中世末	
S K21	長方形	0.81×0.6-0.69	N-17° -E	土葬墓	土師質土器皿、鉄釘	中世末	
S K25	不整楕円形	2.6↑×1.26-0.65	N-44° -E	土葬墓	土師質土器皿、短刀、磁石	中世	角礫

挿表2 西桂見遺跡鷺谷口・堤谷地区中世墓一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C 2~9 C10~13 C14	熙寧元寶他 不明 不明	北 宋	1068年	真 書	熙寧元寶 1 枚を含む、計 8 枚付着 4 枚付着

挿表 3 S K 10出土銅錢一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C 15	開元通寶	唐	621年	真 書	
C 16	淳化元寶	北 宋	990年	真 書	
C 17	景德元寶	北 宋	1004年	真 書	
C 18	天禧通寶	北 宋	1017年	真 書	
C 19	皇宋通寶	北 宋	1038年	真 書	
C 20	熙寧元寶	北 宋	1068年	真 書	
C 21	元豐通寶?	北 宋	1078年	行 書	
C 22	政和通寶	北 宗	1111年	篆 書	
C 23	永樂通寶	明	1408年	真 書	
C 24	不明				
C 25	不明				

挿表 4 S K 11出土銅錢一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C 26	咸平元寶	北 宋	998年	真 書	
C 27	祥符通寶	北 宋	1009年	真 書	
C 28	皇宋通寶	北 宋	1038年	真 書	
C 29	大觀通寶	北 宋	1107年	真 書	
C 30	永樂通寶	明	1408年	真 書	
C 31	不明				〇〇通寶

挿表 5 S K 12出土銅錢一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C32~34 C35 C36・37	皇宋通寶他 熙寧元寶 不明	北宋 北宋	1038年 1068年	真書 真書	皇宋通寶1枚を含む、計3枚付着。布付着 2枚溶着

挿表6 SK14出土銅錢一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C38	開元通寶	唐	621年	真書	
C39	景祐元寶	北宋	1086年	真書	
C40	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	
C41	熙寧元寶	北宋	1068年	篆書	
C42	元祐通寶	北宋	1086年	篆書	
C43	不明				

挿表7 SK18出土銅錢一覽表

No	錢貨名	国名	初鑄年	書体	備考
C44	開元通寶	唐	621年	真書	
C45	祥符元寶	北宋	1009年	真書	
C46	祥符元寶	北宋	1009年	真書	
C47	天聖元寶	北宋	1023年	真書	
C48	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	
C49	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	
C50	元豐通寶	北宋	1078年	行書	
C51	元豐通寶?	北宋	1078年	行書	熱で変形
C52	聖宋元寶?	北宋	1101年	行書	熱で変形
C53	永樂通寶	明	1408年	真書	
C54	不明				〇〇通寶
C55	不明				

挿表8 SK20出土銅錢一覽表

ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ
P 1	55×53—31	P 5	48×41—38	P 9	49×45—26	P 13	36×30—28
P 2	71×53—37	P 6	86×49—47	P 10	52×45—23	P 14	34×31—34
P 3	38×33—27	P 7	42×34—37	P 11	62×57—16		
P 4	34×44—23	P 8	52×48—23	P 12	62×61—52		

挿表9 堤谷地区A区ビット群01—覧表

ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ
P 1	28×21—46	P 5	49×23—40	P 9	40×30—26	P 13	40×25—24
P 2	36×23—19	P 6	40×31—42	P 10	72×43—43	P 14	48×46—43
P 3	40×35—45	P 7	45×35—49	P 11	46×27—30	P 15	34×25—27
P 4	52×32—61	P 8	25×21—27	P 12	26×23—37	P 16	83×51—53

挿表10 堤谷地区A区ビット群02—覧表

ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ	ビット 番号	規模 cm 長軸×短軸—深さ
P 1	28×25—19	P 4	23×21—18	P 7	34×23—16	P 10	44×38—15
P 2	29×28—14	P 5	28×22—31	P 8	32×28—28	P 11	30×27—27
P 3	50×43—45	P 6	45×40—23	P 9	35×34—17	P 12	29×26—31

挿表11 堤谷地区B区ビット群03—覧表

第5章 倉見古墳群の調査 (1994年度)

第1節 倉見古墳群の概要

位置 倉見古墳群は、標高約15～32mの尾根頂部に立地する。これまでに標高約30mの南北に延びる丘陵上で7基確認されていたが、今回の調査で、標高約15mの西側に延びる低丘陵上で新たに2基の古墳を検出し、総計9基からなる。

今回調査した7号墳は西桂見遺跡鷺谷奥地区A区、8・9号墳は西桂見遺跡鷺谷口地区で検出された。

倉見7号墳 7号墳は、標高約30mの丘陵上に立地している。古墳時代前期頃の、一辺約14mを測る方墳または長方墳と考えられる。これまで調査された1～6号墳と同じく、高い丘陵上に立地しており、また時期もほぼ同時期と考えられることから、同じ支群として考えてもよからう。

倉見8号墳 8号墳は、標高約15mの低丘陵上に立地するもので、墳丘南側が半分以上削り取られ、また、盛土もほとんど遺存していなかったが、検出した周溝から、一辺約13mの方墳と考えられる。古墳時代後期頃のものと考えられる。

倉見9号墳 9号墳も、標高約15mの低丘陵上に立地する。南側が8号墳と近接している。墳丘盛土は削平されており、遺存していなかった。径約10mのいびつな円墳と考えられる。主体部は、遺存状態は悪く、基底部のみであったが、湖山地周辺ではあまり知られていない横穴式石室であることが判明した。古墳時代後期頃のものと考えられる。

8・9号墳は、他の古墳と異なる立地条件でありまた、時期も異なることから、異なる支群であることが分かる。

第2節 倉見7号墳 (挿図147～149、図版26・27・52)

位置 倉見7号墳は、西桂見遺跡鷺谷奥地区A区北側の13C・14B～14Dグリッドにあり、標高約32mの尾根頂部に立地する。

倉見古墳群はこれまでに7基確認されていたが、今回の調査で新たに2基の古墳を検出し、総計9基からなる。7号墳は、これまで調査された1～6号墳と同じく、高い丘陵上に立地しており、同じ支群として考えてもよからう。

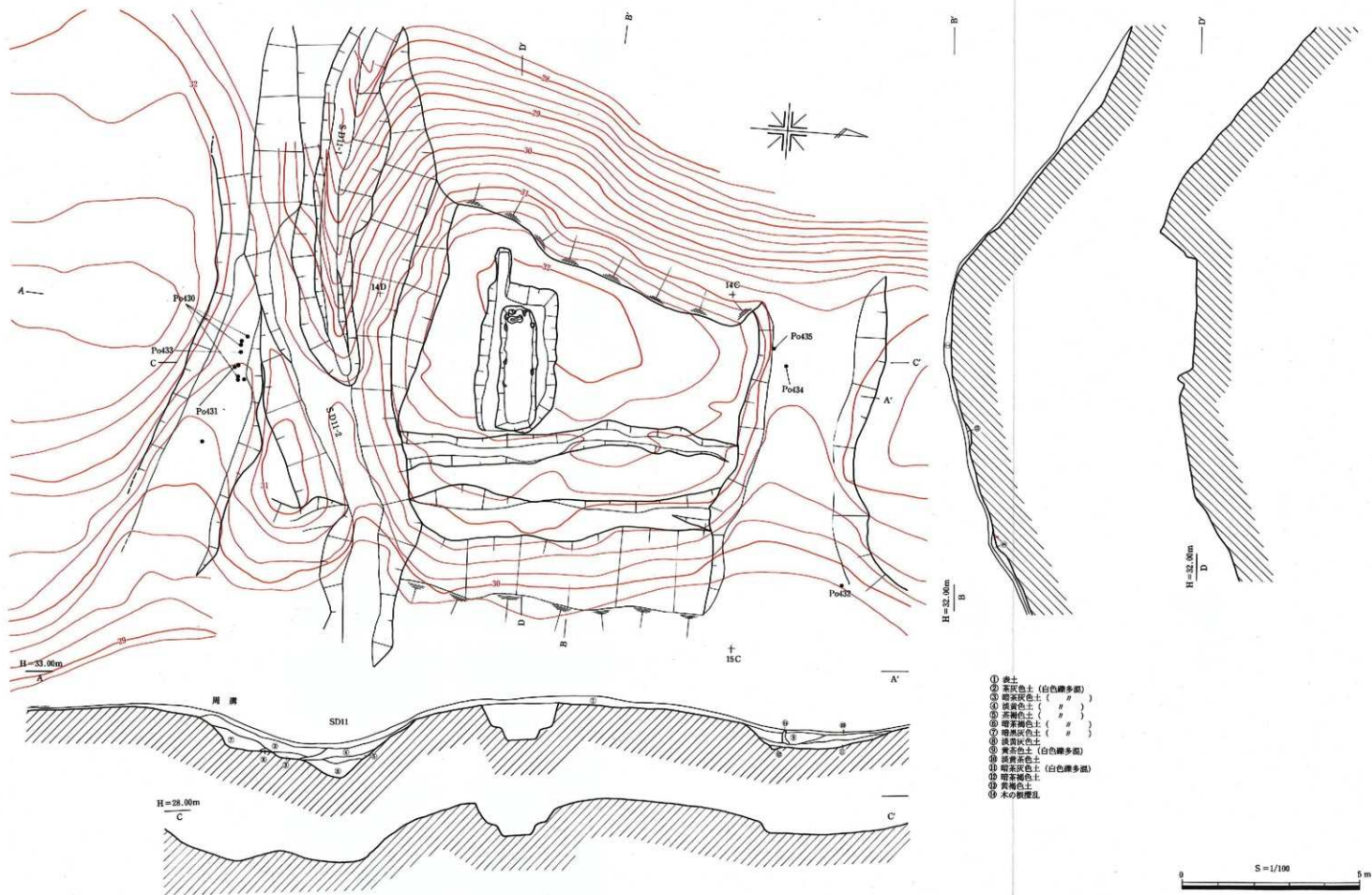
現況 調査前の観察では、北側は平坦部分から南は前述のSD11までの範囲が考えられ、径12mの円墳と考えられていた。

墳丘 表土を除去したところ、墳丘は狭い尾根を横断する南北2本の周溝によって区画されていることがわかった。そのうち、南側の周溝及び墳丘はSD11に大きく削り取られていることがわかった。また、西側は流失のため、東側はSD12及びSD13によって削平を受けており、遺存状態は必ずしも良好ではない。

墳形は、方墳または長方墳と考えられる。

墳丘は地山削り出しと盛土によって造られたものと考えられるが、表土下はすべて地山で、盛土は流失したものと考えられる。旧表土も検出されていないことから、盛土に先立って地山を大きく整形したものと推察される。

残存する墳丘規模は、南北14.45m、東西11.5m以上を測る。高さは、北側周溝底から1.35m、南側周溝底から1.6mを測る。



挿図147 倉見7号墳填丘測量図

基石等の外表施設は検出されなかった。

周溝 周溝は、周辺の地形から考えると全周するものではなく、尾根を直線的に横断する南北2本の周溝で墳丘を区画したものと考えられる。南側のものについては、やや斜めに横断するもので、実際の墳形はいびつな方墳またはいびつな長方墳を呈す。規模は、北側周溝は幅3.6~4.4m、深さ0.6m、南側周溝は幅2.6m、深さ0.7mを測り、断面逆台形状を呈す。

埋土の状況を見ると、北側周溝では4層に分層できたが、②層は周溝埋設後に掘り込まれたものである。南側周溝では9層に分層できたが、②~⑤層はSD11の埋土であり、周溝の埋土は⑦~⑨層である。いずれも基盤礫を含むものである。

主体部 主体部は、墳丘中央で検出された二段掘り土壌をもつものである。東側はSD12によって削られており、棺痕跡は認められなかったが、木棺が埋納されたものと考えられる。なお、底面西側には壁際に深さ3~7cmの小ピットが掘り込まれているが、用途は不明である。

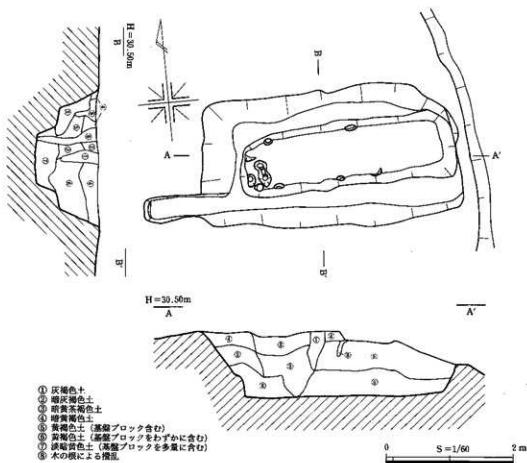
また、西小口側南辺には、長さ1.4m、幅0.4m、深さ0.29~0.42mを測る狭い溝が掘り込まれている。この溝の底面は、墓壇テラス部分のレベルと同じで、また、プランも南長側辺につながるから、この墓壇に伴うものと考えられる。

残存する墓壇の規模は、上縁部長さ4.1m以上、幅2.1~2.3m、深さ0.60mを測る。テラス部分の幅は、0.15~0.5mである。下段は、長さ3.5m、幅1.05m、深さ0.28~0.37mを測る。

主軸方向は、N-97-Eと東西を向く。頭位方向は不明である。

埋土の状況を見ると、中央部やや西側で盗掘を受けたと思われる土層の乱れが認められる。

遺物出土状況 図化できた遺物はすべて周溝内からの出土である。主体部は盗掘を受けたものと思われ、遺物は全く出土しなかった。



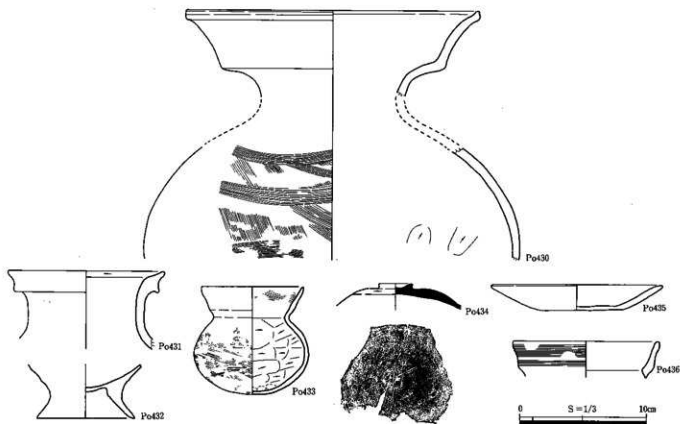
挿図148 倉見7号墳主体部遺構図

南側周溝内からは、埋土中から土師器壺Po430・Po431、小型丸底壺Po433が出土している。北側周溝内からは、埋土中から低脚杯Po432、土師質土器皿Po435、須恵器杯蓋Po434、弥生土器甕Po436が出土している。

時期 北側周溝内からの遺物のうち、Po434、Po435に関しては、周辺からの混入または後世の流れ込みのものと考えられ、この古墳に伴う遺物は南側周溝内から出土しているものと考えられる。これらは布留中～新段階、古墳時代前期後半～中期初頭頃のものと考えられる。

特に、Po430は畿内系の二重口縁壺と考えられ、端部がわずかに上方へつまみ出されるが、口縁部下端部は屈曲するのみであり、退化傾向が認められる。Po433は口縁部径が胴部最大径を上回るものではなく、口縁部も高くない。

倉見7号墳は、後述する8・9号墳とは時期が異なり、また立地条件も異なる。既に調査が行われた倉見2～6号墳とは同じ立地条件であり、時期もほぼ同時期と考えられる。



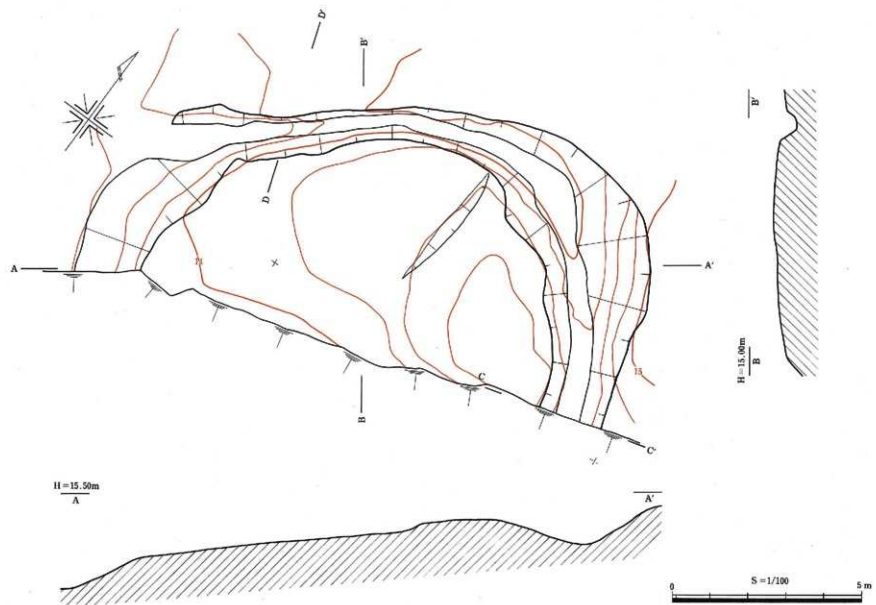
挿図149 倉見7号墳出土遺物実測図

第3節 倉見8号墳 (挿図150～152、図版27・52)

位置と現況 倉見8号墳は、西柱見遺跡A区西側の5D・5E・6D・6Eグリッドにあり、標高約15mの尾根頂部に立地する。北側約1mには倉見9号墳がある。倉見8号墳は、9号墳と合せ、今回の調査で新たに検出されたものである。

調査前の状況は、周辺は後世の耕作等が行われていたものと思われ、西側にやや傾斜しながらも二段の平坦面が形成されていた。また、南側については、SD04によって大きく削り取られている。なお、北側にはS I 01・03があるが、いずれも8号墳周溝によって削られている。

墳丘 表土を除去したところ、墳丘はほとんど削平され、周溝を検出した結果存在を確認した。

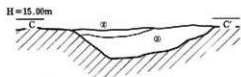


H=15.50m
A

H=15.50m
B

S=1/100
0 5m

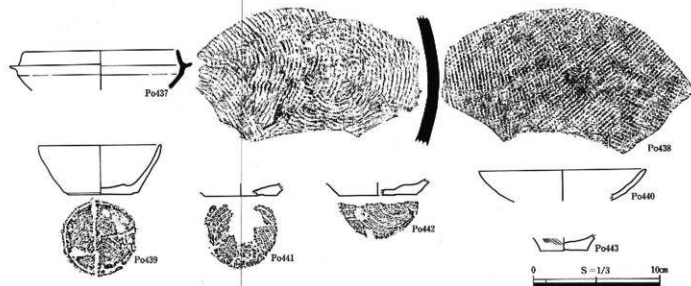
H=15.00m
D



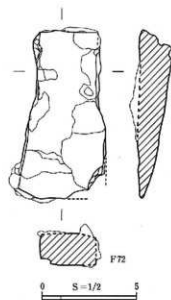
S=1/60
0 2m

- ① 淡黄灰色土 (砂質)
 - ② 暗褐色土
 - ③ 暗赤褐色土
 - ④ 暗赤褐色土 (磁器ブツクを含む)
 - ⑤ 黄灰色土
 - ⑥ 黄褐色土
 - ⑦ 黄灰色土 (炭化物を含む)
- SI03埋土

挿図150 倉見8号墳丘測量図



挿図151 倉見8号墳出土遺物実測図(1)



挿図152 倉見8号墳出土遺物実測図(2)

墳形は、遺存する周溝から方墳と考えられる。

墳丘東側で、若干の盛土が認められた。盛土は旧表土上に行われており、盛土を行う際、旧地形を整地する作業は行われなかったものと推定される。

残存する墳丘規模は、南北6.5m以上、東西13.2mを測る。南側を復元すると一辺約13m程度のものと考えられる。高さは、北側周溝底から1.0m、東側周溝底から0.5mを測る。

墓石等の外表施設は検出されなかった。

周溝 周溝は、西側・南側で削平・掘削を受けており、全形は不明である。形態は、東側はやや広く掘り込まれているが、北側に関しては周溝幅が非常に狭くなっている。コーナー部分は不明瞭で、丸味をもって折れている。規模は、北側周溝は幅0.8～1.0m、深さ0.5m、東側周溝は幅1.7～2.9m、深さ0.4mを測り、断面北側は逆台形状、東側は「U」字状を呈す。

埋土の状況を見ると、北側周溝では4層に分層できたが、②層は周溝埋没後に掘り込まれたものである。南側周溝では9層に分層できたが、②～⑥層はS D11の埋土であり、周溝の埋土は⑦～⑨層である。いずれも基盤礫を含むものである。

主体部 主体部は、削平を受けており、検出されなかった。

遺物出土状況 図化できた遺物は周溝内・墳丘及び周辺からの出土である。

時期 北側周溝内からは、埋土中から須恵器杯身Po437、須恵器蓋Po438、袋状鉄斧F72が出土している。墳丘東側では、土師器杯Po439～Po442が出土している。北側周辺から弥生土器底部Po443が出土している。

この古墳にともなう遺物は北側周溝内出土のものである。このうち、Po437は底部が欠損しており全形はわからないが、立ち上がりが比較的高く、TK43並行期と考えられる。

また、土師器杯は底部に糸切り痕をもち、平安時代～鎌倉時代頃のものと考えられ、この時期には墳丘が削平されていたものと考えられる。

北側周辺から出土しているPo443はS I 03に伴うものと考えられる。

第4節 倉見9号墳 (押図153～157、図版27～29・52)

位置と現況 倉見9号墳は、西桂見遺跡鷺谷門地区西側の5C・5D・6C・6Dグリッドにあり、標高約15mの尾根平坦面に立地する。南東側約1mには倉見9号墳がある。また、東側のS I 01、南側のS I 03を、それぞれ周溝・墓壇掘り方によって切っている。

調査前の状況は、周囲は後世の耕作等が行われていたものと思われ、西側にやや傾斜しながらも二段の平直面が形成されていた。特に西側は、大きく削り取られ、崖面をなしている。北側は丘陵斜面をそのまま墳丘に利用したのと考えられ、墳丘範囲を捉えることはできなかった。また、北側には、後述する横穴式石室の石材と考えられる、大型の石材が見られた。

墳丘 表土を除去したところ、周溝を検出した結果存在を確認した。

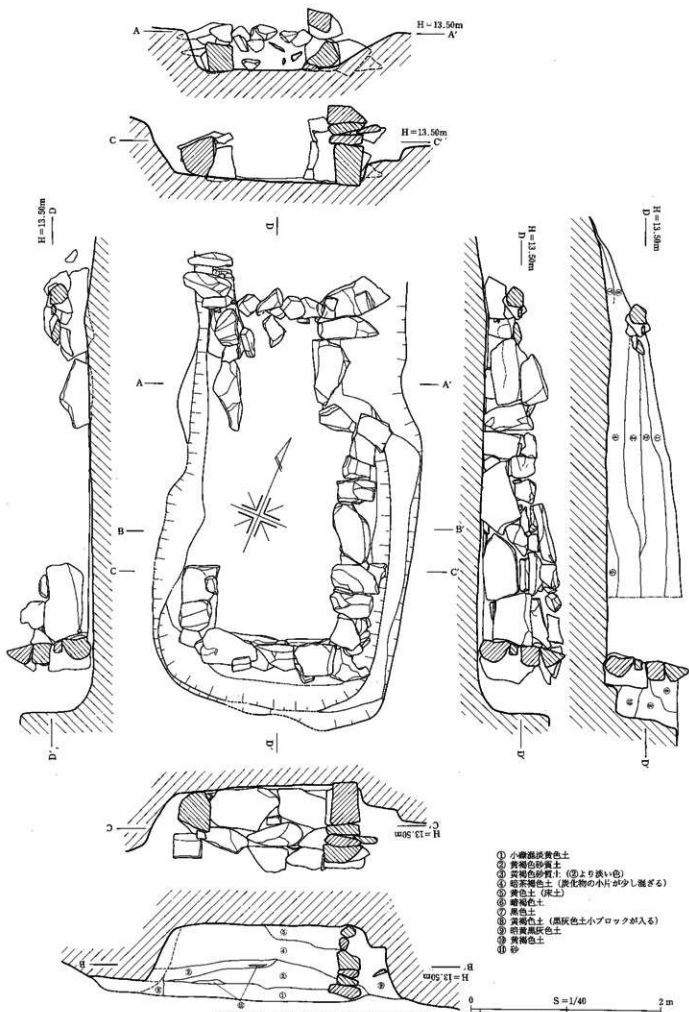
墳形は、遺存する周溝からいびつな円墳と考えられる。

墳丘西側で、若干の盛土が認められた。盛土は旧表土上に行われており、盛土を行う際、旧地形を整地する作業は行われなかったものと推定される。

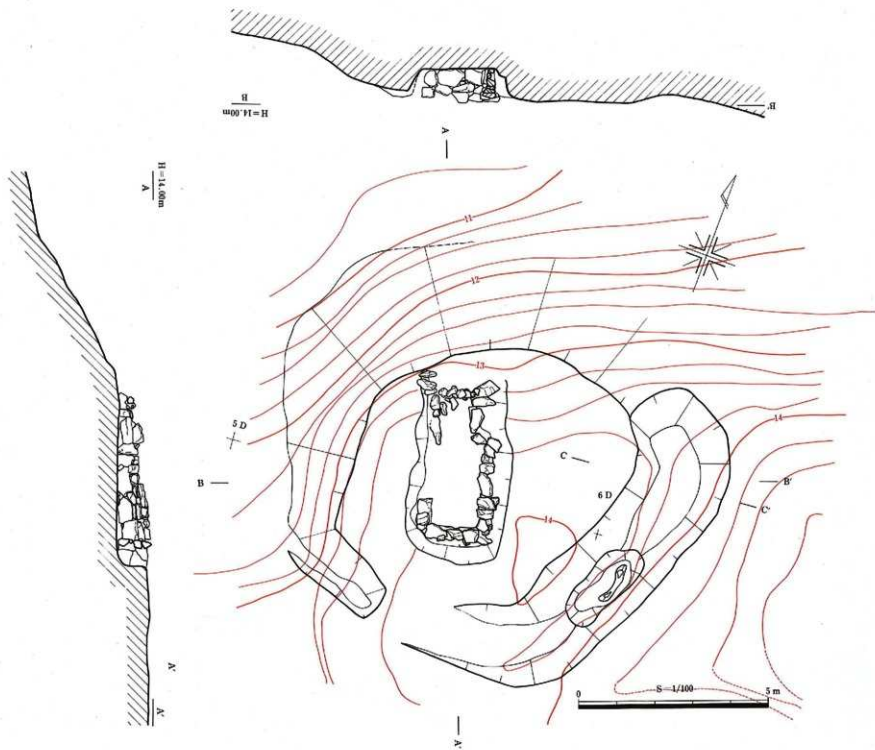
残存する墳丘規模は、南北約10m、東西9.6mを測る。復元すると径約10m程度のものと考えられる。高さは、東側周溝底から0.2mを測る。

墓石等の外表施設は検出されなかった。

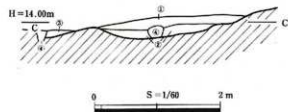
周溝 周溝は、西側・南側で削平・掘削を受けており、遺存状態は悪い。地形的に見て全周するものではなく、墳丘後背部のみに掘り込まれたものと考えられる。形態は、東側はやや広く掘り込まれている



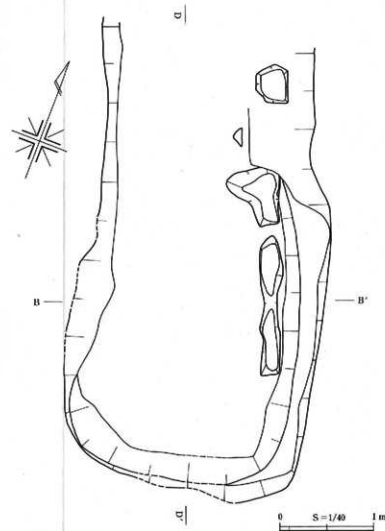
押図153 倉見9号墳横穴式石室実測図



- ① 基壇状土
- ② 階状色土 (基壇ブロックをわずかに含む)
- ③ 暗赤褐色土
- ④ 木の根腐乱



挿図154 倉見9号墳境丘測量図



挿図155 倉見9号墳石室墓墳実測図

が、南側は狭くなっている。これは、後述する周溝内埋葬が東側周溝底にある関係で広くならなかったものと考えられる。

規模は、幅1.7～2.3m、深さ0.3mを測り、断面「U」字状を呈す。

埋土の状況を見ると、東側周溝では2層に分層できた。いずれも締まりのないものである。

横穴式石室 主体部は、墳丘中央部で検出された、N-21'-Wとほぼ北に開口する左片袖式の割り石積みで構築された横穴式石室である。全長は4.1mを測る。石室の遺存状態は悪く、天井部及び左側壁の一部の石材が崩壊しており、基底部と2～3段の石積みが遺存していたに過ぎない。

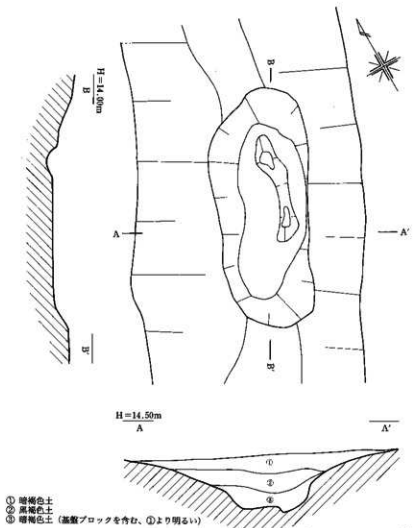
使用石材は、すべて石英安山岩の割石を使用している。

石室内埋土を観察すると、砂質の層が互層状に堆積していることから、後世に掘り返されたものと考えられる。

墓 墳 石室墓墳は、長さ5m以上、幅2.2～2.7m、深さ0.9mを測る。上縁部は隅丸長方形を呈し、底部は片袖形に掘り込まれている。西側壁側・奥壁側は一段掘りであるが、東側壁側は二段に掘り込まれ、基底石を置く掘り方が掘り込まれている。

石室裏込めの埋土を観察すると、奥壁側では黄褐色土と暗黄黒灰色土が交互に裏込めされていた。

玄 室 玄室は、長さ2.3m、奥壁幅1.3m、玄門幅1.2mを測り、平面長方形を呈す。遺存する高さは、奥壁側で0.85mを測る。壁体構成は、各壁とも基底部にはやや大型の割石石材を腰石とし、その上に塊



挿図156 倉見9号墳周溝内埋葬施設実測図

石または扁平な割石を積みあげて構成している。

側壁の腰石はそれぞれ不均等な大きさであるために、間隙を複数の石材によって補填し、奥壁の腰石の高さにそろえてから、さらに石積みを行っている。壁面はほぼ垂直である。

袖部は、やや扁平な縦長の石材を立てている。

羨道 羨道は、長さ1.8m、幅は玄門側で0.85m、羨門側で0.95mを測る。壁体構成は玄室と同様で、腰石上に石積みが行われている。

羨門部では、石材を横長に使用し他の箇所と石材の使い方が異なり、羨門を意識している。

閉塞部 閉塞は羨道部で行われていると考えられ、人頭大の塊石が2～3段積まれている。しかし、これらはいずれも床面から浮いた状態で検出されたものであり、原位置を保つものかどうか疑わしい。

周溝内 東側周溝内で、長軸2.55m、短軸0.95m、深さ0.24mを測る、平面不整形円形の周溝内埋葬と考えられる土壌を検出した。断面は逆台形状を呈し、一部溝状に掘り込まれる。

埋葬施設 埋土は周溝埋土と合せ3層に分層できたが、いずれも皿状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 遺物には、石室内、周溝内、墳丘周辺から出土したものがある。図化できたものには、須恵器壺Po444・Po445、弥生土器底部Po446、高杯Po447、鍔金を施した足金具B4、釣り針F73、鎌F74がある。

このうち、玄室埋土中からは、Po446、B4、F73がある。また、周溝内からはPo447、F74が出土している。その他のものは墳丘周辺からの出土である。

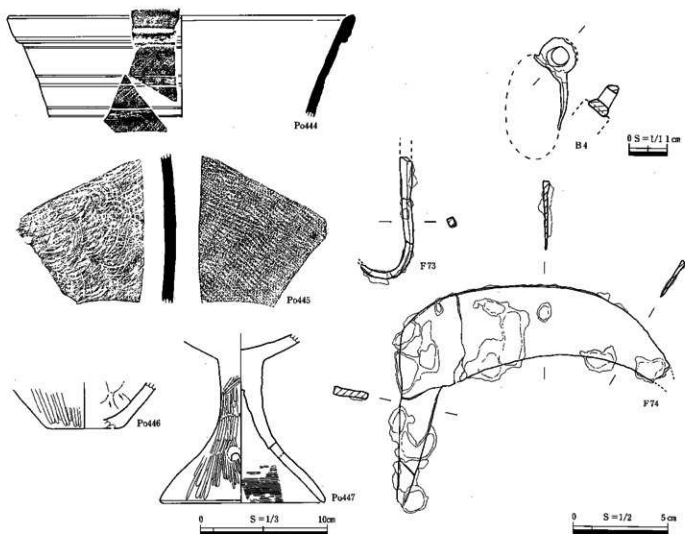
この古墳に伴う遺物はほとんどなく、わずかに玄室内から出土した足金具、墳丘周辺から出土している須恵器壺片が、この古墳に伴うものと考えられる。

足金具は、半分以上欠損しているが、卵形を呈し釣り手が頂点からずれるものである。足金具の釣り手の位置は、頂点からずれるものから頂点につくものへと変化していると考えられている⁹⁰ことから、やや古相を呈すものと考えられる。

なお、玄室内から出土したPo446、周溝内から出土したPo447は弥生時代後期のもので、周辺のS I 01・S I 03に伴うものと考えられる。また、釣り針、鎌については後世のものと考えられる。

時期 この古墳の時期は、周辺の須恵器から、古墳時代後期後半頃のものと考えられる。石室の形態・立地からも導入期の石室形態とは考えられず、この地域で普及した石室形態と考えられる。

また、切り合い関係ははっきりとはしないが、出土遺物を比べるかぎり、南側の倉見8号墳とはほぼ同時期のものと考えられる。



挿図157 倉見9号墳出土遺物実測図

第6章 考察

第1節 西桂見遺跡・桂見遺跡における集落構造

1994年～1995年の調査によって、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落跡がまとまって検出された。

西桂見遺跡では、標高15mの西側に延びる丘陵上（鷺谷口地区）で竪穴住居跡3棟、貯蔵穴と考えられる土坑1基、段状遺構1基、標高約30mの南北に延びる丘陵上～東斜面（鷺谷奥地区）で竪穴住居跡7棟、貯蔵穴と考えられる土坑3基、不明土坑1基、標高約20mの南東側に延びる丘陵上（堤谷地区）で竪穴住居跡7棟、杭列または柵列に区画された掘立柱建物跡1棟、貯蔵穴と考えられる土坑3基が検出されている。

また、西桂見遺跡堤谷地区の東側に接続する桂見遺跡堤谷東地区でも、竪穴住居跡5棟、布掘りの掘立柱建物跡1棟、土坑2基が検出されている（以下、遺跡名省略）。

1. 集落の変遷

これらの遺構の時期をさらに細かく見ると、岩吉編年Ⅲ（古）期～岩吉編年Ⅵ（古）期にかけてのものと考えられ、時期毎に集落様相の推移について考えてみたい。

〔岩吉Ⅲ（古）期〕

鷺谷口地区でS I 01、S S 01、鷺谷奥地区でS K 07、堤谷東地区でS I 02・03・04・05が密集している。堤谷東地区の竪穴住居跡は、非常に接近しておりそれぞれ別々の建物ではなく、同時期内の建て替えによるものと考えられるが、S I 02は隅丸方形、S I 03は五角形を呈しており、単なる建て替えではないことが考えられる。

〔岩吉Ⅲ（新）期〕

この時期、鷺谷奥地区ではS I 04・06・07・10、S K 04・06、堤谷地区ではS I 14がある。集落としては、この時期が最も大きくなる。竪穴住居の平面形は、隅丸方形、方形、楕円形とバラエティーに富む。規模は、全形がわかるS I 06が32㎡と大型で、この時期の中心住居であったと思われる。貯蔵穴は、屋外・屋内両方が見られる。

〔岩吉Ⅳ期〕

鷺谷口地区ではS I 02・03、S K 02、鷺谷奥地区ではS I 08、S K 03がある。前時期に比べて、集落の規模は小さくなっている。竪穴住居の平面形は、方形・楕円形が主流となる。貯蔵穴は、屋外のもののみである。

〔岩吉Ⅴ（古）期〕

堤谷地区ではS I 12、S K 22・24、堤谷東地区でS K 12がある。堤谷地区のS I 12は非常に大型の多角形住居跡で、少なくとも3回の建て替えが確認されている。また、屋外に延びる暗渠状の排水溝をもっている。また、確実な時期は不明であるが、この地区のS B 01も同時期のものと考えられる。S K 22・24は屋外貯蔵穴で、このうちS K 24はS I 12に近接しており、S K 23と合わせて個人所有のものと考えられる。

〔岩吉Ⅴ（新）期〕

鷺谷奥地区ではS I 05・09、堤谷地区でS I 11・13、堤谷東地区でS S 01、S K 15がある。堤谷地区のS I 11は、大型の隅丸方形を呈すもので、屋外に延びる排水溝を備えている。鷺谷奥地区のS I 09の周囲には、いわゆる外周溝であるS D 15が巡っている。

〔岩吉Ⅵ（古）期〕

堤谷地区でS I 15、堤谷東地区でS B 01がある。竪穴住居と掘立柱建物跡は、やや離れて建てられているが、この時期は、高い位置に竪穴住居があり（S I 15）、岩吉Ⅴ（古）期とは逆の位置関係にある。

いずれの時期も、各地区毎に住居跡1～4棟という小さな単位で、散在した状態で住居が見られる。また、同時期の遺構のセット関係をみると、各地区とも竪穴住居と袋状土坑がだいたいセットで見られ、それぞれの地区で独立した集落経営が行われていたものと考えられる。

掘立柱建物跡は堤谷地区、堤谷東地区のみに検出され、その時期は岩吉Ⅴ期（古）以降と考えられる。岩吉Ⅵ

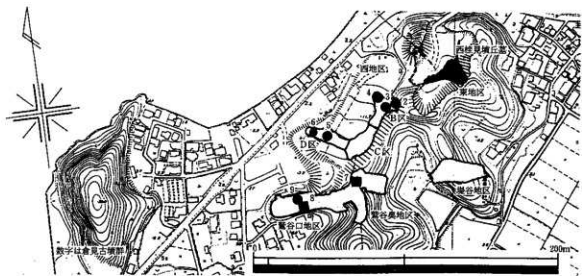


插图158 西柱兒遺跡調查區位置圖



插图159 西柱兒遺跡·桂兒遺跡遺跡全佈圖

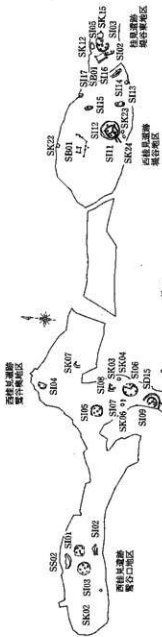


插图159 西柱兒遺跡·桂兒遺跡遺跡全佈圖

期(古)段階では、堤谷地区で、貯蔵穴と掘立柱建物と同時に併存し、かつ、非常に大型の多角形住居(S I 12)を中心とする居住区と掘立柱建物跡がある地区は、杭列または柵列によって区画されている。区画された地区は貯蔵区と考えられ、集落内の機能的分化が明瞭である。特に、S I 12の周囲には、屋外貯蔵穴S K 23・24が隣接し、生産物の所有を独占的に行っていたものと考えられ、S I 12が首長居館である可能性もある。

堤谷東地区の掘立柱建物跡は、岩吉VI期(古)段階のもので、この時期には、堤谷地区のS I 15がある。堤谷東地区S B 01は、布掘りを呈すもので、西桂見遺跡のものとは構造が異なる。

2. 集落の性格

西桂見遺跡の集落は、標高15~30mの狭い丘陵上に立地していることが特徴である。特に、鷲谷奥地区に展開する集落は広義の“高地性集落”と呼んでもよい立地である。しかし、武器類は出土しておらず、瀬戸内海沿岸部の高地性集落とは異なる性格であったといえる。この時期の鳥取県内の遺跡を見ても、現在のところ、いわゆる高地性集落と呼べるものは確認されていない。

遺物の面から考えると、鷲谷口地区・鷲谷奥地区のほとんどの住居跡から製品とは考えられない鉄片が出土していることが特徴である。このうち、S I 09の外周溝である¹⁰⁷⁾S D 15内からは、鉄錆が付着している砥石とともに鉄片も出土している。また、S I 07からは、炭化物が付着している鉄片も出土している。

フイゴ羽口等の鍛冶遺物は検出されなかったが、これらの鉄片は小鍛冶の際に出たものと考えられ¹⁰⁸⁾、この地区の各住居毎で、鉄器の制作が行われていた可能性がある。

また、その他の遺物としては、漁撈具と考えられる石鍾が、S I 03・10でわずかに見られる程度で、積極的な漁撈の痕跡は認められない。

3. 他地域との関係

遺構の構造から見ると、岩吉V期のS I 09の外周溝、S I 11・12の屋外に延び出す排水溝は、ともに、岡山県地方に広く認められるものであり¹⁰⁹⁾、弥生時代終末~古墳時代前期にかけて彼地との関係が十分に窺われる。しかし、この交渉が地域全体にわたるものか、集団間のみのものであるのかは、今後の資料の増加を待ちたい。

4. 墳墓との関係

弥生時代後期の西桂見遺跡では、これまでに四隅突出型墳丘墓(以下、西桂見墳丘墓)をはじめ土墳墓群が、丘陵の先端部に調査されている。

西桂見墳丘墓は、大半が掘削されていたが、遺存する部分から、突出部を含めた規模が一辺64~65m、高さ5mと考えられており、四隅突出型墳丘墓としては最大規模を誇るものである。墳裾には、立石をもつ貼石が巡らされ、墳頂部には複数の埋葬施設が掘り込まれていたものと推察されている。出土遺物から岩吉III(新)期並行と考えられている。

土墳墓群は、西桂見墳丘墓から南西に約120m離れたC地区、さらにC地区から西方に延びる丘陵上に(D地区)の2か所に作られている。C地区のものは、尾根に直交する溝を掘り、その両側に6基(C 1群)、7基(C 2群)の土墳墓が切り合いながら存在する。時期は出土遺物がほとんどなく確実な時期は不明であると考え、調査者は弥生時代後期~古墳時代前期にかけてのものと考えているが、S K 119出土のものは岩吉III(新)~IV期にかけてのものであり、ほぼ墳丘墓と同時期が後続するもので、ほぼ弥生時代後期の範疇で納まるものと考えてよいと思われる。

今回報告した集落との位置関係を見ると、丘陵先端部に最有力首長墓である西桂見墳丘墓が築かれ、やや離れた土墳墓群が、さらに南側に集落が作られていることになる。

墳墓群とほぼ同時期と考えられる集落で、最も有力と考えられるS I 06の床面積が約32m²と、それほど卓越した規模をもたないこと、付属施設も貧弱であること、また集落自体の規模も大きくないことから、墳丘墓との直接的な関係は窺われない。しかし、遺構外ではあるが、小型特殊壺形土器が検出されており、特に鷲谷奥地区の集落が、土墳墓群を含めた“墓域”と何らかの関係をもっていたものと推察され、西桂見墳丘墓の被葬者を支える集団成員の集落と考えてよいであろう。

第2節 湖山池周辺の横穴式石室について

因幡地域の横穴式石室については、比較的密集している鳥取市～岩美町にかけての千代川以東の因幡東部地域について検討されており、盛行期の石室形態は、玄室天井部中央が一段高くなる特徴をもつものが多く、この特徴から「中高式天井石室」と呼ばれている⁽⁴⁶⁾。因幡西部に目を向けると、青谷町・気高町周辺では、各壁に大型の一枚石を用いる石室形態が知られており⁽⁴⁷⁾、小地域毎で異なる石室形態が採用されていることに気づく。

さて、湖山池周辺の横穴式石室は、現在確認されているものは、倉見9号墳の他、石場山5号墳、高住12号墳、葦岡長者古墳(吉岡1号墳)のみと極端に少ない上、千代川右岸域とは異なる石室形態が見られる。

1. 湖山池周辺の横穴式石室の概要

倉見9号墳は、現在確認されているかぎりでは9基からなる倉見古墳群に属する。1～7号墳は標高約30mの高い尾根上にあるが、8・9号墳は、標高約15mの低い西側に延びる丘陵上にあり、異なる立地条件にある。さらに、高い尾根上のもは前期古墳であるが、低い尾根上のもは後期古墳と時期・性格も異なる。

さて、倉見9号墳の横穴式石室は、全長4.1m、玄室長2.3m、幅1.3m、羨道長1.8m、幅0.85mを測る。玄室比は、1.8と狭長な長方形を呈す。右片袖式である。玄室は、各壁ともに腰石上に割り石をほぼ垂直に、横目地が通るように積みあげている。天井の形態は不明である。遺物には、玄室内から鍍金を施した裝飾大刀足金具、釣針、周辺から須恵器片が出土している。およそ6世紀後半頃のものと考えてよいであろう。

石場山5号墳は、5基からなる石場山古墳群中にある。羨道部は埋没し、天井部を欠いている。玄室長1.6m以上、幅1.5mを測る。玄門部が埋没しているため玄室全体の形態は不明であるが、長方形プランであろう。石室主軸に沿って長さ約1.5m、幅0.7mを測る箱式石棺が内包されている。出土遺物は知られていない。

高住12号墳は、12基からなる高住古墳群中にあるが、12号墳周辺には古墳は知られておらず、単独で存在するものであり、他の古墳とは支群を異にしている。墳丘は大半が流失しており、石室が露出している。石室は、玄室内に流土が堆積しており、詳細は不明であるが、玄室長4.2m以上、幅2.1m、現在高2.1mを測る。玄室比は2.0以上で長方形を呈す。壁体構成は、基礎石上に割り石をやや持ち送りながら塊石積みするもので、目地が通っていない。天井は、玄門部に向かって階段状に傾斜する平天井をもつ。この地域では唯一天井形態がわかるものである。玄門形態は、流入土のため不明である。出土遺物は知られていない。

葦岡長者古墳(吉岡1号墳)は、15基からなる吉岡古墳群中にあり、1983年に調査が行われている。墳丘は径約14mと推定されている。石室は、玄室長3.34m、幅2.31m、現存高1.83mを測る。玄室比は1.4と幅広の長方形を呈す。平面形は、左袖部は失われているが、両袖式に、幅0.67m、長さ2.21mを測る狭長な羨道が接続するものであったと考えられている。壁体は、腰石上に割り石をほぼ垂直に積み重ねるもので、横目地が通っている。玄室内には、奥壁に向かって右側に板石を組み合わせた箱式石棺が安置されているが、原位置を保つものかどうかは不明である。出土遺物は、須恵器蓋杯、高杯、台付壺、横瓶、大型甕、鉄刀、刀子、鉄鏃、飾金具、筭(?)、釣針など豊富に出土している。これらの出土遺物のうち最も遅い須恵器類はTK10の新相並行と考えられ、6世紀中葉頃に築造されたものと考えられる。

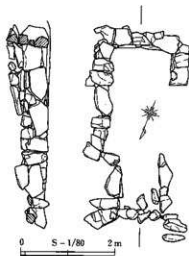
2. 形態的特徴

これらの石室を見ると、形態的には、石室平面形は片袖、両袖の両形式が認められるが、玄室の平面形態は長方形が基本となっていることが共通している。壁体構成についても、腰石上に割り石、塊石をほぼ垂直に積み上げる手法は共通しているものといえる。また、唯一天井形態が判明する高住12号墳は、玄門部に向かって傾斜する平天井形態で、千代川右岸域の中高式天井とは異なる形態を示している。玄門部の形態は、立石を立てるものではなく、羨道幅と同じ袖部が構成される。また、石場山5号墳、葦岡長者古墳に見られるように玄室内に主軸に平行する箱式石棺を安置するものがこの地域の特徴である。

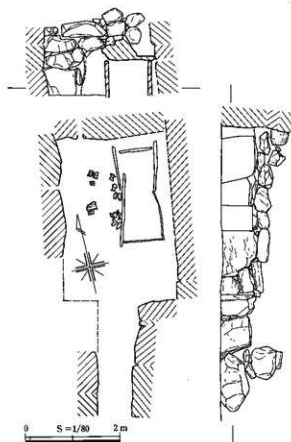
さて、湖山池からはやや離れるが、山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は、13基からなる古海古墳群中にあり、一辺約

11~13mの方墳と考えられている。墳丘上半部は完全に失われており、石室が露出している。石室は、全長5.1m、玄室長2.0m、幅1.08m、高さ0.71~0.94m、羨道長3.1m、幅1.4~1.5mを測り、凝灰岩を割り抜いた形態のものである。玄室は、1枚の床石の上に巨石を割り抜いて天井部・壁からなる部分を乗せるものである。床石には蓋石を受けるための割り込みが施されている。平面形は右袖部をもつ片袖式で、羨道部にあたる部分は、大型の一枚石を3枚組み合わせている。出土遺物は、開口が古く全く知られていない。このため、この古墳の時期は不明であるが、形態的には大阪府石の宝殿古墳、奈良県鬼の廻・駒古墳など、7世紀中頃と推定される畿内の横口式石塚と類似しており、同時期と考えられる。

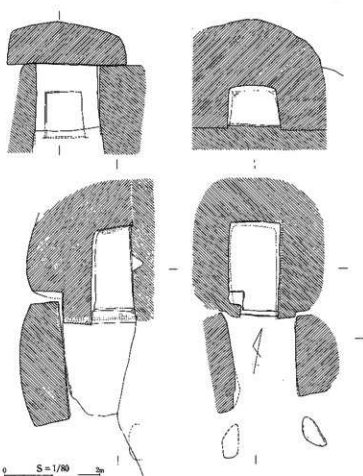
おおむね、因幡地方の横穴式石室は、畿内的な様相が強く、長方形のプランが主流で、岩美町小田川流域の高野坂2号墳・高野坂9号墳・高野坂10号墳など、および袋川中流域の神垣8号墳・新井2号墳・橋本38号墳では石室内に家形石棺を内包するものがある⁽⁴⁾ほか、箱式石棺を内包するものがあり、埋葬形態に上下関係が認められる。湖山池周辺の横穴式石室は、家形石棺を内包する首長層に比べて下位の存在であることが考えられる。しかし、その中で山ヶ鼻古墳は後に高草郡の中心地にあり、より先端的に畿内との関係をもって出現したものと考えられる。



挿図161 倉見9号墳石室実測図



挿図162 葦岡長者古墳(吉岡1号墳)石室実測図
(註28より再トレース。一部変更。)



挿図163 山ヶ鼻古墳(古海13号墳)石室実測図
(註29より。一部変更。)

第3節 西桂見遺跡の土塁状遺構について

西桂見遺跡では、鷲谷奥地区A区尾根筋に長さ45m以上、幅10m、盛土の厚さ最大1.7mを測る土塁状遺構が検出された。この遺構は、現在確認できる範囲では、途中、県立鳥取少年自然の家の建築物によって削り取られているが、南側へ延びているようである。また、東側へ分岐する部分も確認され、かなり大規模な遺構である。

確かな時期については不明であるが、遺構の切り合い関係から判断すると、平安時代頃と考えられるSD11が完全に埋ってから築かれていることから、平安時代以降のものといえる。また、表土中から備前V期の播鉢、倉見7号墳周溝埋土から、16世紀頃と思われる土師質土器が出土しており、この時期に近いものとも考えられる。

さて、この遺構の特徴を挙げると、①立地は狭い尾根上に作られていること、②全て盛土によって築造され、断面台形状を呈すが、西側は緩やかで、東側は急になり、平坦面になっていること、③頂部平坦面は尾根中心より西側にあること、④調査区中央部で二段状に分かれる部分があること、⑤盛土の中心部は岩盤破砕砂層と暗灰褐色砂質土層と明黄褐色土が互層状に非常に固く突き固められ、柱状に見られる。この層の断面は、ジグザグになっており、盛土を行う際に中心部のみを突き固めていったものと考えられること、⑥盛土下には、盛土に先立って溝が掘り込まれていること、⑦丘陵支脈にも築かれていることがあげられる。

県内の中・近世の土塁状遺構の発掘例は限られており、わずかに、鳥取市・太閤ケ平⁽⁴⁵⁾、ヒル山砦跡⁽⁴⁶⁾、庵ノ城砦跡⁽⁴⁵⁾、古屋敷砦跡⁽⁴⁵⁾、中尾土塁⁽⁴⁵⁾、羽合町・馬ノ山遺跡⁽⁴⁶⁾、乳母ケ谷第2遺跡⁽⁴⁷⁾、長瀬高浜遺跡⁽⁴⁸⁾がある。

これらの土塁状遺構の特徴について見ると、立地的には、低地にある長瀬高浜遺跡を除いて、そのすべてが丘陵の頂部に築かれている。

また、形態的には、太閤ケ平、ヒル山砦跡、庵ノ城砦跡、古屋敷砦跡、馬ノ山遺跡、長瀬高浜遺跡が郭の周囲に土塁を巡らすもので、中尾土塁、乳母ケ谷第2遺跡のものは丘陵に沿って築かれるものであり、大きく2通りの形態が認められる。

このうち、尾根頂部に沿って築かれる、中尾土塁・乳母ケ谷第2遺跡のものが西桂見遺跡のものと形態的に類似している。中尾土塁は尾根頂部を平坦面にし、その北側縁辺部に盛土による土塁が築かれている。乳母ケ谷第2遺跡のものは立地・形態とも非常に類似し、土塁が築かれる前に溝が掘り込まれていることも共通しているが、盛土の仕方が西桂見遺跡のものほど丁寧ではなく、雑な作りである。

明らかに用途が判明しているものとして、太閤ケ平、ヒル山砦跡、庵ノ城砦跡、古屋敷砦跡がある。これらは羽柴秀吉による鳥取城攻囲網の一部の陣跡に伴うもので、郭の周囲を取り囲むように土塁が巡っている。ヒル山山頂部は高野駿府守、南裾の台地は垣屋國政守が陣を張ったものといわれ、庵ノ城砦・古屋敷砦は垣屋播磨守が陣を張った場所であるといわれている。また、馬ノ山遺跡のものは羽柴秀吉と吉川元春が対峙した際に、吉川方が作ったものと考えられており、全形は不明であるが、郭の周囲に土塁が築かれているものと考えられている。

このようにして見ると、中世末期の戦略的意味合いをもつ土塁状遺構は、必ずといってよいほど郭に付属するもので、郭の周囲を巡る特徴がある。尾根上に単独で見られる土塁状遺構とは異なる構造であることが特徴である。

さて、尾根上の土塁状遺構の性格を考える時に、まず考えられることが、この土塁状遺構を境にして字名が変わることである。西桂見遺跡の場合は東は字堤谷、西は字鷲谷奥、乳母ケ谷第2遺跡では東は字馬尾、西は字乳母ケ谷と変わっている。現在の地名がどの時代からそう呼ばれていたのかは不明であるが、地境の目的で築かれたものとするにはあまりにも丁寧過ぎるものといえる。

さて、県外に目を向けると、岡山県・みそのお遺跡⁽⁴⁹⁾で土塁状遺構が調査されている。立地的特徴、形態的特徴、盛土の特徴も西桂見遺跡のものと非常に類似している。みそのお遺跡の土塁状遺構の性格を、調査者は古道と考えており、今後土塁の性格を考える上で参考にならう。

第4節 中世墓について

湖山池周辺は、布勢鶴指奥墳墓群・桂見墳墓群など、中世墓の調査が進んでいる地域である。また、「天神山城絵図」には、葬地として「弦サシ屋舖」「テヌケカハナ」の地名が残っており、中世の墓制を考える上で恰好の地域である。今回の西桂見遺跡の調査においても、15基の中世墓が検出され、さらに、周辺には多くの中世墓の存在が考えられる。

今回調査した中世墓のうち、SK11・14・16が周囲に溝をもつものである。確実に墳丘をもつものは確認できなかったが、SK16が1辺約4mの方形の墳丘をもつ可能性がある。これらは、いずれも墓壇から釘が検出されており、木棺墓と考えられる。このうち、SK14は他のものとは異なり、平面円形を呈すもので、座棺であった可能性がある。墳丘・周溝をもつものは他のものに比べて階層的に上位のものと考えられており、SK16の被葬者は上位階層のものと考えられるが、副葬品は少なく、漆被膜が検出されているに過ぎない。まして、他のものに見られる冥土銭の出土もない。他の墳丘・周溝をもつ墳墓の副葬品について見ると、徳尾遺跡群の中世墓のように大量の冥土銭以外は、傑出した副葬品の例はない。階層差は、墳丘や石塔などの外表施設、徳尾中世墓⁽⁹⁾のような墓室の有無であったものといえる。

上記以外のものは、墓壇のみのものである。なお、SK15の周辺にも溝が検出されているが、上記のもののようにしっかりとしたものではない。これらには、土葬墓(SK18・20・21・25)、火葬墓(SK01・09・10・12・15・17・19)の両方が認められる。土葬墓のうち、SK21のみに鉄釘が認められ、木棺墓と考えられる。木棺墓は墓壇の形態から、箱形に組まれたものと、円形のものと同時に存在していたと思われる。その他のものは、釘等が検出されていないため、直接遺体を埋葬した可能性がある。火葬墓のうち、SK01・SK10・SK17は、墓壇底面に焼土面があり、墓壇内で遺体を焼いた茶昆墓と考えられる。その他のものは、炭化物・熱変した古銭が検出されているが、焼土面は検出されておらず、他所で茶昆に付したものを埋葬したのと考えられる。

また、規模の面においては、土葬墓には長軸0.8m~1.38mと大小が認められ、成人と子供の両方が土葬で埋葬されたといえる。火葬墓は1m程度、茶昆墓も長方形で長軸1m、深さは非常に浅いものである。茶昆墓は、熱効率を高めるために浅く掘り込まれたものと考えられている。

なお、堤谷地区の中世墓は密集形態で検出されているが、鷲谷口地区の茶昆墓であるSK01は、単独で検出されており、特異なものである。

さて、この地域の中世墓を見ると、さまざまな形態のものが認められ、中世墓の形態には、(A) 墳丘・周溝をもつもの、(B) 周溝を伴うもの、(C) 墓壇のみのもので確認されている。

さらに、埋葬の形態を見ると (a) 土葬墓、(b) 火葬墓、(c) 蔵骨器を埋置するもの3種類が認められるが、土葬墓には①木棺墓、②直葬墓に分かれ、火葬墓には、③他所で茶昆に付した火葬骨を埋葬するもの、④浅い墓壇を掘りそこで茶昆に付したもの(茶昆墓)⁽¹⁰⁾のそれぞれ2種類に分かれる。

さらに、茶昆墓にも、①表掘りの土壇で茶昆に付すもの、②土壇底部に石を敷きつめ茶昆に付すもの、③底部と側面を平石で囲い、その中で茶昆に付すもの3種類が知られている。⁽¹¹⁾

これらの時期について考えると、土師質土器は京都系の皿をもっていること、副葬された古銭のうち、最も新しい時期を示すものが、初跡年1408年の永楽通寶であることから、15世紀以後のものと考えられる。また、西桂見遺跡の火葬墓出土の炭化物の¹⁴C年代測定値が、B.P.280±40~B.P.540±30、およそ15世紀初頭~17世紀中頃と幅がある値を示した。しかし、遺構に切り合い関係が見られないことから、造営時期は測定値が示すほど長期ではなく、短期間であったものと思われ、ほぼ15世紀~16世紀のものと考えることができよう。

以上簡単に西桂見遺跡の中世墓について触れてみたが、今後、葬法の違いが何を示すものか、また、時期を設定するに当たっては、土師質土器の編年の確立と共に、¹⁴C年代測定など自然科学分野との応用で、より確かな時期決定を行う必要があり、今後の課題としたい。

遺跡名	遺跡番号	規模 長軸×短軸-厚さ cm	平面形	断面形	異軸方向	出土遺物		備考	埋没状況
						古銭	その他		
西性見遺跡Ⅰ(埋没)	S K 01	110×93-38	長方形	逆台形	N-27°-W		土師質土器Ⅰ・鉄釘・人骨片・炭化物	焼土面	奈良基
西性見遺跡Ⅱ(埋没)	S K 02	120×101-44	楕円長方形	凹凸壁し	N-42°-E	融解した銅鏡	炭化物		火葬基
西性見遺跡Ⅲ(埋没)	S K 10	131×69-17	長方形	逆台形	N-8°-E	高卑元寶1他7(不明)	土師質土器Ⅰ・鉄釘・人骨片・炭化物	焼土面	奈良基
西性見遺跡Ⅳ(埋没)	S K 11	121×63-73	長方形	逆台形	N-8°-W	開元通寶1淳化元寶1 新乾元寶1天祐通寶1 会昌通寶1高宗元寶1 元豊通寶1応和通寶1 永泰通寶1不明2	土師質土器Ⅰ・鉄釘	周溝を巡らす。	土葬基
西性見遺跡Ⅴ(埋没)	S K 12	124×83-22	不揃な長方形	逆台形	N-1°-E	咸平元寶1祥符元寶1 皇祐通寶1大徳通寶1 永泰通寶1不明1	鉄釘・炭化物		火葬基
西性見遺跡Ⅵ(埋没)	S K 13	140×66-18	長方形?	逆台形	-	-	-	-	不明
西性見遺跡Ⅶ(埋没)	S K 14	119×117-150	長方形	長方形	-	皇祐通寶1他2高宗元寶1不明2	鉄釘・人骨	北半男性・周溝を巡らす。	土葬基
西性見遺跡Ⅷ(埋没)	S K 15	108×77-24	不揃な長方形	凹凸壁し	N-17°-W	-	鉄釘・炭化物	周溝に溝を巡らす。	火葬基
西性見遺跡Ⅸ(埋没)	S K 16	131×89-108	楕円長方形	逆台形	N-42°-E	-	鉄釘・香灰類	一辺約4mの周溝を巡らす。	土葬基
西性見遺跡Ⅹ(埋没)	S K 17	97×71-18	長方形	逆台形	N-33°-E	古銭	鉄釘・人骨片・炭化物	小房骨・焼土面	奈良基
西性見遺跡Ⅺ(埋没)	S K 18	163×80-63	楕円長方形	逆台形	N-76°-E	-	-	-	土葬基
西性見遺跡Ⅻ(埋没)	S K 19	110×77-24	長方形	凹凸壁し	N-1°-E	-	-	-	火葬基
西性見遺跡Ⅼ(埋没)	S K 20	138×95-79	楕円長方形	逆台形	N-4°-E	開元通寶1祥符元寶2 天祐元寶1高宗元寶2 元豊通寶1聖宋元寶1 永泰通寶1不明2	土師質土器Ⅰ		土葬基
西性見遺跡Ⅽ(埋没)	S K 21	81×60-69	長方形	逆台形	N-17°-E	-	土師質土器Ⅰ・鉄釘		土葬基
西性見遺跡Ⅾ(埋没)	S K 22	200×126-85	不揃な楕円形	逆台形	N-44°-E	-	土師質土器Ⅰ・短刀・磁石	埋土中に多数の角礫	土葬基
西性見遺跡ⅰ	S K 04	110×90-41.5	長方形	逆台形 縦壁凹凸	N-30°-E	-	鉄釘・香灰類・人骨片・炭化物	焼土面・上面に基石	奈良基
西性見遺跡ⅱ	S K 06	150×98.5-56	楕円長方形	逆台形 小門扉に障	N-31°-E	天祐通寶1皇祐通寶1 聖宋元寶1永泰通寶3	骨片・歯		土葬基
西性見遺跡ⅲ	S K 07	24×66-(20)	楕円形	逆台形	-	-	-	周溝に石1個。	不明
西性見遺跡ⅳ	S K 08	102×60-(19.3)	楕円長方形	逆台形	-	-	鉄釘・楕円磁片・炭化物	周溝に各3個の石。	奈良基
西性見遺跡ⅴ	S K 09	160×63-(52)	楕円形	逆台形 縦壁凹凸	-	-	-	-	不明
西性見遺跡ⅵ	S K 10	89×53-(23.7)	楕円形	逆台形	-	-	-	周溝に障して石1個。	不明
西性見遺跡ⅶ	S K 11	78×64-(16)	楕円形	逆台形	-	-	-	-	不明
西性見遺跡ⅷ (B-C地区)	S K 01	115×95-10	不揃門形	段し平底	N-34°-W	開元通寶1咸平元寶1 祥符元寶1高宗元寶1 元祐通寶1聖宋元寶1	-	人頭大角礫3個。	不明
西性見遺跡ⅸ (B-C地区)	S K 02	114×82-25	長方形	平底逆台形	N-23°-E	開元通寶1景祐元寶1 天祐元寶1皇祐通寶3 高宗元寶1高宗元寶3 元豊通寶1元徳通寶1	鉄釘・骨片・歯		土葬基
西性見遺跡ⅹ (B-C地区)	S K 03	-×95-13	楕円長方形	平底逆台形	-	-	-	-	土葬基
西性見遺跡ⅺ (B-C地区)	S K 04	102×85-50	長方形	平底楕円形	N-15°-E	-	鉄釘		土葬基
西性見遺跡ⅽ (B-C地区)	S K 05	190×67-25	楕円形	縦壁凹凸	-	-	-	-	土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 06	85×71-30	楕円形	不揃し字形	N-5°-E	開元通寶1皇祐通寶1 天祐元寶1皇祐通寶3 高宗元寶1永泰通寶2	-	-	土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 07	85×70-55	楕円形	平底逆台形	N-32°-E	-	-	-	土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 08	107×77-79	楕円長方形	平底	N 24° E	-	-	中位で若干平らむ。	土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 09	120×89-56	楕円長方形	平底逆台形	N-22°-E	-	土師質土器Ⅰ・人骨片		土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 10	125×89-28	楕円長方形	平底不揃逆台形	N 41° E	-	鉄釘・土師質土器Ⅰ・人骨片		奈良基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 11	118×100-108	楕円形	U字形	N 25° E	皇祐通寶1景祐元寶1 天祐元寶1皇祐通寶3 元祐通寶3不明2	越前産大鏡	一辺約3.5mの方形周溝・埋没用板石?	雙基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 12	110×73-21	長方形	平底逆台形	N-25°-E	融解した銅鏡	鉄釘・人骨片・炭化物・土師質土器Ⅰ・五輪骨(火輪)	一辺約3.5mの方形周溝。	奈良基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 13	110×79-9	楕円形	平底逆台形	N-37°-E	-	-	-	土葬基
西性見遺跡ⅿ (B-C地区)	S K 14	197×165-18	楕円形	傾斜逆台形	N-52°-W	-	-	-	土葬基

挿表12 中世墓一覽表(1)

遺跡名	遺構名	規模 長×短×高さ cm	平面形	断面形	異動方向	出土遺物		備考	埋没法
						古 銭	その他		
西谷見遺跡II (B・C地区)	S K15	113×98-37	長方形	傾斜低じり形	N 41° E		備前焼大甕	土器片	土器片
西谷見遺跡II (B・C地区)	S K16	124×96-81	長方形	平底筒形	N 32° E				土器片
西谷見遺跡II (B・C地区)	S K17	— × — 41	隅丸長方形	平底台形	N 42° E				土器片
池見遺跡群	S K101	120×91-6	不整形隅丸方形	底伏台形	N-45° E		鉄釘・人骨片・炭化物		奈良基
池見遺跡群	S K102	166×90-25	不整形方形	底台形	N 43° E		基米遺物1 天冠遺物1 天冠光背1	人骨片・炭化物	植床
池見遺跡群	S K103	98×73-66	不整形方形	底台形	N-53° E		基米遺物1 基米遺物2 陶土遺物1 不明2		土器片
池見遺跡群	S K104	114×(80)-8	不整形隅丸方形	底伏台形	N-42° E		炭化物		奈良基
池見遺跡群	S K105	139×132-37	不整形隅形	底台形	N-53° E		土師質土器片	床面にビット状遺構	土器片
池見遺跡群	S K106	131×122-75	不整形隅形	底台形	N-4° E		天冠遺物1 銅製土器3 元祐遺物1 天冠遺物1 威平光背1 天冠光背2 基米遺物3 陶土遺物1 不明1	鉄釘	埋床厚さ約2cm
池見遺跡群	S K201	97×72-36	隅丸方形	底台形	N-63° E		不明1	鉄釘・人骨片・炭化物・石やぐ・土師質土器片・鉄釘・土金状銅製品・人骨片・炭化物	埋床3.5mの盛土
池見遺跡群	S K202	120×73-16	不整形隅丸方形	底台形	N-45° E		不明13	土師質土器片・鉄釘・土金状銅製品・人骨片・炭化物	3.5×3.1mの盛土・埋内に溝石
池見遺跡群	S K203	125×93-23	方形	底台形	N-44° E			人骨片・炭化物	3.5×3.4mの盛土・埋内に敷石
池見遺跡群	S K204	126×82-24	不整形隅丸方形	底台形	N-44° E		不明以上	定置印(漆)・人骨片・炭化物	3.1×2.6mの盛土
池見遺跡群	S K205	124×97-9	不整形隅丸方形	底台形	N-39° E		基米遺物1 天冠遺物1 不明1	土師質土器片	土器片
池見遺跡群	S K206	140×100-60	不整形隅丸方形	底台形	N-42° E		陶土遺物1 不明6	鉄釘・人骨片・漆	3.8×3.6mの盛土
池見遺跡群	S K207	181×104-8	長方形	底伏台形	N 46° E				土器片
池見遺跡群	S K208	272×137-17	不整形隅丸方形	底台形	N-65° E			土器片	土器片
池見遺跡群	S K209	163×128-51	隅丸方形	底台形	N 30° E				土器片
池見遺跡群	S K210	169×96-112	不整形隅丸方形	底台形	N-41° E			人骨(30代女性)・漆 製土器片	土器片
池見遺跡群	S K211	69×30-13	不整形隅形	底伏	N-52° E		天冠光背1		角筒1個
池見遺跡群	S K212	95×75-37	隅丸方形	底台形	N 73° E		銅製土器片	炭化物	角筒1個
池見遺跡群	S K301	152×95-28	不整形隅丸方形	底台形	N-68° E			炭化物	角筒3個
池見遺跡群	S K302	149×103-43	不整形隅丸方形	底台形	N 68° E				土器片
池見遺跡群	中庭基	119×70-50	長方形	底台形	N-7° E		陶土遺物5 土師質土器1 平田土器2 押付土器9 天冠光背3 基米遺物2 基米遺物16 漆遺物2 鉄平光背3 漆遺物2 天冠遺物8 天冠遺物3 銅製土器4 漆遺物1 底和遺物2 天冠遺物1 漆遺物1 漆遺物2 不明2	鉄釘	角ノ字墓石(5.8×4.3, 高さ1.6m), 1×1間隙物
池見遺跡群	土溝1	250×70-40	不整形長方形	底台形	N 10° W				土器片?
池見遺跡群	土溝2	100×100-60	方形	底台形	N-10° W				土器片
池見遺跡群	土溝3	130×100-60	長方形	底台形	N 69° W				土器片
池見遺跡群	第1号墓石	92×63-35	隅丸長方形	底台形	N-17° W			土師質土器片	角筒
池見遺跡群	第2号墓石	126×93-45	隅丸長方形	底伏状	N 11° W				角筒
池見遺跡群	第3号墓石	160×74-30	隅丸形	底伏状	N-6° E				角筒
三浦遺跡	第1号墓	112×71-30	隅丸長方形	底台形	N 8° W		陶土遺物1 天冠遺物1 基米遺物1 天冠遺物1 不明3	刀子	
三浦遺跡	第2号墓	186×72-14	隅丸長方形	U字形平座	N-12° W				
三浦遺跡	第3号墓	152×118-35	長方形	底台形	N-29° W				
大船院遺跡	1号基	112×78-55	長方形	底台形	N-20° E			鉄釘・土師質土器片・人骨	社午骨・礎土函・方形周溝(0.8×3.3m)
大船院遺跡	2号基	106×79-88	長方形	略方形	N-16° E		基米遺物2 漆遺物1 威平光背1 天冠遺物3 元祐遺物1 漆遺物2 不明1	鉄釘・土師質土器片・人骨片	成人骨・U字形周溝(-2辺約4.5m)
大船院遺跡	3号基	78×47-76	長方形	略方形	N-68° E			土師質土器片	土器片
大船院遺跡	4号基	101×72-82	不整形長方形	底台形	N-23° E		押付土器1 漆遺物1 元祐遺物1 天冠遺物1 底和遺物1 漆遺物1	土師質土器片・竹筒・漆	女性?
大船院遺跡	5号基	66×61-56	隅丸方形	底台形	N-67° W			土師質土器片・白磁	土器片
大船院遺跡	6号基	160×81-115	隅丸方形	長方形	N-17° E			夾矸製青磁片・銅製金具・刀子・人骨片	社午男性?

挿表13 中世墓一覧表(2)

遺跡名	遺跡ID	規模 長軸×短軸-埋込 cm	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物		備考	埋没法	
						古 銭	そ の 他			
布勢輪指染織墓群	S K01	不明	長方形?	不明	不明		人骨	壮年女性	土葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K02	102×70-20	長方形	逆台形	N-10°-E		土師質土器皿・人骨・炭化物	子供?	土葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K03	18×55-25	長方形	逆台形	N-18°-E		人骨・炭化物		土葬墓	
布勢輪指染織墓群	被埋	不明	不明	不明	不明		火葬器	葬前焼火葬	火葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K01	118×95-82	長方形	逆台形	N-15°-E		鉄釘・人骨	壮年女性	土葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K02	81×25 53	逆長方長方形	逆台形	N-27°-E		又歯遺骨 1 糸串遺骨 1 鹿角遺骨 1	人骨	壮年前期女性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K03	97×70-58	楕圓長方形	逆台形	N-8°-E		鉄釘		土葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K04	75×64-13	不整形	凹凸型 1/3	N-15°-E		漆塗元寶 1 天竺元寶 1 糸串遺骨 4 鹿角遺骨 1	土師質土器皿・銅製金具・人骨片	火葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K05	92×70-15	楕圓長方形	逆台形	N-10°-E		完全遺骨 2 糸串遺骨 1 鹿角元寶 1 不明 2	鉄釘・人骨	成人骨	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K06	112×91-67	不整形楕圓長方形	逆台形	N-15°-E		磨光元寶 1 天竺遺骨 1 糸串遺骨 1 鹿角元寶 1 元和遺骨 1 不明 1	土師質土器皿・鉄釘・人骨	幼少前期女性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K07	104×68-80	長方形	長方形	N-9°-E		天竺遺骨 1 天竺元寶 1 鹿角遺骨 1 鹿角元寶 1 元和遺骨 1	人骨	壮年前期女性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K08	92×7-23	楕圓長方形	逆台形	N-3°-E			土師質土器皿	成人	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K09	70×(45)-13	不整形	不整形	N 9°-E			炭土面	火葬墓	
布勢輪指染織墓群	S K10	110×85-50	楕圓長方形	逆台形	N-4°-E		磨光元寶 1 天竺元寶 1 糸串遺骨 1 鹿角遺骨 1 鹿角元寶 1 元和遺骨 1	土師質土器皿・鉄釘		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K11	118×73-58	楕圓長方形	長方形	N 8°-E		磨光元寶 1 元和遺骨 1 糸串遺骨 1 鹿角遺骨 1 元和遺骨 1	土師質土器皿・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K12	118×87-68	楕圓長方形	逆台形	N-9°-E			土師質土器皿		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K13	118×84-75	長方形	長方形	N-2°-E		磨光元寶 1 糸串遺骨 1 鹿角遺骨 1 鹿角元寶 1 元和遺骨 1	鉄釘・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K14	106×79-25	楕圓長方形	逆台形	N-12°-E		天竺遺骨 2 天竺元寶 1 伴符元寶 1 天竺遺骨 3 天竺元寶 1 鹿角遺骨 1 糸串遺骨 2 鹿角元寶 3 鹿角遺骨 1 元和遺骨 1	鉄釘・人骨	小児骨・土師質	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K15	116×102-19	不整形楕圓長方形	逆台形	N-100°-E		伴符元寶 1 元和遺骨 1 鉄釘元寶 1 不明 1	人骨・炭化物	成人女性?	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K16	122×80-25	楕圓長方形	逆台形	N-15°-E			鉄釘・人骨・炭化物	小児骨	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K17	108×75-33	楕圓長方形	逆台形	N-13°-E			鉄釘・人骨・炭化物	青年	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K18	94×67-20	不整形楕圓長方形	逆台形	N-15°-E		漆塗元寶 1 糸串遺骨 1	人骨	成人?	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K19	110×75-70	不整形長方形	逆台形	N-0°-E			鉄釘・人骨	成人女性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K20	94×77-80	不整形楕圓長方形	逆台形	N-0°-E			土師質土器耳環・漆製片・鉄釘		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K21	111×79-20	長方形	逆台形	N-15°-E			人骨	小児骨?	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K22	65×50-32	不整形四角形	不整形逆台形	N-70°-W					不明
布勢輪指染織墓群	S K23	120×86-85	不整形楕圓長方形	逆台形	N-15°-E		天竺遺骨 1 鹿角元寶 2 元和遺骨 1 供武遺骨 1 不明 1	鉄釘・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K24	100×80-38	不整形楕圓長方形	逆台形	N-14°-E					不明
布勢輪指染織墓群	S K25	96×81-58	不整形長方形	不整形逆台形	N-29°-E					不明
布勢輪指染織墓群	S K26	109×67-89	楕圓長方形	長方形	N 12°-E					土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K27	92×67-15	不整形楕圓長方形	不整形	N-18°-E		元和遺骨 1	土師質土器皿・人骨片	焼上	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K28	81×71-46	不整形楕圓長方形	逆台形	N-21°-E			五輪埴(地輪)		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K29	(135)×80-19	楕圓長方形	不整形	N-19°-E			土師質土器皿・人骨	焼土面・小児骨	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K30	90×65-8	楕圓長方形	不整形	N 10°-E			炭土面		火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K31	104×65-15	楕圓長方形	逆台形	N-22°-E		元和遺骨 1 鹿角遺骨 1 鹿角元寶 1 不明 2	人骨片	炭土面	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K32	106×73-84	楕圓長方形	逆台形	N-26°-W		元和遺骨 1 伴符元寶 1 天竺遺骨 1 元和遺骨 1 糸串遺骨 1 鹿角元寶 1	土師質土器皿・鉄釘・人骨	成人男性?	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K33	93×84-54	不整形楕圓長方形	逆台形	N-26°-E			人骨	女性?	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K34	107×75-50	楕圓長方形	逆台形	N-11°-E			人骨		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K35	108×81 55	不整形楕圓長方形	逆台形	N-17°-E			人骨	青年女性	土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K36	(126)×109-9	不整形楕圓長方形	不整形	N-4°-E			鉄釘	炭土面	火葬墓
布勢輪指染織墓群	S K37	120×76-38	楕圓長方形	不整形逆台形	N 9°-E			小刀		土葬墓
布勢輪指染織墓群	S K38	130×76-80	不整形楕圓長方形	逆台形	N-38°-E		元和遺骨 1 明透元寶 1 鹿角遺骨 1 元和遺骨 2 元和遺骨 1	人骨	熟年女性	土葬墓

挿表14 中世墓一覽表(3)

遺跡名	遺構名	規模 長×幅(延床) cm	平面形	断面形	異軸方向	出土遺物		備考	埋葬法
						古銭	その他		
志勢稲垣良塚墓群	S K39	117×90-84	不整形長方形	逆台形	N 12°-E	陶瓦遺物 1 意土遺物 2 漆器残片 1 漆器元器 1 意土遺物 4 元土遺物 2 灰砂遺物 1	銀針・人骨	青年女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K40	116×(90)-6	隅丸長方形	不整形	N 1°-E		土師質土器蓋・人骨	小児?・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K41	99×85-39	不整形長方形	逆台形	N 19°-E		人骨	壮年男性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K42	111×90-45	不整形	不整形	N 54°-E	得符元器 1 漆器元器 1	人骨	壮年女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K43	98×76-109	長條形	逆台形	K 8°-E		人骨	20歳前後女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K45	111×100-42	不整形長方形	不整形	N 7°-E				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K46	115×7-7	隅丸長方形	不整形	N 16°-W			熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K47	116×94-38	不整形隅丸長方形	不整形	N 3°-E				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K48	110×85-71	隅丸長方形	逆台形	N 2°-E		銀針・人骨	20歳前後女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K49	113×91-12	不整形隅丸長方形	不整形	N 100°-E				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K50	110×82-62	不整形隅丸長方形	逆台形	N 12°-E	意土遺物 1 陶器遺物 1 銅製元器 2 意土遺物 1 赤土遺物 1	銀針・人骨		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K51	121×72-94	長方形	逆台形	N 20°-E		人骨片		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K52	104×80-48	長方形	逆台形	N 14°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K53	84×(50)-45	隅丸長方形	逆台形	N 5°-E		土師質土器底		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K54	不明	不明	不明	不明			続けられた自然殉葬	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K55	120×85-47	隅丸長方形	逆台形	N 6°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K56	113×80-45	不整形長方形	不整形逆台形	N 13°-E		銀針	墓土中に自然殉葬	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K57	7×7-10	不明	不明	不明		銀針・人骨・炭化物	墓土内	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K58	106×88-11	隅丸長方形	逆台形	N 9°-E	陶瓦遺物? 1	銀針	墓土中に埋入した配石	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K59	113×78-15	隅丸長方形	不整形逆台形	N 4°-E		土師質土器底・銀針・人骨	小児骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K60	109×69-20	長方形	逆台形	N 14°-E		銀針・人骨	小児骨・熊土器・漆土器に配石	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K61	92×(90)-10	隅丸長方形	逆台形	N 15°-E	赤土遺物 1 不明 2	銀針・人骨	小児骨・熊土器・漆土器に配石・燻	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K62	100×(70)-19	隅丸長方形	不整形逆台形	N 2°-E		人骨	成人骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K63	118×68-22	不整形隅丸長方形	逆台形	N 20°-E	威平元器 1 得符元器 1 意土遺物 1 元土遺物 2 組聚元器 2	銀針・人骨・炭化物	成人骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K64	83×7-14	不明	逆台形	N 72°-W		人骨・炭化物	小児骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K65	68×50-7	不整形長方形	逆台形	N 25°-E	熊土元器 1 元土遺物 1 不明 1	銀針・人骨・炭化物	小児骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K66	100×71-51	不整形隅丸長方形	不整形	N 7°-E				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K67	65×82-17	隅丸長方形	逆台形	N 2°-E	威平元器 1	炭化物		火葬墓?
志勢稲垣良塚墓群	S K68	75×83-30	不整形長方形	逆台形	N 1°-E		土師質土器灰燼		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K69	85×50-28	長條形	逆台形	N 10°-E		人骨	小児骨・熊土器	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K70	97×7-15	隅丸長方形?	不整形逆台形	N 13°-E	元土遺物 1 得符遺物 1 不明 1	銀針・不明鉄製器具・人骨	成人骨・熊土器・漆土器に配石	火葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K71	95×75-44	小整形長方形	不整形	N 41°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K72	121×87-61	不整形隅丸長方形	逆台形	N 8°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K73	7×7-10	隅丸長方形?	逆台形	N 38°-W				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K74	160×90-40	不整形長方形	逆台形	N 16°-E		漆土遺物 1 漆器遺物 1 元土遺物 2 赤土遺物 1 不明 1	人骨	10代?
志勢稲垣良塚墓群	S K75	100×68-37	隅丸長方形	不整形逆台形	N 16°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K76	85×62-72	隅丸長方形	逆台形	N 6°-E				土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K77	94×68-64	隅丸長方形	長方形	N 70°-W		人骨	青年・壮年前期	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K78	72×60-37	不整形長方形	逆台形	N 70°-W				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K79	72×69-42	不整形長方形	逆台形	N 7°-E				不明
志勢稲垣良塚墓群	S K80	129×68-46	隅丸長方形	逆台形	N 22°-E		銀針		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K81	97×69-48	隅丸長方形	逆台形	N 20°-E		土師質土器底・銀針		土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K82	107×74-44	隅丸長方形	逆台形	N 13°-E		人骨	青年女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K84	87×55-61	長方形	長方形	N 8°-E		人骨	壮年男性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K85	100×74-38	長方形	逆台形	N 96°-E		銀針・人骨	成人女性	土葬墓
志勢稲垣良塚墓群	S K86	不明	不明	不明	不明	意土元器 1 意土遺物 2 元土遺物 1 組聚元器 1		S D11埋土中	土葬墓

挿表15 中世墓一覽表(4)

註・参考文献

1. 鳥取県教育委員会「西桂見遺跡」1981
2. 鳥取市教育委員会「西桂見遺跡II」1984
3. 新日本海新聞社「鳥取県大百科事典」1984
4. 鳥取市「新修鳥取市史」1984
5. 梅原未治「鳥取県に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史蹟勝地調査報告書』第1冊 1922
6. 鳥取県教育文化財団「布勢遺跡発掘調査報告書」1981
7. 鳥取県教育文化財団「東桂見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群」1992
8. 鳥取市教育委員会「桂見遺跡発掘調査報告書」1978
9. 鳥取市教育委員会「大勢遺跡I」1978
10. 鳥取県教育委員会「天神山遺跡発掘調査概報」1973
11. 鳥取県教育文化財団「湖山第2遺跡」1982
12. 鳥取市教育福祉振興会「山ヶ鼻遺跡」1995
13. 鳥取市教育委員会「岩吉遺跡発掘調査報告書」1976
14. 鳥取県「原始・古代」『鳥取県史』1 1972
15. 鳥取県埋蔵文化財センター「弥生時代の鳥取県」1985
16. 鳥取市教育委員会「帆城遺跡・天神山遺跡調査報告」1982
17. 鳥取市教育委員会「松原谷田遺跡・大路川遺跡発掘調査概報」1976
18. 鳥取県教育文化財団「湖山第1遺跡」
19. 鳥取市教育委員会「古海遺跡発掘調査概報」1981
20. 鳥取市教育委員会「秋里遺跡I」1976
21. 鳥取市教育委員会「桂見墳墓群」1984
22. 鳥取県埋蔵文化財センター「鳥取県の古墳」
23. 鳥取県教育委員会「鳥取県文化財調査報告書」第11集 1979
24. 鳥取大学「三浦古墳」1977
25. 野田久雄・清水真一「日本の古代遺跡・鳥取」保育社 1985
26. 鳥取県教育文化財団「里仁古墳群」1985
27. 鳥取市教育福祉振興会「桂見墳墓群II」1993
28. 明日の湖南を考える会「葦原長者古墳発掘調査報告書」1984
29. 出雲考古学研究会「石槌式石室の研究」1987
30. 鳥取県教育委員会「萬福寺発掘調査概報」1968
31. 鳥取県教育文化財団「大熊説遺跡」1985
32. 鳥取県教育文化財団「三浦遺跡」1982
33. 鳥取県教育委員会「天神山遺跡発掘調査概報」1973
34. 谷口恭子「土壘」『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会 1991
35. 田辺昭三「陶器古窯址群I」平安学園考古クラブ 1966
36. 田辺昭三「須恵窯大成」角川書店 1981
37. 新納泉「戊辰年鉦大刀と裝飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻3号 1987
38. 藤田憲司「単位集団の居住領域―集落研究の基礎作業として―」『考古学研究』第31巻第2号 考古学研究会 1984
39. 村上恭通「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻3号 考古学研究会 1994
40. 津山市小原遺跡・東葦坊遺跡・押入西遺跡、岡山市・天神坂遺跡などで検出されている。
41. 下高瑞哉「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」『島根考古学会誌』第6集 1989
42. 近藤晋雄「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第4集 1986
43. 牧本晋雄「鳥取県における家形石棺について」『古墳時代後期の棺一形状石棺を中心に―』第23回山陰考古学研究会集會資料 1995
44. 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城附太閤ヶ平保存管理計画策定報告書」1984
45. 鳥取県立博物館「久松山鳥取城」『鳥取県の自然と歴史』6 1984
46. 鳥取市教育委員会「ヒル山岩跡・熊田古墳発掘調査報告書」1980
47. 鳥取県教育文化財団「円籠寺遺跡群」1983
48. 羽合町「羽合史」前編 1967
49. 鳥取県教育文化財団「南谷ヒジリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・乳母ヶ谷第2遺跡・南谷19-23号墳・宇野3-9号墳」1991
50. 鳥取県教育文化財団「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」VI 1983
51. 岡山県教育委員会「みそのお遺跡」1993
52. 鳥取県教育委員会「徳尾遺跡群発掘調査報告書」1985
53. 鳥取県教育委員会「布勢鶴指奥墳墓群発掘調査報告書」1992
54. 倉吉市教育委員会「不入間遺跡群発掘調査概報」1995

むすびにかえて

西桂見遺跡の発掘調査は、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う発掘調査の一環として1993年から1995年にかけて行われた。この結果、湖山池周辺の弥生時代から古墳時代の集落、特に、弥生時代後期の日本最大の四隅突出型墳丘墓と同時期の集落が検出され、当時の集団関係を考える上で貴重な資料を提供できたとともに、まとまって中世墓が検出され、近年注目されてきた中世の生活様相を解明する上で、新たな資料を追加できた。

桂見遺跡とあわせて3カ年の継続調査を、関係各位のご協力により終了することができ、ここに、ようやく報告書をまとめることができた。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりである。本報告書に納めた内容が、歴史研究の一助となれば幸いである。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力・助言をいただいた各位に深く感謝申し上げたい。

遺跡名	遺物番号	検出層	取上層	出土番号	種類	数量	口径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	図録	出土	形状	色調内面	色調外面	備考	実測値	
S101	Pa1	9	30	242-282	埴土下層	甕	■17.8	△8.2				短く外縁する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-35
S101	Pa2	9	30	347	埴土上層	甕	■11.6	△3.8				外反する筒台口縁をもつ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-71
S101	Pa3	9	30	244	埴土上層	甕	■7.2	△2.6				短く外反する口縁部をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1-1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	褐色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-36
S101	Pa4	9	30	228	埴土下層	甕		△2.1			■11.6	短く外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	褐色	黄褐色色		FK-58
S101	Pa5	9	30	341-345	埴土上層	甕		△3.8			■12.4	「ハ」字状に広がる筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-37
S102	Pa6	11	30	297-302	埴土上層	甕	■18.3	△7.4				大きく外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-13
S102	Pa7	11	30	285	埴土上層	甕	■4.0	△2.5				裾部が肥厚し、筒台口縁部を思った口縁部をもつ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-56
S102	Pa8	11	30	285-289 310-343	埴土上層	甕	■12.7	△2.7			■17.5	「フ」字状に大きく広がる筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-35
S103	Pa9	13	30	323	埴土下層	甕	■16.0	△6.5				ほぼ垂直する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-12
S103	Pa10	13	30	324-326 412-413 414-426	埴土下層	甕	■17.5	△5.9				外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-11
S103	Pa11	13	30	315	埴土上層	甕	■23.4	△3.3				短く外縁する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-54
S103	Pa12	13	30	322	埴土下層	甕	■14.0	△6.1				短く外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-23
S103	Pa13	13	30	407-426	埴土下層	甕	■15.3	△6.1				外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-4) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-20
S103	Pa14	13	30	409	埴土下層	甕	■16.8	△6.1				内周口縁部の「く」字状口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-16
S103	Pa15	13	30	319-311 417	埴土上層	甕	■11.5	△2.5			■6.4	内縁部がしっかりと面をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付。裏面あり	FK-18
S103	Pa16	13	30	316	埴土上層	甕	■12.1	△3.1			■7.0	しっかりとした口縁部をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-21
S103	Pa17	13	30	326	埴土上層	甕	■12.1	△3.2			■3.0	しっかりとした口縁部をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-19
S103	Pa18	13	30	308	埴土下層	甕	■12.7	△3.7			■12.0	おぼろしく「ハ」字状に筒台口縁部を思わせる。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-22
S103	Pa19	13	30	404	埴土上層	甕		△3.0				筒台口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-33
S103	Pa20	13	30	405	埴土上層	甕	■12.9	△1.6				筒台口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	内周口縁部	FK-45
S103	Pa21	13	30	319	埴土下層	甕	■12.9	△4.4				大きく外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-13
S103	Pa22	13	30	314-417	埴土上層	甕	■16.2	△6.3				裾部が肥厚する。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-17
S103	Pa23	13	30	417	埴土上層	甕	長さ35 高さ25	■16.5	△6.2	19.0 12.0	重量 91.5g	真鍮製。中心に丸い穴あり。平らな底面あり。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-20
S104	Pa24	37	35	460	埴土上層	甕	■16.5	△4.4				外縁する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	内周口縁部	V.33
S105	Pa25	40	35	505	埴土上層	甕	■12.0	△5.5				内周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-44
S105	Pa26	40	35	544	埴土上層	甕	■17.5	△6.9				外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-55
S105	Pa27	40	35	546	埴土上層	甕						外縁する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-75
S106	Pa28	40	35	578	埴土上層	甕	■13.2	△2.8				短く外反する筒台口縁をもつ。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-76
S106	Pa29	40	35	579	埴土上層	甕	■14.4	△3.4				裾部が肥厚する。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。裾部は細い口縁部以下方向ケズ。	密 (1-2) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色	外壁ス入付	FK-78
S106	Pa30	40	35	572	埴土下層	甕		△4.9			△13.4	「ハ」字状に筒台口縁部を思わせる。外周口縁部はコナダ。内周口縁部はコナダ。	密 (1) ㎝大の砂粒を含む。	黒灰	黄褐色色	黄褐色色		FK-77

挿表16 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器) 観察表(1)

S 106	Pa31	40	508	壇上層	弥生土器	甕	△13.6		内腹縁の割線を持つ。外周風化のため調査不能。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	外周風化あり	FK-41		
S 107	Pa32	40	514	灰層	弥生土器	甕形貯			断面内縁を呈する割線。径不明。	良好	黄褐色	黄褐色		FK-42		
S 108	Pa33	41	35	628	灰層	弥生土器	甕	※19.3	△4.9	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内周口縁縁部コナダ。断面以下方向コナダ。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	134		
S 109	Pa34	41	35	641	壇上層	弥生土器	甕	※16.3	△4.2	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	明褐色	明褐色	外周スス付着	138	
S 110	Pa35	41	35	658	灰層	弥生土器	甕	※14.3	△3.4	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	黄褐色	灰褐色	133		
S 116	Pa36	41	35	523	壇上層	弥生土器	甕	※16.6	△3.1	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	明褐色	明褐色	129		
S 116	Pa37	41	35	533	壇上層	弥生土器	甕	※14.6	△3.4	短く外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	明褐色	明褐色	131		
S 116	Pa38	41	35	787	P 1 内	弥生土器	甕		△5.8	唇台口縁をもつ。断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	145		
S 116	Pa39	41	35	523	壇上層	弥生土器	甕形貯	△2.4		断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	灰褐色	明褐色	128		
S 116	Pa40	41	35	522	壇上層	弥生土器	甕形貯	△5.9		断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	明褐色	明褐色	127		
S 116	Pa41	41	35	639	灰層	弥生土器	甕形貯	△4.1		断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	明褐色	明褐色	135		
S 117	Pa42	45	35	567	壇上層	弥生土器	甕	※19.9	△6.3	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	136		
S 117	Pa43	45	35	507	壇上層	弥生土器	甕	※14.2	△4.4	短く外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	灰褐色	灰褐色	外周スス付着	FK-189	
S 117	Pa44	45	35	580	壇上層	弥生土器	甕	※17.1	△4.1	唇台口縁をもつ。断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	137		
S 117	Pa45	45	35	564	壇上層	弥生土器	甕	※15.2	△14.5	※17.3	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	明褐色	明褐色	外周スス付着	FK-58
S 117	Pa46	45	35	386	壇上層	弥生土器	甕形貯	△9.5		※12.3	断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	灰褐色	灰褐色	FK-57	
S 117	Pa47	45	35	564	壇上層	弥生土器	甕形貯	△4.3		断面以下方向コナダ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	142		
S 118	Pa48	47	35	645	P 1 内	弥生土器	甕	※19.2	※27.9	※21.6	外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	灰褐色	灰褐色	外周スス付着	FK-56
S 119	Pa49	55	35	789	灰層	弥生土器	甕	※29.2	△18.8		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	外周スス付着	FK-83
S 119	Pa50	55	35	789	灰層	弥生土器	甕	※33.9	△18.2		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	灰褐色	灰褐色	外周スス付着	FK-161
S 119	Pa51	55	35	865	壇上層	弥生土器	甕	※16.8	△19.9		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	明褐色	明褐色	外周スス付着	FK-60
S 119	Pa52	55	35	884	壇上層	弥生土器	甕	※14.8	△5.6		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	黄褐色	黄褐色	FK-63	
S 119	Pa53	55	35	472	壇上層	弥生土器	甕形貯	△2.2		1.4	小さく外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	灰褐色	灰褐色	外周スス付着	FK-50
S 119	Pa54	55	35	486	壇上層	弥生土器	甕形貯	※20.6	△7.5		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	中年代 良好	黄褐色	黄褐色	FK-62	
S 119	Pa55	57	37	776	壇上層	弥生土器	甕	※18.4	△5.8		外腹する唇台口縁をもつ。外周口縁縁部は平行的に隆起。内径不明。	良好	黄色	明褐色	外周スス付着	FK-87

挿表17 西柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(2)

S 110	Pa66	37	37	701・702	瓦葺	弥生土層	層	■17.0	△6.2		ほぼ直立する露出口縁をもつ。内面口縁部多少歪した平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1m×2mmの砂粒を含む)。	良好	明褐色	明褐色	FK-66
S 110	Pa67	57	57	697	埴土下層	弥生土層	層	■19.2	△5.1		短く直立する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部のため顕著な凹。	青 (1m×2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色～灰褐色	灰黄色～灰褐色	FK-68
S 110	Pa68	57	718	埴土下層	弥生土層	層		△5.8			やや内傾する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	FK-91
S 110	Pa69	57	711	埴土下層	弥生土層	層	■14.0	△4.7			短く直立する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (砂粒を含む)。	良好	灰～褐色	褐色	外周スス付着
S 110	Pa69	57	708	埴土下層	弥生土層	層		△13.1	■6.0		筒状の胴部～中上にかけて厚みの増大。外周部ワケナテ。内面下方ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色～灰褐色	褐色	外周スス付着
S 110	Pa61	57	705・706・709	埴土上層	弥生土層	層		△6.2	■7.2		やや内傾する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色～灰褐色	外周スス付着
S 110	Pa62	57	717	埴土上層	弥生土層	層		△5.2	■3.4		やや内傾する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	外周スス付着
S 110	Pa63	57	658	埴土下層	弥生土層	層		△2.8			短く直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (砂粒を含む)。	やや不良	赤褐色	灰黄色	FK-92
S 110	Pa64	57	734	埴土下層	弥生土層	層	■9.6	△4.1			短く直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	明褐色	灰黄色	FK-69
S K01	Pa65	13	31	112	埴土上層	土師窯土層	層	■10.2	△1.8		浅く内傾する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	黄	良好	にじり褐色	にじり褐色	FK-163
S K02	Pa66	17	31	221	赤土	弥生土層	層	■18.4	△3.7		完成品の外側に粘土を塗付け、分厚く鋭い稜角1個に作る。内外ともに直ナテ。	黄緑	良好	褐色	褐色	口縁部内面黒色あり
S K02	Pa67	17	31	213・223	赤土	弥生土層	層	■21.0	■27.0		ほぼ直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。	青	良好	黒褐色	褐色～赤褐色	外周スス付着
S K02	Pa68	17	31	224・228	赤土	弥生土層	小割層	■15.4	△3.5	■13.9	内傾する露出口縁をもつ。頸部唇部を多く含む。外周部下方ナテ。内面下方ナテ。頸部下方ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色～灰褐色	灰黄色	S-17
S K02	Pa69	17	325	赤土	弥生土層	層		△3.9			短く直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	やや不良	赤褐色～灰褐色	褐色	内面黒色あり
S K04	Pa70	60	37	394・636	埴土上層	弥生土層	層	■15.0	△3.2		短く直立する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	中～やや不良	灰黄色	灰黄色	FK-61	
S K04	Pa71	60	396	埴土上層	弥生土層	層	■11.0	△4.4		直立する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	外周黒色あり	
S K04	Pa72	60	399	埴土上層	弥生土層	層	■15.2	△3.0		外反する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	FK-60	
S K04	Pa73	60	406	埴土下層	弥生土層	層	■12.6	△4.3		外反する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	外周スス付着	
S K04	Pa74	60	398	埴土上層	弥生土層	層	■13.0	△6.1		外反する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	赤褐色	赤褐色	FK-71	
S K04	Pa75	60	37	390	埴土上層	弥生土層	層	■19.4	△4.4		外反する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	FK-72
S K04	Pa76	60	37	363	埴土上層	弥生土層	層	■16.8	△4.0		外反する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	外周スス付着
S K04	Pa77	60	37	436	埴土下層	弥生土層	層	■15.0	△3.0		内反する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	赤褐色	赤褐色	外周スス付着
S K04	Pa78	60	37	362・393	埴土上層	弥生土層	層	■15.4	△3.8		短く直立する露出口縁をもつ。外周口縁部平行状。内面口縁部コナテ。頸部唇部以下は直下ナテ。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	灰黄色	灰黄色	外周スス付着
S K04	Pa79	60	37	363	埴土上層	弥生土層	層		△2.5		短く直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1m×2mmの砂粒を含む)。	良好	灰白色	灰白色	外周黒色あり
S K04	Pa80	60	37	399	埴土上層	弥生土層	層	■19.0	△4.2		外反する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	明褐色	明褐色	外周スス付着
S K04	Pa81	60	38	362	埴土上層	弥生土層	層	■15.6	△3.4		短く直立する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	中～やや不良	灰黄色	明褐色	1-39	
S K04	Pa82	60	38	636	埴土下層	弥生土層	層	■14.0	△3.0		短く外反する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	外周スス付着
S K04	Pa83	60	38	636	埴土上層	弥生土層	層	■17.4	△4.9		外反する露出口縁をもつ。外周部下方ナテ。内面下方ナテのため顕著な凹。	青 (1～2mmの砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	FK-126

挿表18 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(3)

S. No.	Form	Size	Color	Material	Shape	Weight	Height	Remarks	Specimen No.	Location					
S.K04	Pu04	60	38	563	埴土上層	弥生土層	壁	△6.6		腹(1)縁をもつ楕円鉢形。内面は黒褐色の土を被文文。内面は平直。	良好	灰褐色	明褐色	内面土入付	FN-70
S.K04	Pu05	60	38	563	埴土上層	弥生土層	壁	△6.6		文様も「く」字状口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	灰褐色	褐色	内面土入付	FN-60
S.K04	Pu06	60	563	埴土上層	弥生土層	壁	△6.1		「く」字状口縁をもつ。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色		FN-66	
S.K04	Pu07	60	563	埴土上層	弥生土層	壁	△3.1		「く」字状口縁をもつ。外面は黒褐色。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	黄褐色	黄褐色	内面土入付	FN-74	
S.K04	Pu08	60	563	埴土上層	弥生土層	蓋	△5.5	W.6.7	やや上り縁の蓋。外面は平直。	やや粗	褐色	灰褐色	内面黒色あり	FN-62	
S.K04	Pu09	60	563・600	埴土上層	弥生土層	蓋	△2.5	W.3.3	しつかりとした蓋。外面は平直。内面は平直。	良好	黄褐色	灰褐色		FN-77	
S.K04	Pu00	60	38	562・563 565・627	埴土上層	弥生土層	蓋	20.1	14.1	上唇部はワット状に開き。腹縁部は平直。腹縁部以下は平直。内面は平直。腹縁部以下は平直。	良好	黄褐色	黄褐色	内面土入付	FN-64
S.K04	Pu01	60	562	埴土上層	弥生土層	蓋	△4.4	W.20.7	口縁部は平直。腹縁部は平直。内面は平直。	良好	黄褐色	黄褐色	内面黒色あり	FN-63	
S.K04	Pu02	60	38	561・607	埴土上層	弥生土層	蓋	△4.1	W.19.8	小形の腹縁部は平直。腹縁部以下は平直。内面は平直。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-78
S.K04	Pu03	60	568	埴土上層	弥生土層	蓋	△2.4	W.6.7	大きき蓋の腹縁部は平直。内面は平直。	良好	灰褐色	灰褐色		FN-704	
S.K04	Pu04	60	563・603	埴土上層	弥生土層	蓋	△4.7	W.13.4	「く」字状口縁をもつ。腹縁部は平直。内面は平直。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-76	
S.K05	Pu05	46	36	562	埴土	弥生土層	壁	△5.4	W.20.2	やや外反する楕円口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色		1-43
S.K06	Pu06	46	36	560	埴土	弥生土層	壁	△5.2	W.17.7	やや外反する楕円口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	やや粗	明褐色	明褐色		1-46
S.K06	Pu07	46	36	629・633	埴土上層	弥生土層	壁	△4.8	W.17.9	外反する楕円口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色	Po01と同様	1-49
S.K06	Pu08	46	36	602	埴土上層	弥生土層	壁	△4.7	W.17.9	やや外反する楕円口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	やや粗	明褐色	明褐色		1-44
S.K07	Pu09	73	39	766	埴土中	弥生土層	壁	△7.2	W.15.6	口縁部が加厚する。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	褐色	褐色		FN-88
S.K07	Pu100	73	39	777	埴土中	弥生土層	壁	△3.9	W.13.3	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色		1-37
S.K07	Pu101	73	39	767・768 772	埴土中	弥生土層	壁	△6.9	W.16.9 W.16.2	縁り上げ口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	やや粗	黄褐色	黄褐色	腹縁外周黒色あり	FN-96・97
S.K07	Pu102	73	39	759	埴土中	弥生土層	壁	△3.8	W.13.3	内面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色		1-59
S.K07	Pu103	73	722	埴土中	弥生土層	壁	△2.8	W.14.2	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	黄褐色	黄褐色	内面土入付	1-50	
S.K07	Pu104	73	39	778	埴土中	弥生土層	壁	△3.4	W.17.7	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	黄褐色	黄褐色		1-52
S.K07	Pu105	73	39	772	埴土中	弥生土層	壁	△3.3	W.17.6	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色	外周土入付	1-51
S.K07	Pu106	73	39	722	埴土中	弥生土層	壁	△3.9	W.21.7	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	明褐色	明褐色		1-56
S.K07	Pu107	73	39	760	埴土中	弥生土層	壁	△4.7	W.18.2	外反する楕円口縁をもつ。外面は黒褐色。腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	黄褐色	黄褐色	内面土入付	FN-173
S.K07	Pu108	73	765	埴土中	弥生土層	壁	△7.6	W.22.2	腹縁部は平直。内面は黒褐色。腹縁部以下は平直。	良好	灰褐色	明褐色		1-48	

挿表19 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器) 観察表(4)

S K07	Pa109	73	39	719	塚土中	弥生土層	竪	■12.3	△4.9				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡赤褐色	口縁部外側ス入付書	1-55
S K07	Pa110	73	39	780	塚土中	弥生土層	竪	■17.6	△4.4				短く直立する唇合口縁をもつ。外傾角約5度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~3)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色		1-53
S K07	Pa111	73	39	719	塚土中	弥生土層	竪	■18.4	△3.5				外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色	外側ス入付書	1-52
S K07	Pa112	73	39	780	塚土中	弥生土層	竪	■17.3	△3.8				ほぼ直立する唇合口縁をもつ。外傾角約4度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色	外側ス入付書	1-47
S K07	Pa113	73	39	775	塚土中	弥生土層	竪	■20.1	△6.6				やや外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約5度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色		1-58
S K07	Pa114	73	39	720	塚土中	弥生土層	竪	■16.6	△4.9				外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約5度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	明褐色	淡赤褐色	外側ス入付書	1-56
S K07	Pa115	73	39	775	塚土中	弥生土層	竪	■16.5	△5.3				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色	口縁部外側ス入付書	1-53
S K07	Pa116	73	39	789	塚土中	弥生土層	竪	■20.1	△5.5				外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	暗褐色	淡赤褐色		1-49
S K07	Pa117	73	40	198	塚土中	弥生土層	小竪	■11.2	△5.7				やや外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	暗褐色	赤褐色	外側ス入付書	1-53
S K07	Pa118	73	40	721	塚土中	弥生土層	小竪	■9.6	△4.6				唇部がやや厚くなる。平状口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	暗褐色	明赤褐色		1-60
S K07	Pa119	74	40	777	塚土中	弥生土層	短手付き		△6.9				唇部がやや厚くなる。平状口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	淡赤褐色		1-59
S K07	Pa120	74	40	770	塚土中	弥生土層	高杆	14.0	15.3	9.7			短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	灰色	灰色		FN-91
S K07	Pa121	74	40	777	塚土中	弥生土層	高杆		△4.8				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	淡褐色	外側ス入付書	1-57
S K07	Pa122	74	40	768	塚土中	弥生土層	短手付き	■17.8	■19.0	■14.4			短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-95
S K07	Pa123	74	40	771	塚土中	弥生土層	短手付き		△9.8				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	明褐色	明褐色	外側ス入付書	1-56
S K08	Pa124	76	40	801	塚土中	弥生土層	竪	■20.1	△5.5				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	明赤褐色	明赤褐色		1-54
S D61	Pa125	19	409		塚土中	弥生土層	竪	■19.2	△4.2				外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	灰色	灰色		FN-106
S D65	Pa126	21	201		塚土中	弥生土層	竪						短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	赤褐色	赤褐色		FN-183
S D68	Pa127	23	403		塚土中	弥生土層	竪		△5.9				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	淡赤褐色		FN-202
S D69	Pa128	24	407		塚土中	弥生土層	竪	■20.2	△2.1				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	灰白色	灰白色		FN-182
S D10	Pa129	25	444		塚土上層	弥生土層	竪	■19.4	△5.7				やや外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~3)mmの砂粒を含む。	良好	赤褐色	赤褐色		FN-184
S D11	Pa130	65	478		塚土中層	弥生土層	竪		△3.2				やや外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-185
S D11	Pa131	65	38	478	塚土中層	弥生土層	竪		△2.6				外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-186
S D11	Pa132	66	38	468	塚土上層	弥生土層	竪		△1.9	■10.3			短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	暗赤褐色	赤褐色		FN-187
S D14	Pa133	63	38	575	塚土中層	弥生土層	竪		△6.7	■6.6			短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	良好	灰色	灰色		FN-188
S D15	Pa134	36	736		塚土中層	弥生土層	竪		△10.3				内傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~2)mmの砂粒を含む。	不良	淡褐色	淡褐色		FN-194
S S01	Pa135	38	31	339	塚土中層	弥生土層	竪	■12.8	△9.2				短く外傾する唇合口縁をもつ。外傾角約3度の傾斜。内面口縁部コナテ。唇部縁部以下下方テラス。	唇(1~3)mmの砂粒を含む。	良好	暗赤褐色	暗赤褐色		FN-199

挿表20 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(5)

S 502	Pol136	28	422	埴土中	弥生土器	甕	№12.3	△1.4			内面すも盛り上げ口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰緑色	褐色		FN-103
S 502	Pol137	28	341+420	埴土中	弥生土器	甕	№19.1	△8.3			中や中厚なる組合口縁をもつ。口縁部下縁以下盛り。外周口縁部3条の砂状隆起。内面口縁部コナナ。内面口縁部コナナ。腹面縁部以下左向き。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰緑色	褐色		内面スス付着
S 502	Pol138	28	445	埴土中	弥生土器	甕	№15.4	△5.1			内面すも盛り上げ口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面口縁部コナナ。腹面以下向き。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰緑色	褐色		FK-31
S 502	Pol139	28	422	埴土中	弥生土器	甕	№13.1	△3.3			短く直立する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		内面スス付着
S 502	Pol140	28	282	埴土中	弥生土器	甕	№14.2	△3.9			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面口縁部縁部下方トナナ。	甕(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FK-27
S 502	Pol141	28	421	埴土中	弥生土器	甕	№13.6	△5.3			外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部多面化の平行状隆起。内面口縁部コナナ。腹面縁部以下向き。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FK-32
S 502	Pol142	28	290	埴土中	弥生土器	甕	№3.5	△2.8	№3.5		シロクロとした平腹を呈する甕。外周縁部外ハング状。内面以下コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰緑色	褐色		FK-9
S 502	Pol143	28	289+292	埴土中	弥生土器	甕	№7.2	△1.8	№7.2		シロクロとした平腹を呈する甕。外周縁部外ハング状。内面以下コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		外周面あり
S 502	Pol144	28	387	埴土中	弥生土器	甕	№3.1	△3.1	№3.2		シロクロとした平腹を呈する甕。外周縁部外ハング状。内面以下コナナ。	甕(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		内面スス付着
S 502	Pol144	28	378	埴土中	弥生土器	甕	№4.2	△1.8	№4.2		短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		外周スス付着
S 502	Pol146	28	386	埴土中	弥生土器	高杯	№6.8	△6.8	№6.5		立ち上がり口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FN-151
S 502	Pol147	28	277	埴土中	弥生土器	高杯	№6.8	△3.4	№6.8		立ち上がり口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FK-10
S 502	Pol148	28	282	埴土中	弥生土器	甕	№7.5	△3.7	№7.5		短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		外周面あり
S 502	Pol149	28	346	埴土中	弥生土器	甕	№9.5	△9.4			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FK-34
S 502	Pol150	28	384	埴土中	弥生土器	甕	№10.5	△10.5			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		外周面あり
土器状遺物	Pol151	70	353	埴土中	弥生土器	甕	№14.9	△2.9			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰白色	灰白色		FK-94
土器状遺物	Pol152	70	438	埴土中	弥生土器	甕	№8.5	△2.5	№8.5		短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部平行状隆起。内面コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	灰白色		FK-96
土器状遺物	Pol153	70	619	埴土中	弥生土器	甕					外周平行状隆起。内面同心状隆起。	甕(砂状を含む)。	灰白色	灰白色		FK-95
土器状遺物	Pol154	70	619	埴土中	弥生土器	甕	№14.8	△2.1	№14.8		大きくシロクロとした平腹を呈する甕。外周縁部外ハング状。内面以下コナナ。	甕(1~2) 6cmの砂状を含む。	灰白色	灰白色		FK-98
土器状遺物	Pol155	70	474	埴土中	弥生土器	甕					腹面縁部隆起。口縁部は裏面より外ハング状。内面コナナ。	甕	灰緑色	黄褐色		FK-99
黄銅口地区土器群	Pol156	31	32	178	弥生土器	甕	№16.6	△3.9			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面口縁部コナナ。	甕(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		外周スス付着
黄銅口地区土器群	Pol157	31	32	61	弥生土器	甕	№14.8	△3.8			短く直立する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	中や中厚(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		N-9
黄銅口地区土器群	Pol158	31	32	80	弥生土器	甕	№19.2	△5.7			外縁する組合口縁をもつ。口縁部下縁以下盛り。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	中や中厚(1~2) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		外周スス付着
黄銅口地区土器群	Pol159	31	32	135	土器群	甕	№15.8	△8.4			外縁する組合口縁をもつ。口縁部下縁以下盛り。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	甕(1) 6cmの砂状を含む。	灰褐色	黄褐色		FN-5
黄銅口地区土器群	Pol160	31	32	149	土器群	甕	№14.4	△7.8			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	中や中厚(砂状を含む)。	黄褐色	黄褐色		N-2
黄銅口地区土器群	Pol161	31	32	86	土器群	甕	№16.3	△8.3			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	中や中厚(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		S-1
黄銅口地区土器群	Pol162	31	32	63	土器群	甕	№14.0	△5.4			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	中や中厚(4) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	褐色		S-9
黄銅口地区土器群	Pol163	31	32	63	土器群	甕	№11.0	△6.1			短く外縁する組合口縁をもつ。外周口縁部3条の砂状隆起。内面コナナ。	甕(1) 6cmの砂状を含む。	黄褐色	黄褐色		FN-207

挿表21 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(6)

豊後口地区土器群Ⅰ	Pa184	31	303	弥生土器	壺	ハ8.4	中腹線と肩合わせ。外周7条の凹線。内面高化のため凹線不詳。	青(1~3mm程度の砂粒を含む)。	良好	棕色	棕色	FN-33	
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa183	31	91	弥生土器	壺	■13.2 △5.9	外縁する「C」字状凹線をもつ。内腹口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	灰白色	灰白色	YH-6	
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa186	31	31	173	弥生土器	壺	■10.2 △4.6	外反する「C」字状凹線をもつ。内腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部内側ハナハナ凹線。頸部以下ツブシ。	中～青(1~2mmの砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-22
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa187	31	32	193	弥生土器	壺	■12.2 △4.9	外縁する「C」字状凹線をもつ。内腹口縁部ハナハナ凹線。頸部以下ツブシ。	青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	明赤褐色	明赤褐色	S-12
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa188	31	32	192	弥生土器	壺	■14.8 △4.5	内周高化に連立する「C」字状凹線をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。頸部以下ツブシ。	青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	明赤褐色	明赤褐色	S-13
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa189	31	32	38	土師器	小壺形	■9.6 △5.4	外反する「C」字状凹線をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。頸部以下ツブシ。	青(1~3mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	KY-3
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa170	31	32	62・160	土師器	小壺形	■9.8 △6.8 ■10.2	短く外反する「C」字状凹線をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ハナハナ凹線。頸部以下ツブシ。	黄(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	外反ス入付壺
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa171	31	32	167	弥生土器	壺	■16.8 △4.9	短く外反する唇口縁をもつ。口縁下縁は下直する。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。	黄(1~2mm程度の砂粒を含む)。	中～不良	浅黄褐色	棕色	S-12
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa172	31	32	62	弥生土器	壺	■16.8 △4.1	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	赤褐色	赤褐色	S-23
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa173	31	32	168	弥生土器	壺	■14.6 △4.9	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	黄(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	赤褐色	赤褐色	外反ス入付壺
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa174	31	31	113	弥生土器	壺	■17.6 △3.3	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1~4mm程度の砂粒を含む)。	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	S-10
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa175	31	32	33	弥生土器	壺	■18.4 △3.6	短く外反する唇口縁をもつ。口縁下縁は下直する。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	中～不良	赤褐色	赤褐色	S-22
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa176	31	32	177	弥生土器	壺	■10.6 △3.5	短く外反する唇口縁をもつ。口縁下縁は下直する。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	黄(1~3mm程度の砂粒を含む)。	不良	暗赤褐色	暗赤褐色	S-2
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa177	31	32	100	弥生土器	壺	■17.2 △6.6	短く外反する唇口縁をもつ。口縁下縁は下直する。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～不良	赤褐色	赤褐色	外反ス入付壺	
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa178	32	256	弥生土器	壺	■19.8 △11.4	外反する唇口縁をもつ。頸部直線部を短くする。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	灰褐色	灰褐色	外反ス入付壺	
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa179	32	33	71	弥生土器	壺	■16.5 △3.6	外縁する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	外反ス入付壺
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa180	32	33	85	弥生土器	壺	■17.0 △8.3	中～外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	灰褐色	灰褐色	S-15
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa181	32	33	100	弥生土器	壺	■18.4 △4.2	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	S-34
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa182	32	33	183	弥生土器	壺	■21.6 △4.7	外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-26
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa183	32	33	63	弥生土器	壺	■21.4 △3.6	中～外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	外反ス入付壺
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa184	32	33	94	弥生土器	壺	■18.8 △6.4	内腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	S-14
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa185	32	33	194	弥生土器	壺	■17.1 △4.9	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-7
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa186	32	33	192	弥生土器	壺	■17.1 △5.0	中～外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	中～青(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄色	黄色	FN-34
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa187	32	33	192	弥生土器	壺	■18.4 △4.4	外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	中～不良	黄褐色	黄褐色	外反ス入付壺
豊後口地区土器群Ⅰ	Pa188	32	33	50	弥生土器	壺	■14.9 △3.7	短く外反する唇口縁をもつ。外腹口縁部ハナハナ凹線。内面口縁部ヨコナテ。頸部直線以下ツブシ。	青(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-1

挿表22 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(7)

竪穴口 地区土 器群Ⅰ	Pa188	32	33	145	弥生土器	Ⅱ	№14.6	△3.3	中や外反する複合口縁をもつ。内面は直線平行状縁。頸部短く浅く。内面磨光せず。	中や横(1)の2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	FN-8
竪穴口 地区土 器群Ⅱ	Pa190	32	36	150	弥生土器	Ⅱ	№15.6	△3.7	強く外反する複合口縁をもつ。口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁部を有し、内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅲ	Pa191	32	36	168	弥生土器	Ⅱ	№17.4	△3.6	強く外反する複合口縁をもつ。口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁部を有し、内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~4mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	YH-5
竪穴口 地区土 器群Ⅳ	Pa192	32	79	170	弥生土器	Ⅱ	№14.8	△3.5	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	中や横(1)の2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅴ	Pa193	32	207	170	弥生土器	Ⅱ	№16.6	△4.0	強く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	14
竪穴口 地区土 器群Ⅵ	Pa194	32	36	16	弥生土器	Ⅱ	№14.4	△4.2	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	S-32
竪穴口 地区土 器群Ⅶ	Pa195	32	37	37	弥生土器	Ⅱ	№13.8	△3.7	強く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁部を有し、頸部短く浅く。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅷ	Pa196	32	89	89	弥生土器	Ⅱ	№13.4	△4.3	外反する複合口縁をもつ。口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁部を有し、内面口縁部はコナテ。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	FN-31
竪穴口 地区土 器群Ⅸ	Pa197	32	88 - 194	88 - 194	弥生土器	Ⅱ	№17.9	△4.1	大きく外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	YH-3
竪穴口 地区土 器群Ⅹ	Pa198	32	147	147	弥生土器	Ⅱ	№14.6	△3.6	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	133
竪穴口 地区土 器群Ⅺ	Pa199	32	63	63	弥生土器	Ⅱ	№14.4	△3.2	中や外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁部を有し、頸部短く浅く。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅻ	Pa200	32	128	128	弥生土器	Ⅱ	№16.2	△3.8	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅼ	Pa201	32	113	113	弥生土器	Ⅱ	№15.6	△3.2	大きく外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	S-4
竪穴口 地区土 器群Ⅽ	Pa202	32	63	63	弥生土器	Ⅱ	№12.6	△3.7	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着
竪穴口 地区土 器群Ⅾ	Pa203	32	63	63	弥生土器	Ⅱ	№19.6	△3.7	大きく外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	S-36
竪穴口 地区土 器群Ⅿ	Pa204	32	113	113	弥生土器	Ⅱ		△2.7	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	KV-9
竪穴口 地区土 器群ⅰ	Pa205	33	33	150	弥生土器	Ⅱ	№19.0	△19.5	強く外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	中や横(1)の2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	S-19
竪穴口 地区土 器群ⅱ	Pa206	33	33	120	弥生土器	Ⅱ	№21.4	△8.4	中や外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~5mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	YH-4
竪穴口 地区土 器群ⅲ	Pa207	33	118	118	弥生土器	Ⅱ	№28.2	△5.7	外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~3mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	FN-32
竪穴口 地区土 器群ⅴ	Pa208	33	139	139	弥生土器	Ⅱ	№21.6	△5.8	外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	中や横(1)の2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	FN-21
竪穴口 地区土 器群ⅵ	Pa209	33	86	86	弥生土器	Ⅱ	№23.4	△5.8	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	FN-6
竪穴口 地区土 器群ⅶ	Pa210	33	172	172	弥生土器	Ⅱ	№23.6	△5.3	強く外反する複合口縁をもつ。内面口縁部はゆるやかに反する。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~3mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	S-22
竪穴口 地区土 器群ⅷ	Pa211	33	127	127	弥生土器	Ⅱ	№22.8	△5.0	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	N-11
竪穴口 地区土 器群ⅸ	Pa212	33	165	165	弥生土器	Ⅱ	№22.0	△5.1	外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	横(1)~2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	N-8
竪穴口 地区土 器群ⅹ	Pa213	33	87	87	弥生土器	Ⅱ	№29.0	△3.4	強く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行状縁。内面口縁部はコナテ。頸部短く浅く。	中や横(1)の2mm程度の砂粒を含む。	灰緑	黄褐色	黄褐色	外側入付 付着

押表23 西柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(8)

窪谷口地区土器群	Ps14	33	32	385	弥生土器 甕	■13.9	△4.8			中央部より底面口縁をもつ。口縁部下縁はわずかに下巻する。内外面とも磨石が施し、内面口縁部平行状跡心。内面口縁部もつ。	やや中 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	灰褐色	褐色褐色	1.6
窪谷口地区土器群	Ps215	33	33	251	弥生土器 甕	■18.6	△8.6			外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも風化のたぬり跡あり。	骨 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	灰褐色	灰褐色	YH-2
窪谷口地区土器群	Ps216	33	33	153	弥生土器 甕	■17.4	△5.6			中央部より底面口縁をもつ。内外面とも風化が施し、内面口縁部平行状跡心。内面口縁部もつ。	骨 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	褐色	褐色	1.21
窪谷口地区土器群	Ps217	33	33	79	弥生土器 甕	■16.8	△4.3			外側下巻する唇合口縁をもつ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	灰色	褐色	S-21
窪谷口地区土器群	Ps218	33	33	88	弥生土器 甕	■15.3	△4.3			外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも磨石が施し、内面口縁部平行状跡心。内面口縁部もつ。	骨 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	灰褐色	褐色	1.24
窪谷口地区土器群	Ps219	33	33	100	弥生土器 甕	■15.2	△4.7			ほぼ直立する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps220	33	33	92	弥生土器 甕	■13.1	△13.0	■15.3		磨石が施し、外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。外掘り跡あり。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps221	33	33	184+206	弥生土器 甕	■11.8	■12.5	■11.1	■11.9	外側下巻する唇合口縁をもつ。磨石が施し、口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps222	33	33	63	弥生土器 甕	■10.4	△4.1			外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも風化のたぬり跡あり。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	灰褐色	褐色褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps223	33	33	92	土師器 甕	■13.6	△5.5			磨石が施し、外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	やや不良	黒褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps224	33	33	84+134	土師器 甕	■16.4	△8.7			磨石が施し、外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨	やや不良	褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps225	33	33	91	土師器 甕	■23.9	△4.7			外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	やや不良	黄褐色	黄褐色	S-31
窪谷口地区土器群	Ps226	34	34	62	弥生土器 甕	■16.0	△4.3			く、字状口縁をもつ唇合口縁をもつ。内外面とも磨石が施し、内面口縁部平行状跡心。内面口縁部もつ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	赤褐色	赤褐色	S-30
窪谷口地区土器群	Ps227	34	34	113	弥生土器 甕?	■14.4	△3.8			磨石が施し、外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	褐色	S-37
窪谷口地区土器群	Ps228	34	34	80	土師器 甕	■21.8	△4.5			大きく外反するく、字状口縁をもつ。内外面とも磨石が施し、内面口縁部平行状跡心。内面口縁部もつ。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps229	34	34	93	弥生土器 甕	△5.9				磨石が施し、外側下巻する唇合口縁をもつ。口縁部下縁は下巻する。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。内面口縁部コナテ。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps230	34	34	119+176	弥生土器 甕	△13.0		■11.4		大器で、しっかりとした平底を呈す。外掘り方向ハック目。内面コナテ。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	良好	褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps231	34	34	138	弥生土器 甕	△4.2		7.8		大きくしっかりとした平底を呈す。外掘り方向ハック目。内面コナテ。	骨 (1~2mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps232	34	34	72+155	弥生土器 甕	△7.9		■7.0		中央部より底面口縁をもつ。外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも風化のたぬり跡あり。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps233	34	34	182	弥生土器 甕	△3.0		■5.6		中央部より底面口縁をもつ。外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも風化のたぬり跡あり。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps234	34	34	128	弥生土器 甕	△5.2		4.1		しっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1~4mm程度の砂粒を含む)	良好	明褐色	褐色褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps235	34	34	100	弥生土器 甕	△5.2		■5.2		しっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	良好	黒褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps236	34	34	146	弥生土器 甕	△4.2		■5.0		しっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	灰褐色	黄褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps237	34	34	63	弥生土器 甕	△3.0		■5.8		しっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1mm程度の砂粒を含む)	良好	灰色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps238	34	34	1+46	弥生土器 甕	△4.9		■7.8		やや「ハ」字状口縁をもつ。外側下巻する唇合口縁をもつ。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1~4mm程度の砂粒を含む)	不良	褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps239	34	34	154+156	弥生土器 甕	△3.2		■4.0		小さくしっかりとした平底を呈す。外掘り方向ハック目。内面コナテ。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	不良	明褐色	褐色	外掘スス付着
窪谷口地区土器群	Ps240	34	34	33	弥生土器 甕	△3.3		6.0		しっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため磨石が施す。	骨 (1~3mm程度の砂粒を含む)	良好	明褐色	褐色褐色	外掘スス付着

挿表24 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(9)

寛政口 地区土 器群	Pa241	34	61	弥生土器	磁器	△3.2	#3.4	小さくしっくりとした平底の砂を食む。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色～黄褐色	黄褐色～黄褐色	XY-7		
寛政口 地区土 器群	Pa242	34	128	弥生土器	磁器	△3.1	#6.0	下部腹面平縁をもち、外縁部がややへらげ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	YH-16		
寛政口 地区土 器群	Pa243	34	184	弥生土器	高杯	#14.6	△3.1	両面した面から断面の砂を食む。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-30		
寛政口 地区土 器群	Pa244	34	12・74	弥生土器	高杯	#22.4	△4.8	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	YH-1		
寛政口 地区土 器群	Pa245	34	95	弥生土器	高杯	#16.3	△7.3	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-6		
寛政口 地区土 器群	Pa246	34	185	土師器	高杯	#18.7	△5.1	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-2		
寛政口 地区土 器群	Pa247	34	67	土師器	高杯	#17.7	△4.9	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-16		
寛政口 地区土 器群	Pa248	34	144	弥生土器	高杯	#16.4	△3.7	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-28		
寛政口 地区土 器群	Pa249	34	125	弥生土器	高杯	△11.3		両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	S-7		
寛政口 地区土 器群	Pa250	34	166	弥生土器	高杯	△4.7	#12.5	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-18		
寛政口 地区土 器群	Pa251	34	34	62・81	弥生土器	飯鉢	#1.4	△6.3	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～4mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-3	
寛政口 地区土 器群	Pa252	34	34	72	弥生土器	飯鉢	△6.3	#16.0	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	KY-2	
寛政口 地区土 器群	Pa253	36	34	122	弥生土器	飯鉢	#16.7	△16.1	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-1	
寛政口 地区土 器群	Pa254	36	34	160	弥生土器	飯鉢	△6.0	#11.5	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～4mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-17	
寛政口 地区土 器群	Pa255	36	34	102・111	弥生土器	飯鉢	△7.8	#16.6	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-9	
寛政口 地区土 器群	Pa256	36	34	94	土師器	飯鉢	△5.6	#20.2	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-11	
寛政口 地区土 器群	Pa257	36	34	69・168	弥生土器	蓋	△5.8	#12.2	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	I-2	
寛政口 地区土 器群	Pa258	36	34	252	弥生土器	蓋	△4.8	#16.5	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～4mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-10	
寛政口 地区土 器群	Pa259	36	130	土師器	飯鉢	△3.8	#6.1	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-20		
寛政口 地区土 器群	Pa260	36	137	土師器	飯鉢	△1.8	4.6	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-14		
寛政口 地区土 器群	Pa261	36	34	173・195	弥生土器	蓋	△10.6		両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～3mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-41	
寛政口 地区土 器群	Pa262	36	85・97	弥生土器	蓋	△14.1		両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	中々 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-16		
寛政口 地区土 器群	Pa263	36	34	78	弥生土器	蓋	△7.7		両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1～3mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FK-197	
寛政口 地区土 器群	Pa264	36	36	30	弥生土器	蓋	#10.4	2.6	4.5	両面した面から断面の砂を食む。外縁部コナテ。内面黒褐色に染まる。	良好 (1mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	KM-1
寛政口 地区土 器群	Pa265	78	40	840	埴土器	弥生土器	#13.4	△6.1		良好 (1～4mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-106	
寛政口 地区土 器群	Pa266	78	40	840	埴土器	弥生土器	#14.4	△4.4		良好 (1～2mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-107	
寛政口 地区土 器群	Pa267	78	40	840	埴土器	弥生土器	#17.5	△4.9		良好 (1～3mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-108	
寛政口 地区土 器群	Pa268	78	40	868	埴土器	弥生土器	#11.7	△12.1		良好 (1～3mm程度の砂を食む)	黄褐色	黄褐色	FN-102	

挿表25 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器) 観察表(10)

寛谷奥地区土器群	Pa269	78	871	埴土中	赤土土器	Ⅱ13.0	△6.4			大きく開く。受け口縁をもつ。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰褐色	褐色		FN-141
寛谷奥地区土器群	Pa270	78	48	868	埴土中	赤土土器	Ⅱ14.2	△8.8		口縁部縁部をもつ。外側口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	内外面黒染あり	FN-141
寛谷奥地区土器群	Pa271	78	40	875・882	埴土中	赤土土器	Ⅱ45.0	△39.8	Ⅱ48.0	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化し、内面口縁部も多量化した。内面口縁部一部テズ。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	明褐色	明褐色	製法特殊な土器。内外面に黒染あり	J16
寛谷奥地区土器群	Pa272	78	41	886・888	埴土中	赤土土器	Ⅱ18.8	△8.0		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰褐色	灰褐色	外面スス付	FN-152
寛谷奥地区土器群	Pa273	78	41	876・880	埴土中	赤土土器	Ⅱ11.2	△7.5		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰黄色	灰黄色	口縁部外面黒染あり	FN-134
寛谷奥地区土器群	Pa274	78	41	872	埴土中	赤土土器	Ⅱ23.5	△6.6		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	褐色		FN-138
寛谷奥地区土器群	Pa275	78	41	868	埴土中	赤土土器	Ⅱ17.4	△7.2		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色		FN-135
寛谷奥地区土器群	Pa276	78	41	883	埴土中	赤土土器	Ⅱ16.4	△4.9		大きく開く。受け口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰黄色	灰黄色	口縁部外面スス付	FN-138
寛谷奥地区土器群	Pa277	78	885	885	埴土中	赤土土器	Ⅱ16.4	△4.9		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	不良	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-142
寛谷奥地区土器群	Pa278	78	41	840	埴土中	赤土土器	Ⅱ15.6	△4.7		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	褐色	外面スス付	FN-137
寛谷奥地区土器群	Pa279	77	41	840	埴土中	赤土土器	Ⅱ19.9	△6.7		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色		FN-140
寛谷奥地区土器群	Pa280	77	877	877	埴土中	赤土土器	Ⅱ17.8	△3.8		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰褐色	灰褐色		FN-146
寛谷奥地区土器群	Pa281	77	41	840	埴土中	赤土土器	Ⅱ20.0	△4.7		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-143
寛谷奥地区土器群	Pa282	77	41	840	埴土中	赤土土器	Ⅱ22.4	△4.2		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-148
寛谷奥地区土器群	Pa283	77	844	844	埴土中	赤土土器	Ⅱ17.3	△4.9		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面黒染あり	FN-144
寛谷奥地区土器群	Pa284	77	41	844・867・874	埴土中	赤土土器	Ⅱ18.4	△4.3		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰褐色	灰褐色	外面スス付	FN-133
寛谷奥地区土器群	Pa285	77	844	844	埴土中	赤土土器	Ⅱ13.2	△2.3		外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	灰褐色	灰褐色		FN-159
寛谷奥地区土器群	Pa286	77	41	873	埴土中	赤土土器		△6.1		大きく開く。受け口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-162
寛谷奥地区土器群	Pa287	77	874・889	874	埴土中	赤土土器		△8.0		大きく開く。受け口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-151
寛谷奥地区土器群	Pa288	77	41	884	埴土中	赤土土器		△6.1	Ⅱ4.5	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-156
寛谷奥地区土器群	Pa289	77	41	840	埴土中	赤土土器		△4.6	Ⅱ8.3	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	褐色	外面黒染あり	FN-164
寛谷奥地区土器群	Pa290	77	844	844	埴土中	赤土土器		△3.4	Ⅱ7.0	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面黒染あり	FN-153
寛谷奥地区土器群	Pa291	77	41	888	埴土中	赤土土器		△2.9	3.5	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	褐色	褐色	外面スス付	FN-152
寛谷奥地区土器群	Pa292	77	844	844	埴土中	赤土土器		△3.6	Ⅱ5.3	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-154
寛谷奥地区土器群	Pa293	77	840	840	埴土中	赤土土器		△2.7	Ⅱ3.8	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1mm程度の砂粒を含む。)	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付	FN-168
寛谷奥地区土器群	Pa294	77	41	840	埴土中	赤土土器		△3.1	Ⅱ4.0	外反する唇部口縁をもつ。外側口縁部多量化した。内面口縁部も多量化した。内面口縁部コナテ。腹部以下方向テズ。	Ⅱ(1~2mm程度の砂粒を含む。)	良好	褐色	褐色	外面スス付	FN-170

挿表26 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(1)

筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa295	77	43	880	縄土中	弥生土層	雑形砂土	※15.7	△3.8	ほぼ直立する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~3 m)の砂 を含む。	良好	褐色	褐色		FN-145
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa296	77	379		縄土中	弥生土層	雑形砂土	※19.5	△6.4	大きく内反する層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	中々 不良	淡黄褐色	淡黄褐色		FN-157
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa297	77	42	840	縄土上	弥生土層	雑形砂土	△5.5		急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-110
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa298	77	476		縄土上	弥生土層	雑形砂土	△5.8	△12.8	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	褐色	褐色		FN-161
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa299	77	42	844	縄土上	弥生土層	砂土	幅1.8 厚さ 1.0		ほぼ直立する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		FN-172
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa300	77	42	840	縄土中	弥生土層	砂土	幅1.9 厚さ 1.4		ほぼ直立する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	褐色	褐色		FN-171
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa301	56	56	270	弥生土層	雑	※21.8	△3.3	中々内反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	淡黄褐色		FK-3	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa302	56	35	276	弥生土層	雑	※17.4	△3.3	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	灰褐色	灰褐色	外周スレ 付着	FN-48	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa303	56	35	58	弥生土層	雑	※16.6	△5.8	中々内反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FK-5	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa304	56	35	287	弥生土層	雑	※14.2	△2.5	中々内反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	明黄褐色	明黄褐色		FK-4	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa305	56	56	56	弥生土層	雑	※14.2	△4.7	※9.4 大きく内反する層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	外周スレ 付着	FK-6	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa306	56	35	56	弥生土層	雑形砂土	※18.0	△4.3	大きく内反する層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(2m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FK-2	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa307	56	35	280	雑形砂土	雑	△4.4	※9.8	傾斜に傾く層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	灰色	黄褐色		FN-201	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa308	56	3	3	土質黄土	雑	※14.8	△1.9	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	内周スレ あり	FN-40	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa309	56	24	24	土質黄土	雑	※6.9	△2.2	中々内反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	内周スレ あり	FN-43	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa310	56	32	32	土質黄土	雑	※7.4	△2.1	中々内反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	内周スレ あり	FN-44	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa311	71	39	405	弥生土層	雑	※11.3	△4.4	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	明黄褐色	明黄褐色		FN-51	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa312	71	39	407	弥生土層	雑	※24.0	△3.8	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FN-49	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa313	71	39	600	弥生土層	雑	※17.9	△8.8	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	断面内面 スレ付着	FN-50	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa314	71	39	602	弥生土層	雑	※19.8	△5.5	外反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	外周スレ 付着	FN-45	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa315	71	39	466	弥生土層	雑	※18.7	△5.8	外反する層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	明黄褐色	明黄褐色	外周スレ 付着	FN-52	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa316	71	304	304	弥生土層	雑	※17.2	△3.2	傾斜に傾く層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	赤褐色	赤褐色		FN-54	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa317	71	39	403	弥生土層	雑	※15.0	10.6	4.4 急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色	断面内面 スレ付着	FN-48	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa318	71	39	405	弥生土層	雑	△4.5	※8.4	傾斜に傾く層状土層を 示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1~2 m)の砂 を含む。	良好	明黄褐色	明黄褐色		FN-15	
筑前県 地区A 区遺跡 外	Pa319	71	39	405	土層砂	雑形砂土	△2.1	※6.2	急ぐ傾斜に傾く層状土層 を示す砂層層上土層。 内面はほぼ垂直。内面 コナツキ。	層(1m)の 砂を含む。	良好	黄褐色	黄褐色		FK-30	

挿表27 西柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(2)

豊前県 地区別 区遺構 外	Pa320	71	39	467	弥生土器	瓠	△14.1		内肉状を呈す類。体腔に 中子土を充填した形を もつ。外周縁化のため 堅い。内面平直。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色 ～ 黄褐色	褐色 ～ 黄褐色	FN-37
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa321	71		447	弥生土器	瓠	△14.4		大きく肉状を呈する。外 周縁粗く平直。腹面が 斜形平直。内面縁部 粗す。腹面中央部土 が硬い。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	灰白～ 黄褐色	灰白～ 黄褐色	FN-200
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa322	80	42	837	弥生土器	瓠	■15.6	△5.9	厚く肉状を呈し口縁も もつ。内面口縁部平直 状。腹面粗く平直。内 面口縁部一部粗す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	褐色	FN-87
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa323	80	42	468	弥生土器	瓠	■12.5	△3.2	厚く肉状を呈し口縁も もつ。外周縁粗く平 直。内面口縁部一部粗 す。腹面中央部土が 硬い。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-66
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa324	80		839+840	弥生土器	瓠	■16.8	△7.8	大きくフツフツ状に厚 く。平直口縁をもつ。 腹面がやや平直状。外 周縁部一部粗す。内 面口縁部一部粗す。腹 面中央部土が硬い。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-103
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa325	80		842	弥生土器	瓠	■12.4	△5.7	外反する「く」字状口 縁をもつ。外周縁部一 部粗す。腹面が平直 状。内面口縁部一部 粗す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	FN-106
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa326	80		866	弥生土器	瓠	■12.7	△6.4	外反する「く」字状口 縁をもつ。外周縁部一 部粗す。腹面が平直 状。内面口縁部一部 粗す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	FN-85
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa327	80		894	弥生土器	瓠	■21.8	△3.7	厚く中子肉状す。腹面 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa328	80	42	933	弥生土器	瓠	■20.6	△3.7	厚く肉状す。口縁部も もつ。口縁部下部は やや下平直。外周縁 部粗す。内面口縁部 粗す。腹面中央部土 が硬い。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	FN-118
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa329	80		799	弥生土器	瓠	■27.0	△5.0	肉状を呈し口縁もも もつ。外周縁部一 部粗す。腹面が平直 状。内面口縁部粗 す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-119
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa330	80		800	弥生土器	瓠	■25.6	△6.3	肉状を呈し口縁もも もつ。外周縁部一 部粗す。腹面が平直 状。内面口縁部粗 す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-91
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa331	80	42	808+813 840	弥生土器	瓠	■21.3	△6.4	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-61
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa332	80		821	弥生土器	瓠	■22.4	△4.6	外反する腹面口縁も もつ。口縁部下部は やや下平直。外周縁 部粗す。内面口縁部 粗す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-86
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa333	80		809	弥生土器	瓠	■22.7	△5.3	外反する腹面口縁も もつ。外周縁部一 部粗す。腹面が平直 状。内面口縁部粗 す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa334	80		827	弥生土器	瓠	■20.4	△6.3	肉状を呈し口縁もも もつ。口縁部下部は やや下平直。外周縁 部粗す。内面口縁部 粗す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-88
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa335	80		795	弥生土器	瓠	■17.6	△3.4	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa336	80		795	弥生土器	瓠	■17.2	△4.7	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa337	80		832	弥生土器	瓠	■18.6	△5.8	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	FN-120
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa338	80		819	弥生土器	瓠	■14.3	△4.9	外反する腹面口縁も もつ。口縁部下部は やや下平直。外周縁 部粗す。内面口縁部 粗す。腹面以下左方 が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa339	80	42	781	弥生土器	瓠	■17.4	△4.8	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0～ 2.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	外周縁部 あり
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa340	80		830	弥生土器	瓠	■18.4	△3.0	中子肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	黄褐色	黄褐色	FN-121
豊前県 地区別 区遺構 外	Pa341	80		780	弥生土器	瓠	■19.8	△4.3	厚く肉状す。腹面口縁 ももつ。外周縁部一 部粗す。腹面中央部 土が硬い。内面口縁 部粗す。腹面以下左 方が平直す。	径(1.0m) 程度のものを 含む。	良好	褐色	褐色	外周縁部 あり

挿表28 四柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(3)

甌曲南地区区画調外	Po342	80	42	774	弥生土層	第	№12.0	12.0	12.3	2.5	縦く外縁する腰台口縁をもつ。腰部は陶器等を多く含む。内面は70%程度の灰をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	中年代(1→2) 年代不詳	黄褐色	赤褐色 - 褐色	外側スス付着	FN-105
甌曲南地区区画調外	Po343	80	42	829	弥生土層	第	№10.4	△1.8			縦く外縁する腰台口縁をもつ。外面は灰化のため、内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	中年代(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色	外側スス付着	FN-114
甌曲南地区区画調外	Po344	80	42	832	弥生土層	第	№13.7	△3.5			縦く外縁する腰台口縁をもつ。外面は灰化のため、内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-124
甌曲南地区区画調外	Po346	80	42	865	弥生土層	第	№16.6	△4.9			中や内縁部には外面する腰台口縁をもつ。外縁口縁部には漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-117
甌曲南地区区画調外	Po346	80	42	865	弥生土層	第	№16.6	△4.9			中や内縁部には外面する腰台口縁をもつ。外縁口縁部には漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-117
甌曲南地区区画調外	Po346	80	42	865	弥生土層	第	№16.6	△4.9			中や内縁部には外面する腰台口縁をもつ。外縁口縁部には漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-117
甌曲南地区区画調外	Po346	80	42	865	弥生土層	第	№16.6	△4.9			中や内縁部には外面する腰台口縁をもつ。外縁口縁部には漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-117
甌曲南地区区画調外	Po347	81	42	784	土師層	第	№21.6	△5.1			大きく外縁する腰台口縁をもつ。漆布下縁は灰化している。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	中年代(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-115
甌曲南地区区画調外	Po348	81	42	809	弥生土層	第	№12.8	△8.9			大きく外縁する腰台口縁をもつ。漆布下縁は灰化している。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→6) 年代不詳	褐色	褐色	外側スス付着	FN-104
甌曲南地区区画調外	Po349	81	799	796	弥生土層	底部	△6.5		№6.9		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	褐色	外側スス付着	FN-145
甌曲南地区区画調外	Po350	81	775		弥生土層	底部	△6.8		№4.2		レッキラとした小さな平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	灰褐色	黄褐色	外側スス付着	FN-152
甌曲南地区区画調外	Po351	81	796		弥生土層	底部	△3.1		№6.9		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	灰褐色 - 黄褐色	外側スス付着	FN-89
甌曲南地区区画調外	Po352	81	843		弥生土層	底部	△3.4		№3.2		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	中年代(1) 年代不詳	黄褐色	褐色		FN-166
甌曲南地区区画調外	Po353	81	815		弥生土層	底部	△2.8		№6.0		丸みを帯びた中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色	外側スス付着あり	FN-85
甌曲南地区区画調外	Po354	81	799		弥生土層	底部	△3.5		№3.2		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	褐色	外側スス付着	FN-100
甌曲南地区区画調外	Po355	81	849		弥生土層	底部	△3.1		№6.3		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	褐色	外側スス付着	FN-163
甌曲南地区区画調外	Po356	81	810		弥生土層	底部	△2.8		№6.8		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色	外側スス付着	FN-96
甌曲南地区区画調外	Po357	81	842		土師層	下部部	△1.3		№6.3		レッキラとした中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	黄褐色	外側スス付着	FN-140
甌曲南地区区画調外	PO358	81	797		弥生土層	灰口土層	△6.6				筒状の口。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	灰褐色	灰褐色	外側スス付着	FN-129
甌曲南地区区画調外	Po359	81	42	650	弥生土層	特殊層	△3.1		№17.4		正五角形の特殊な器。断面中央に2本の突起をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-79
甌曲南地区区画調外	Po360	81	42	773-846	弥生土層	内坪	△11.7				丸みを帯びた中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→3) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-103
甌曲南地区区画調外	Po361	81	829		弥生土層	内坪	№27.4	△4.3			丸みを帯びた中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	褐色		FN-82
甌曲南地区区画調外	Po362	81	471		弥生土層	内坪		△3.4		№13.7	大きく「ハ」字に似た中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-55
甌曲南地区区画調外	Po363	81	796		弥生土層	漆器層	△5.5		№17.2		腰台口縁部に灰化した土師層が認められる。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	黄褐色	褐色		FN-88
甌曲南地区区画調外	Po364	81	799-846	844	弥生土層	漆器層		△8.0		№17.3	腰台口縁部を呈す中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1) 年代不詳	黄褐色	黄褐色		FN-100
甌曲南地区区画調外	Po365	81	779		弥生土層	陶器層		△7.3			黄褐色をもつ中年代の平皿をもつ。外面は漆布を付した。内面は漆布を付した。内面は漆布を付した。	第(1→2) 年代不詳	褐色	褐色		FN-131

挿表29 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(1)

集分典地区Ⅰ 区遺構 外	Pc305	81	42	851	弥生土層	竪穴墓	#15.6	△7.7	大層の横穴を呈す円形に、周縁部を呈す。外周に「家」ナデ。内周部が「家」ナデ。一部周方向にナデ。	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	外周土ナデ付着	PK-80	
集分典地区Ⅰ 区遺構 外	Pc307	81	43	853	弥生土層	竪穴墓?	#12.6	△2.6	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	黄褐色		PK-128		
集分典地区Ⅰ 区遺構 外	Pc308	81	42	851	弥生土層	竪	4.7		#11.3	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		PK-81	
S 111	Pc360	84	43	2170	弥生土層	竪	#14.2	14.6	20.3	中層部を呈す褐色口縁をもつ。胴部は玉白砂を呈す。外周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	やや不真	黄褐色	黄褐色		PK-132	
S 111	Pc370	84	43	2085	弥生土層	土器類	#10.8	△7.4	大層で外縁する褐色口縁をもつ。内周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	にぶい黄褐色		PK-121	
S 111	Pc371	84	43	2077	弥生土層	土器類	新平			稀の砂粒と含まれる。子器はコナデ。	良好	淡黄褐色			PK-122	
S 112	Pc372	80	43	2102 2120	弥生土層	弥生土層	#41	△10	横口縁部。外周部ナデ。内周部ナデ。	密(1~3mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	にぶい黄褐色		PK-125	
S 112	Pc373	80	43	2146	弥生土層	土器類	新平	△3.1	#5.8	横口縁部。外周部ナデ。内周部ナデ。	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		PK-127	
S 112	Pc374	80	43	2145	弥生土層	土器類	新平	△2.7		横口縁部。外周部ナデ。内周部ナデ。	良好	にぶい黄褐色	淡黄褐色		PK-128	
S 112	Pc375	80	43	2145	弥生土層	土器類	新平	△2.7	#12.2	横口縁部。内周部とも内周部との境界不明。	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		PK-126
S 113	Pc376	86	42	2230	弥生土層	土器類	新平	△3.3	#9.3	わずかに平縁をもつ。内周部ともコナデ。	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	淡黄褐色	黄褐色		PK-129
S 114	Pc377	120	48	2237	弥生土層	竪	#	△	横口縁部。外周部ナデ。内周部ナデ。	やや不真	黄褐色	黄褐色		PK-134		
S 114	Pc378	120	48	2241	弥生土層	竪	#11.6	△5.1	横口縁部を呈す褐色口縁をもつ。外周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	やや不真	黄褐色	褐色	外周土ナデ付着	PK-131		
S 114	Pc379	120	48	2210	弥生土層	土器類	新平	#14.8	△8.8	横口縁部。外周部ナデ。内周部ナデ。	良好	黄褐色	黄褐色		PK-175	
S 114	Pc380	120	49	2208	弥生土層	竪	#16.8	△9.0	外縁する褐色口縁をもつ。胴部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	やや不真	黄褐色	黄褐色		PK-174		
S 114	Pc381	120	49	2236	弥生土層	竪	#12.7	△2.7	「ハ」字状に開く。外周部ナデ。内周部ナデ。	良好	黄褐色	黄褐色	内周土ナデ付着	PK-130		
S 115	Pc382	89	43	2204 2205	弥生土層	土器類	新平	#12.6	△10.2	外縁する褐色口縁をもつ。胴部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		PK-136	
S 115	Pc383	89	43	2209	弥生土層	土器類	新平	#16.4	△5.2	外縁する褐色口縁をもつ。内周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		PK-147	
S 115	Pc384	89	43	2208	弥生土層	土器類	新平	#13.8	△4.7	外縁する褐色口縁をもつ。内周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	良好	黄褐色	黄褐色		PK-149	
S 115	Pc385	89	43	2088 2055	弥生土層	土器類	新平	△9.3	#14.2	内縁に開く人字状に開く。外周部は内周部と異なる。内周部はコナデ。胴部はナデナデ。	良好	褐色	褐色		PK-148	
S 116	Pc386	130	49	2327	弥生土層	弥生土層	#7.6	△4.8	コナデを呈す形跡は認められず。内周部ともコナデ。把子部はコナデ。	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色		PK-168	
S 116	Pc387	130	49	2327	弥生土層	土器類	新平	#15.8	△1.4	外縁部は内周部と異なる。内周部はコナデ。	やや不真	灰白色	灰白色		PK-169	
S 102	Pc388	143	50	2309	F13内	土器類	土	9.8	1.8	#6.0	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-153
S 102	Pc389	143	50	2307	F13内	土器類	土	△1.6	5.6	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-151	
S 102	Pc390	143	50	2308	F13内	土器類	土	△1.4	5.1	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	黄褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-152	
S 102	Pc391	143	50	2312	F14内	土器類	土	#9.7	3.5	5.8	密(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-156
S 102	Pc392	143	50	2317	F14内	土器類	土	△2.2	3.9	密(1mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-155	
S 102	Pc393	143	50	2311	F14内	土器類	土	△1.7	4.6	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	黄褐色		PK-154	
S 102	Pc394	143	50	2313	F14内	土器類	土	△1.4	3.0	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-167	
S 102	Pc395	143	50	2314	F14内	土器類	土	△1.4	3.0	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色	磨面部は赤褐色	PK-166	
S 102	Pc396	143	50	2315	F14内	土器類	土	△2.0	3.2	密(1~2mm程度の砂粒を含む)。	良好	褐色	褐色		PK-159	

挿表30 西柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(1)

S 092	Po307	143	50	2316	P14内	土師土器	皿			△1.8	5.7	底く、大きく広がると口縁をもつ。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色	底面平坦 高切り皿	FK-160
S 092	Po308	143	2209	底面	土師	茶碗				△5.0		テが枝の物像をもつ。内外面ともコナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰白色	灰白色	外壁スチ付着	FK-161
S K10	Po309	99	3010	背面	土師土器	鉢				W13.0	△5.3	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-117
S K10	Po400	99	44	2009	背面	土師土器	皿			9.6	1.9	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-116
S K10	Po491	99	3010	背面	土師土器	皿				W13.0	△1.7	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-116
S K20	Po492	120	47	2045	腹土中	土師土器	皿			15.7	2.5	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。内面口縁部へテ付着テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-119
S K30	Po493	120	47	2054	背面	土師土器	皿			9.4	1.7	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	やや不良	灰褐色	灰褐色		FK-123
S K24	Po494	122	49	2058	腹土中	土師土器	皿			13.2	2.1	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-120
S K22	Po495	91	43	2141	腹土中	土師土器	鉢			△6.8		内外面共に磨白口縁をもつ。表面酸化のため黄褐色を呈す。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	黄褐色		FK-128
S K22	Po496	91	43	2164	腹土中	土師土器	鉢			△16.6	W6.0	大口径の器。磨白口縁をもつ。内外面ともコナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	やや不良	灰褐色	灰褐色		FK-133
S K34	Po497	95	44	2247	腹土中	土師土器	皿			W17.6	△6.1	内外面とも磨白口縁をもつ。外側テ。内面口縁部コナテテ。腹面以下ツラテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色	口縁部へテ付着あり	FK-146
S K34	Po498	95	44	2281	腹土中	土師土器	鉢			W12.2	5.2	狭く、口縁が大きく開く。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色		FK-137
S K34	Po499	95	44	2242	腹土中	土師土器	鉢			△5.5	6.6	口縁に広がると口縁部が厚く。内面コナテ。内面口縁部コナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-136
S K25	Po410	120	49	2249	腹土中	土師土器	皿			13.8	3.3	やや中や中内側する体腔をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色	底面平坦 高切り皿	FK-144
S K25	Po411	125	49	2283	腹土中	土師土器	皿			7.9	1.3	小径の中や内側する体腔をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	明褐色	明褐色	底面平坦 高切り皿	FK-140
S K25	Po412	133	49	2249	腹土中	土師土器	皿			7.7	1.5	小径で外側する体腔をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	明褐色	明褐色	底面平坦 高切り皿	FK-143
S K25	Po413	136	49	2287	腹土中	土師土器	皿			7.9	1.6	小径の中や内側する体腔をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色	底面平坦 高切り皿	FK-142
S K25	Po414	136	49	2286	腹土中	土師土器	皿			7.6	1.5	小径の中や内側する体腔をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	明褐色	明褐色	底面平坦 高切り皿	FK-139
S K26	Po415	135	2249	腹土中	土師土器	鉢				W23.2	△4.8	直立する口縁をもつ。内外面ともコナテ。	黒	良好	灰褐色	灰褐色		FK-145
S K26	Po416	135	2249	腹土中	土師土器	鉢				W19.6	△4.1	直立する口縁をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色		FK-141
S K26	Po417	137	49	2254	底面	土師土器	鉢			△2.5	9.2	張り出し口縁をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色	内面平坦	FK-175
S 010	Po418	146	2286	腹土中	土師土器	鉢				W20.6	△6.5	テが枝に開く口縁をもつ。磨白は磨白する。外底に磨白テ。磨白部のテが枝が、表面酸化のため磨白不明。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰白色	灰白色		FK-165
S 010	Po419	146	2288	腹土中	土師土器	鉢				W14.1	△1.9	張り出し口縁をもつ。外底に磨白するの跡。内面コナテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	褐色	褐色		FK-166
S 000	Po420	140	2283	腹土中	土師土器	鉢				△3.6	W7.2	スマートな形状。内外面とも磨白のため磨白不明。	黒(1~5) ぬい色の砂を含有。	良好	灰白色	灰褐色	外壁スチ付着	FK-164
S 000	Po421	140	2288	腹土中	土師土器	鉢				△11.2		磨白部磨白。内外面ともに底底の穴。磨白不明。	黒(1~3) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-163
S 001	Po422	146	51	2260	腹土中	土師土器	鉢			△2.0	W9.2	特殊の形状。低い口縁をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色	底面平坦 高切り皿	FK-167
S 005	Po423	146	51	2266	腹土中	土師土器	鉢			△2.5	W11.3	直立口縁をもつ。全面に磨白。	黒	良好	オレンジ色	オレンジ色		FK-172
S 010	Po424	146	51	2206	腹土中	土師土器	鉢			△8.9	W10.4	小径で、張り出し口縁をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	明褐色	明褐色		FK-170
S 010	Po425	146	51	2206	腹土中	土師土器	鉢			W5.6	1.0	小径で、張り出し口縁をもつ。内外面とも磨白テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	明褐色	明褐色		FK-171
ビット跡	Po426	126	2271	P4内	土師土器	鉢				W16.8	△3.2	短く外側する磨白口縁をもつ。外側テ。内面口縁部コナテ。腹面以下ツラテ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-162
埴形地区 瓦器 遺物	Po427	140	2218	腹土中	土師土器	鉢				W28.4	△5.1	大きく外側する磨白口縁をもつ。表面酸化のため黄褐色を呈す。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-177
埴形地区 瓦器 遺物	Po428	140	2130	腹面	土師土器	鉢				W14.4	△2.7	立ち上がりは中や中内側。実り厚は必ずしも引き出される。内外面とも磨白テ。	黒(1)ぬい ぬい色の砂を含有。	良好	灰白色	灰白色		FK-176
埴形地区 瓦器 遺物	Po429	140	2221	瓦質土器	土師	鉢				W36.4	△5.8	直立する口縁をもつ。内外面ともコナテ。	黒(1~2) ぬい色の砂を含有。	良好	灰褐色	灰褐色		FK-178

挿表31 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(土器)観察表(6)

遺長7号 号	Ps40	149	52	481・499	福岡県 福井	土器類	陶	■22.4	△7.0					口縁部が大きく内反する 筒い器に類似する。内 縁部はわずかに上方へ凸 起する。器底は器高に長 方形コナテ。器底縁部 は外反する。口縁部は 筒口コナテ。胴部はツラ ツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	中々 不発	淡黄色 黄褐色	FK-51 52
遺長7号 号	Ps41	149	52	498	福岡県 福井	土器類	陶	■22.6	△5.5				縁部は器高に、筒く内反 する筒口縁部を呈す。 内面口縁部は、内反口縁 部を呈す。口縁コナテ。 胴部はツラツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	中々 不発	淡黄色 黄褐色	FK-57	
遺長7号 号	Ps42	149	489	北原西 福井	土器類	鉄器類	鉄		△4.3		■7.8		筒い器に、筒く大きく 筒く開口部を呈す。内 面口縁部は、内反口縁 部を呈す。口縁部は筒 口コナテ。胴部はツラ ツラ。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-48	
遺長7号 号	Ps43	149	52	482	内原西 福井	土器類	小器・土 器類	8.1	8.8	9.2			中々大きく内反する。口 縁部は筒口縁部を呈す。 胴部は筒口縁部を呈す。 内面口縁部は、内反口 縁部を呈す。口縁部は 筒口コナテ。胴部はツ ラツラ。器底縁部は、 筒い器に類似する。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	内原西 福井 大石 大石	
遺長7号 号	Ps44	149	52	484	北原西 福井	土器類	陶		△1.8		■1.8 ■1.8		筒く小さく筒口のつま みをもつ。縁部は筒く 内反する。口縁部は筒 口コナテ。胴部はツラ ツラ。器底縁部は、筒 い器に類似する。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	内原西 福井 大石 大石	
遺長7号 号	Ps45	149	52	477	北原西 福井	土器類	陶		13.6	2.2			筒く大きく筒く。内面 口縁部は筒く内反する。 口縁部は筒口コナテ。 胴部はツラツラ。器底 縁部は、筒い器に類似 する。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-46	
遺長7号 号	Ps46	149	495	福岡県 福井	土器類	陶		■11.6	△4.9				筒く大きく筒く。内面 口縁部は筒く内反する。 口縁部は筒口コナテ。 胴部はツラツラ。器底 縁部は、筒い器に類似 する。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-50	
遺長8号 号	Ps47	151	262	北原西 福井	土器類	陶		■12.4	△2.2				口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-47	
遺長8号 号	Ps48	151	234	北原西 福井	土器類	陶							縁部は筒く内反する。内 面口縁部は、筒い器に 類似する。口縁部は筒 口コナテ。胴部はツラ ツラ。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-44	
遺長8号 号	Ps49	151	52	197・198 293	東原西 福井	土器類	陶	■8.9	△4.9	6.0			筒く大きく筒く。内面 口縁部は筒く内反する。 口縁部は筒口コナテ。 胴部はツラツラ。器底 縁部は、筒い器に類似 する。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-43	
遺長8号 号	Ps46	151	263	東原西 福井	土器類	陶		■13.4	△2.5				口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-41	
遺長8号 号	Ps41	151	201・204	東原西 福井	土器類	陶		△0.5		■5.8			口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-43	
遺長8号 号	Ps42	151	199	東原西 福井	土器類	陶		△1.9		■6.1			口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-41	
遺長8号 号	Ps43	151	225	高野内 福井	土器類	陶		△1.0		■2.8			口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-45	
遺長9号 号	Ps44	157	54	北原西 福井	土器類	陶		■20.2	△2.2				口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。器底縁 部は、筒い器に類似す る。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-46	
遺長9号 号	Ps45	157	25	西原西 福井	土器類	陶							縁部は筒く内反する。内 面口縁部は、筒い器に 類似する。口縁部は筒 口コナテ。胴部はツラ ツラ。	器(1mm級 の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-105	
遺長9号 号	Ps46	157	38・227 293	西原西 福井	土器類	陶		△2.2		■6.2			口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-39	
遺長9号 号	Ps47	157	52	129・224	東原西 福井	土器類	陶		△13.0		■13.1		口縁部は筒く内反する。 筒い器に類似する。口 縁部は筒口コナテ。胴 部はツラツラ。器底縁 部は、筒い器に類似す る。	器(1-2mm 級の砂粒を含む。 含む。	良好	淡黄色 黄褐色	FK-40	

表32 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(7)

遺物名	遺物番号	検出番号	出土層	出土地点	遺物	最大長さ	最大幅	最大高さ	重さ	形状上の特徴	備考	
S101	F1	9	30	243	壇土下層	鏡片	△2.8	2.2	0.3	△5.6	扁平で、五角形を呈す。	IW-24
S101	F2	9	30	458	壇土下層	鏡片	△3.9	1.6	0.4	△6.0	板状で不整形な五角形を呈す。ほぼ中央で穴が開く。	IW-23
S101	F3	9	30	306	壇土下層	鏡片	4.8	1.3	0.3	4.4	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-26
S101	F4	9	30	459	壇土下層	鏡片	3.5	1.0	0.9	4.8	板状を呈す。新断面形。	IW-25
S101	F5	13	31	399	壇土下層	鏡片	4.6	3.8	0.3	10.6	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-12
S101	F6	13	31	401	壇土下層	鏡片	2.3	1.2	0.2	1.6	板状で五角形を呈す。	IW-13
S101	F7	13	31	414	壇土下層	鏡片	2.1	1.5	0.2	1.6	板状で五角形を呈す。	IW-15
S101	F8	13	31	435	壇土下層	鏡片	△1.8	2.2	0.1	△2.2	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-14
S101	F9	13	31	332	壇土下層	鏡片	4.2	1.1	0.3	3.3	板状で五角形を呈す。	IW-16
S101	F10	40	310	壇土下層	鏡片	3.9	2.3	6.6	7.6	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-19	
S101	F11	40	368	壇土下層	鏡片	2.4	2.6	0.4	8.0	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-21	
S101	F12	40	571	壇土下層	鏡片	2.6	1.5	0.3	2.6	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-18	
S101	F13	40	567	壇土下層	鏡片	1.7	1.7	0.2	1.3	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-22	
S101	F14	40	535	壇土下層	鏡片	4.7	0.7	0.5	4.3	板状を呈す。新断面形。	IW-17	
S101	F15	40	516	壇土下層	鏡片	△2.6	0.5	0.15	△1.4	板状で不整形な五角形を呈す。	IW-20	

表33 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（鉄器・青銅器）観察表(1)

S106	F16	41	35	534	埋土下層	鉄片	4.2	3.3	1.7	31.2	扁平で半環形鉄片が3~4枚付着している。		FW-46
S107	F17	45	36	582	埋土下層	鉄片	5.1	6.5	0.6	73.5	やや厚手のいびつなバチ形を呈す。		FW-40
S107	F18	45	36	589	埋土下層	鉄片	△3.4	4.9	0.5	△21.0	やや湾曲する板状で不整形な形を呈す。一端を欠く。折り返しの痕跡が認められる。		FW-42
S107	F19	45	36	606	埋土下層	鉄片	3.7	3.2	0.9	12.8	不整形三角状を呈す。	表面に炭化物付着	FW-43
S107	F20	45	36	606	埋土下層	鉄片	5.0	2.4	0.3	9.4	三角形状形を呈す。	表面に炭化物付着	FW-39
S107	F21	45	36	606	埋土下層	鉄片	5.9	1.8	0.4	15.8	不整形台形を呈す。	表面に炭化物付着	FW-41
S109	F22	55	36	697	埋土下層	鉄片	4.1	3.3	0.4	15.4	板状で不整形な形状を呈す。断面が折れ曲がる。		FW-34
S109	F23	55	36	698	埋土下層	鉄片	5.8	1.9	0.6	23.8	棒状を呈す。断面は方形。断面歪曲の可能性あり。		FW-37
S109	F24	55	36	408	埋土下層	鉄片	3.4	2.2	0.7	6.4	厚手の不整形形状を呈す。	表面に炭化物付着	FW-44
S109	F25	55	36	666	埋土下層	鉄片	1.7	2.5	0.3	2.5	板状で無蓋三角形状を呈す。		TW-26
S109	F26	55	36	699	埋土下層	鉄片	3.1	0.6	0.2	1.0	板状で長筒状を呈す。		FW-35
S K01	F27	15	31	162	灰面	鉄釘	6.0	6.45	0.5	3.1	直線状を呈す。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-1
S K01	F28	15	31	163	埋土中	鉄釘	6.2	0.3	0.4	2.2	直線状を呈す。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-31
S K01	F29	15	31	197	埋土中	鉄釘	△5.3	0.5	0.4	△2.6	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-3
S K01	F30	15	31	13	埋土中	鉄釘	△5.2	9.6	0.5	△5.4	直線状を呈す鉄片。両端部を欠く。断面方形。		FW-2
S K01	F31	15	31	192	埋土中	鉄釘	5.7	0.3	0.3	2.5	「L」状に折れ曲がる鉄釘。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-7
S K01	F32	15	31	161	灰面	鉄釘	4.7	0.4	0.3	2.9	「L」状に折れ曲がる鉄釘。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-6
S K01	F33	15	31	191	埋土中	鉄釘	△4.5	0.4	0.3	2.2	「L」状に折れ曲がる鉄釘。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-4
S K01	F34	15	31	197	灰土中	鉄釘	△4.4	0.45	0.3	△2.2	「L」状に折れ曲がる鉄釘。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		FW-38
S K03	F35	51	36	618	埋土中	鉄片	3.8	2.7	0.2	10.3	いびつなバチ形を呈す。一端が折れ曲がる。		FW-30
S K03	F36	51	36	620	埋土中	鉄片	△3.2	1.4	0.25	△7.3	扁平な長方形を呈す。一端を欠く。		FW-29
S K03	F37	51	36	620	埋土中	鉄片	2.2	1.2	0.3	1.7	扁平で、いびつな二角形状を呈す。		FW-28
S K04	F28	61	38	563	埋土中	鉄片	4.8	△2.6	0.5	△2.2	やや厚手のバチ形を呈す。		FW-27
土層状遺物	F39	70	38	559	旧灰土中	金刀	△6.2	4.1	0.6	△65	鍔口の鍔弁と面われる。断面くさび状を呈す。		FW-8
鷺谷L地区土層遺り	F40	29	35	173	銅鉄片	△4.9	3.0	0.6	△29.2	刃部は3 Acmと判い。挿入部は両側を折ら曲がる。		FW-33	
鷺谷L地区遺物	B1	36		97	煙管残片	△3.6	1.6	0.9	△2.3	火筒は大型で長く、首部は直線状を呈す。		FW-16	
鷺谷L地区遺物	B2	36		23	不明銅製品	△4.3	0.6	0.5	△6.9	棒状の銅製品。断面円形を呈し、両取りが施される。		FW-9	
S K09	B3	96	44	2012	灰面	磨銅占銭				△6.9	磨定した古銭と思われる。		FN-
S K10	F41	99	44	2002	灰面	鉄釘	△3.1	0.5	0.45	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、わずかに折れる。断面方形を呈す。		MT-2
S K10	F42	99	44	2002	灰面	鉄釘	△1.7	0.5	0.45	△	斜に直線状。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		MT-3
S K10	F43	99	44	2002	灰面	鉄釘	△2.6	0.35	0.25	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		MT-4
S K10	F44	99	44	2002	灰面	鉄釘	△1.7	0.45	0.35	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		MT-5
S K10	F45	99	44	2002	灰面	鉄釘	△3.0	0.4	0.3	△	直線状を呈す。断面を欠く。断面方形。		MT-6
S K11	F46	102	44	2023	埋土中	鉄釘	△2.4	0.36	0.25	△	斜に直線状。断面は「L」字形に折れる。	横方向木質付着	MT-7
S K12	F47	104	46	2021	灰面中上	鉄釘	△3.3	0.3	0.3	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は切れ込みをもち、「L」字形に折れる。断面方形。		MT-16
S K14	F48	108	46	2034	埋土中	鉄釘	△3.8	0.4	0.35	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は「L」字形に折れる。断面方形。	横方向木質付着	MT-11
S K14	F49	108	46	2035	埋土中	鉄釘	△2.6	0.3	0.25	△	直線状を呈す。先端部を欠く。断面は「L」字形に折れる。断面方形。	横方向木質付着	MT-12
S K15	F50	119	46	2097	灰面中上	鉄釘	4.5	0.25	0.2		直線状を呈す。断面は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。		MT-17

挿表34 西柱見遺跡・倉見古墳群出土遺物（鉄器・青銅器）観察表(2)

S K15	F51	110	46	2007	墓面中上	鉄釘	4.7	0.3	0.3	ヤ中曲がる。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-20	
S K15	F52	110	46	2007	墓面中上	鉄釘	△4.3	0.3	0.3	ヤ中曲がる。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-18	
S K15	F53	110	46	2007	墓面中上	鉄釘	△3.9	0.35	0.35	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-19	
S K16	F54	113	46	2002	墓面	鉄釘	5.4	0.4	0.4	直線状を呈す。頭部に切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-4	
S K16	F55	113	46	2002	墓面	鉄釘	△3.7	0.35	0.3	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-9	
S K16	F56	113	46	2002	墓面	鉄釘	△2.1	0.6	0.4	鉄釘頭部片。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-13	
S K16	F57	113	46	2000	墓面	鉄釘	△1.8	0.5	0.5	鉄釘頭部片。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面方形。	MT-15	
S K16	F58	113	46	2002	墓面	鉄釘	△3.1	0.4	0.35	頭部欠く。断面方形。	MT-10	
S K16	F59	113	46	2002	墓面	鉄釘	△3.2	0.3	0.3	頭部欠く。断面方形。	MT-14	
S K17	F60	115	47	2048	埋土中	鉄釘	△3.2	0.3	0.25	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもち、「L」字形に折れる。断面方形。	MT-21	
S K17	F61	115	47	2048	埋土中	鉄釘	△2.8	0.3	0.35	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもち、「L」字形に折れる。断面方形。	MT-22	
S K17	F62	115	47	2005	墓面	鉄釘	△4.1	0.3	0.3	直線状を呈す。頭部を欠く。断面方形。	MT-23	
S K21	F63	122	48	2042	埋土中	鉄釘	4.3	W0.4	W0.4	直線状を呈す。頭部に「L」字形に折れる。断面方形。	MT-24	
S K21	F64	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△2.3	W0.4	W0.4	直線状を呈す。頭部に「L」字形に折れる。断面方形。	MT-25	
S K21	F65	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△1.8	W0.4	W0.4	直線状を呈す。頭部に「L」字形に折れる。断面方形。	MT-26	
S K21	F66	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△2.5	W0.4	0.3	直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	MT-27	
S K21	F67	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△3.5	0.35	0.3	直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	MT-27	
S K21	F68	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△0.8	0.35	0.3	直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	MT-27	
S K25	F69	134	49	2258	墓面	短刀	25.1	2.7	0.7	刀身は短く、中央で切れ、頭は不明な形状。直線状を呈す。	Y-10	
S S03	F70	146	51	2286	墓面中	クサビ?	5.5	1.3	0.5	36.0	厚平の板状を呈す。頭部はつぶれたように凹んでいる。	MT-29
S S03	F71	146	51	2294	墓面中	鉄釘	△7.4	0.65	0.8	△13.8	ほぼ直線状を呈す。頭部は切れ込みをもち、折れ曲がる。断面長方形。	MT-28
倉見8号墳	F72	152	52	903	埋葬層土中	鉄釘	△8.9	△4.9	1.9	△151	断面クサビ状を呈す。先端部、頭部を欠く。	FN-127
倉見9号墳	B4	157	52	210	土室埋土中	足金具					楕円形の扁扁長と考えられる。頂上よりややずれて内側の縁端がつく。青銅製の鍍金が施される。	1W-11
倉見9号墳	F73	157	52	212	土室埋土中	釣針	△8.5	0.5	0.4	△3.8	「L」状に折れ曲がる釣針。両端部を欠く。頭部を欠いたもの。断面方形。	1W-32
倉見9号墳	F74	157	52	98	埋葬層埋土中	線	△11.6	4.4	0.4	△79.5	曲刀線。先端部を欠く。葉はヤ中斜めに付く。	1W-5

挿表35 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(鉄器・青銅器)観察表(3)

遺物番号	探検番号	探検層	取上層	出土地点	器 類	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重さ	形態上の特徴	備 考	実測者
S 1 01	S1	9	30	456	P 2 内	石皿	花崗岩	27.6	24.5	17.5	16700	不整形な長方形を呈す。両面に磨打痕があり、くぼんでいる。	FN-208
S 1 02	S2	11	30	301	埋土上層	磁石	緑色瓦片	△11.9	5.1	4.8	△448	平形長方形片。断面六角形を呈す。主な断面は3面ある。一部欠損。	FK-104
S 1 02	S3	11	299		埋土上層	磁石	緑色瓦片	△6.8	△2.7	△0.6	△10.8	扁平な磁石破片。断面は2面ある。	FK-72
S 1 03	S4	13	31	406	埋土上層	石鏃	三稜突成物(褐色瓦片)	5.7	5.5	1.3	66	楕円形を呈す。両端を打ち欠く。	FK-73
S 1 05	S5	39	566		埋土下層	磁石	赤色瓦片	△5.0	2.5	△0.4	△6.0	磁石の破片。断面は1面ある。	FK-80
S 1 05	S6	39	544		埋土下層	磁石	緑色瓦片	△11.1	5.1	△0.6	△39.8	扁平な磁石の破片。断面は2面ある。	FK-79
S 1 06	S7	40	35	325	埋土下層	磁石	褐色瓦片	△11.5	4.3	1.4	△66.5	扁平で、不整形を呈す。主な断面は4面ある。磨打痕が2か所認められる。	FN-210
S 1 07	S8	44	585	床面	磁石	黒色安山岩	△6.1	△3.8	4.3	△142	端部に磨打痕あり。欠損。	FK-110	
S 1 08	S9	46	36	644	P 1 内	磁石	緑色花崗岩	7.2	3.4	3.3	96.5	楕円形を呈す。両端部に磨打痕あり。	FN-216

挿表36 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(石器)観察表(1)

S 109	S10	54	37	605	埴土下層	磁石	細粒花崗岩	9.2	4.6	2.4	154	扁平な角形を呈す。両端部及び側面に稜打痕をもつ。		FK-107
S 109	S11	54	37	601	埴土下層	磁石	細粒花崗岩	6.9	5.0	1.9	110	角形を呈す。全粒を磨いている。		FK-213
S 109	S12	54	37	603	埴土下層	磁石	細粒花崗岩	7.7	7.6	4.7	437	角形を呈す。両端部及び側面に稜打痕。	有色鉱物が少ない。準球形の面。	FN-211
S D15	S13	65	37	600	埴土中	磁石	細粒花崗岩	△21.2	14.0	8.9	△3145	ほぼ方形を呈す。主な砥面は4面あり、よく使い込まれ磨き出している。		I-71
S D15	S14	65	37	847	床面	磁石	細粒花崗岩	△16.1	10.0	5.8	△1569	長方形を呈す。主な砥面は3面あり、よく使い込まれ磨き出している。		FN-209
S 110	S15	66	37	725	床面	磁石	安山岩質凝灰岩	7.5	6.8	4.5	373	角形を呈す。端部に稜打痕有り。		FK-118
S 110	S16	66	37	730	埴土下層	磁石?	磁石(コウサイト)	△7.1	3.4	1.3	△42.3	扁平な長方形を呈す。端部を両側から打ち欠く。一方角欠。		FK-212
土器状遺物	S17	69	38	561	旧埴土中	不明石類	粘板岩	△7.1	△3.8	△0.35	△15.4	扁平。表面には磨痕、稜打痕が認められる。		FK-100
土器状遺物	S18	69	38	561	旧埴土中	管工半製品	碧玉	△2.8	△1.2	△1.1	4.3	実形未製品。一部取りがある。		FK-114
寛谷口地区土器群内	S19	28	35	169	黒色土中	磁石	細粒花崗岩	△13.0	5.3	5.0	692	卵形長方形を呈す。主な砥面は4面有る。一部欠。		FK-105
寛谷口地区土器群内	S20	28	35	49	磁石	細粒花崗岩	△8.7	6.9	2.3	△223	扁平な長方形を呈す。主な砥面は3面有る。一部欠。		FK-106	
寛谷口地区土器群内	S21	28	74		磁石	細粒花崗岩	△7.4	7.3	3.0	△151	主な砥面は2面有る。欠。		FK-109	
寛谷口地区土器群内	S22	28	87		山崖	安山岩	△12.3	△6.3	8.5	△905	石面の破片と思われ。上面は磨き出している。	安山岩質凝灰岩	FN-217	
寛谷口地区遺物外	S23	35	36		磁石	砂岩	△5.6	3.1	1.1	34.2	扁平な長方形を呈す。砥面は4面有る。稜形欠。		FK-111	
寛谷口地区遺物外	S24	35	31		磁石	灰緑色頁岩	△4.1		1.8		磁石の破片。砥面は3面ある。		FK-113	
寛谷口地区遺物外	S25	35	35	219	五輪等(安山岩)	角閃石安山岩	21.1	13.0	11.7	3543	五輪等安山岩部分。風化している。		I-72	
寛谷口地区遺物外	S26	35	35	2	磁石?	緑色頁岩	6.1	3.2	0.3	△7.1	扁平で、長方形を呈す。両端部にくり込みがある。	粘板岩凝灰岩	FN-218	
S 111	S27	83	43	2088	埴土中	磁石	流文岩質凝灰岩	△9.9	8.3	5.1	△582	扁平欠。主な砥面は3面あり、よく使い込まれている。		I-13
S 111	S28	83	43	2083	埴土中	磁石	流文岩質凝灰岩	5.3	2.6	0.6	30	扁平な長方形を呈す。全面研磨される。		北-13
S 116	S29	129	49	2236	F 1内	磁石	花崗岩	△14.2	△8.9	7.0	△1250	磁石破片。主な砥面は1面である。		Y-5
S K25	S30	134	49	2319	埴土中	磁石	細粒花崗岩	△14.4	△19.8	△8.8	△1916	磁石破片。主な砥面は2面である。		T-9
S S03	S31	145	51	2290	埴土中	磁石?	灰緑色頁岩	△6.6	5.0	△0.6	△37	扁平な長方形破片。全面研磨される。		T-11
S S03	S32	145	51	2299	埴土中	石類	角閃石花崗岩	6.8	6.6	2.7	171	角形を呈す。両端を打ち欠く。		T-6
S S03	S33	145	51	2294	埴土中	黄緑石	閃緑岩	△8.4	6.2	4.6	△388	磨製石片基部。刃部を欠く。断面角形。		北 12
S S03	S34	145	51	2291	埴土中	石面	安山岩	29.1			△7.0 Kg	角形を呈す。平面。中央部はよく使い込まれ、くぼみがある。砥面は3面ある。		北-41
埴谷地区A区遺物外	S35	126	2024		磨製石片	細粒花崗岩	△13.8	5.5	△4.2	△521	磨製石片破片。刃部・基部欠く。		FK-108	

挿図37 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(石器)観察表(2)

遺物名	遺物番号	探査番号	図面番号	取上層号	出土地点	種類(姓名)	国名	初検年(西暦)	書体	最大径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
寛谷口地区遺物外	C1	56	35	950		寛永通寶	日本	1630年	行書	2.3		0.15	2.6	
S K10	C 2~C 9	99	44	2011	西面	開元光寶銭	北宋	1068年	真書	3.13	縦径2.57	1.43	25.2	計4枚付録、FN-209
S K16	C10~C13	99	44	2011	底面	不明				2.88	縦径2.6	0.77	12.0	計4枚付録、FN-210
S K10	C14	99	44	2011	底面	不明				2.67	縦径3.55	0.175	3.8	変形
S K11	C15	102	44+45	2022	底面	開元通寶	唐	621年	真書	2.31	2.205	0.116	2.4	
S K11	C16	102	44+45	2022	底面	淳化元寶	北宋	990年	真書	2.4	1.845	0.1	2.6	
S K11	C17	102	44+45	2022	底面	崇寧元寶	北宋	1104年	真書	2.46	1.9	0.1	3.1	
S K11	C18	102	44+45	2022	底面	天禧通寶	北宋	1017年	真書	2.53	2.565	0.1	3.0	
S K11	C19	102	44+45	2022	底面	皇祐通寶	北宋	1033年	真書	2.455	1.835	0.13	3.2	
S K11	C20	102	44+45	2022	底面	崇寧元寶	北宋	1068年	真書	2.375	1.9	0.135	3.0	
S K11	C21	102	44	2022	底面	元禧通寶?	北宋	1079年	行書	2.375	1.91	0.12	2.4	
S K11	C22	102	44+45	2022	底面	政和通寶	北宋	1111年	新書	2.405	2.14	0.115	2.9	

挿表38 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物(古銭)観察表(1)

S K11	C23	102	44・45	2022	鹿洞	永楽遺寶	明	1428年	真書	2.5	2.085	0.135	4.2	
S K11	C24	102	44	2022	鹿洞	不明				2.32	1.845	0.1	2.2	
S K11	C25	102	44	2022	鹿洞	不明				2.385	2.085	0.13	3.6	
S K12	C26	105	45・46	2016	鹿洞	咸平元寶	北宋	990年	真書	2.455	1.91	0.1	2.8	
S K12	C27	105	45・46	2016	鹿洞	祥符通寶	北宋	1029年	真書	2.49	2.0	0.13	3.0	
S K12	C28	105	45・46	2016	鹿洞	紹興通寶	北宋	1132年	真書	2.53	1.925	0.105	2.9	
S K12	C29	105	45・46	2017	鹿洞	大觀通寶	北宋	1127年	真書	2.46	2.14	0.135	△2.4	
S K12	C30	105	45・46	2015	鹿洞	永樂通寶	明	1428年	真書	2.49	2.09	0.14	1.9	
S K12	C31	105	45・46	2015	鹿洞	不明				2.4	1.86	0.13	3.2	○遺寶
S K14	C32~C34	108	46	2051	鹿洞	崇寧通寶	北宋	1138年	真書	2.385	2.025	0.39	9.0	計2枚付着。布付着
S K14	C35	108	46	2051	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	真書	2.46	2.0	0.095	2.6	
S K14	C36・C37	108	46	2051	鹿洞	不明				2.53	2.025	0.21	6.1	計2枚付着
S K18	C38	117	47	2033	鹿洞	開元通寶	唐	621年	真書	2.48	2.18	0.09	1.7	
S K18	C39	117	47	2033	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1134年	真書	2.405	1.955	0.105	2.8	
S K18	C40	117	47	2033	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	真書	2.355	1.79	0.1	2.4	
S K18	C41	117	47	2033	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	篆書	2.46	1.8	0.13	2.9	
S K18	C42	117	47	2033	鹿洞	元祐通寶	北宋	1088年	篆書	2.43	2.0	0.1	2.5	
S K18	C43	117	47	2033	鹿洞	不明				2.37	1.9	0.12	1.4	
S K20	C44	120	47	2053	鹿洞	開元通寶	唐	621年	真書	2.32	1.97	0.11	2.6	
S K20	C45	120	47	2052	鹿洞	祥符元寶	北宋	1029年	真書	2.41	1.855	0.13	3.7	
S K20	C46	120	47	2052	鹿洞	祥符元寶	北宋	1029年	真書	2.41	1.975	0.115	2.9	
S K20	C47	120	47	2052	鹿洞	天聖通寶	北宋	1023年	真書	2.38	2.015	0.09	3.3	
S K20	C48	120	47・48	2052	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	真書	2.39	1.915	0.115	2.4	
S K20	C49	120	47	2053	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	真書	2.39	1.825	0.13	3.7	
S K20	C50	120	47・48	2053	鹿洞	元祐通寶	北宋	1078年	行書	2.37	1.935	0.14	2.9	
S K20	C51	120	47	2052	鹿洞	光祿通寶?	北宋	1078年	行書	2.335	1.815	0.11	△1.4	熱で変形
S K20	C52	120	47・48	2044・2052	鹿洞	崇寧元寶	北宋	1138年	行書	2.365	1.995	0.11	1.8	熱で変形
S K20	C53	120	47	2052	鹿洞	永樂通寶	明	1428年	真書	2.46	2.16	0.145	△1.6	
S K20	C54	120	47・48	2052	鹿洞	不明				2.38	2.04	0.1	2.2	○遺寶
S K20	C55	120	47	2053	鹿洞	不明				2.355	1.98	0.125	2.6	

挿表39 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（古銭）観察表(2)

遺物名	遺物番号	探検番号	同図番号	取上番号	出土地点	種類	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	形跡上の特徴	備	号	実測者
S 101	J 1	9	30	309	床面	管玉	碧玉	△1.4	0.75	孔径0.2 ~0.25	△0.9	断面円形を呈す。一方 端を欠く。両側穿孔。			FK-69

挿表40 西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（玉製品）観察表